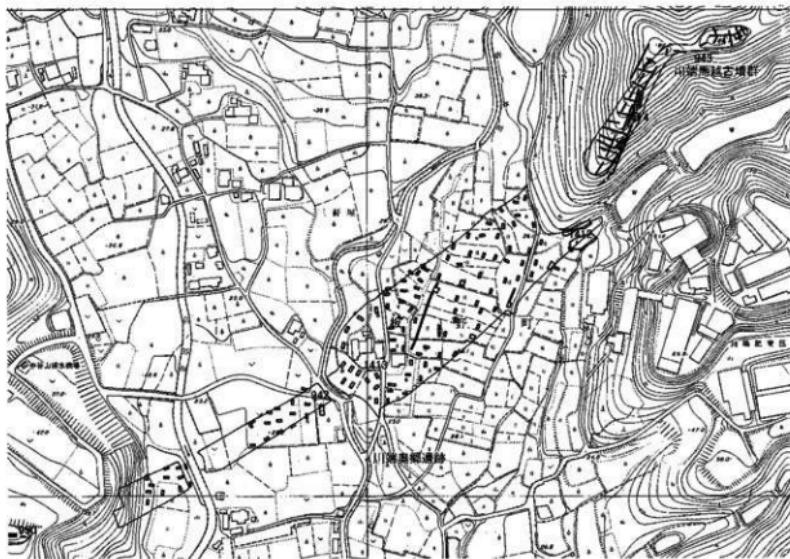
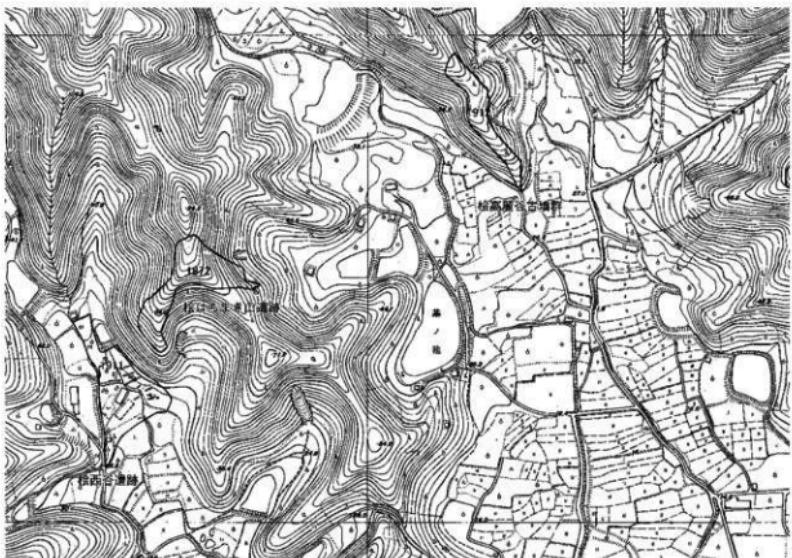


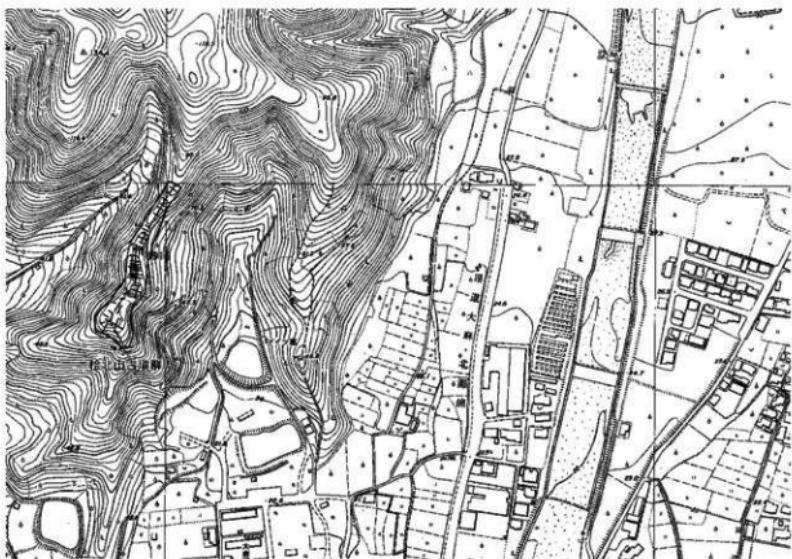
第11図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第12図 調査区位置図 (S=1/5,000)



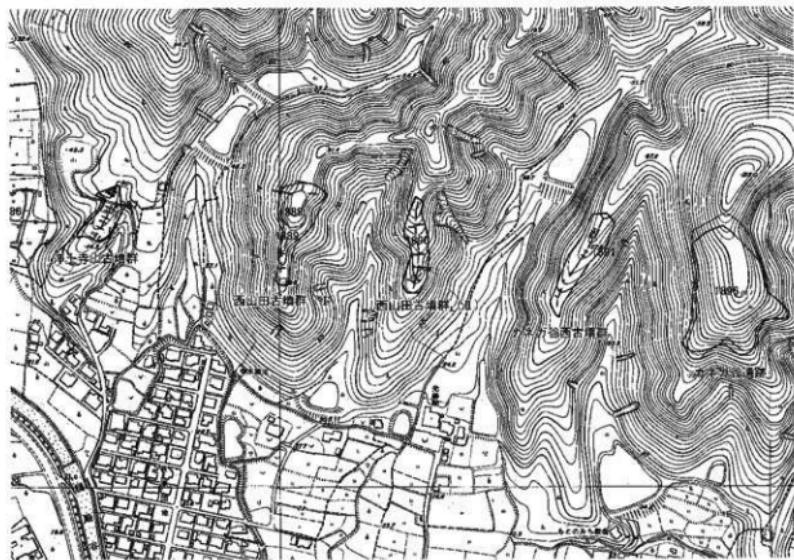
第13図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



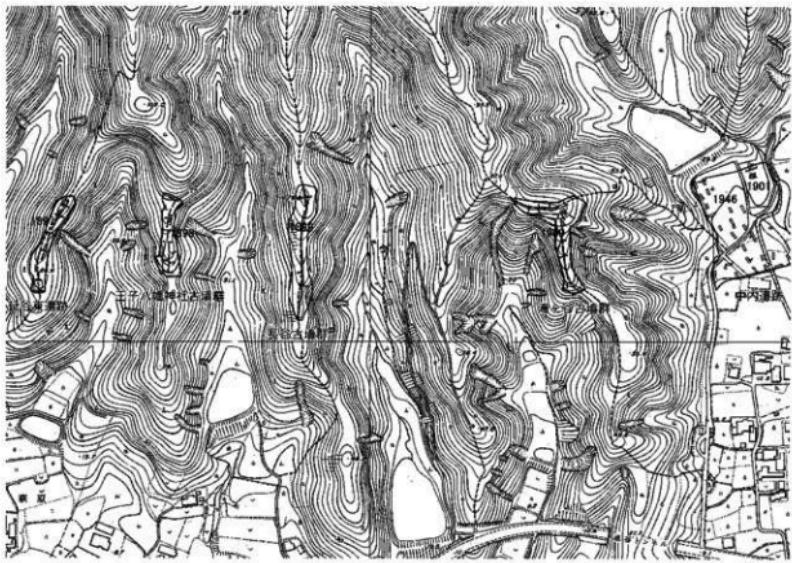
第14図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



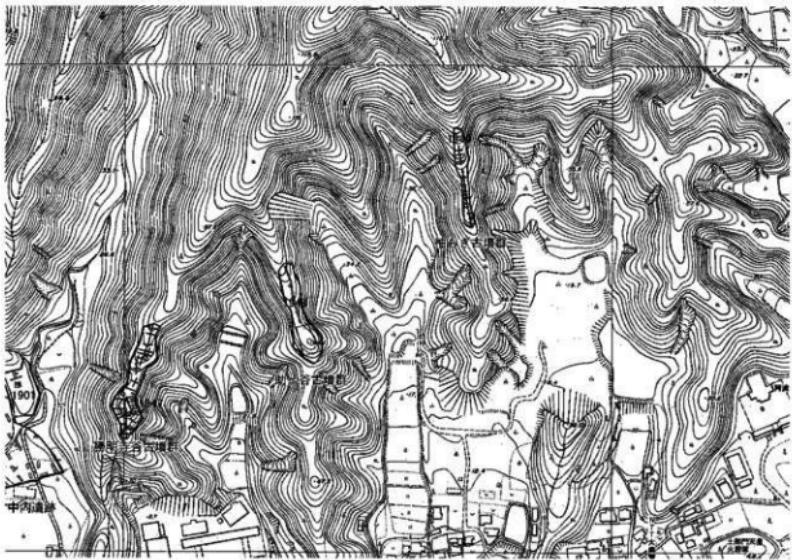
第15図 調査区位置図 (S=1/5,000)



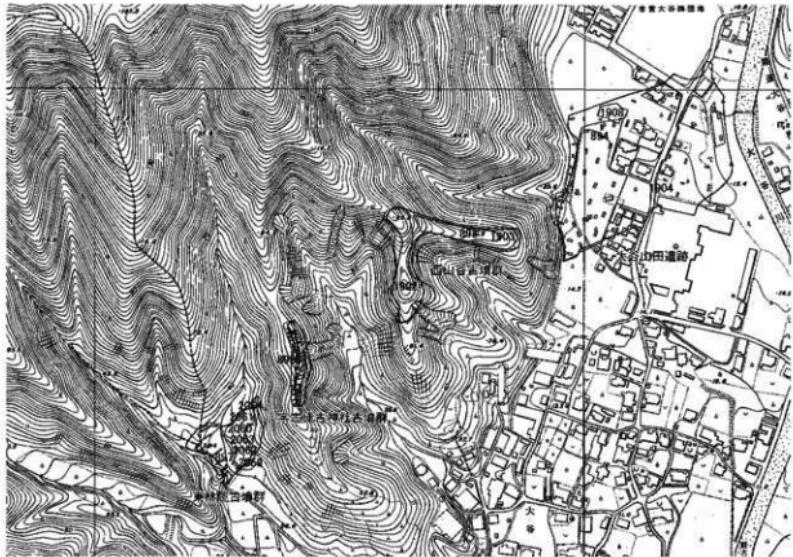
第16図 調査区位置図 (S=1/5,000)



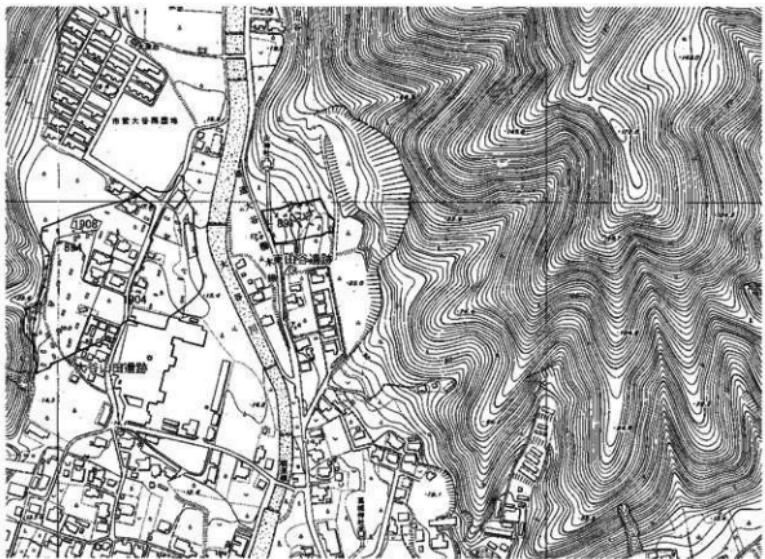
第17図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



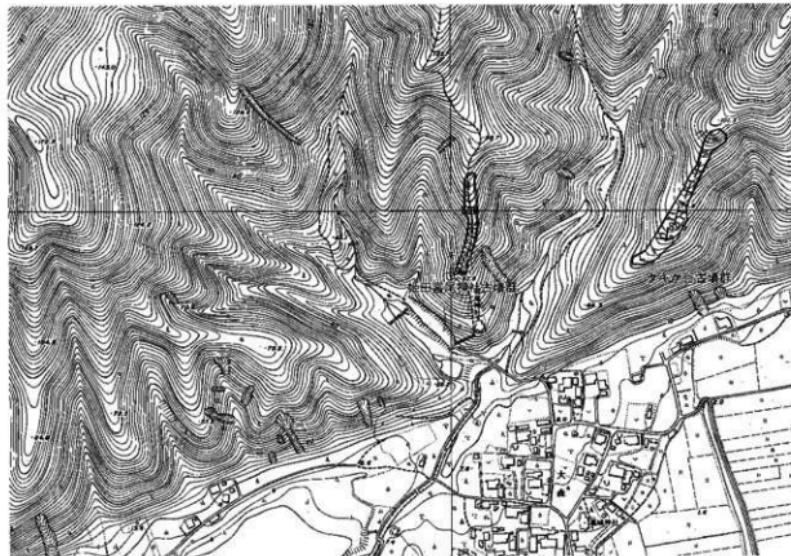
第18図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



第19図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



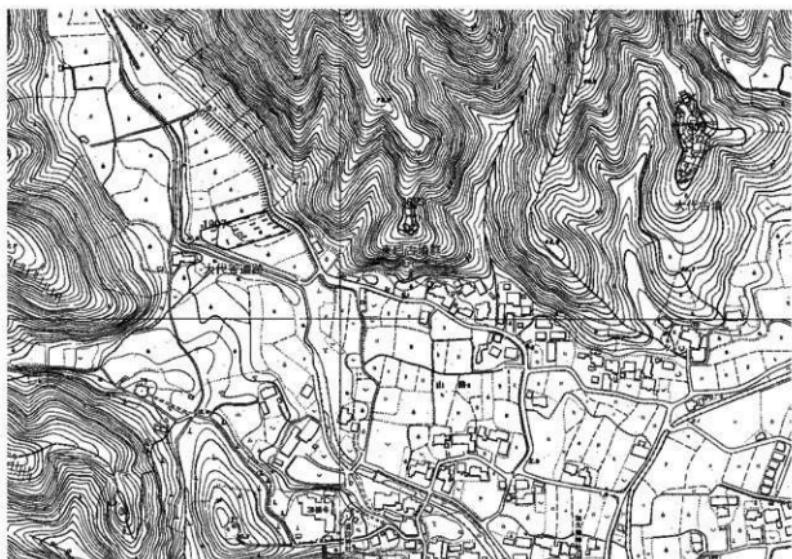
第20図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



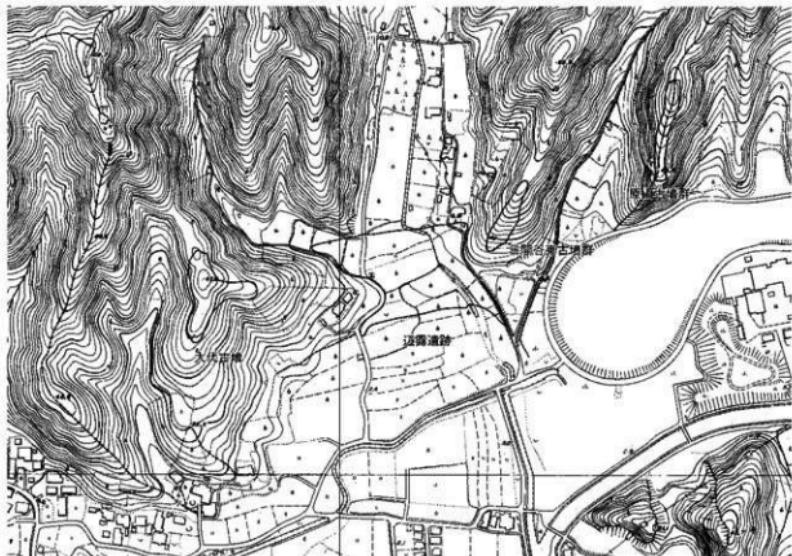
第21図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



第22図 調査区位置図 ( $S=1/5,000$ )



第23図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第24図 調査区位置図 (S=1/5,000)



### III 試掘調査総括



## 板野郡板野町内の試掘調査

### 1 大坂西谷遺跡

#### 調査成果

##### 遺跡の位置（I - 第1図およびII - 第1・2・7図）

調査対象地は吉野川北岸、標高95m前後の阿讃山脈の南麓に抜がる扇状地の緩斜面に位置し、四方を山に囲まれ盆地状になっている。調査対象面積は28,200m<sup>2</sup>である。現況は畑地である。

##### トレンチの設定（第1図）

調査区は横断道の路線に沿い、扇状地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

##### 基本層序（第2図）

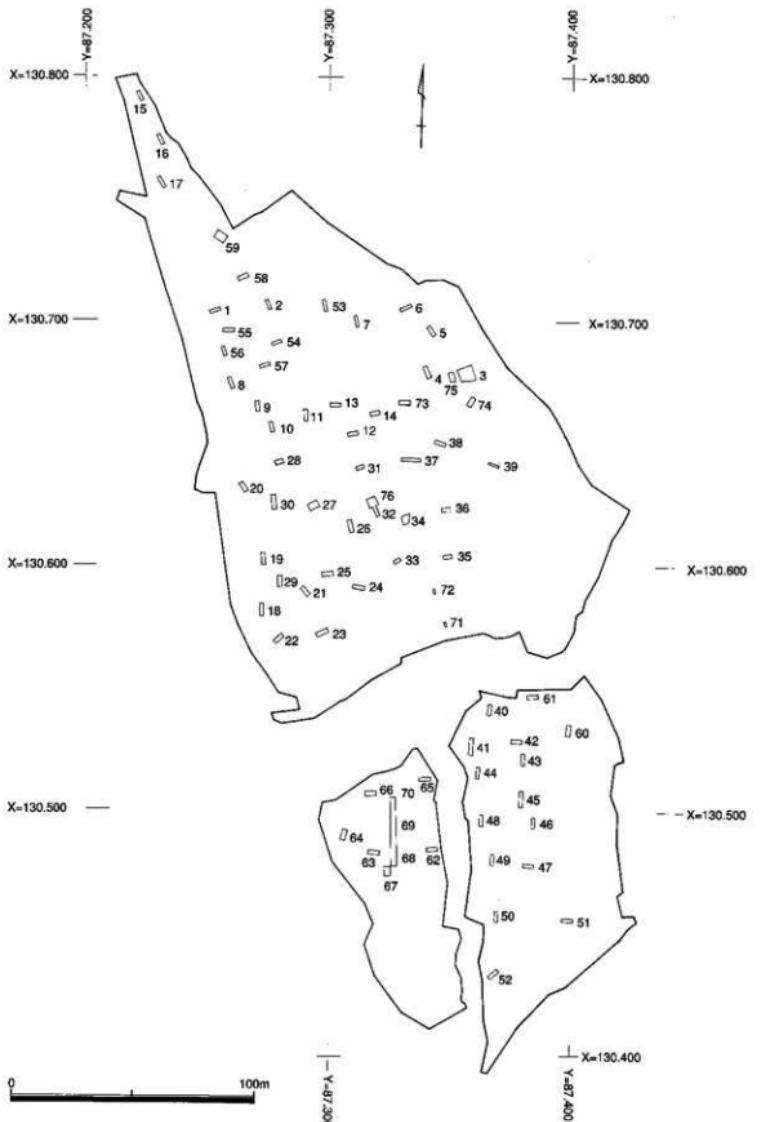
調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は扇状地性の疊層の堆積が見られ、安定した遺物包含層・造構面は確認することができなかった。

##### 出土遺物（第3図）

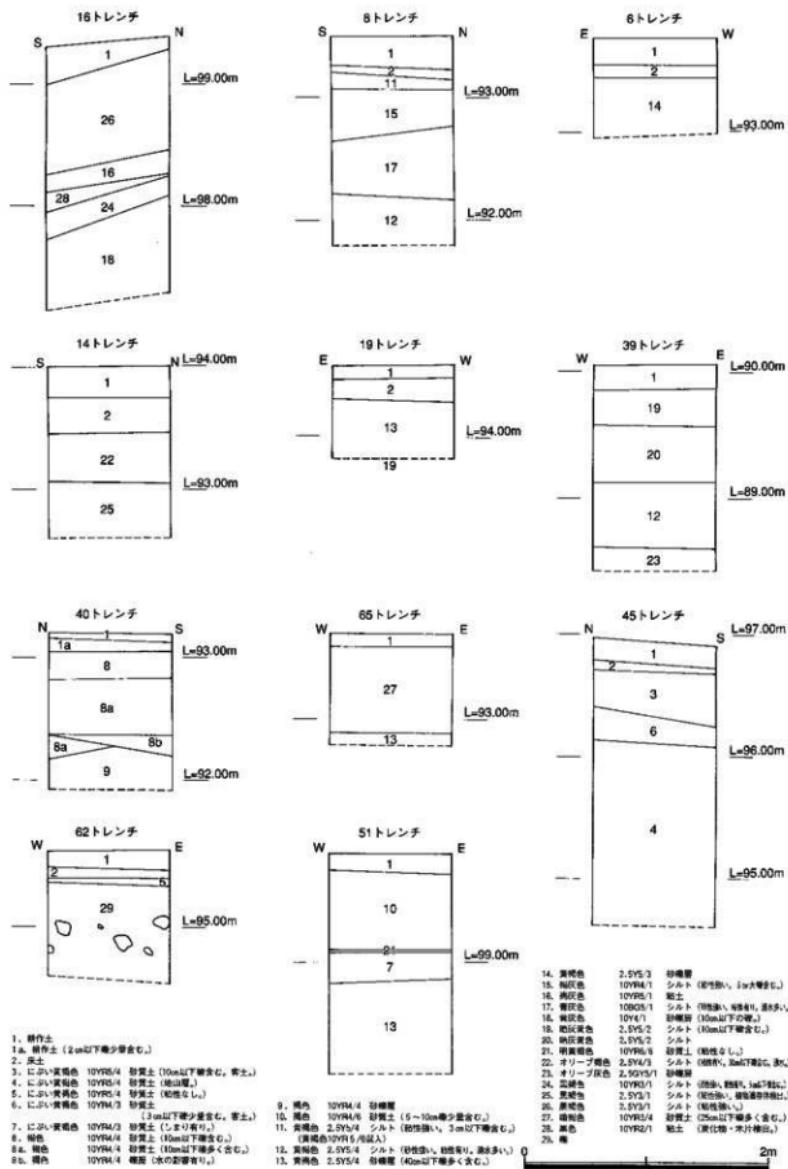
遺物は1層（耕作上・客土）からの出土がほとんどであり、近世～近代頃の時期の遺物で占められている。1は龍泉窯系青磁碗である。底部器壁は厚く、高台の削り出しが浅い。時期的には13世紀頃と考えられる。2は初期伊万里と思われる皿である。3は肥前系の陶器大皿である。時期的には17世紀第3四半期から第4四半期頃と思われる。4は初期伊万里の染付草花文皿、5は土師質土器の擂鉢である。6は須恵質土器の小片である。詳細な器種は不明であるが外面に格子状のタタキがみられ、壺の一部だと思われる。7は須恵質土器の壺である。8は砂岩製の石臼である。

##### まとめ

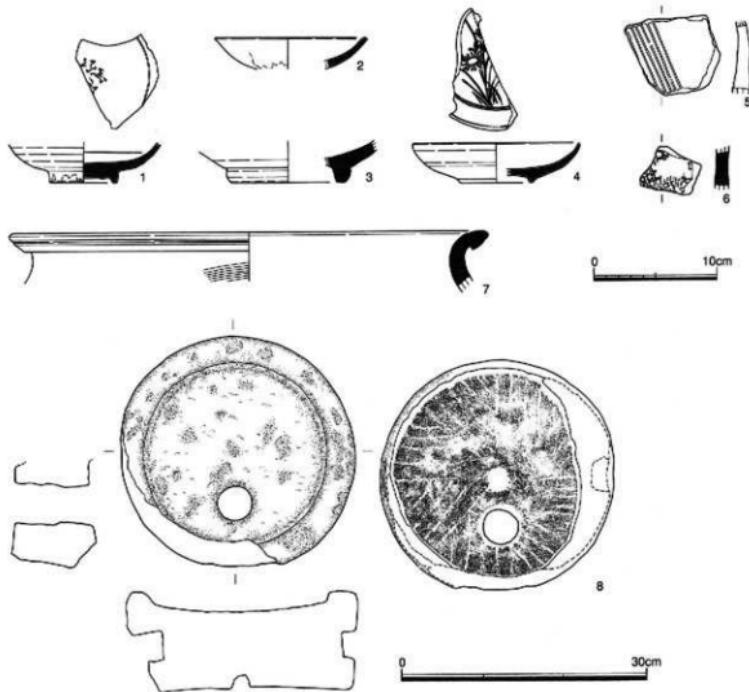
76基（850m<sup>2</sup>）の試掘トレンチを開口し、遺跡の有無の確認に努めた。しかし、表土（耕作土）直下は30cm前後の疊を多く含み、大谷川の堆積作用により形成された扇状地の疊層と考えられ、出土遺物はほとんど客土層よりの出土であり、また造構等も確認することはできなかった。調査区全域において造構は存在しないと考えられることから、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図



第3図 出土遺物

## 大坂西谷遺跡 土器観察表

### 包含層

層号 採取手 段番号	試験 箇所	出土地點	層位	器種	持存率	口径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	腹部 (底付) (cm)	器底 ・残存部 (cm)	その他の 測定 (cm)	相違	形態	尺度	記載	古物 法	名 称	備 考
1 Y602 トレンチ		3層	青磁 灰	直筒 1/3				5.4		3.4	高脚 1.0	底部	外縁外上部へ傾かる。 頂下部に凹凸がある。 内面に底付がある。 底付は白色。	外縁：ロクロナギの も裂隙。 内面：ロクロナギの も裂隙。	右肩・底 部付近 口沿附近 内面	右肩・底 部付近 口沿附近 内面	底付良品。 底良好。	
2 Y602 トレンチ		脚上	褐漆 灰	山根相 1/20	12.5					2.5	直筒 1.0	底部	外縁外上部へ傾かる。 頂下部に凹凸がある。 内面に底付がある。	外縁：ロクロナギの も裂隙。 内面：ロクロナギの も裂隙。	右肩 内面	右肩 内面	底付良品。 底良好。	
3 Y602 トレンチ		脚上	青磁 灰	直筒 1/4				9.2		3.4	高脚 1.3	底部	外縁外上部へ傾かる。 頂下部に凹凸がある。 内面に底付がある。	外縁：ロクロナギの も裂隙。 内面：ロクロナギの も裂隙。	右肩 内面	右肩 内面	底付良品。 底良好。	
4 Y602 トレンチ		5層土被	褐漆 灰	半球 1/5	13.6			6.0		3.5	高脚 0.33	口縁 1.0	底部	外縁外上部へ傾かる。 頂下部に凹凸がある。 内面に底付がある。	外縁：ロクロナギの も裂隙。 内面：ロクロナギの も裂隙。	右肩 内面	右肩 内面	底付良品。 底良好。
5 Y602 トレンチ		脚上	十輪青 十輪 灰	直筒						5.0		不明		外縁：底付のため調整 小窓。 内面：底付。	右肩・底 部付	右肩 内面	青磁 内面	底付不良。
6 Y606 トレンチ		2層土被	青磁 灰							3.6		不明		外縁：棒子目タテキ。 内面：ナメ。	右肩 内面	右肩 内面	青磁 内面	底付良好。
7 Y606 トレンチ		3層	青磁 灰	LH相 1/3	38.0					4.1	口縁付	底部	外縁外上部へ傾かる。 頂下部に凹凸がある。 内面に底付がある。	外縁：直筒上部。 内面：ナメ。	右肩 内面	右肩 内面	青磁 内面	底付不良。

## 大坂西谷遺跡 石器・石製品観察表

### 包含層

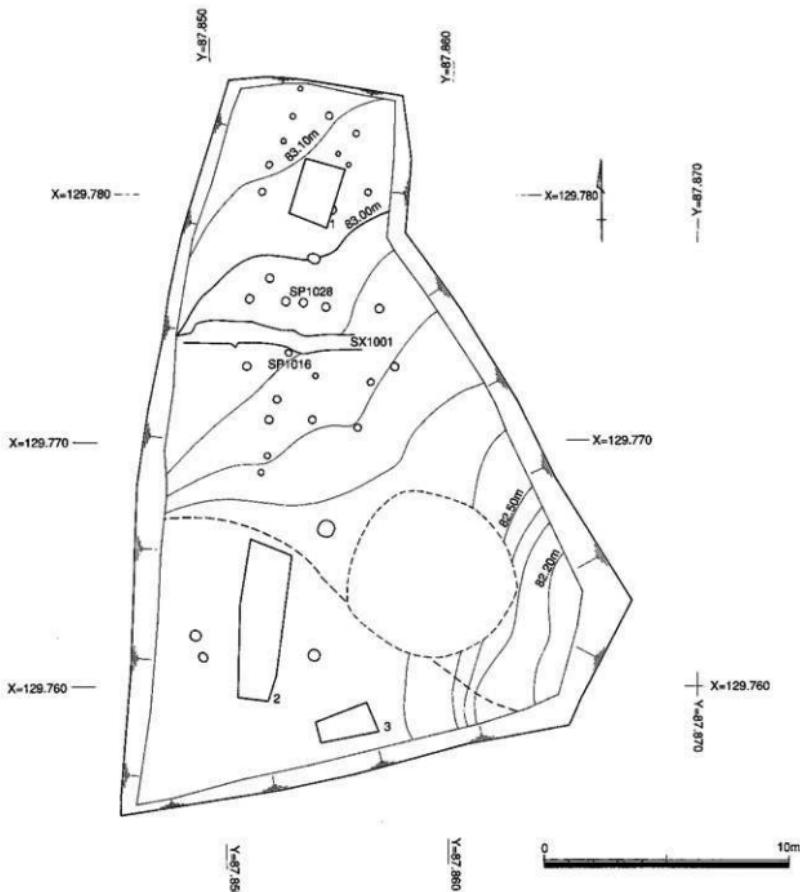
層号 採取手 段番号	施設	出土地點	層位	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	その他の 測定 (cm)	相違	形態	尺度	記載	古物 法	名 称	備 考
8				砂岩	石斧	12.4			高さ12.2	13000	底大径25.1	右肩	9/10				

## 2 唱谷遺跡

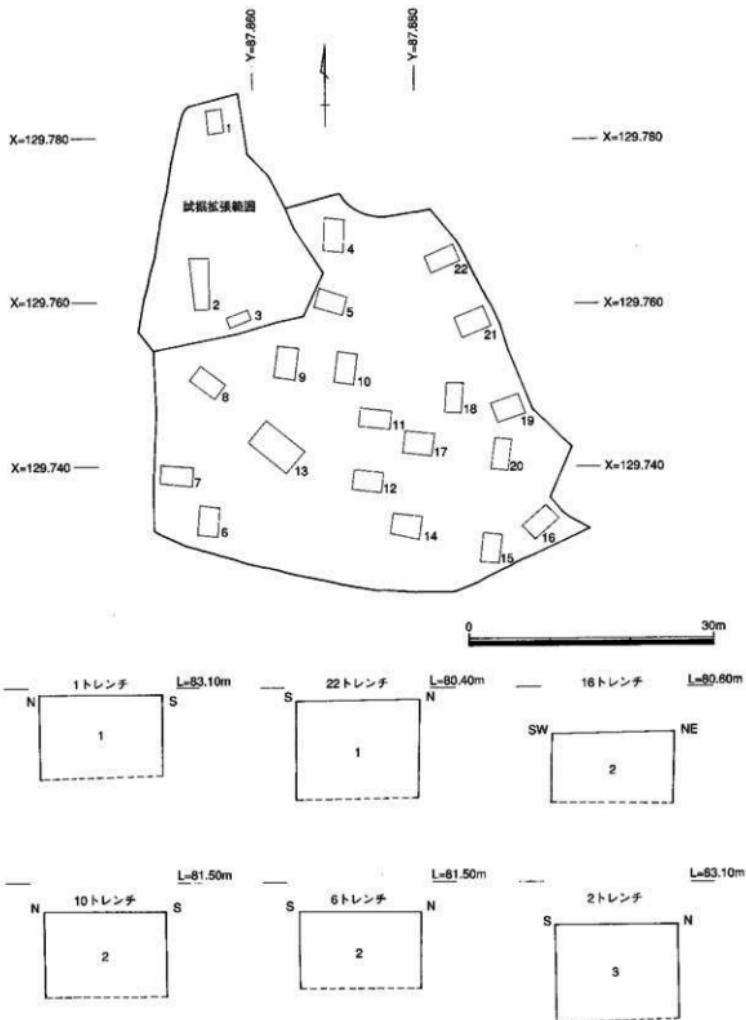
### 調査成果

#### 遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・2・8図)

調査対象地は周囲を阿讃山脈から派生する支脈に囲まれた、標高約80mの北唱谷川に沿った傾斜地に位置する。現況は石垣や擁壁で仕切られた段々畑となっている。1995年度に徳島県教育委員会文化財課により実施された精密分布調査では遺跡確認調査の必要性が指摘されている。



第1図 地形平面・遺構配置図



1. 明黄褐色 10YR7/6 砂質土（やや粘性あり。）  
 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土（しまりのない堆積層。φ=2~30cmの大粒が多く混じる。）  
 3. 明黄褐色 2.5Y6/6 砂（しまり弱い。水気多い。）



第2図 トレンチ配置・模式柱状土層図

### トレンチの設定（第2図）

調査区は横断道の路線に沿い、傾斜地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

### 基本層序（第2図）

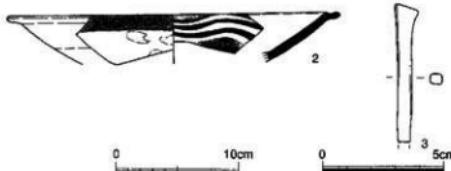
表上以下は耕作地開墾による削平あるいは客土等の変更が著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

### 出土遺物（第3～5図）

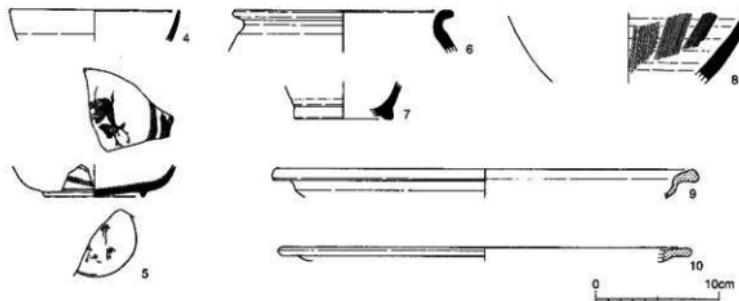
1は瓦質土器の焙烙鍋である。2は瀬戸美濃系と思われる内面に白泥刷毛目が施された陶器の皿である。3は鉄釘である。4は肥前系の青磁碗である。5は肥前系磁器と思われる染付の皿である。6は人谷焼と思われる鉄釉陶器壺、7は瀬戸美濃系陶器壺の底部である。8は備前焼の擂鉢、9・10は1と同様、瓦質土器の焙烙鍋である。



第3図 出土遺物1



第4図 出土遺物2



第5図 出土遺物3

### まとめ（第1図）

22基の試掘トレーナーを開口した。土層の堆積状況から、調査区域は耕作地（畑）を造成する過程でかなりの削平・寄せ等、人為的な土地の改変が行われていることが確認された。また土地の改変を受けていない自然堆積層中においても近世以降の陶磁器類が出土したにとどまった。調査時において数基のSPあるいはSXが検出されたが、後世の擾乱等によるものと判断され、遺構等は確認されなかった。試掘結果を受け、本調査区全域において遺跡は存在しないと考えられるため、試掘調査のみで終了した。

## 唱谷遺跡 土器観察表

SX

出土品 記録番号	遺 墓	出土地点	層 次	形 働	残 高	下 径 (cm)	上 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	前部 残存高 (cm)	背高・ 残存高 (cm)	その他の 測定 (cm)	説 明	形 異	質 感	金属性 質	色 調	備 考
1	SX103	第1遺跡 壁上	瓦質 砂胎	口縁部 シマ	32.0	35.0			2.5		口縁部大きく外反し、底を多く取る。	外壁：ナチュラル。内壁：ナチュラル。	石灰、 灰岩	外因：灰灰 内因：灰灰。	褐色 灰化色	外因に傷付 る。		

SP

出土品 記録番号	遺 墓	出土地点	層 次	形 働	高 度 (cm)	下 径 (cm)	上 径 (cm)	底 径 (cm)	前部 残存高 (cm)	背高・ 残存高 (cm)	その他の 測定 (cm)	説 明	形 異	質 感	金属性 質	色 調	備 考
2	SP103	第1遺跡 壁上	陶器	口縁部 シマ	27.0	27.2			4.0		口縁部 外反	側面外上方へ大きく膨らむ。口縁部で底多く取る。底辺は大きく外反し、口縁部は丸みを帯びた形状。口縁部は内側に凹み、外側に凸みがある。内側に凹み、外側に凸みがある。内側に凹み、外側に凸みがある。	外壁：ロクロナガのち 内壁：ナチュラル。	石灰	地：グレイ みのオーバー ル。内壁：ナ チュラル。	褐色 灰化色	内壁は濃 い褐色。外 壁は灰白 色。

## 包含層

番 号 記録番号	形 働	出土地点	層 次	器 様	高 度 (cm)	下 径 (cm)	上 径 (cm)	底 径 (cm)	前部 残存高 (cm)	背高・ 残存高 (cm)	その他の 測定 (cm)	説 明	形 異	質 感	金属性 質	色 調	備 考
4				直筒型	口縁部 シマ	34.0			2.6		口縁部	側面外上方へ大きく膨らむ。口縁部で底多く取る。内側に凹み、外側に凸みがある。	外壁：ワタロケヅノ 内壁：ナチュラル。	石灰	地：グレー みのオーバー ル。内壁：ナ チュラル。	褐色 灰化色	地：赤茶 色。内壁：灰 色。
5				深腹平底	直筒 型	直筒 型			8.1	2.6	直筒型	側面外上方へ大きく膨らむ。口縁部で底多く取る。内側に凹み、外側に凸みがある。	外壁：ロクロナガのち 内壁：ナチュラル。	石灰	地：灰 色。内壁：灰 色。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。
6	b013 トレンチ			直筒型	直筒 型	口縁部 シマ	37.6		16.1	3.5	口縁部	側面外上方へ大きく膨らむ。口縁部で底多く取る。内側に凹み、外側に凸みがある。	外壁：ロクロナガのち 内壁：ナチュラル。	石灰	地：グレー みのオーバー ル。内壁：ナ チュラル。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。
7				先端削 除	直筒 型	直筒 型			7.9	3.1	直筒型	側面外上方へ直線的に立ち上がり、尖りをもつ。内側に凹み、外側に凸みがある。	外壁：ロクロナガのち 内壁：ナチュラル。	石灰	地：灰 色。内壁：灰 色。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。
8				直立直縁 盆二	直筒 型	直筒 型			5.7		直筒	側面外上方へ立ちあがる。	外壁：ナチュラル。	石灰、 砂岩	外壁：灰 色。内壁：灰 色。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。
9				直筒型	直筒 型	口縁部 シマ	34.0	35.0		2.3	口縁部	側面外上方へ大きく外反し、側面を上に傾かせる。	外壁：ナチュラル。 内壁：ナチュラル。	石灰、 砂岩	外壁：灰 色。内壁：灰 色。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。
10	b04 トレンチ			直筒型	直筒 型	口縁部 シマ	34.0		1.2		口縁部	側面外上方へ丸みを極め、底を多く取る。	外壁：ナチュラル。 内壁：ナチュラル。	石灰、 砂岩	外壁：灰 色。内壁：灰 色。	褐色 灰化色	地：灰 色。内壁：灰 色。

## 唱谷遺跡 鉄製品観察表

SP

出土品 記録番号	遺 墓	出土地点	層 次	器 様	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の 測定 (cm)	種類	高 度
3	SP105	第1遺跡	鉢	鉢	5.5	0.6	0.4	9.8		1/2	鉢

### 3 関柱遺跡

#### 調査成果

##### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・3・9図）

調査対象地は阿波山脈南麓、調査地点の東側を北から南へ流れる大坂谷川によって形成された扇状地の扇頂部、標高約32~44mの緩斜面上に位置する。調査対象面積は83,000m<sup>2</sup>と広範囲であるため、調査同意の得られた地区から順次、試掘調査を実施した。現況は耕作地（田・畑）であり、擁壁や石垣で区切られた階段状の地形となっている。

##### トレンチの設定（第1図）

調査区は横断道の路線に沿い、扇状地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

##### 基本層序（第2図）

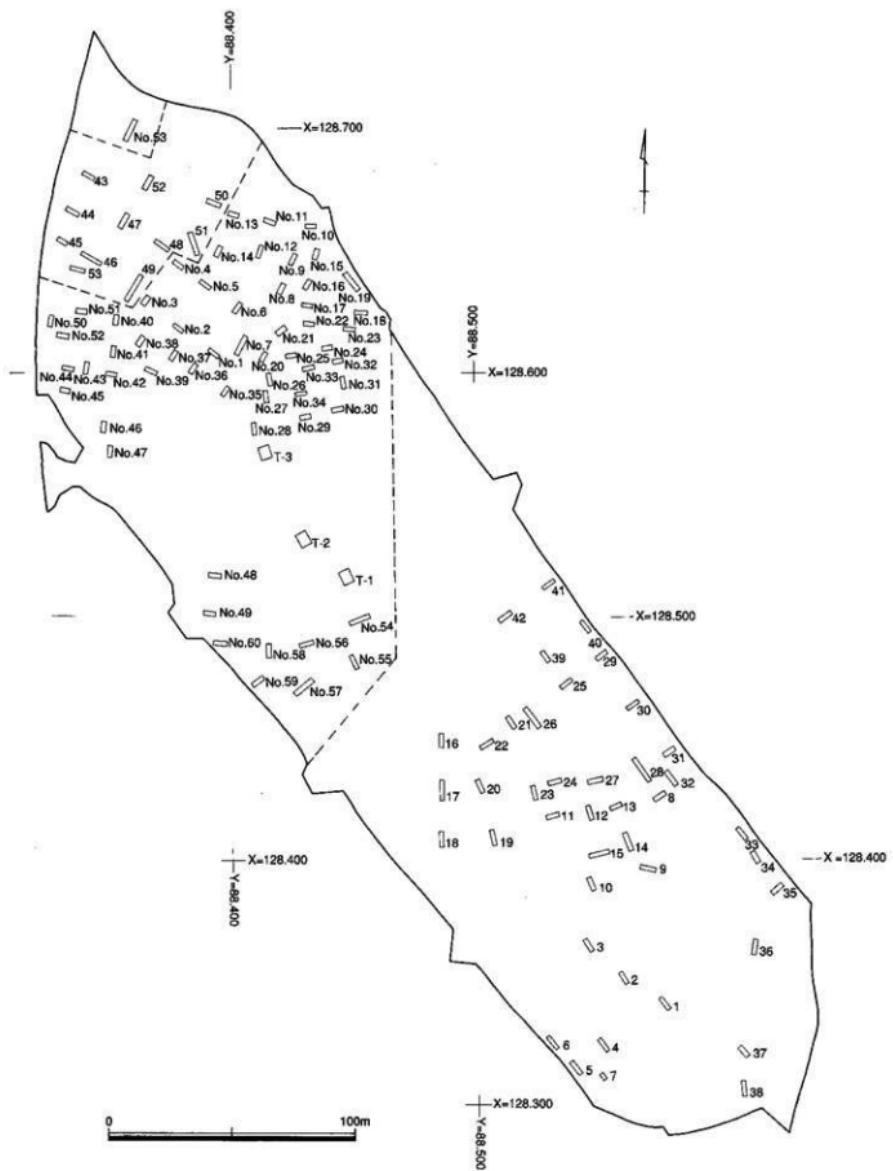
調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の変更が著しい。表土以下は扇状地性の疊層の堆積が見られ、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

##### 出土遺物（第3図）

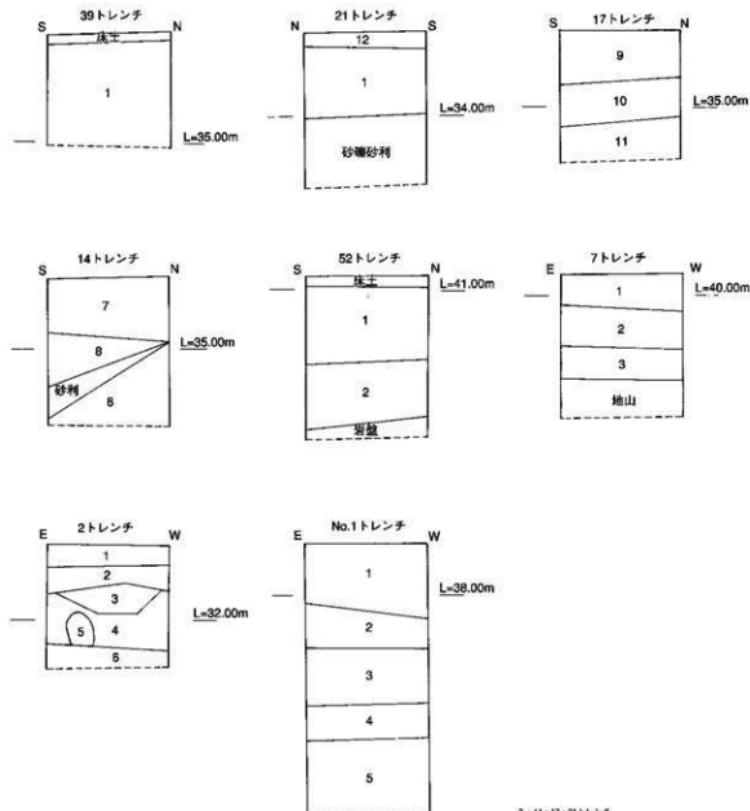
1は東播系の指鉢の底部である。2は備前系の陶器の徳利である。3は陶器の鍋の口縁部である。4は瓦質土器の焰焰鍋である。5は緑色岩製の敲石である。

#### まとめ

53基の試掘トレンチを開口した。試掘トレンチ規模は5m×1mを基本とし、必要に応じて拡張あるいは深掘りを行い、遺跡の有無の確認に努めた。試掘の結果、表土（耕作土）直下は、大坂谷川の堆積作用による扇状地性の疊層が堆積しており、遺構の存在するような安定した層は確認できなかった。また調査対象地は後世の開墾による削平・盛土等の土地変更が著しく、出土遺物も表土（耕作土）からであり、時期的にも近世以降のものである。また遺構も検出されなかった。試掘結果を受け、本調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、試掘調査のみで終了した。



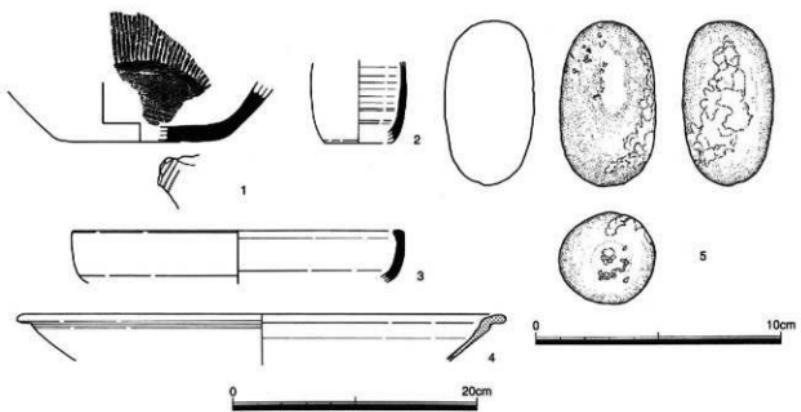
第1図 トレンチ配置図



**2・14・21トレンチ**  
1. にじいろ黄色 (10YR5/4 砂質土  
(しまりやけあり。3~5cmの砂礫多く含む。))  
2. 黄色 10YV4/4 砂質土  
(2cm大的の砂礫多く含む。草木根もねる。)  
3. 布質褐色 10YR8/6 砂質土 (4~6cmの砂礫多く含む。)  
4. 明黄褐色 10YR8/6 砂質土 (4~6cmの砂礫多く含む。)  
5. 明黄褐色 10YR8/6 砂質土 (4~6cmの砂礫少し含む。)  
6. 黄色 10YV4/4 砂質土  
(しまりやけあり。1~10cmの砂礫多く含む。)  
7. 布質褐色 10YR8/6 砂質土 (やや粘性質あり。しまりやけなし。)  
8. 明黄褐色 10YR8/6 砂質土 (3~4cmの砂礫多く含む。)  
9. 明黄褐色 12YR7/2 砂質土  
(1~10cmの砂礫を大きさの砂礫多く含む。)  
10. 布質褐色 10YR8/6 砂質土  
(しまりなし。5mm~2cmの砂礫を含む。)  
11. 布質褐色 10YR8/6 砂質土 (3~20cmの砂礫を多く含む。)  
12. 黄色 10YV8/6 粘性砂質土 (しまり強い。3cm大的の砂礫。)

- 39トレンチ**  
1. 緑褐色 10YR5/4 砂質土 (1~10cmの砂礫を多く含む。)
- 7トレンチ**  
1. 緑褐色 2.5Y3/2 シルト (砂礫を多く含む粘土土。)  
2. 明黄褐色 2.5Y5/6 砂質土 (底泥が生、こじり固大が多い。大葉  
~巨葉。)  
3. 青色 2.5Y6/6 砂質土  
(底泥~角鈍が生、下部にしまりのある粘土を含む。)
- 52トレンチ**  
1. 砂質土・細選 (3cm大粒径の丸みを帯びた砂が中心。)  
2. 明黄褐色 2.5Y5/6 砂質土 (部分的に5cm大的の砂礫を含む。)
- No.1トレンチ**  
1. オリーブ褐色 2.5Y3/4 シルト (粘性有り。しまりやや弱い。耕作土。)  
2. にじいろ黄色 2.5Y5/4 砂質土  
(細粒、しまりやや有り。1~5cmの砂を全粒に含む。)  
3. にじいろ黄色 2.5Y6/4 砂質土 (細粒、しまり有り。粗粒、砂礫を多く含む。)  
4. にじいろ黄色 2.5Y6/4 砂質 (しまり弱い。中層の土。)

第2図 模式柱状土層図



第3図 出土遺物

開柱遺跡 土器観察表  
包含層

包含層 番号	遺跡	地盤高点	基 位	器 形	底厚さ	L (m)	W (m)	底 高 度 (m)	高 度 (m)	50cm 底 高 (m)	最高 底 高 (m)	その他の 底 高 (m)	底厚 (cm)	底形	器 形	内面 材質	外 表 材質	色 調	備 注
1	14 トレンチ		盛土	輪番 器體	底厚 1.5			13.6		4.6				底部	底部僅小にとげ感。体 積外上方に張げる。	外面：ナガ。 内面：白子口（をゑ／ サカナ）口縁有り。 底部のため内側不規 則。	石光・長 石	内面：暗赤 外側：暗赤 内側：白	東濃系、 焼成良好。
2	14 トレンチ		盛土	陶器 焼物	底厚 1.5			7.8	5.4	6.7				底部～ 器身	作部内面に変化・トゲ あり。底壁外側面取りを 残す。	外室：ロリコナガ。 内室：ロリコケツリ。 底部：ロリコケツリ。	底部	外面：赤灰 内面：赤灰	燒成良好。
3	14 トレンチ		盛土	陶器 焼物	口幅約 2.20	26.7	27.2			4.2				口縁部	口縁部は僅くて斜斜 は直角く丸める。	外面：ナガ。 内面：口縁僅屈ケツリ。 内面：ナナ。	石光・真 石	外室：赤灰 内室：褐色 底：灰白	燒成良好。
4	14 トレンチ		盛土	瓦質 器體	口底厚 1.51	40.0					3.7			口縁部	底部外上方へ製さし。 底部で折平。外从いし 縫隙を大きく認め。	外面：ロコナガ。 内室：ロリナガ。 内室：ロリナガ。 ナデ面有り。	石光・長 石・青白	内面：赤灰 外室：赤灰 内面：赤灰	燒成良好。

開柱遺跡 石器・石製品観察表  
包含層

包含層 番号	遺跡	地盤高点	基 位	石 材	器 形	底 厚	底 高 (cm)	厚 さ (cm)	底 高 (cm)	底 高 (cm)	底 高 (cm)	その他の 底 高 (cm)	底厚 (cm)	底形	内面 材質	外 表 材質	色 調	備 注	
5	14 トレンチ		混合層	白色石	假石	6.7		4.0	3.9	128.5				1/1					

## 4 金泉寺谷西古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・3・10図）

調査対象地は阿瀬山脈南麓の標高約56～59mの高位段丘面上に位置する。調査地点の南には中央構造線に派生する断層が通る。現況は山林であるが、以前には耕作地（畑）として開墾されていた。調査地点周辺には、中谷山古墳群・愛宕山古墳・阿王塚古墳・吹田奥郷古墳など多くの古墳が存在している。

#### トレンチの設定（第1図）

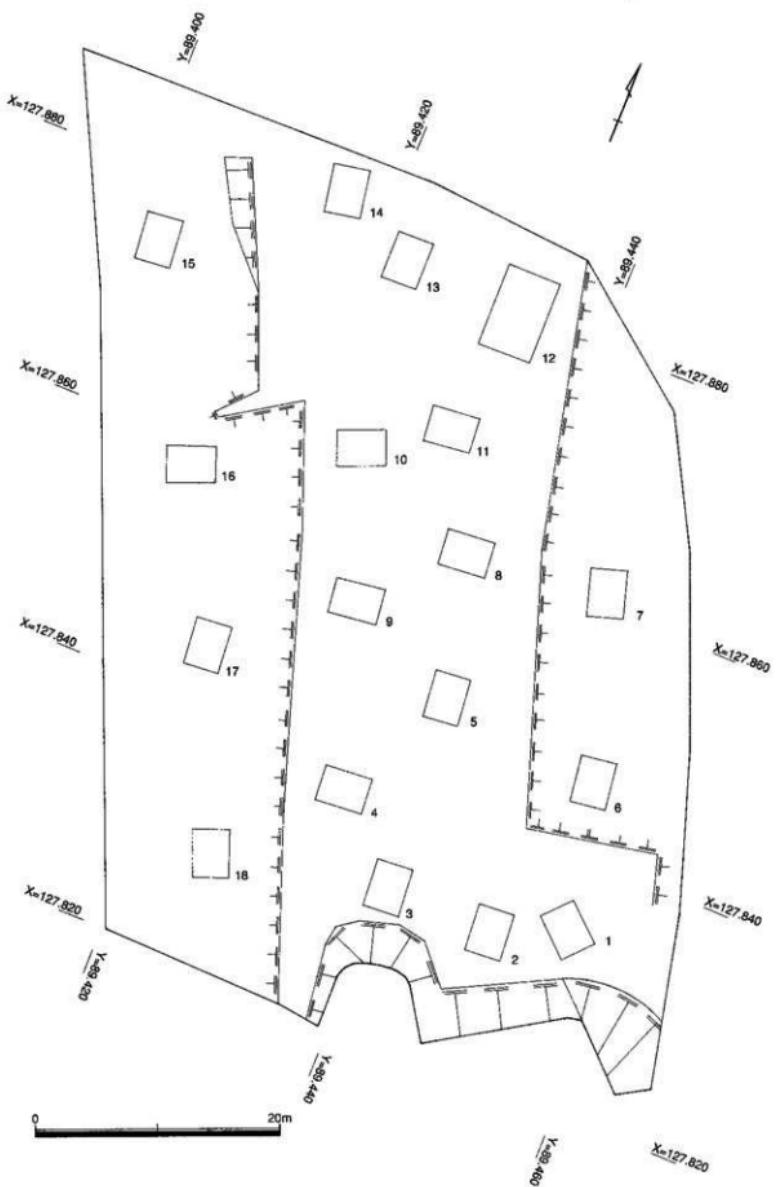
調査区は段丘平坦面を中心に設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

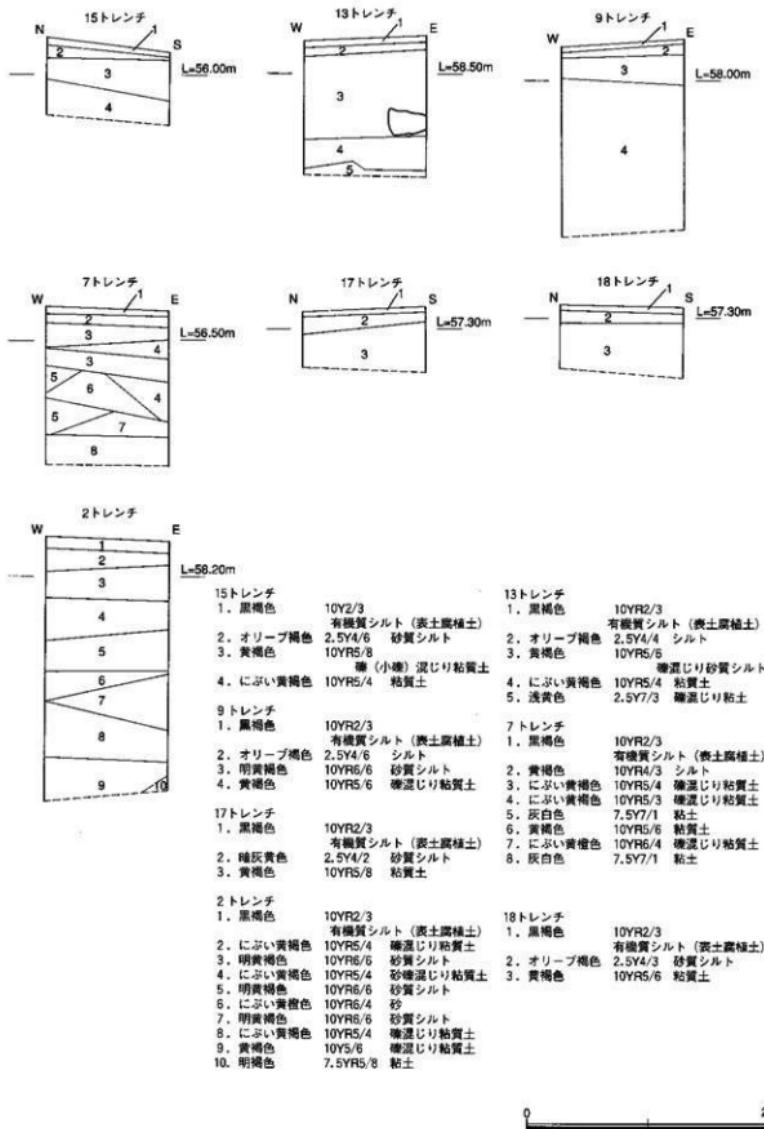
調査地点は耕作地開墾による削平等の変化が著しい。また表土（腐植土）以下は岩盤の風化砂礫層となっており、遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

18基のトレンチを開口した。調査の結果、表土直下は風化砂礫層（地山・無遺物層）である。部分的に火山灰の堆積層も見られた。調査地点は後世の開墾による削平を受けており、遺構・遺物共に発見されなかつたため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

## 5 金泉寺谷東古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・3・11図）

阿瀧山脈南麓、標高52~62mの北から南に傾斜する尾根上に位置する。調査地点周辺には、中谷山古墳群・愛宕山古墳・阿王塚古墳・吹田奥郷古墳など多くの古墳が存在している。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1図）

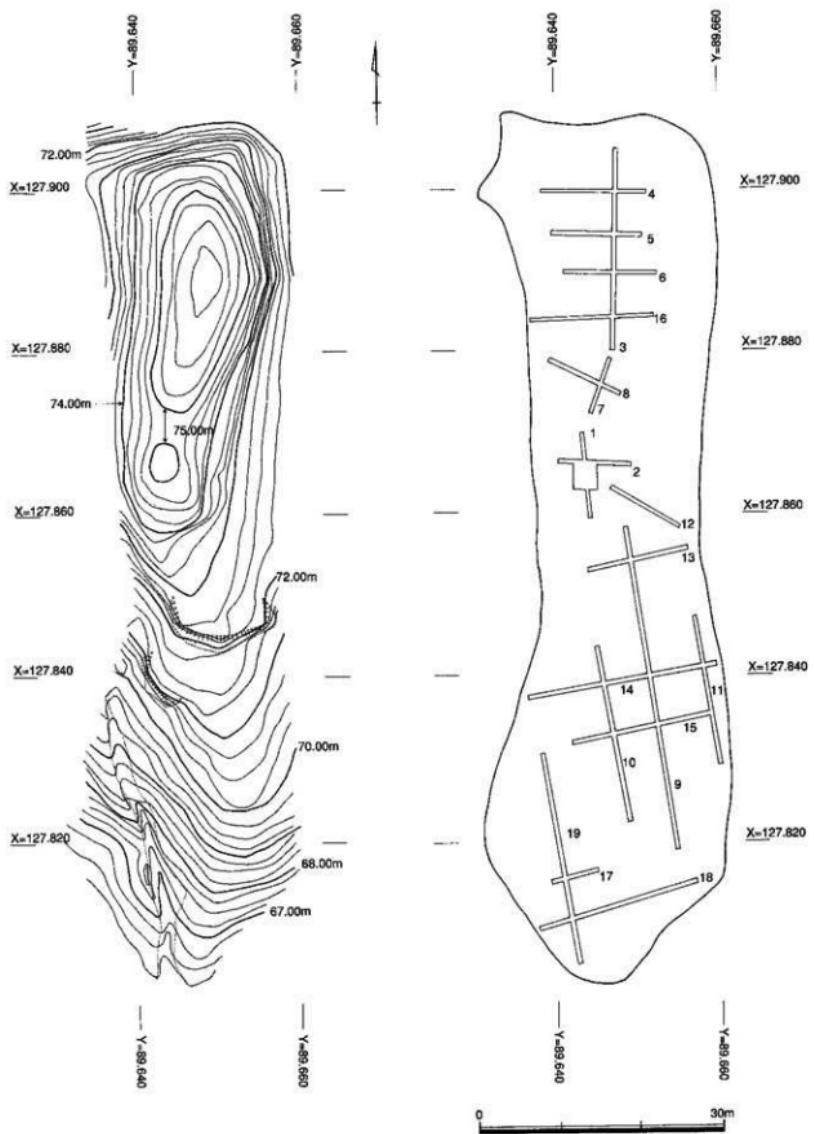
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

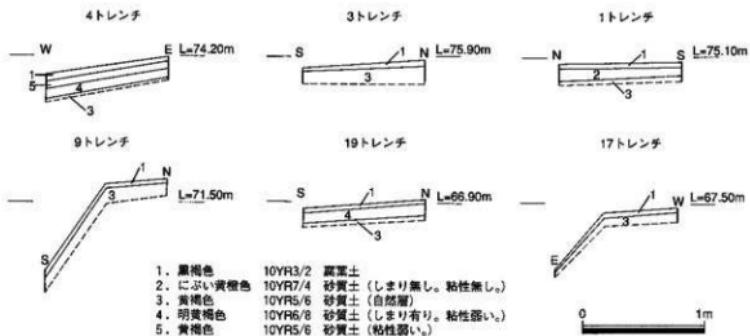
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

調査に際し、平板地形測量を実施した。地形測量から墳丘の可能性が考えられる部分を中心に試掘トレンチを設定し、19基のトレンチを開口した。各トレンチとも基本的な層序は、表土直下は和泉層群の岩盤層である。墳丘状の高まりは自然地形の風化によるものと確認され、また調査区2ヶ所でみられた段状の部分は、後世の開墾時の改変によるものであった。試掘の結果、遺構・遺物共に発見されなかつたため、調査区全域において遺跡は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

## 6 中谷山古墳群（Ⅱ）

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・3・11図）

阿瀬山脈南麓、標高52～61mの南北に延びる尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には愛宕山古墳・谷口山古墳など多くの占墳が存在する。

#### トレンチの設定（第1・2図）

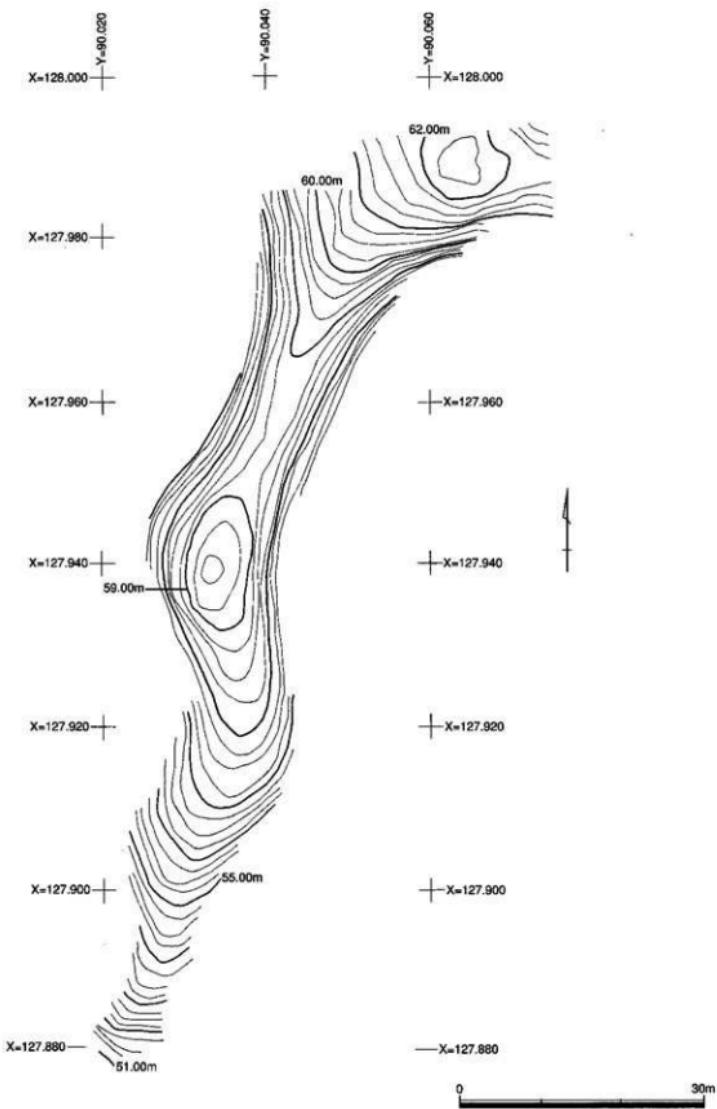
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無造物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

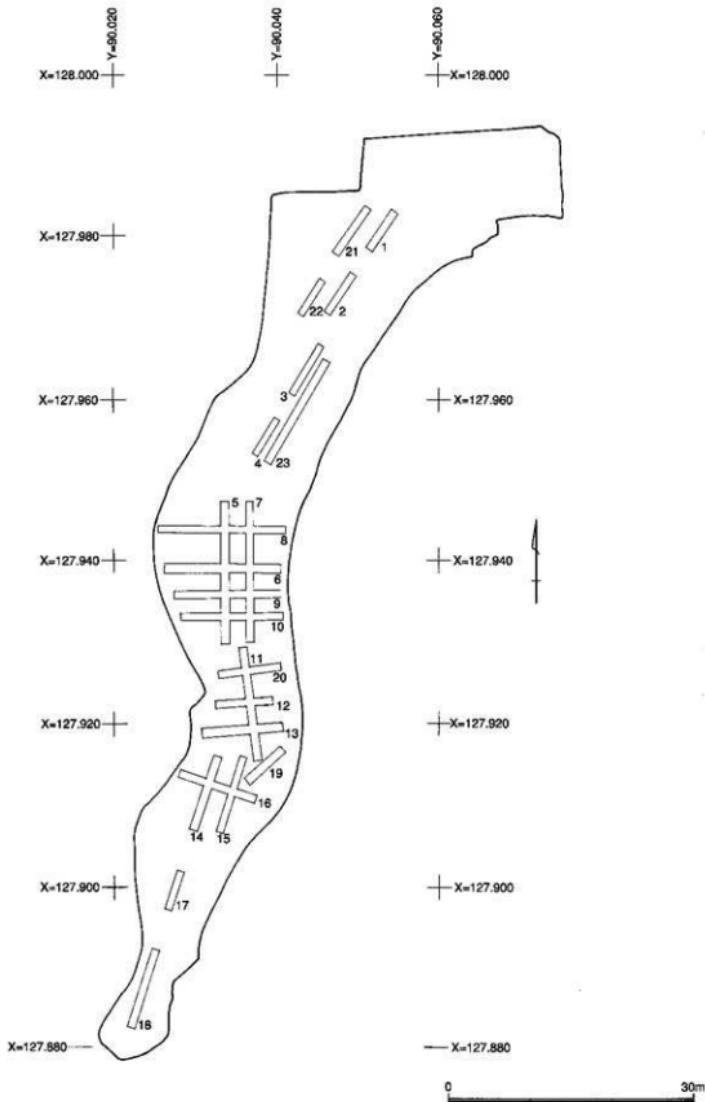
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・造構面は確認することができなかった。

#### まとめ

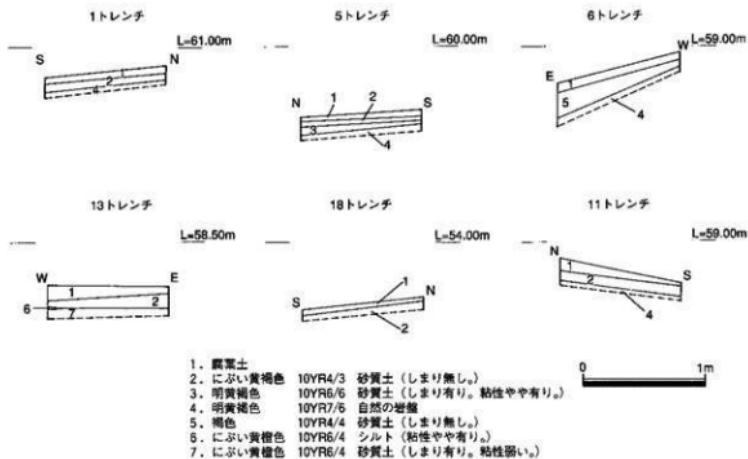
調査に際し、平板地形測量を実施した。その結果を基に試掘トレンチを設定し、23基のトレンチを開口した。試掘の結果、表土直下は和泉層群の岩盤の風化層及び岩盤であり、造構・遺物共に発見されなかった。よって、調査区全域において造構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 7 中谷山古墳群（Ⅲ）

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・3・11図）

阿諏山脈南麓、標高約45m前後の南北に延びる尾根上に位置する。現況は山林となっている。

#### トレンチの設定（第1図）

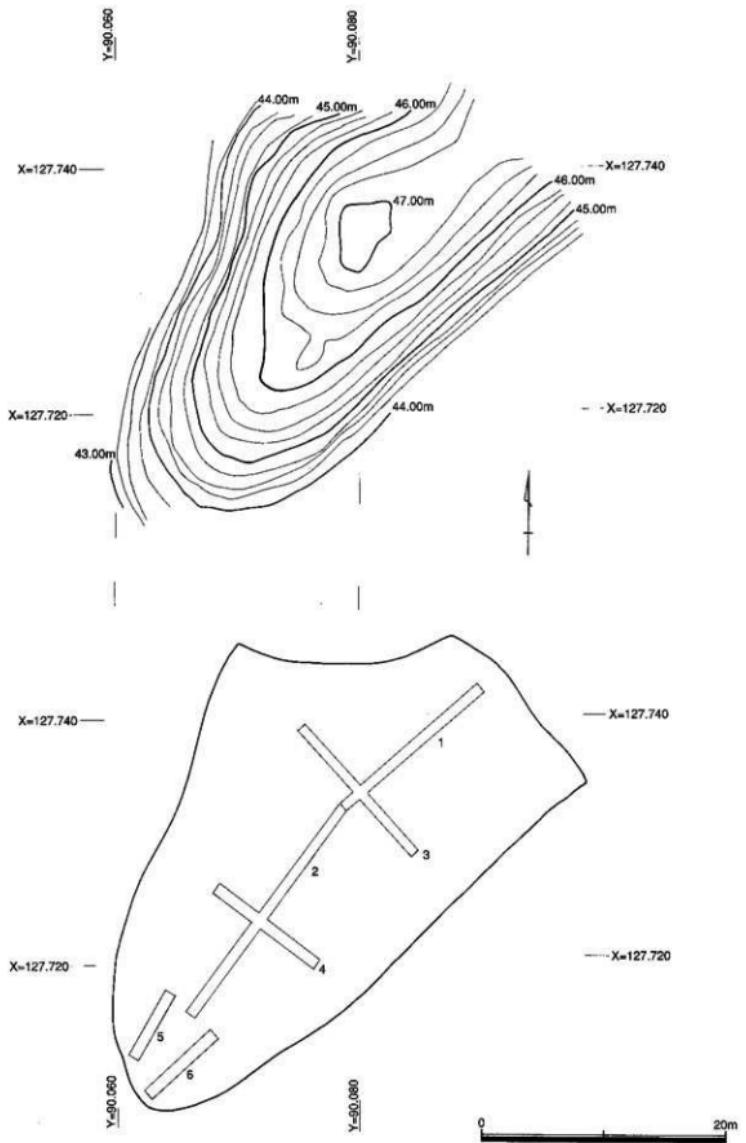
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

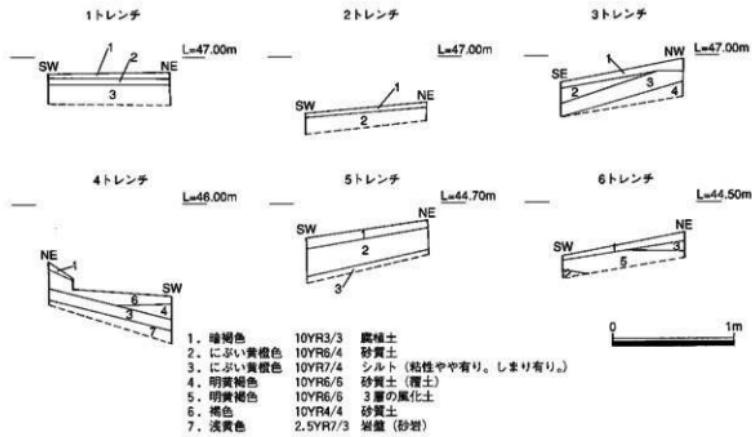
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

調査に際し、平板地形測量を実施した。その結果に基づき尾根筋に沿ってメイントレンチを、それに直交するようにサブトレンチを設定し、6基のトレンチを開口した。表土直下は和泉層群の岩盤層であり、試掘の結果、遺構・遺物共に確認することはできなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

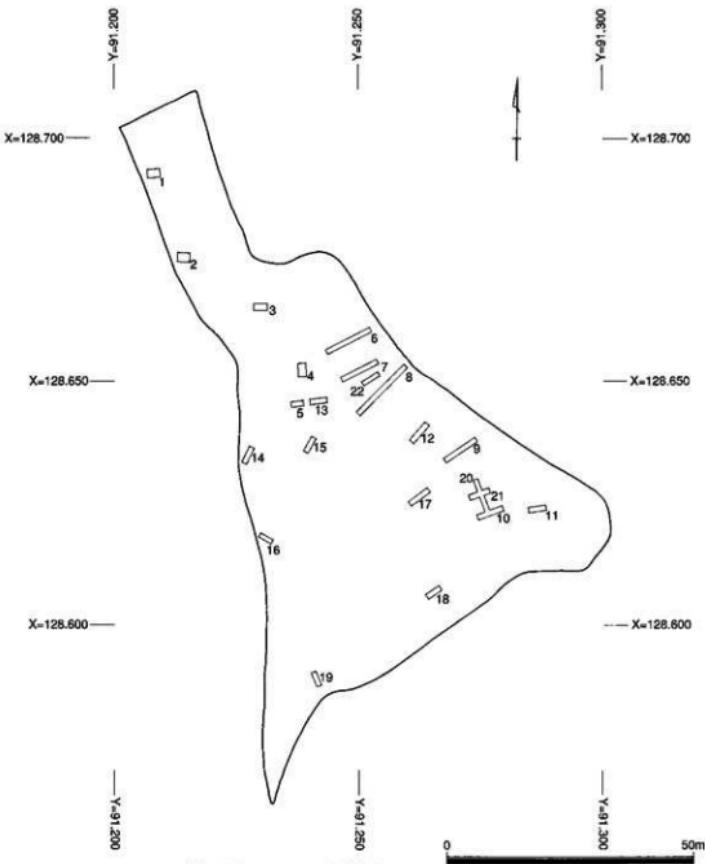
## 鳴門市大麻町内の試掘調査

### 8 桧西谷遺跡

#### 調査成果

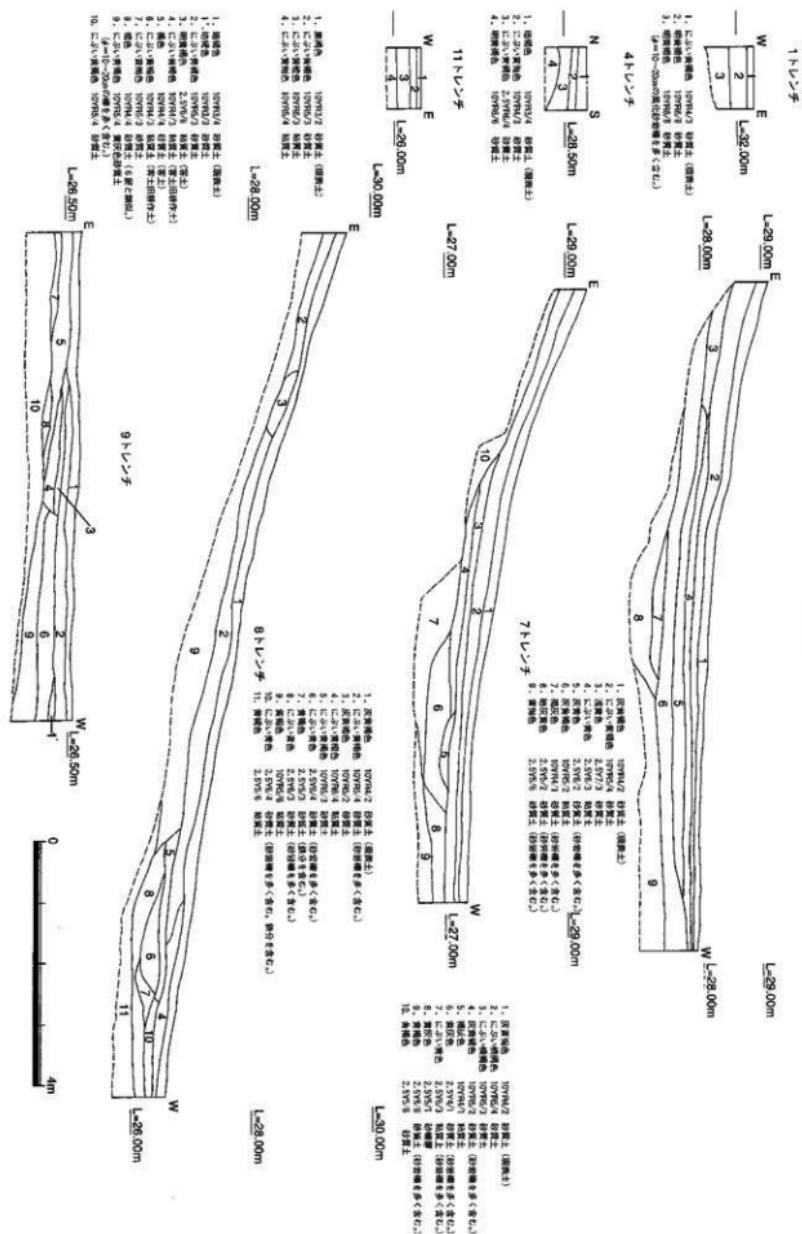
遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・4・13図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、標高25~32mの低位段丘上に位置する。現況は畑地となっている。本調査地に隣接して東側の尾根上には、弥生時代の集落が営まれた桧はしまき山遺跡が所在する。



第1図 トレンチ配置図

圖 2 圖 壓縮面圖



### トレンチの設定（第1図）

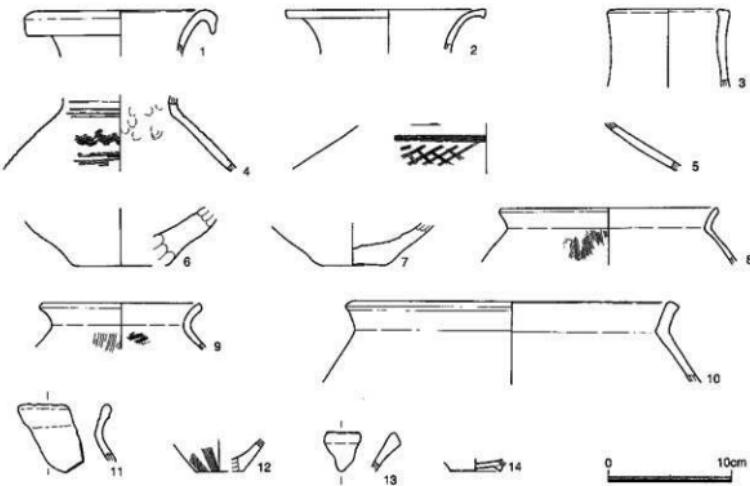
斜面に直交するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

### 基本層序（第2図）

調査地点は尾根部の谷状地形あるいは山裾を巡る流路状の地形であったと思われ、粘質土および砂礫あるいは砂が互層に堆積している状況が確認された。これらは尾根からの土砂の流入と考えられ、現在の地形は谷状地形が埋没して形成された傾斜地であると思われる。また耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変も著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

### 出土遺物（第3図）

1～13は弥生土器で、1～7は壺、8～12は甕である。13は鉢の口縁部と思われる。時期的には弥生時代中期後半～末頃と考えられる。14は上質土器碗の底部である。



第3図 出土遺物

## まとめ

22基の試掘トレンチを開口したが、遺構を確認するには至らなかった。いくつか弥生土器片等の出土がみられたが、これらは東に隣接する桧はしまき山遺跡からの流入と考えられる。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

## 検西谷遺跡 土器観察表

## 包含層

番号	遺物名	遺物	出土地点	層	形	質	底	口径	体 高 (cm)	最大厚 (cm)	底 径 (cm)	表面 處理 (cm)	表面 感 知 (cm)	その他の 特徴 (cm)	形状	調査	含 有 物	色 調	備考	
1	No.6 トレンチ		発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5	16.2					3.6		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・赤 色地帯	外縁部:凹 内側:弧度不明	右肩・赤 色地帯	外縁部:凹 内側:凸口	赤地非常に 強い。	
2	No.7 トレンチ		発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5	16.5					3.6		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・赤 色地帯	外縁部:ナ 内側:肩部不 規則	右肩・赤 色地帯	外縁部:明 眞	地底良好。	
3	No.7 トレンチ	灰褐色	台の堤壁上 取牛下部 蓋の部分	山崎層 1/5	9.6					6.3		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・赤 色地帯	外縁部:凹 内側:内面に 凹凸あり、 やや角を丸め る。縁内はやや凹 む。	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良好、 1~2mmの 石英を多 く含む。
4	No.6 トレンチ		発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5					9.3	6.3		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕あり。外 縁部:凹 内側:スリット 溝底により 強張り。	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良好、 外縁部:凹 内側:凸
5	No.7 トレンチ	灰褐色	台の堤壁上 発生土層 蓋の部分	山崎層 1/5						3.5		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・赤 色地帯	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良好、 小割合・先 端式へ変 化する。
6	No.6 トレンチ		発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5					7.3	4.7		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良、 外縁部:凹 内側:直 線的
7	No.7 トレンチ	灰褐色	台の堤壁上 発生土層 蓋の部分	山崎層 1/5					5.0	3.6		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良、 内側:直 線的
8	No.7 トレンチ		灰褐色	発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5	17.5			16.6	4.7		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良好、 外縁部:切 削痕なし。
9	No.17 トレンチ		下層	発生土層 Ⅲ 1/20	山崎層 1/20	12.8			11.4	3.7		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良好、 内側:直 線的
10	No.6 トレンチ		灰褐色	発生土層 Ⅲ 1/12	山崎層 1/12	26.2			25.8	6.7		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:江 戸式 内側:ナ ド	右肩	地底良、 外縁部:直 線的
11	No.6 トレンチ		灰褐色	発生土層 Ⅲ 1/5	山崎層 1/5				5.1	4.5 4.3 4.0 3.5	不規	外縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	地底良好、 外縁部:直 線的
12	No.7 トレンチ	灰褐色	台の堤壁上 発生土層 蓋の部分	山崎層 1/5					3.8	2.6		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	地底良好、 内側:直 線的
13	No.6 トレンチ		下層	発生土層 Ⅲ 1/24	山崎層 1/24	13.9				3.1		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩・長 径	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	地底良好、 内側:直 線的
14	No.6 トレンチ		下層	発生土層 Ⅲ 1/1	山崎層 1/1	4.2			1.0	0.3		口縁部 内側	外縁部 内側	外縁部 内側	右肩	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則を方形狀に 成める。	右肩	外縁部:切 削痕なし。 内側:肩部不 規則	右肩	地底良好、 内側:直 線的

## 9 板東塚鼻遺跡

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・15図）

調査対象地は阿譜山脈南麓、板東谷川によって形成された標高約23~28mの扇状地上に位置し、西を板東谷川、東を樋殿谷川に挟まれている。現況は田・畑となっている。調査対象面積は約33,500m<sup>2</sup>と広範囲であるため、調査同意の得られた地区から順次、試掘調査を実施した。

#### トレンチの設定（第1図）

調査区は横断道の路線に沿って、扇状地上を東西に横断するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

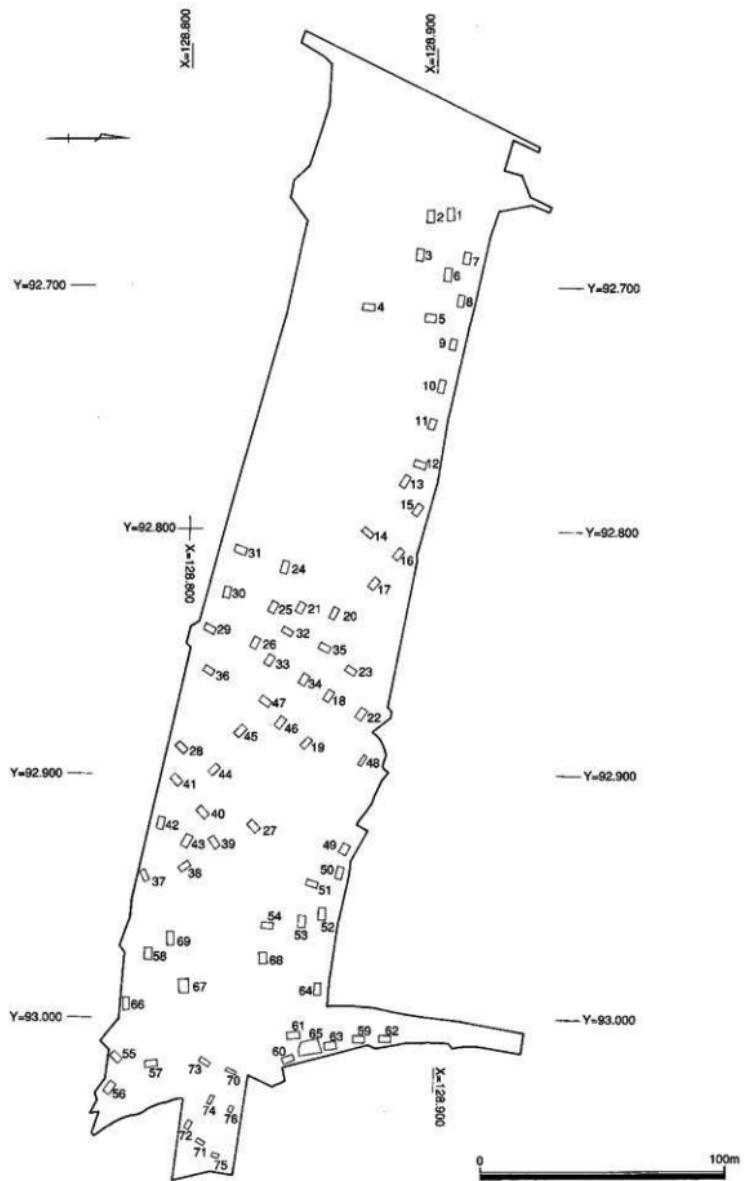
調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の変更が著しい。表七以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂礫層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### 出土遺物（第3図）

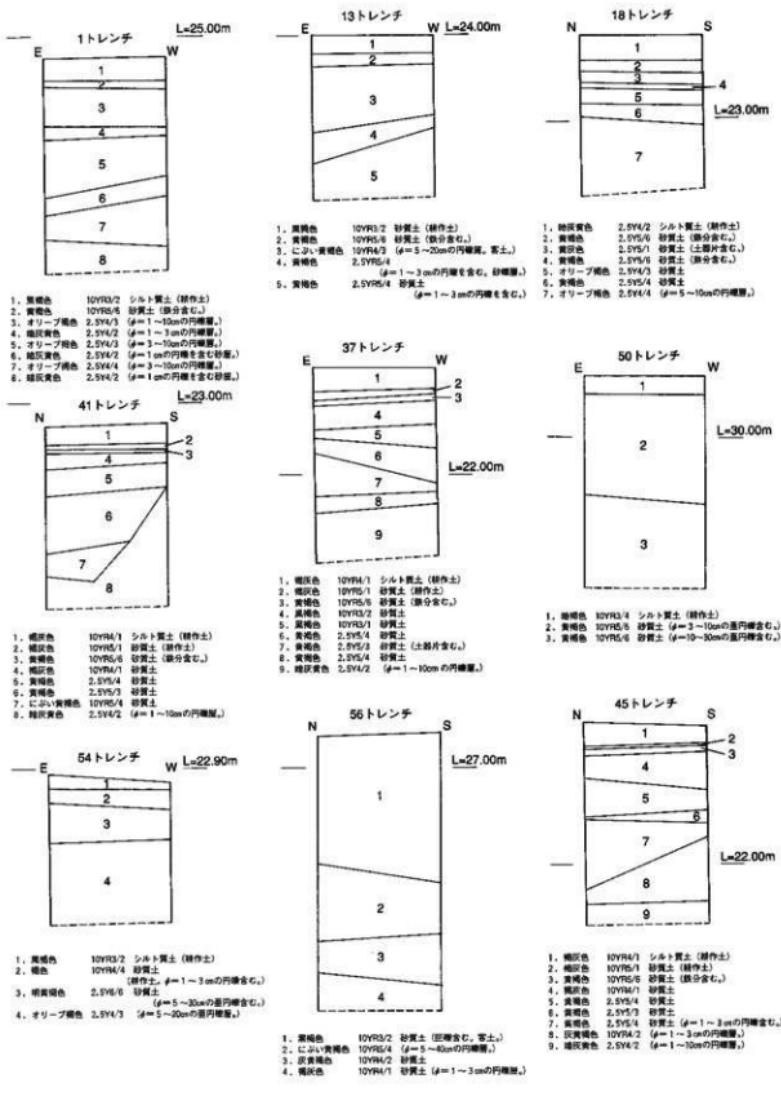
1~3は弥生土器で、1は長頸壺、2は壺、3は壺の底部と思われる。時期的には弥生時代後期頃と思われる。4は古墳時代後期頃と思われる須恵器の杯身である。

#### まとめ

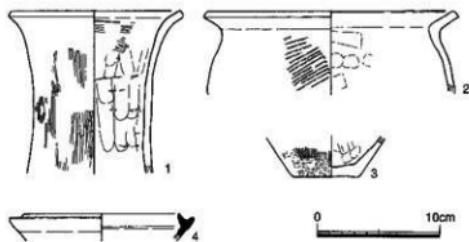
約70基のトレンチを開口した。試掘トレンチ規模は5m×1mを基本とし、必要に応じて拡張あるいは深掘りを行い、遺跡の有無の確認に努めた。各トレンチにおいて基本的な十層堆積は、耕作土直下が板東谷川の氾濫による円礫または砂質土の扇状地性の堆積である。出土した弥生土器等の遺物も流れ込みによるものと考えられ、原位置は遊離しているものと思われる。調査区周辺に弥生時代の遺跡が存在したことが推測されるが、試掘では遺構は検出できなかつたため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図



第3図 出土遺物

## 板東深鼻遺跡 土器観察表

包含層

包含層 深度	地 層	出土地點	層位	器 種	残存部	口 徑 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	測定 (厚さ) (cm)	底面 残存度 (cm)	その他の 特徴 (cm)	断 面	基 準	調 査	出土情 況	色 調	備 考			
1 E637 トレンチ		7番下層	底盤上 部 壁	口盤 部	口盤 部 3/4	13.8			9.0	13.3		山形 形態	断面直し。 口盤部で 若干内反し。 縁部を方 形部に改め。	外面：コ被膜 ア、無鉛ミガキ。 内面：山形部 より調査不切。周縁ミガ キ、エビナギ。	右灰・黄 等、赤色 等、新 品一日	外面：神 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日	
2 B637 トレンチ		7番下層	底盤上 部 壁	口盤部 部	口盤 部 1/2	20.2			17.9	6.7		口盤部	体部打撃しがら立ち 上がり、山形部で内反 し、底盤部に凹の ある。	外面：タテキ。 内面：タテキ。 底面：ヨビキサス。 縁部アスリ。	黒斑・赤 色斑駆 赤斑片駆	外面：赤 内面：新 品一日	外面：神 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日	左灰 右白 内面：新 品一日
3 N638 トレンチ		6番	底盤上 部 壁	底盤 部	底盤 部 1/2			5.5		3.3		底盤	平底。体部外 方に延 びる。	外面：軋ナギ。 内面：タテキ。 内面：ヨビキサス。 縁部アスリ。	灰斑・良 いも 外面：新 品一日	外面：灰 内面：灰	外面：灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰
4 N616 トレンチ		6番 下層	底盤上 部 壁	底盤部 部	底盤 部 1/20	12.6	15.1			2.2		口盤部	かえじは短く内傾し、 縁部を大に改める。	外面：ヨクロナギ。 内面：ヨクロナギ。	右灰 左灰 内面：灰	外面：灰 内面：灰	外面：灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰	右灰 左灰 内面：灰

## 10 西山田古墳群（Ⅱ）

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・16図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約64～73mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には大河別神社古墳群・萩原墳墓群・愛宕山古墳などが所在する。

#### トレンチの設定（第1・2図）

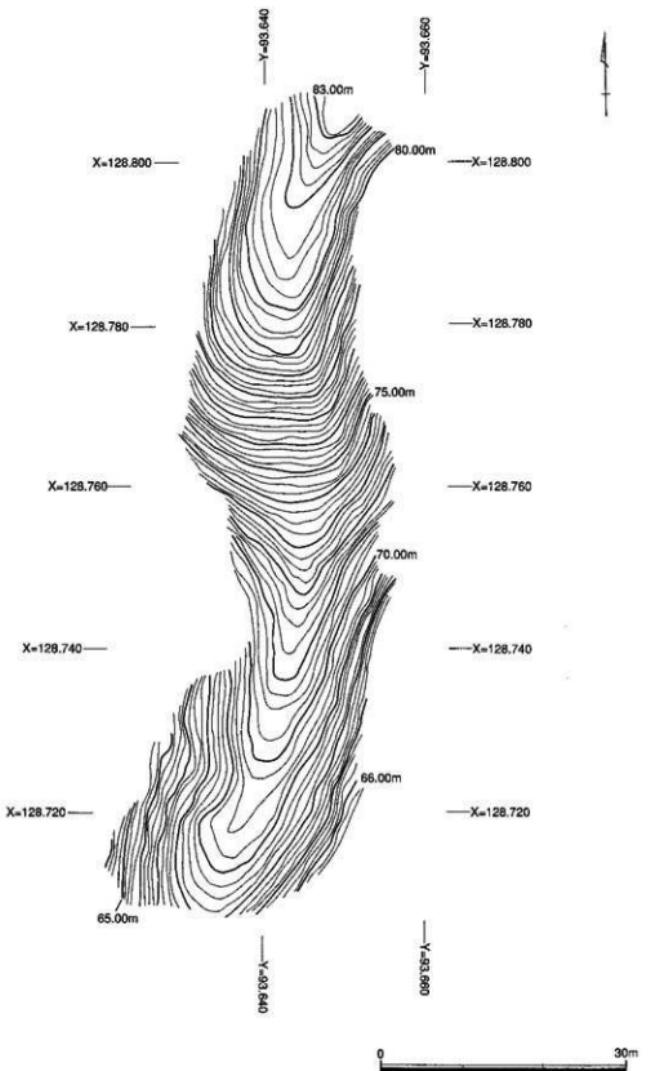
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

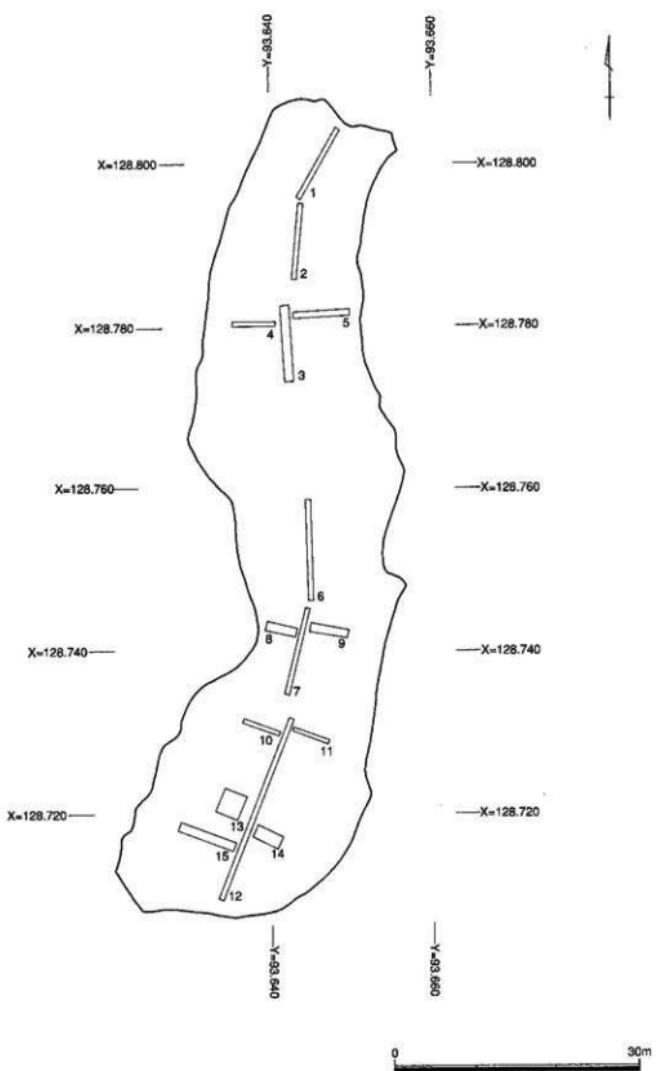
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

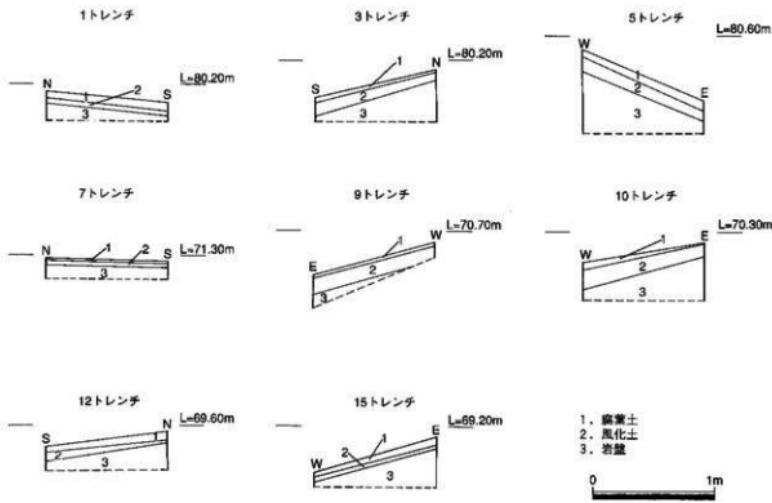
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、試掘トレンチを設定した。調査区北および南側に地形変換点がみられ、何らかの埋葬施設の存在が予想された。しかし、試掘の結果、各トレンチとも表土（腐葉土）直下は岩盤若しくは岩盤の風化土が僅かに堆積するのみであり、15基のトレンチを開口したが、各トレンチとも遺構・遺物はまったく検出されなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 11 カネガ谷西古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・16図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約68~80mの細長い尾根上に位置し、周辺の尾根上には多くの古墳が所在する。また調査地点の東側の尾根上には弥生時代後期の高地性集落のカネガ谷遺跡が所在している。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1・2図）

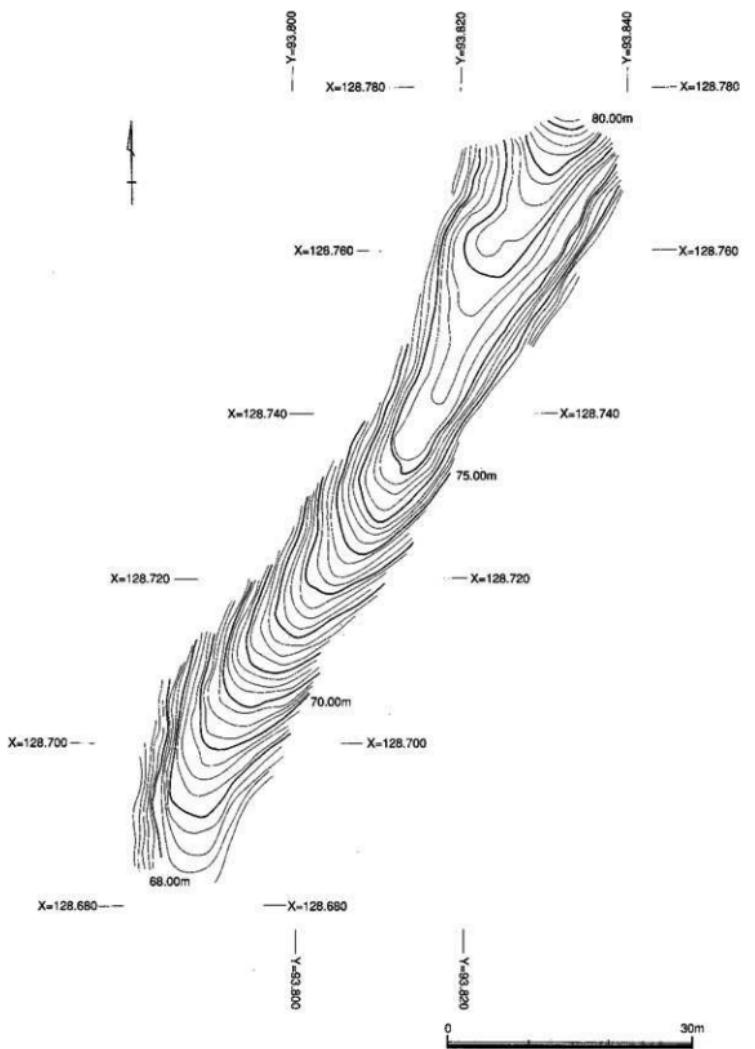
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、撤削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

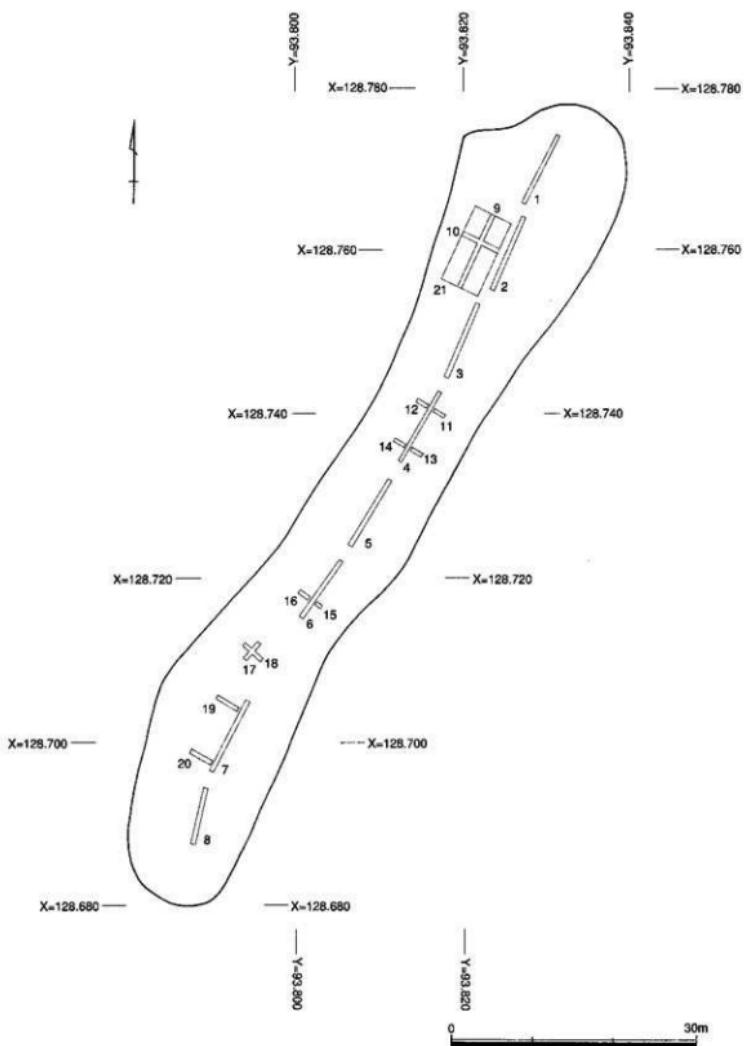
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

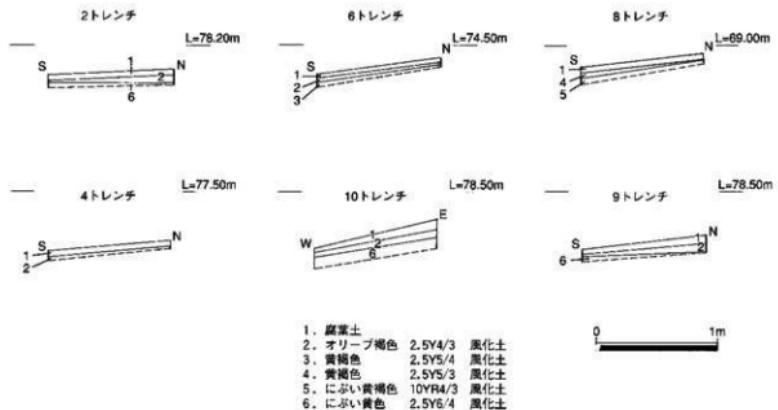
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、試掘トレンチを設定した。試掘の結果、21基のトレンチを開口したが、いずれも表土（腐葉土）の直下は岩盤若しくは岩盤の風化土であり、堆積も10数cmと非常に浅く、遺構・遺物ともに全く検出できなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 12 王子八幡神社古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・17図）

調査対象地は、讃岐山脈南麓の標高約57~72mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1・2図）

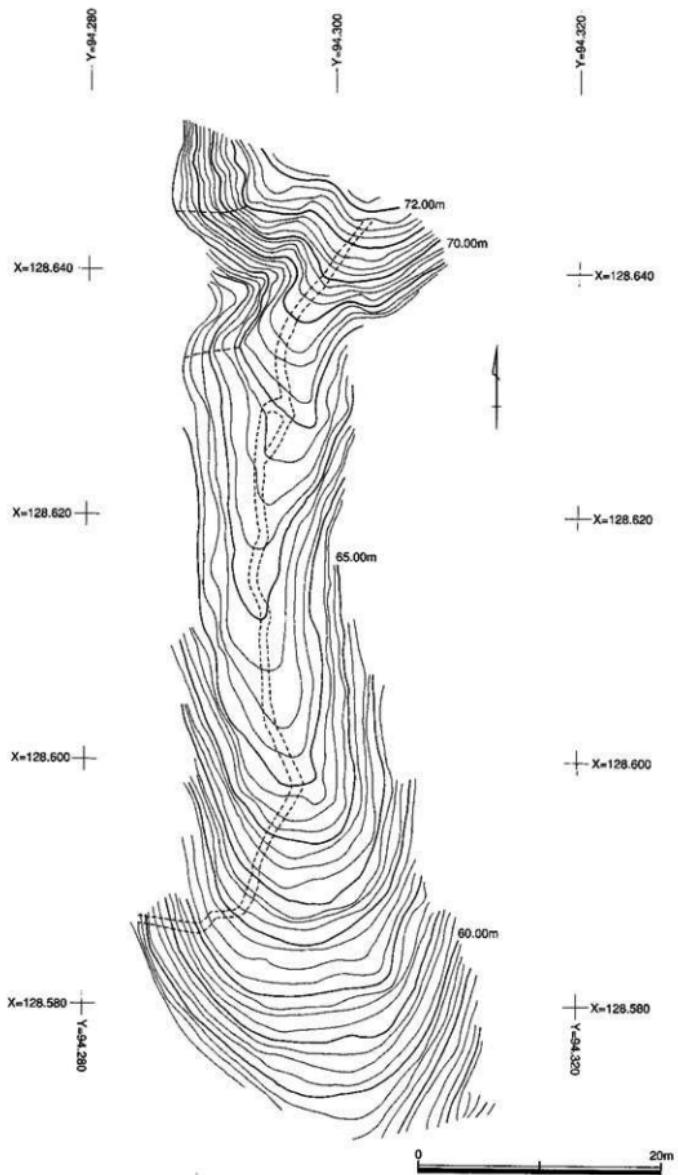
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

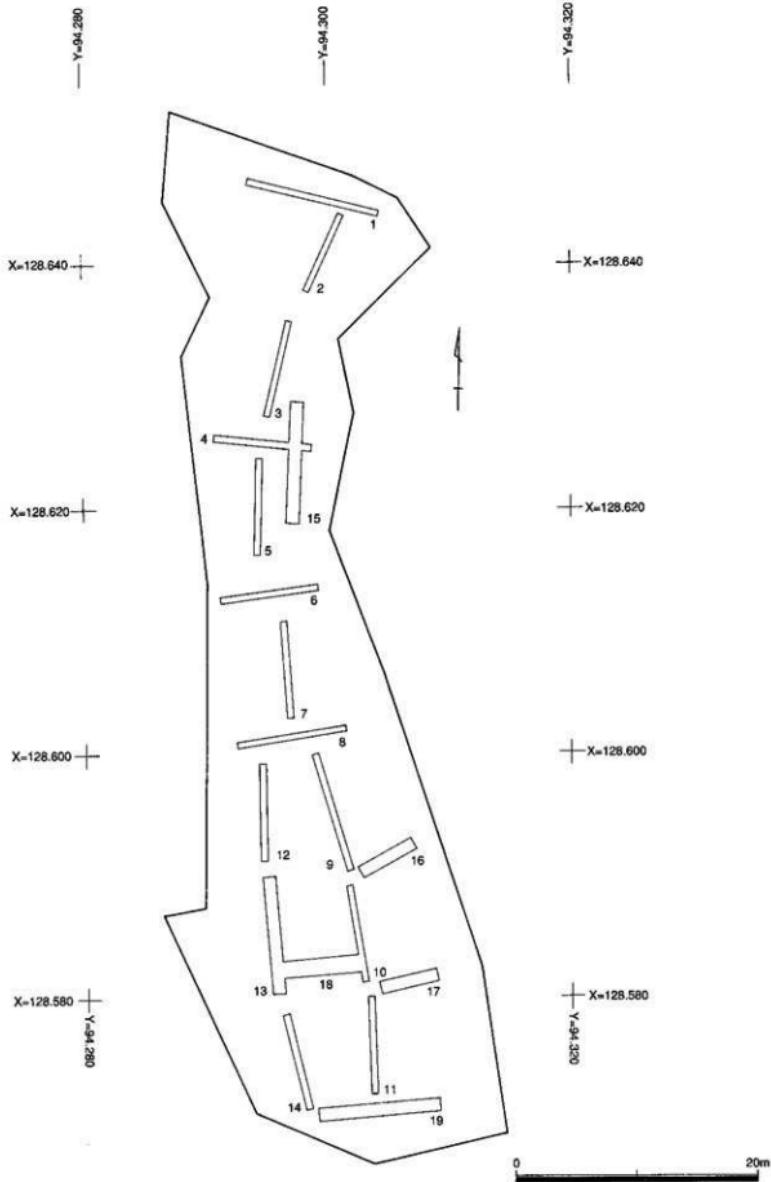
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

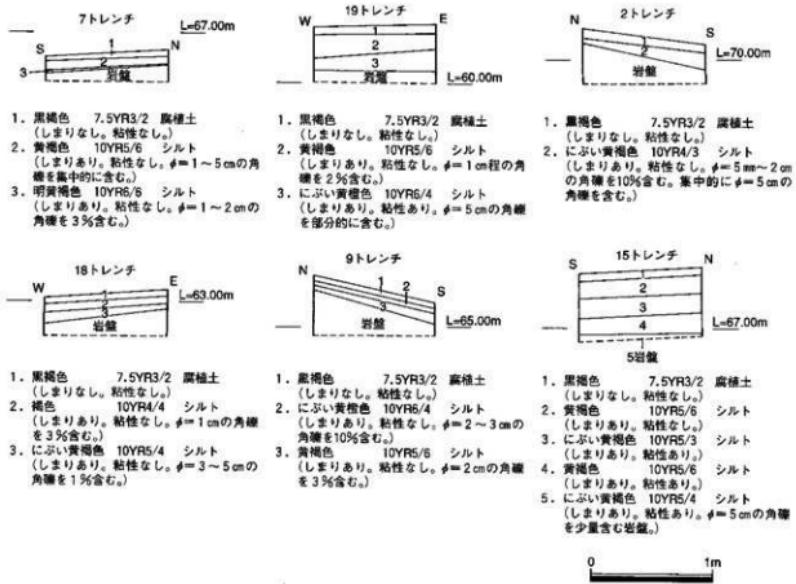
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、19基の試掘トレンチを設定した。試掘の結果、いずれのトレンチも表土（腐植土）の直下は岩盤もしくは岩盤の風化土の土層堆積であり、遺構・遺物ともに検出できなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 13 長谷古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・17図）

調査対象地は、阿讚山脈南麓、標高約62～77mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1図）

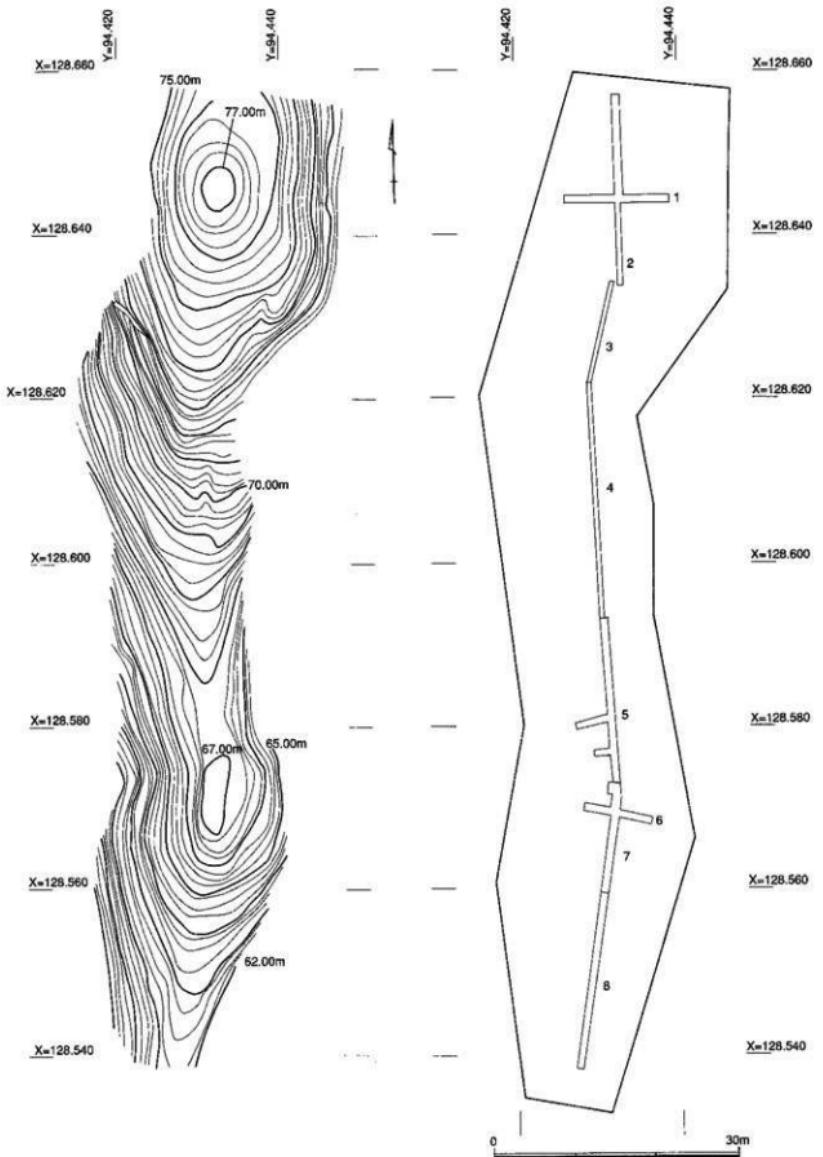
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

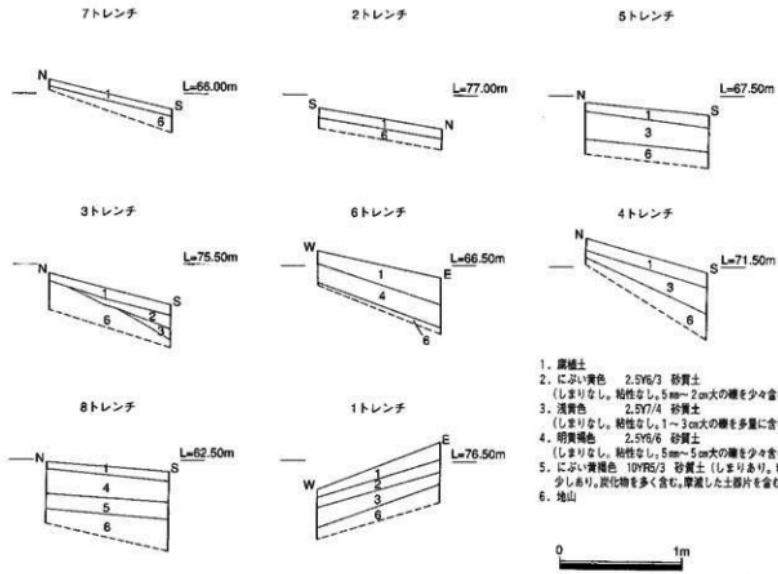
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

地形測量の結果を基に、尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。8基のトレンチを開口したが、いずれも表土（腐植土）直下は、岩盤の風化土および岩盤（地山）であり、遺構・遺物共にまったく検出されなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

## 14 滝ヶ谷古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・17図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約56～78mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1図）

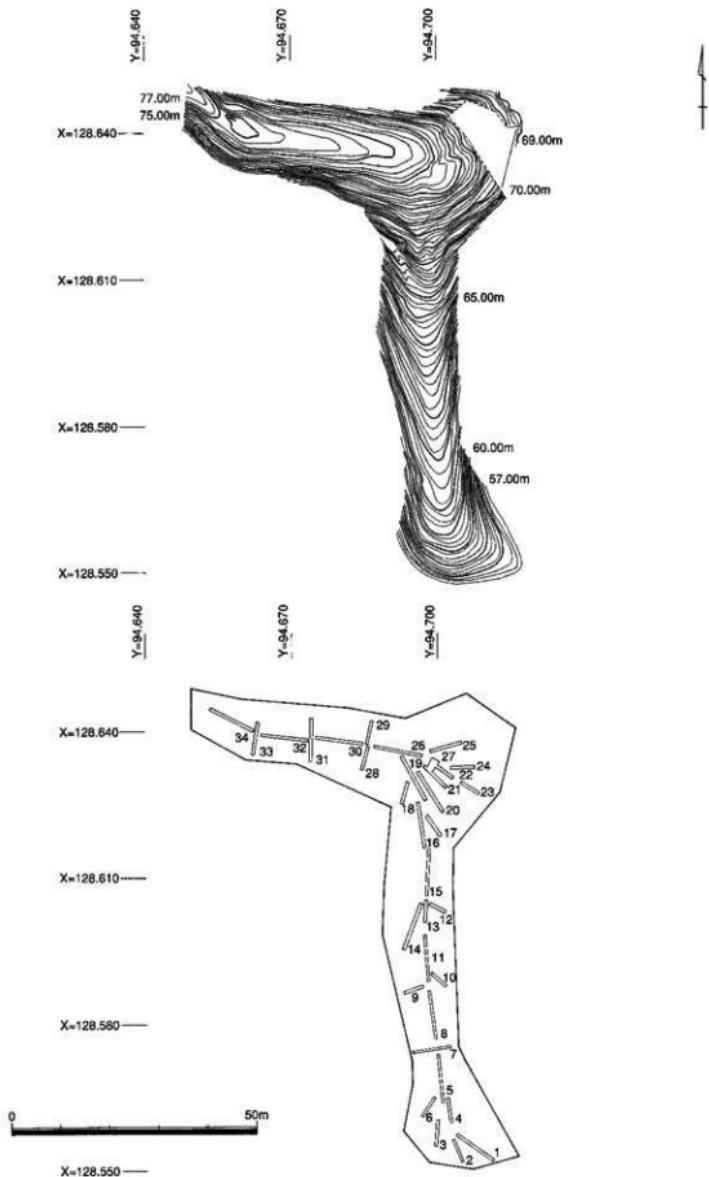
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掲削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

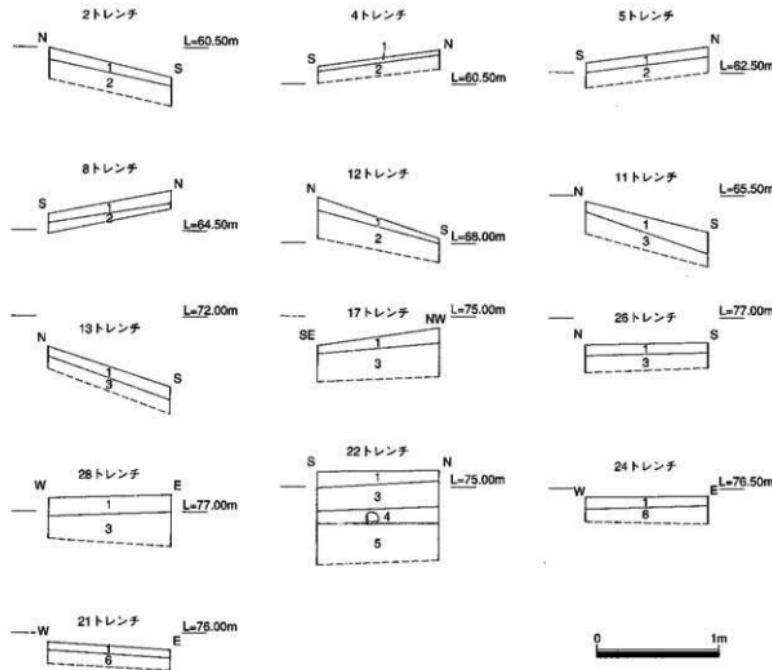
表上：（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

地形測量の結果をもとに、墳丘の可能性があると思われる地点を中心に34基のトレンチを開口した。いずれも表土（腐葉土）直下は、岩盤風化土層あるいは岩盤（地山）となっており、遺構・遺物共にまったく検出されなかったため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置図



- |           |          |                               |
|-----------|----------|-------------------------------|
| 1. 黒褐色    | 7.5YR2/2 | 腐葉土                           |
| 2. にぶい黄褐色 | 10YR4/3  | 砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）    |
| 3. 黄褐色    | 10YR4/4  | 砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）    |
| 4. 黄褐色    | 10YR5/6  | 砂質シルト（ややもろい。和泉層群の砂質泥岩。礫層。岩盤。） |
| 5. 明黄褐色   | 10YR6/6  | 砂質シルト（和泉層群の砂質泥岩。礫層。岩盤。）       |
| 6. 黄褐色    | 10YR5/6  | 砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）    |

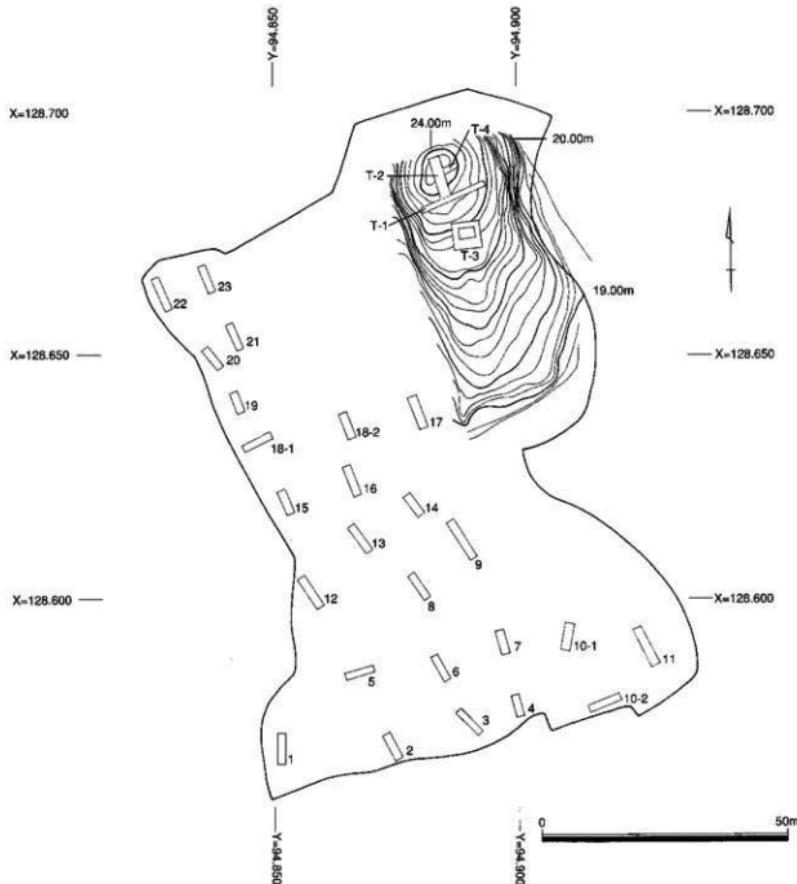
第2図 模式柱状土層図

## 15 中内遺跡

### 調査成果

#### 遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・5・17図)

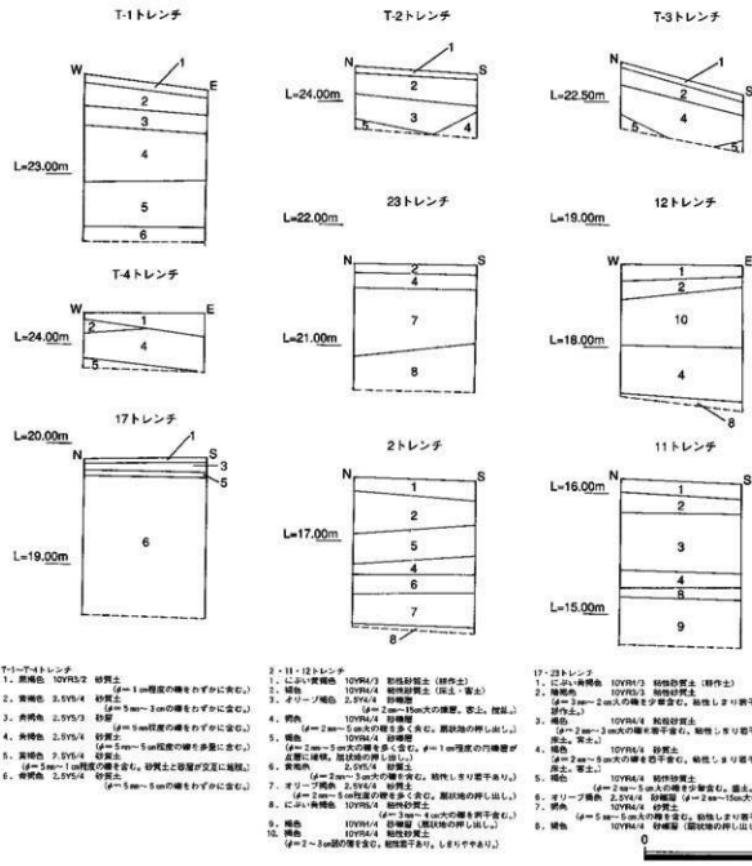
調査対象地は、阿讃山脈南麓、中内谷川によって形成された扇状地の扇尖部に位置する。標高は17~24mで、北から南へ緩やかに傾斜する。現況は畑地となっている。



第1図 地形平面・トレンチ配置図

## トレンチの設定 (第1図)

調査に際し、現況の地形測量を実施し、掘削作業を行った。トレンチの設定については扇状地の傾斜に直交するかたちで南北方向にトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。



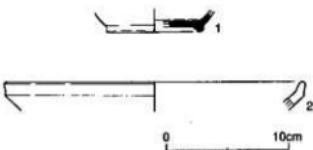
第2図 模式柱状土層図

### 基本層序（第2図）

調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂疊層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

### 出土遺物（第3図）

1は須恵器の椀である。2は土師質土器の甕口縁である。小片であるため詳細な時期決定は困難であるが、いずれも10世紀頃のものと思われる。



第3図 出土遺物

### まとめ

23基のトレンチを開口した。基本的な土層堆積は、表土（耕作土・客土）直下は、扇状地性の疊混じりの堆積であり、遺構の存在は確認できなかった。また遺物はすべて表土（耕作土・客土）からの出土であった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。

## 中内遺跡 土器観察表

## 包含層

目次番号 REG#	測量 場所	出土地点	層位 付近	器種	純形	口径 (cm)	体 高大径 (cm)	基 底 (cm)	胎 色 (cm)	胎 厚 (mm)	胎 厚 (mm)	その他の 特徴 (cm)	断面	形 状	内 部	外 部 特 徴	内 部	備 考
1 3610 トレンチ		2層底土層	標準断面	直底 1/9		7.6		1.7	褐色 0.6				直底外二方にツマる。 第3突出し奥底でハコナギ に刺さり、断面を逆V字 状に形成する。	外縁：ロタリナギ。 内縁：クロナギ。	石高：長 石底：外 内底：内 内面：直	外縁：灰 内底：灰内	深底直口。	
2 3615 トレンチ		3層底土層	上層質 上部 1/15	直底 1/15	24.4			2.3				内縁	内縁向外に向し、断面を 上方につきふり下げる。大 く底のふくらみがある。	不規。	長石	外縁：灰 内底：灰内	深底直口。	

## 16 袖もぎ古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I -第1図およびII -第1・5・18図）

調査対象地は、阿瀬山脈南麓、標高60～80mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には東林院古墳群・宝幢寺古墳群・天河別神社古墳群など多くの古墳群が所在する。

#### トレンチの設定（第1図）

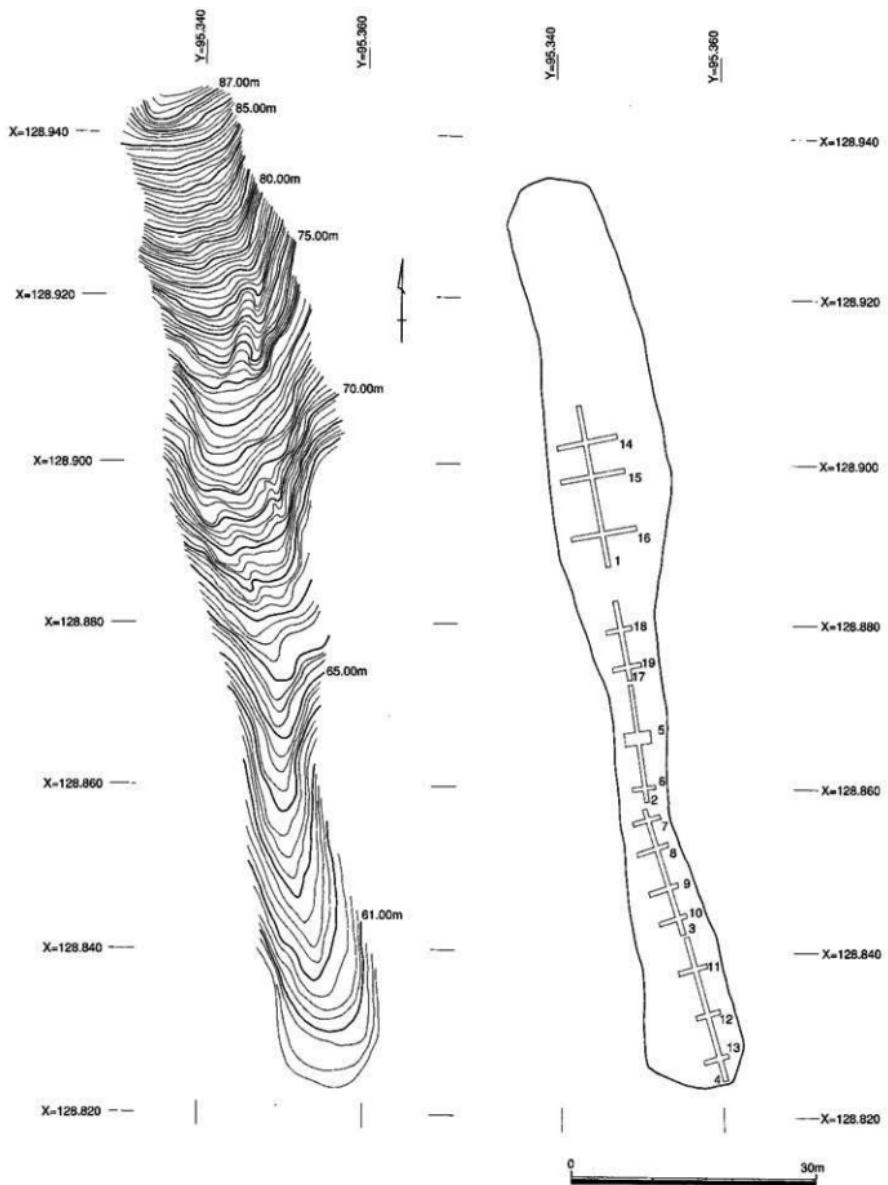
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

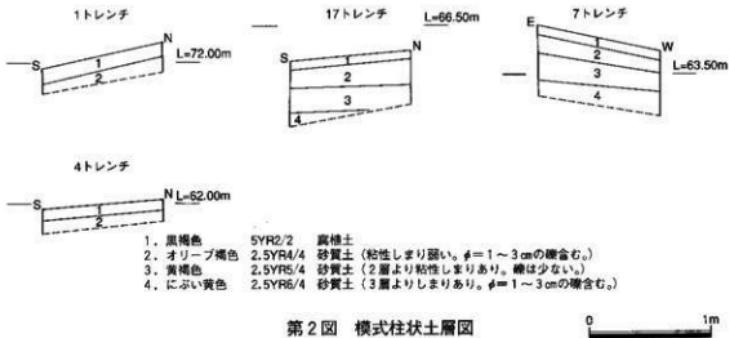
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

調査に先立ち、平板地形測量を実施した。その結果を基に19基のトレンチを設定した。各トレンチいずれも表土（腐植土）直下は、岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構は検出できなかった。遺物も表土から出土した土師器小片のみであり、時代の特定可能なものはなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

## 17 宇志比古神社古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・19図）

調査対象地は、讃岐山脈南麓、標高約63～68mの北から南へ緩やかに傾斜する尾根上に位置する。現況は山林となっている。周辺には東林院古墳群・西山谷古墳群など多くの古墳が所在する。

#### トレンチの設定（第1・2図）

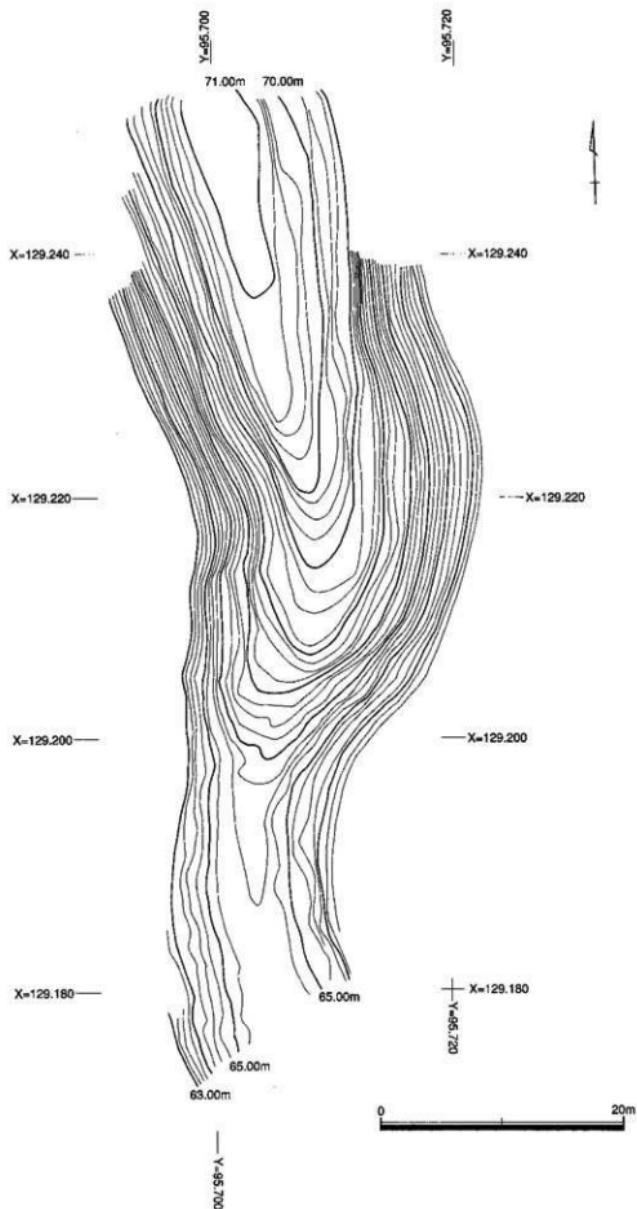
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

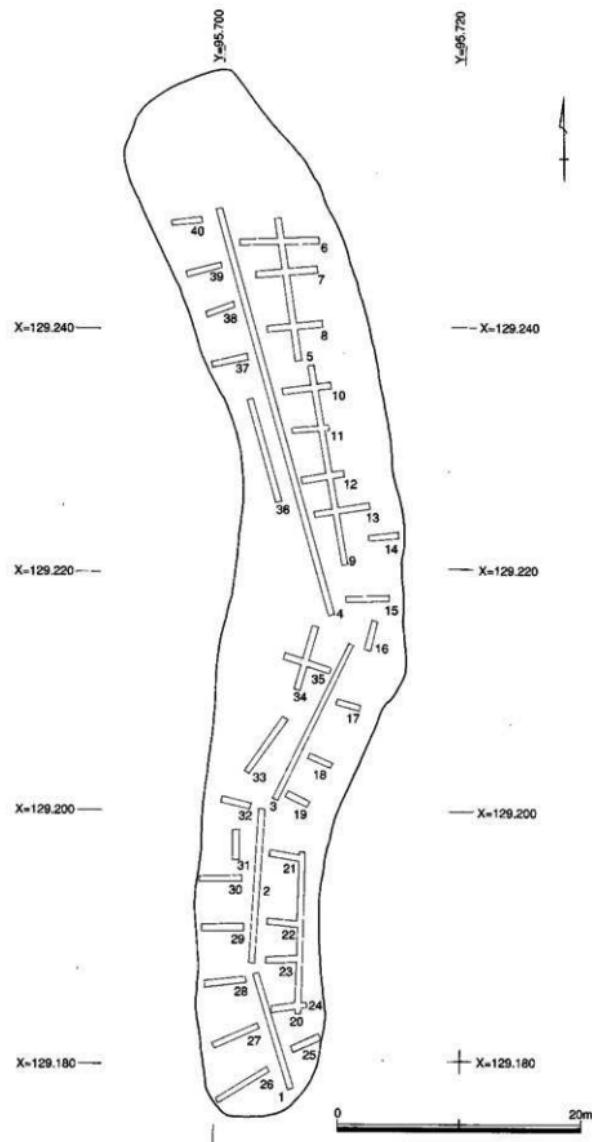
表上（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

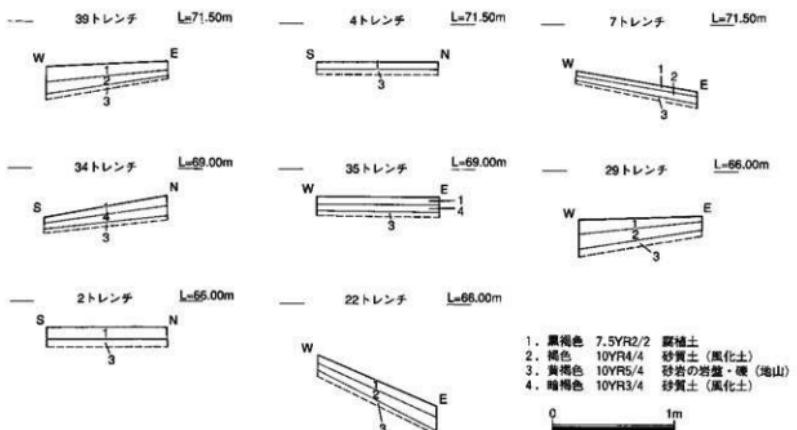
調査に先立ち、地形測量を実施した。その結果を基に40基のトレンチを設定し掘削を行った。試掘の結果、各トレンチとも表土（腐植土）の直下は岩盤あるいは岩盤の風化土であり、遺構・遺物は検出できなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 18 東山谷遺跡

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・5・20図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、大谷川左岸の標高17~28mの斜面上に位置する。現況は山林となってい。る。大谷川の両岸には近世に創業した大谷焼の窯元が現在も多く存在する。

#### トレンチの設定（第1・2図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。マウンド状の高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

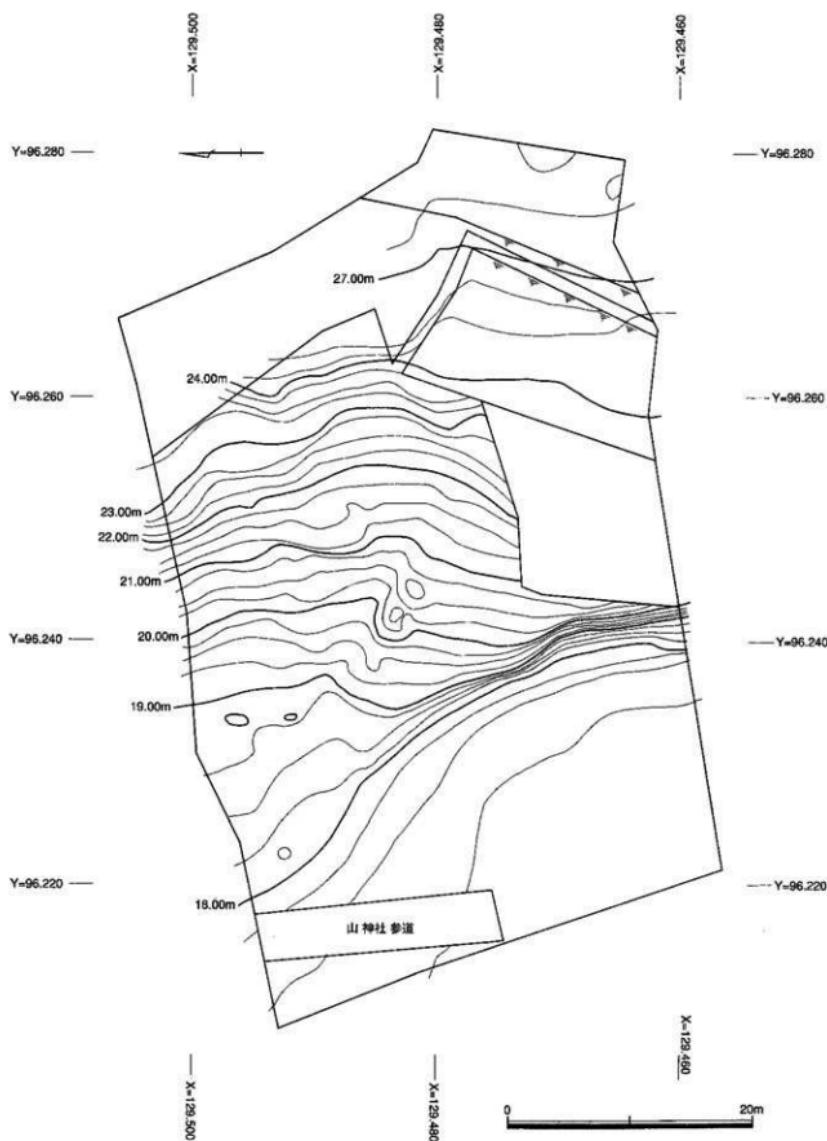
表土（腐葉土）以下は扇状地性の疊層の堆積層となっており、安定した遺物包含層・造構面は確認することができなかった。

#### 出土遺物（第4図）

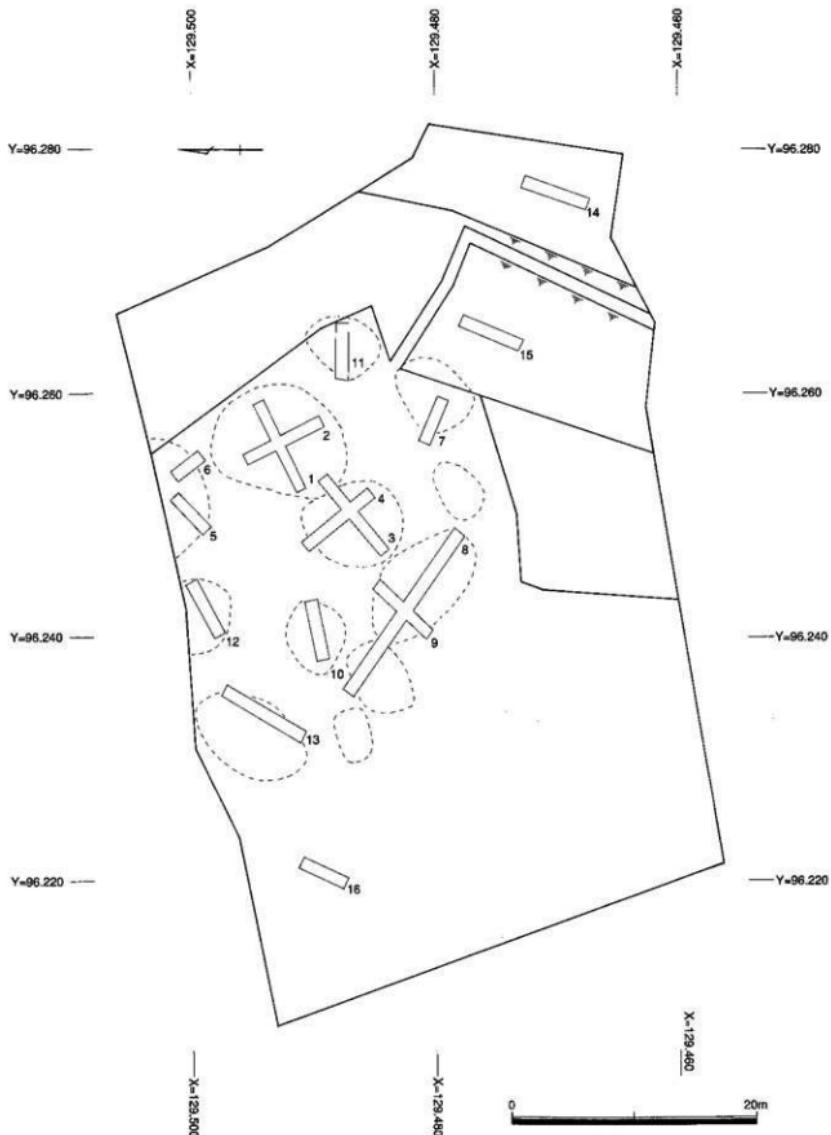
1~5（3は除く。）は大谷焼である。3は須恵器の壺と思われる底部である。3以外は近世以降の遺物である。4の底部内面には焼成時に重ねた窯道具の痕跡が残っている。6~10は窯道具である。7には底部に直径約7cmの孔があいている。これらの出土遺物や周辺の環境などから、近隣に大谷焼の窯が存在していたと思われる。11は寛永通寶である。

#### まとめ

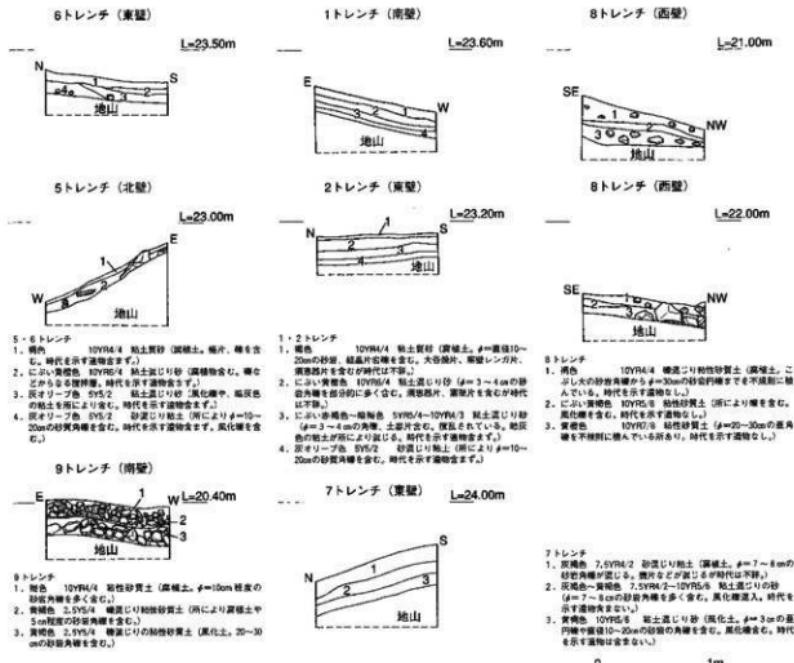
地形測量を基にマウンド状の地形の高まりを中心に16基のトレンチを開口した。当初、近世窯跡の存在が予想されたが、試掘の結果、マウンド状の高まりは斜面からの崩落した礫の堆積したものであった。各トレンチとも表土直下は斜面押し出しの和泉層群起源の疊の堆積となっており、造構は確認できなかつた。また遺物はほとんどが表土上面からの出土であった。調査区全域において造構の存在が確認できなかつたため、調査区域では試掘調査のみで終了した。



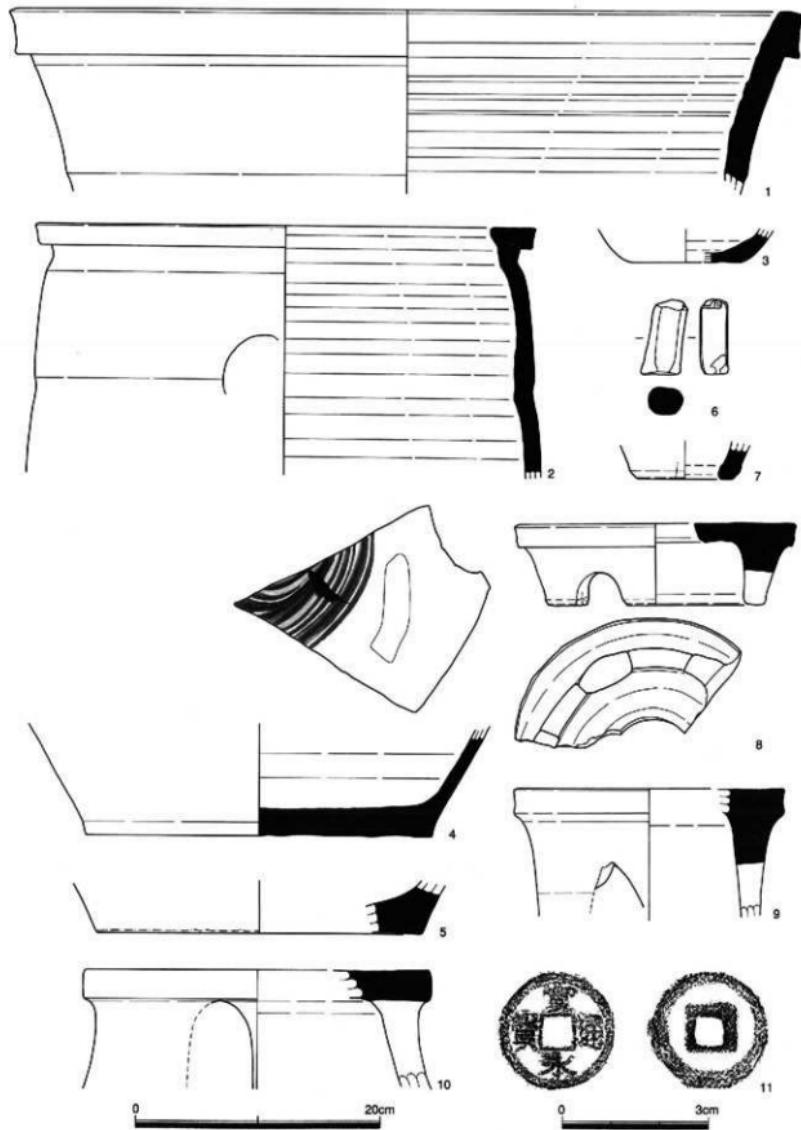
第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図



第4図 出土遺物

## 東山谷遺跡 土器観察表

包含層

区分 測量番号	測定 器具	出土地点	基 位	形 姿	底 平	口 径 (cm)	体 高 (cm)	底 (cm)	壁 (cm)	底 (cm)	その他の 寸法 (cm)	底 (cm)	形 姿	圖 事	含む陶 器成	化 識	備 留	
1	No.5 トレンチ	1層表土	セロ 窓	口香港 1/6	62.0					15.0		口香港	山根外側にし、山根は土下に低張する。	外底：ロクロナダ。内 面：リカリナダ。底 部：	近底 部	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
2	No.7 トレンチ	1層表土	陶器 窓	口香港 1/4	40.0					20.6		口香港	表面に立し、山根底部 で上方に低張し、方舟 底に似る。山根は頂 半分、底脚7cmほどの が張っている。	外底：ロクロナダ。内 面：ロクロナダ。底 部：	近底 部	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
3	No.5 トレンチ	1層表土	陶器 窓	底脚 1/3				6.0		2.7		底脚	体部外二方に立ち。 山根外側に立する。	外底：ロクロナダ。内 面：リカリナダ。底 部：	近底 部	外底：深目 内面：オリ ーブラック 加：の底 部：	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
4	No.7 トレンチ	2層	陶器 窓	底脚 1/2				35.4		8.9		底脚	平底。体部外上方に 立げる。	外底：リカリナダ。 内面：リカリナダ。 底 部：	石英 石	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
5	No.2 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/2				36.6		7.4		底脚	体部外上方に立げる。 底脚内凹に移り込む。	外底：ロクロナダ。 内面：ロクロナダ。	石英 石	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
6	No.2 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/2							15.1 底脚 厚さ2.1	不明		外底：ナダ。制ナダ。 内面：	石英 石	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	
7	No.2 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/3				7.9		2.8		底脚	体部外上方に立げる。 底脚内凹に移り込む。	外底：ナダ。 内面：ナダ。 底脚砂粒が多い。	石英 石	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
8	No.2 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/3	22.0					6.8		全体	体部下方に立げる。	外底：ナダ。 内面：ナダ。	石英 石	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
9	No.1 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/2	22.2					10.5		上部	体部下方に立げる。	外底：ロクロナダ。 内面：ロクロナダ。	石英 石	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶
10	No.1 トレンチ	1層	陶器 窓	底脚 1/3	38.0					9.8		上部	体部外下方に立げる。	外底：ロクロナダ。 内面：リカリナダ。	石英 石	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	外底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶	底：洗色 くらべテレ ルムラブラン 加：に近い 赤茶

## 東山谷遺跡 銅鏡観察表

包含層

区分 測量番号	測定 器具	出土地点	厚 底	形 姿	及き (cm)	径 (cm)	厚さ (cm)	重数 (g)	その他の寸法 (cm)	底形态	部 位	備 留
11	No.3 トレンチ		3層	鏡	2.4			0.5	2.0			★記

## 19 姫田宮尾神社古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・6・21図）

調査対象地は阿諏山脈南麓、標高58~88mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には多くの古墳群が存在する。

#### トレンチの設定（第1・2図）

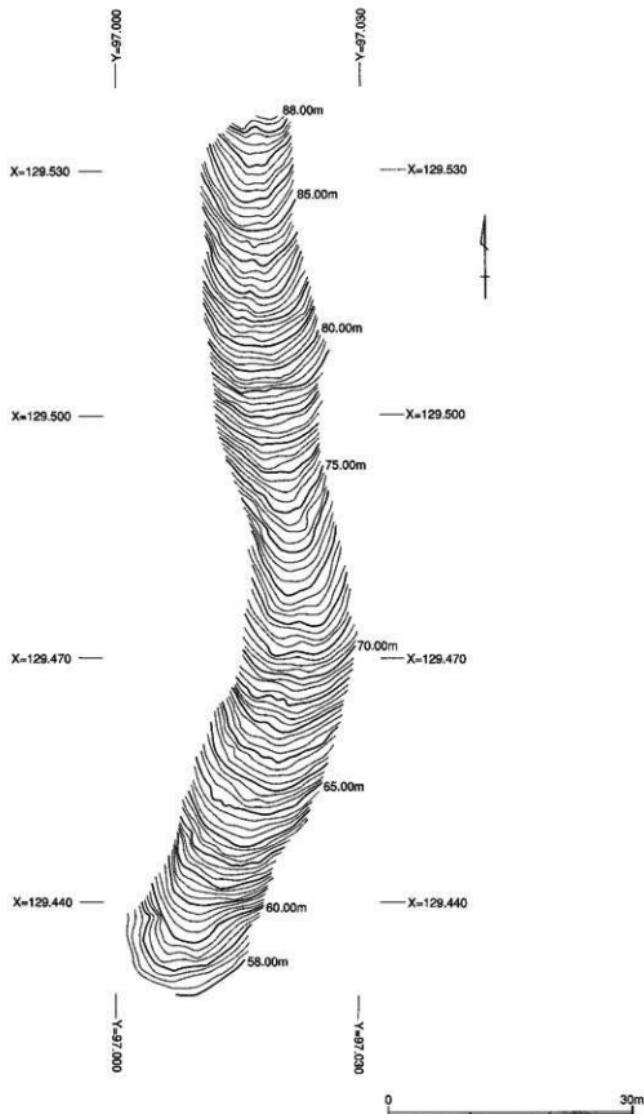
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

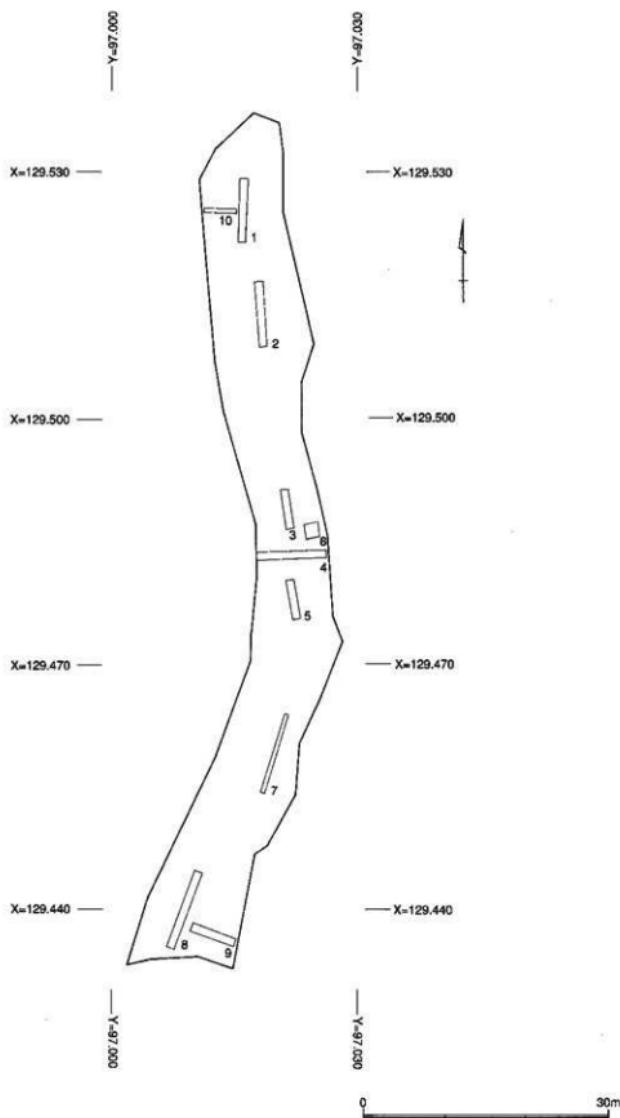
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

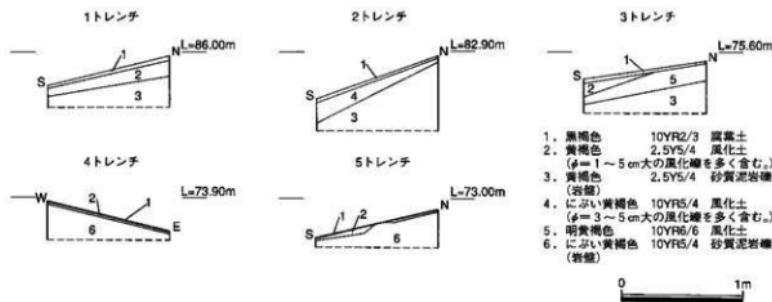
試掘トレンチ掘削に先立ち、現況地形を実施し、その結果を基に10基のトレンチを設定・掘削した。地形測量により墳丘と思われたマウンド状の高まりは、露呈していた岩脈に岩盤風化土が堆積した自然地形であった。また当初、古墳に関する構築物と考えられていた石列状のものも和泉層群の岩脈の風化したものであった。試掘の結果、各トレンチとも遺構・遺物の出土は皆無であり、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

## 20 タキケ谷古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・6・21図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の隆起扇状地が中小河川の削刻により形成された、標高62~99mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレントの設定（第1・2図）

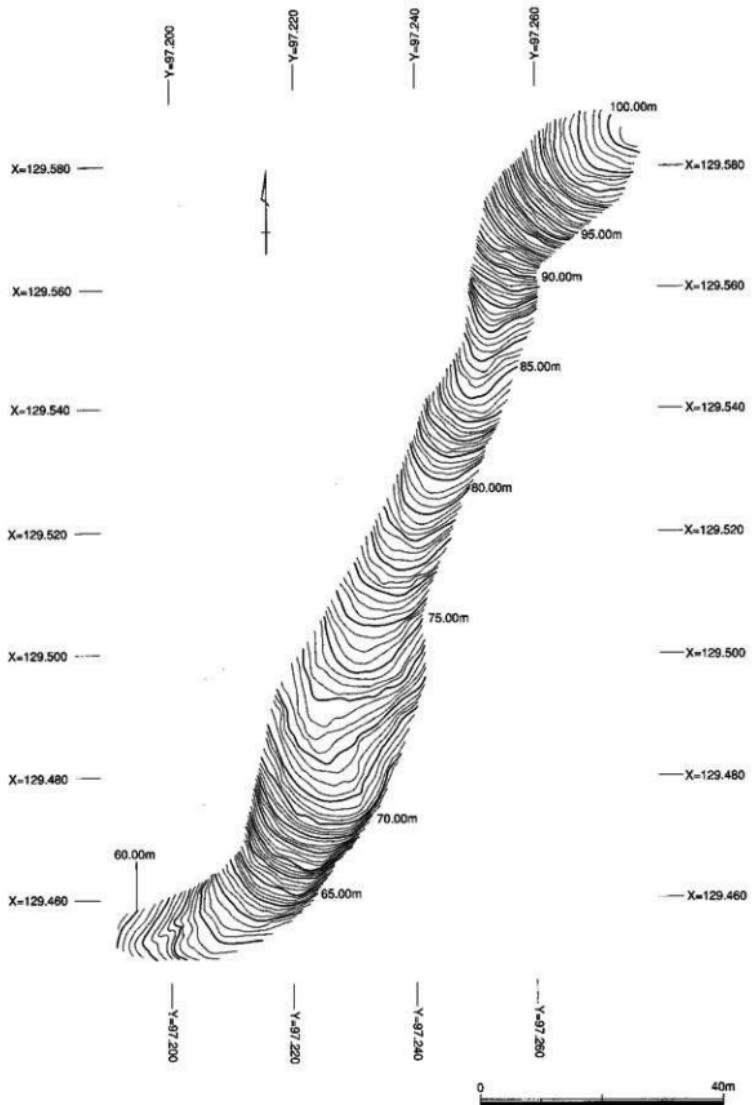
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレントを設定し、掘削作業を行った。トレントの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレントを設定し、それに直交するようにサブトレントを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレントを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

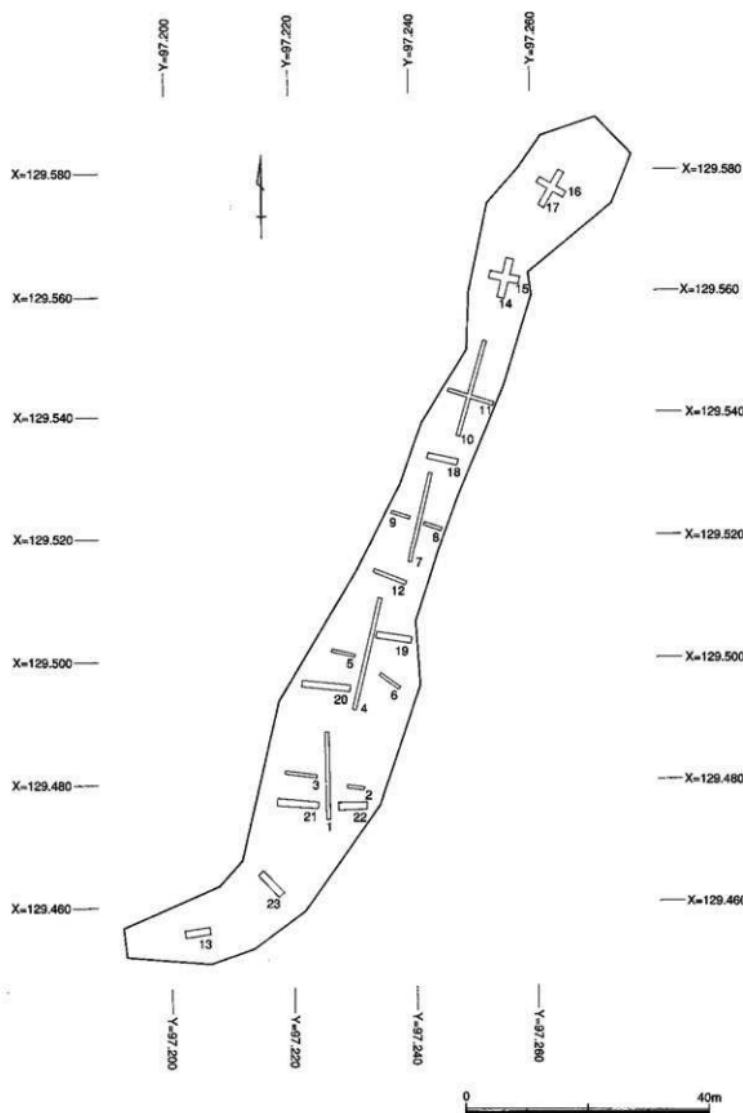
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

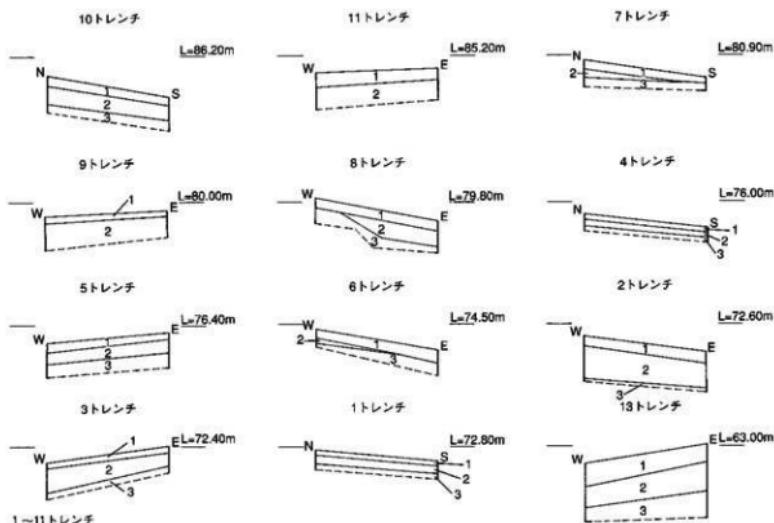
試掘に際し、平板地形測量を実施した。その結果を基にして、墳丘と思われる高まりを中心に尾根筋にメイントレントを、それに直交するようにサブトレントを設定し掘削を行った。地形測量から墳丘の存在が想定された高まりは、露頭していた岩脈に岩盤風化土が堆積しマウンド状の高まりを形成したものであった。ほとんどのトレントにおいて、表土（腐葉土）の下は岩盤風化土及び和泉層群の砂質泥岩疊層の土層堆積状況はあり、遺構・遺物の出土はみられなかった。試掘結果から、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。しかし調査区外、南方の標高55m前後の地点に径10m程度の円墳と見られる高まりが存在している。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



- 1~11トレンチ  
 1. 黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土・腐葉土）  
 2. 明黄褐色 10YR6/6 砂質土（岩盤風化土。やや粘性あり。 $\phi = 3 \sim 5$ cm程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無造物層）  
 3. 明黄褐色 10YR6/6 砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩層。 $\phi = 10 \sim 30$ cm程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無造物層。）

- 13トレンチ  
 1. 黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土・腐葉土）  
 2. にじい黄褐色 10YR5/3 砂質土（岩盤風化土。やや粘性あり。 $\phi = 2 \sim 5$ cm程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無造物層。1トレンチ2層対応。）  
 3. にじい黄褐色 10YR5/4 砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩層。 $\phi = 10 \sim 30$ cm程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無造物層。1トレンチ3層対応。）

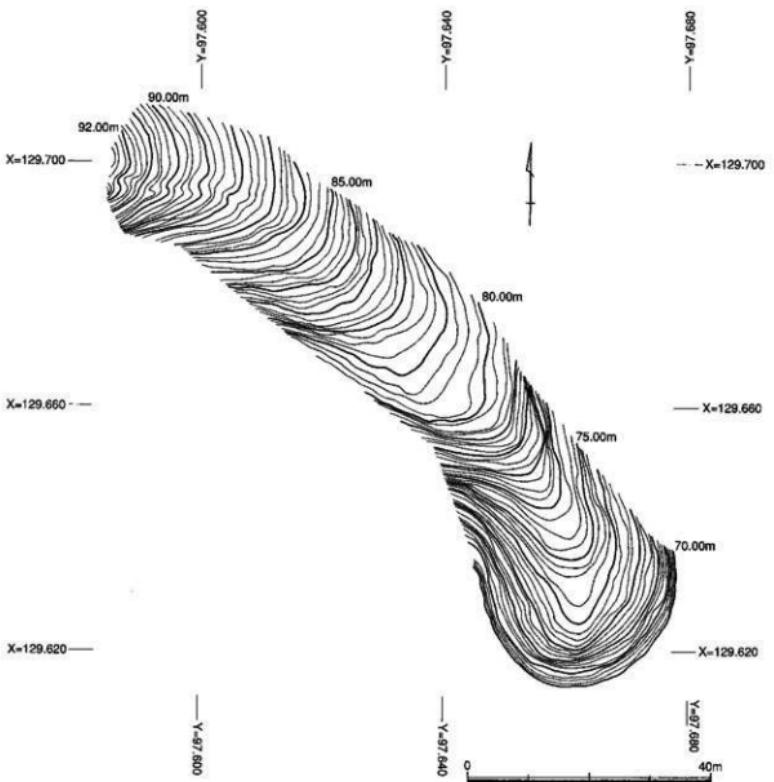
第3図 模式柱状土層図

## 21 小森宮尾神社古墳群

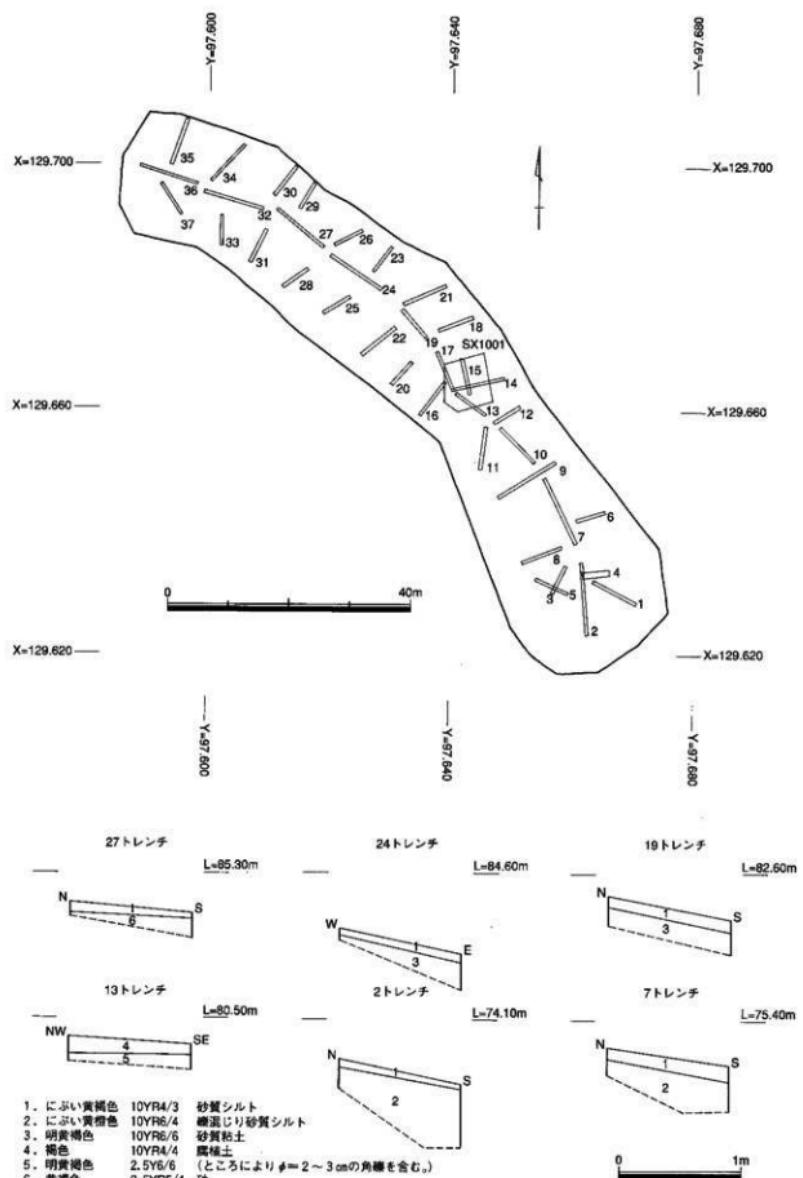
### 調査成果

遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・6・22図)

調査対象地は、阿謹山脈南麓の尾根上、標高約70~91mの斜面上に位置する。斜面の南端は中央構造線による断層崖となっている。現況は山林である。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置・模式柱状土層図

### トレンチの設定（第1・2図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

### 基本層序（第2図）

表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

### まとめ

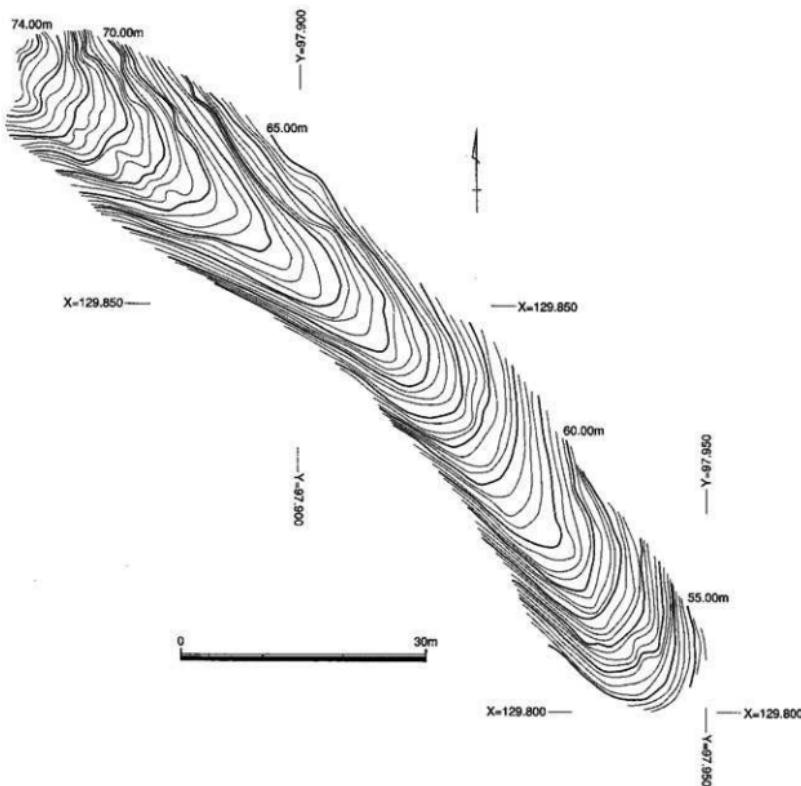
試掘に際し地形測量を実施し、その結果を基に37基のトレンチを設定し掘削を行った。いずれのトレンチも表土（腐植土）直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、堆積も10~30数cmと非常に浅く、遺構・遺物共に全く検出できなかった。調査区中央部の窪地には砂層・粘土層があるが、級化が見られ水中で堆積したと考えられ、池状になっていたと思われる。この窪地からも遺構・遺物共に検出されなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

## 22 宮ヶ谷古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・6・22図)

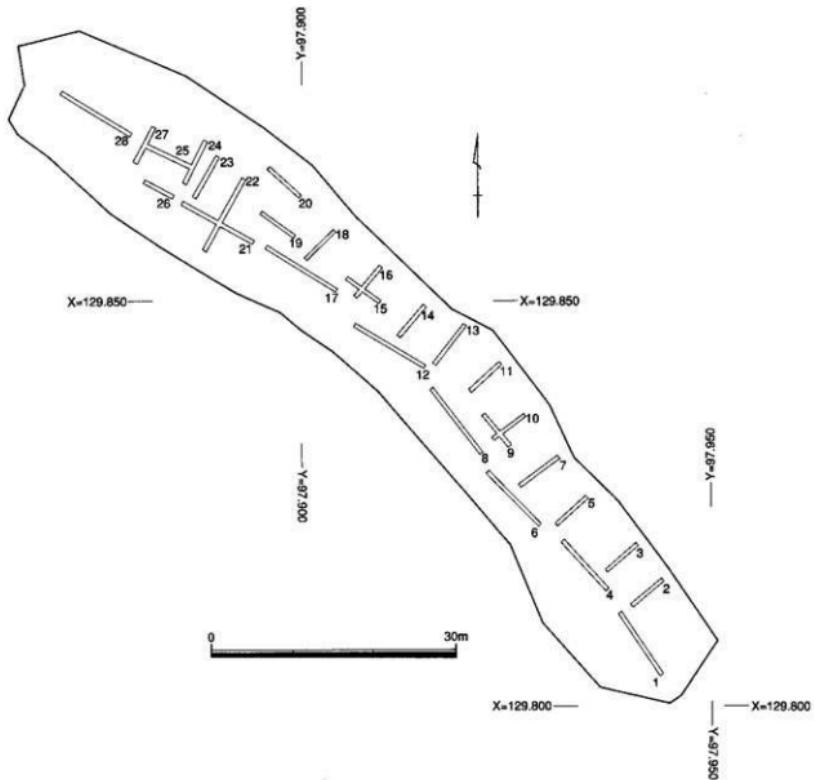
調査対象地は、阿讃山脈南麓、標高約55~75mの尾根上の斜面に位置する。斜面の南端は中央構造線による断層崖となっている。現況は山林である。



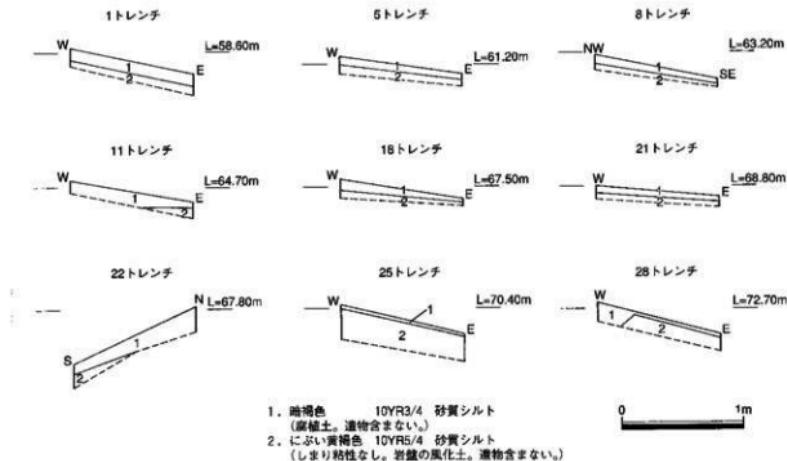
第1図 地形平面図

### トレンチの設定（第1・2図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。



第2図 トレンチ配置図



第3図 模式柱状土層図

### 基本層序（第3図）

表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した造物包含層・造構面は確認することができなかった。

### まとめ

試掘に際し地形測量を実施し、その結果を基に28基のトレーニングを設定し掘削を行った。いずれのトレーニングも表土（腐植土）直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、造構・造物共に全く検出できなかった。19トレーニングには焼土がみられたが、明確な造構・造物は検出されなかった。試掘の結果、調査区全域において造構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

## 鳴門市大津町内の試掘調査

### 23 大代谷遺跡

#### 調査成果

##### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・6・23図）

調査対象地は、大代谷川左岸の標高9m前後の低位河岸段丘上に位置する。現況は果樹園（梨畠）である。

##### トレーニングの設定（第1図）

斜面に直交するかたちでトレーニングを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレーニングを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

##### 基本層序（第1図）

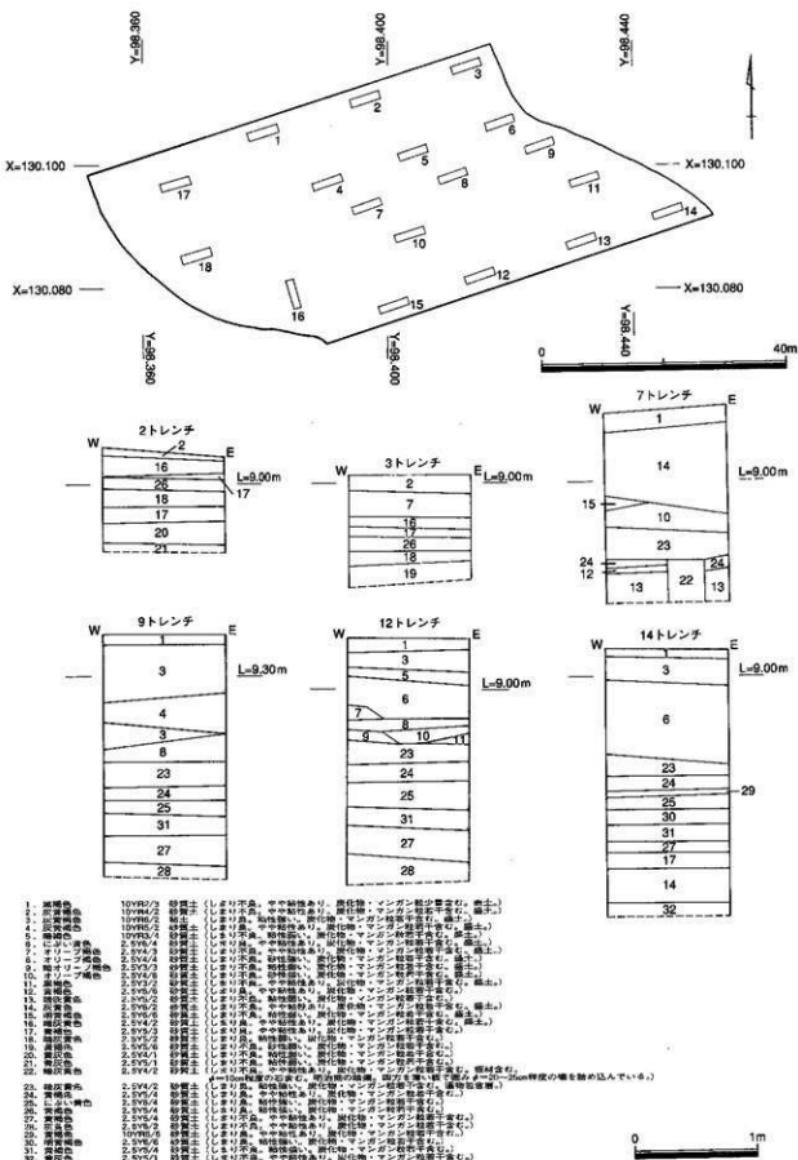
調査地点は尾根裾部の谷状地形にあたり、大代谷川によって形成された自然堤防上の微高地にあたります。表土以下は粘質土および砂礫あるいは砂が厚く堆積している状況が確認された。現在の地形は谷状地形が埋没して形成されたものと思われる。また耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変も著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

##### 出土遺物（第2図）

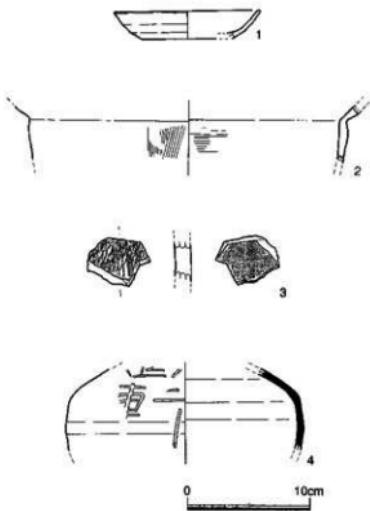
1は七輪質土器皿、2は鍋である。3は平瓦である。4は火谷焼の徳利で外面に文字が線刻されている。小片のため詳細な時期決定は困難であるが、これらの出土遺物や周辺の環境などから、中世以降のものと考えられる。

#### まとめ

18基のトレーニングを開口した。7トレーニングより明治期のものと思われる暗渠が検出されたが、それ以外の遺構は確認できなかった。出土遺物もすべて小片で流れ込みによるものと考えられ、原位置を遊離しているものと思われる。当初は戦国期に所在したとされる大代谷城闘連の遺構・遺物の出土が想定されたが、試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 トレンチ配置・模式柱状土層図



第2図 出土遺物

## 大代谷遺跡 土器観察表

## 包含層

層号 代表標本番号	種類	出土地點	層位	基盤	周半径	口 径 (cm)	基盤 直径 (cm)	高 度 (cm)	底面 (脚付 付)	底面 (脚付 付)	その他の 寸法	性質	形 態	調 型	古物 登 録 號	内 容	備 考
1 1	Bu 6 トレンチ		土師瓦 上段 Ⅱ	口縁幅 1/3	32.0				2.3	口縁～ 底面	外底外上方へ内壁 が立ち、口縁より上部 は直線状で、底面を丸く收める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石窓・青 白窓	内面：淡青 色。内面：淡青 色。	片頭：淡青 色。内面：淡青 色。	直筒頭。	
2 2	Bu 6 トレンチ		土師瓦 上段 Ⅲ	口縁幅 1/20			25.6	4.7	浅腹	外底外上方へ内壁 が立ち、口縁より上部 は直線状で、底面を丸く收める。	外底：内壁底付 近付	外底：白 内底：青	石窓・青 白窓	外底：淡青 色。内底：淡青 色。	直筒頭。	施成やや不 良。	
3 3	Bu 6 トレンチ		平瓦	破片					不明	外底： 内壁： 底付	外底：淡青文。 内底：青白文。	石窓	外底：青白文。 内底：淡青 色。	外底：青白文。 内底：淡青 色。	直筒頭。	施成やや不 良。	
4 4	Bu 6 トレンチ		大谷板 粘土	底部 1/8	19.4			6.6	深腹	体部内壁上をがらま 上せりし、裏窓で内壁に 押しつけし、口縁部に盛り 込む。	外底：ロクロナデ。 内底：ロクロナデ。	新窓	新窓：グレー みのブラウン 基：赤褐色。	新窓	施成良好。		

## 24 東口古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・6・23図）

調査対象地は、阿讚山脈南麓の標高約48~50mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1図）

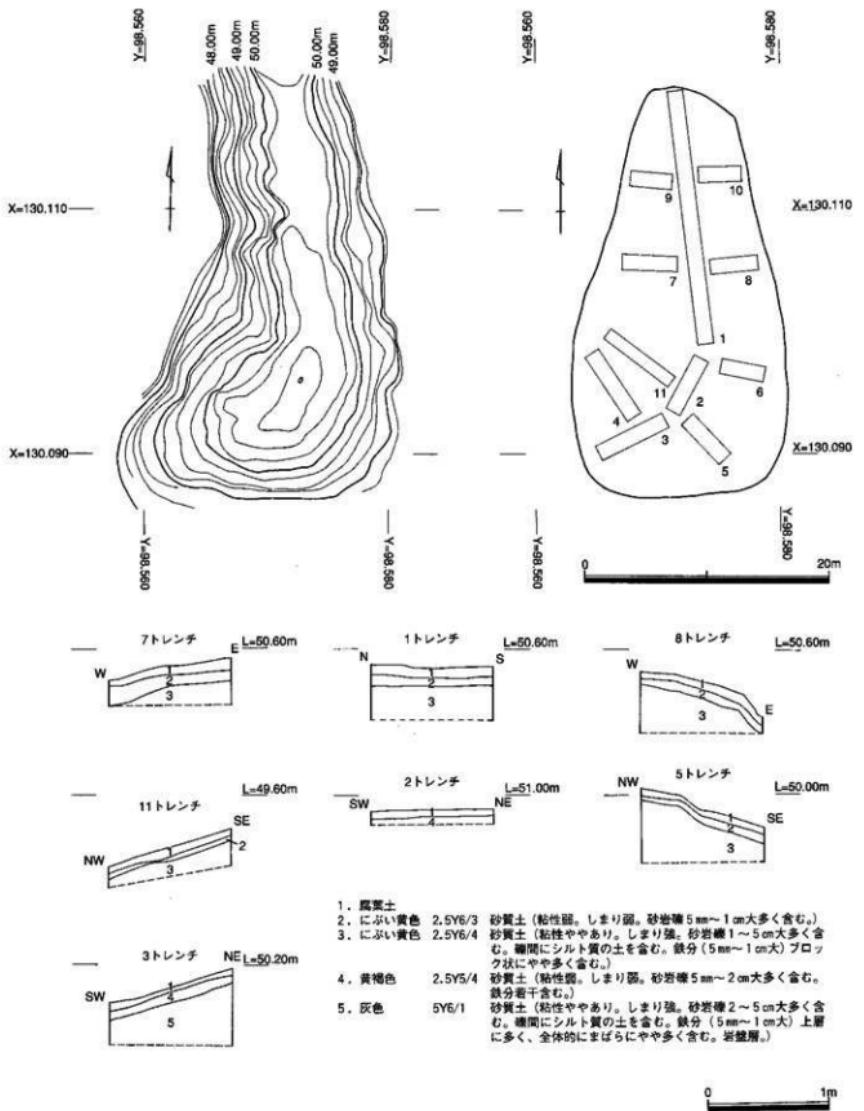
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真的作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第1図）

表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

調査に際し平板地形測量を行い、その結果を基に11基のトレンチを設定して試掘を実施した。いずれのトレンチも表土（腐葉土）の直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できなかつた。墳丘状の高まりの部分も岩盤風化土の堆積による自然地形であることが確認された。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面・トレンチ配置・模式柱状土層図

## 25 日開谷東古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I - 第1図およびII - 第1・6・24図）

調査対象地は、阿讚山脈南麓の標高25～40mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1・2図）

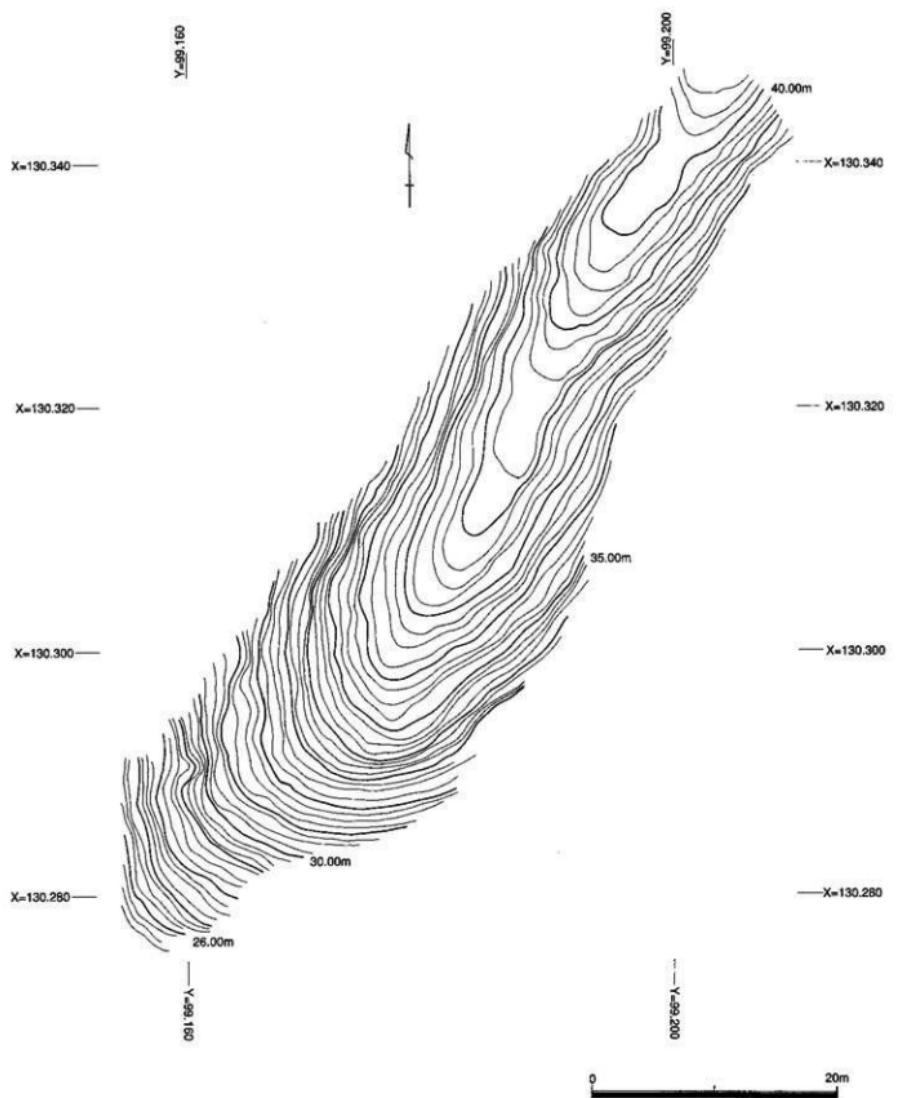
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第3図）

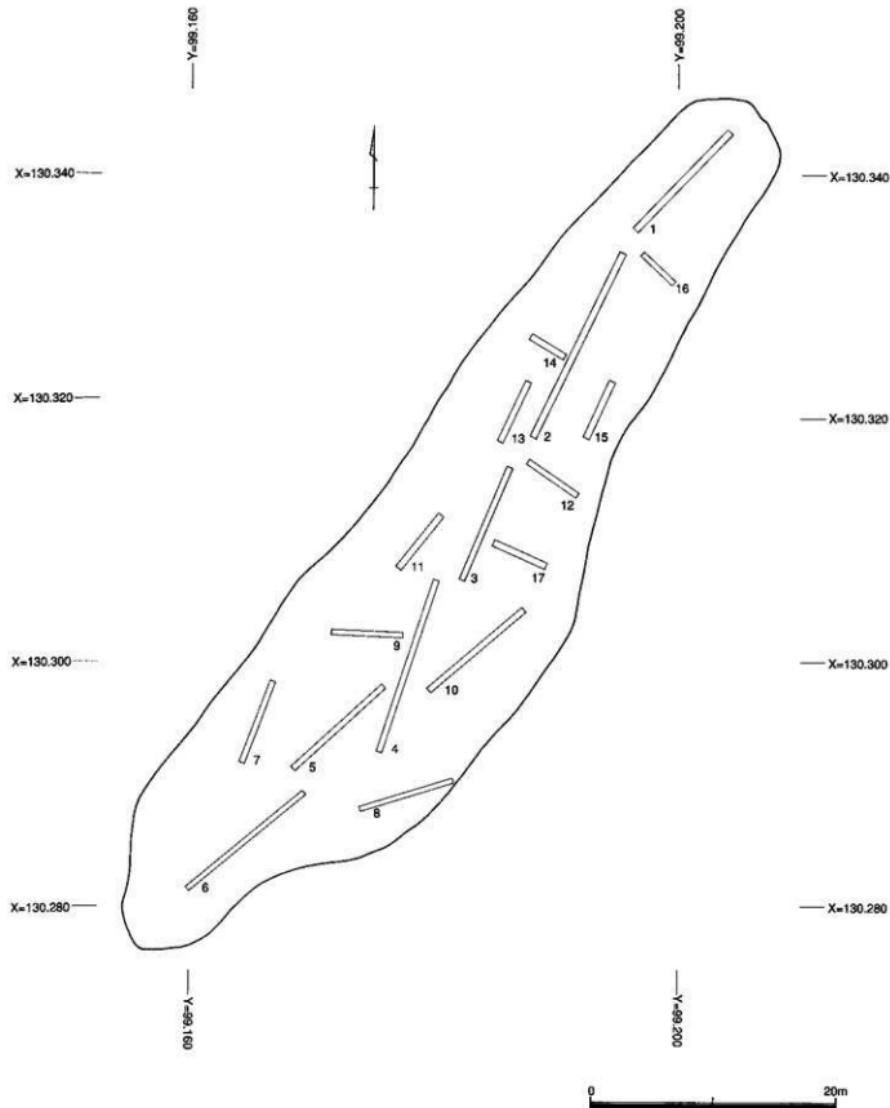
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

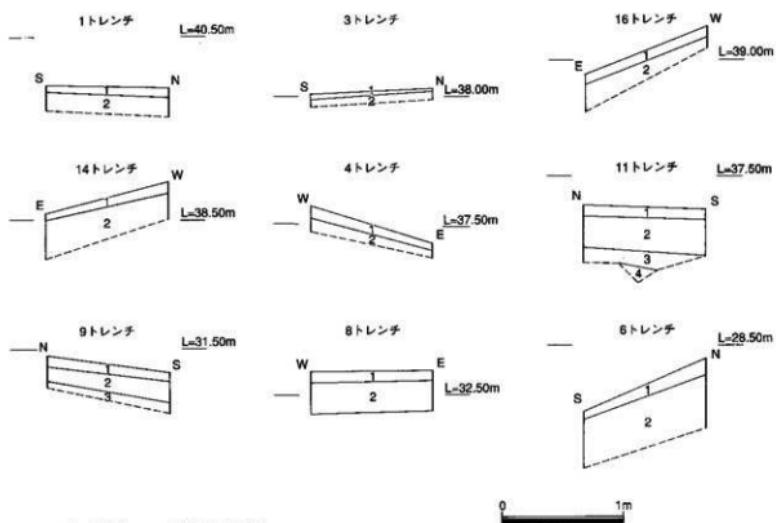
調査に際し平板地形測量を行い、その結果を基に17基のトレンチを開口した。いずれのトレンチも表土（腐植土）の直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図 地形平面図



第2図 トレンチ配置図



1. 黒褐色 10YR3/2 腐植土  
 2. にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土 (しまりやや有り。1~3cmの炭化物を少量含む。)  
 3. にぶい黄橙色 10YR6/4 砂質土 (しまりやや有り。5mm程の炭化物・赤色炭化物を少量含む。)  
 4. にぶい黄橙色 10YR6/4 砂質土 (しまり有り。1cm程の炭化物を少量含む。)

第3図 模式柱状土層図

## 26 原山古墳群

### 調査成果

#### 遺跡の位置（I-第1図およびII-第1・6・24図）

調査対象地は、阿諏山脈南麓の標高約44～60mの尾根上に位置する。現況は山林である。

#### トレンチの設定（第1図）

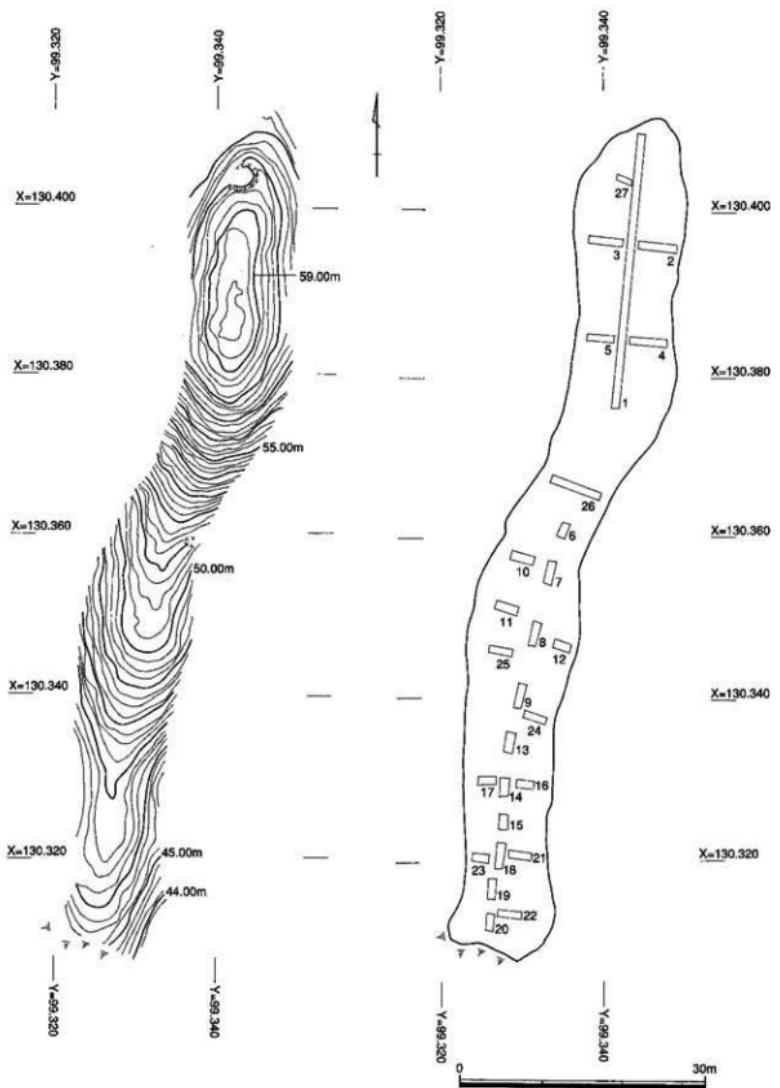
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

#### 基本層序（第2図）

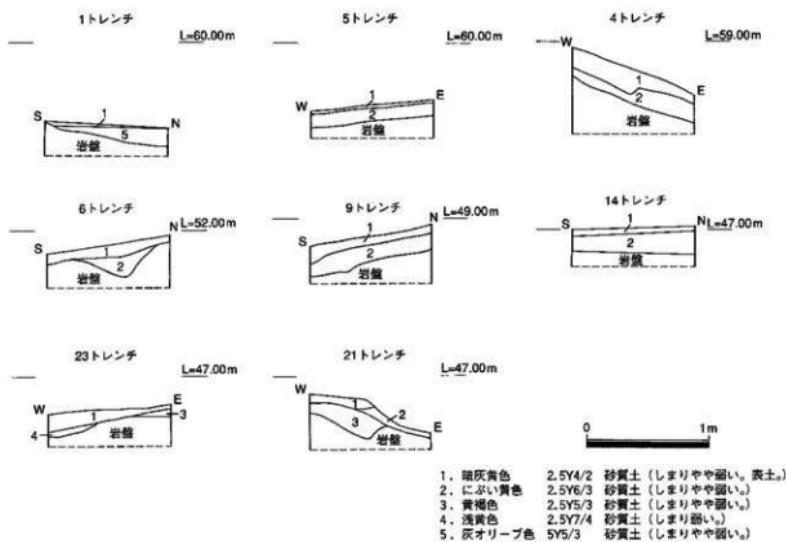
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

#### まとめ

27基のトレンチを開口した。地形測量の結果、調査地の北部には前方後円墳状の地形が確認されたが、試掘トレンチの結果、いずれも表土（腐葉土）下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できず、尾根の浸食による自然地形であることが確認された。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

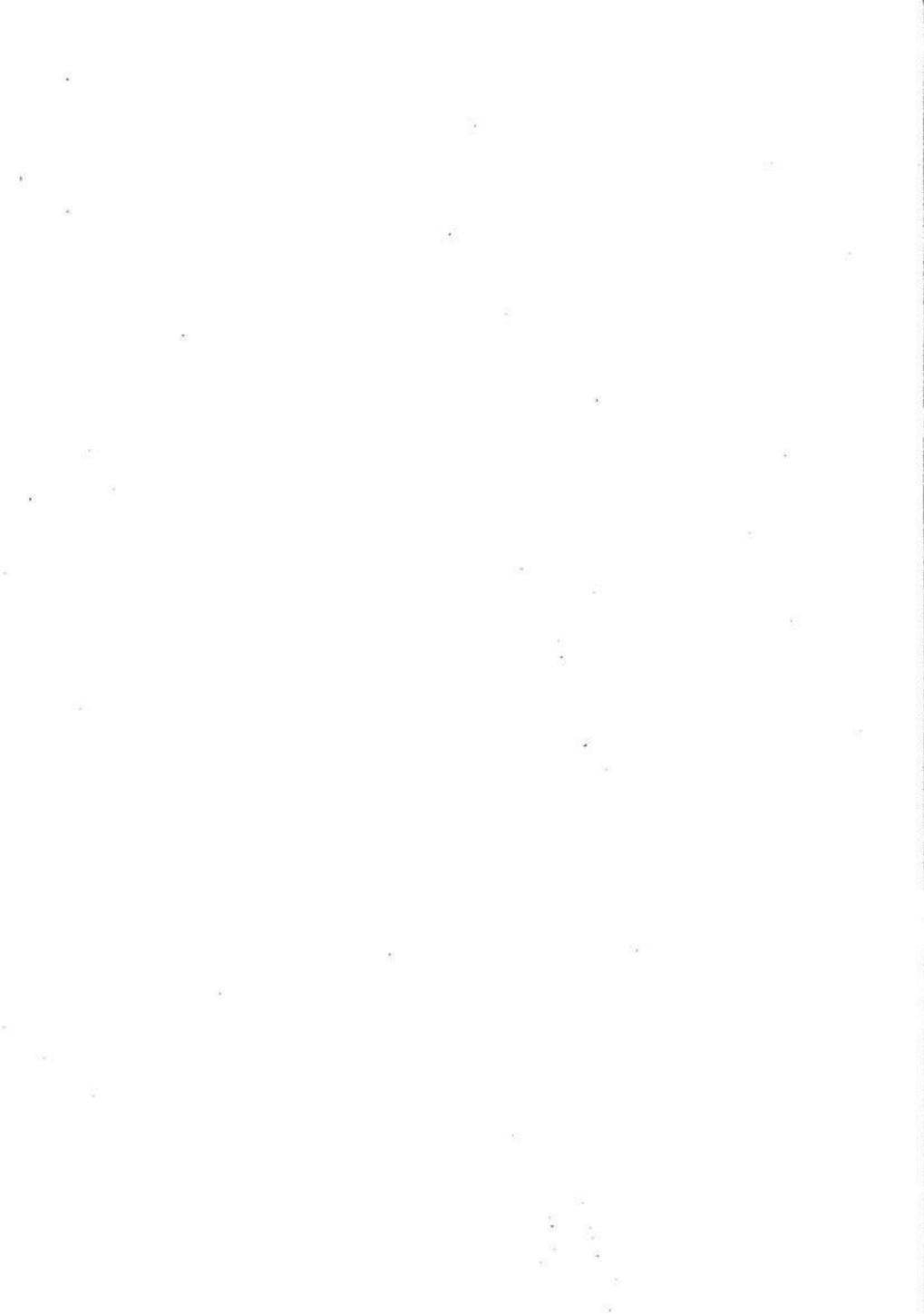


第1図 地形平面・トレンチ配置図



第2図 模式柱状土層図

## IV 中谷山古墳群（I）



## 例　　言

- 1 本章は四国横断自動車道建設に伴う中谷山古墳群（I）の発掘調査報告書である。
- 2 所在地　板野郡板野町川端字中谷山20-1他  
　　調査対象面積　　10,000m<sup>2</sup>  
　　試掘面積　　　　168m<sup>2</sup>  
　　本調査面積　　　225m<sup>2</sup>
- 3 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。  
　　発掘調査期間　　平成10年1月5日～平成10年3月31日（試掘）  
　　　　　　　　　平成10年4月1日～平成10年5月31日（本掘）  
　　報告書作成期間　平成14年4月1日～平成15年3月31日
- 4 遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。
- 5 本遺跡の地理的・歴史的環境については、「II 調査地点の立地と環境」を参照されたい。

# 1 調査の経過

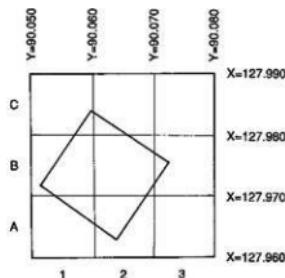
## (1) 調査の経過

中谷山古墳群（I）は阿讃山脈南麓の板野郡の東部に位置する板野町川端に所在し、以前から古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,765m<sup>2</sup>を調査対象面積として平成9年度に試掘調査を実施した。当該地域では無墳丘の箱式石棺が点在しており、その分布状況の把握や調査に要する期間の算定は困難であるため、調査対象地全域の立木伐採を前提にした試掘調査や全面調査が必要と考えられた。中谷山古墳は横断自動車道建設に伴う最初の古墳調査であり、JHの要請もふまえて、効率的かつ効果的な調査手法を検討するため、地下レーダー探査の有効性と試掘調査結果との整合性を試行した。地ドレーダー探査の有効性は、かつて徳島市矢野遺跡の銅鐸埋納坑周辺で実施し、豊穴住居跡の分布について実証済みであった。今回は電磁波が斜角に入った頁岩層に反応することが多く、地質条件等から効果的でないと判断した。したがって、当該事業では調査対象地を全面伐探し、試掘調査を実施することを決定した。

地形測量時において、直径8m、高さ50cm程度の古墳状隆起が北西地点で確認された。地下レーダー探査では微弱な反射像がみられた地点である。試掘の結果をふまえ、この地点を対象に225m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成10年5月31日に終了した。

## (2) 発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第IV系国土地標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南北隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第1図 グリッド配置図

### (3) 調査日誌抄

中谷山古墳群（I）調査日誌抄

1998年

- 4月1日 調査準備。  
4月7日 図面作成。遺構検出。遺構精査。  
4月17日 遺構掘削。図面作成。  
5月1日 遺構掘削。石列除去。完掘写真。  
5月8日 図面整理。  
5月12日 理め戻し。等高線測量。



## 2 調査成果

### (1) 遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・3・11図)

調査対象地点は、阿讀山脈南麓の隆起扇状地が中小河川の浸食により形成された標高59~62mの尾根上に位置する。現況は山林となっている。

### (2) 基本層序 (第2・3・4図)

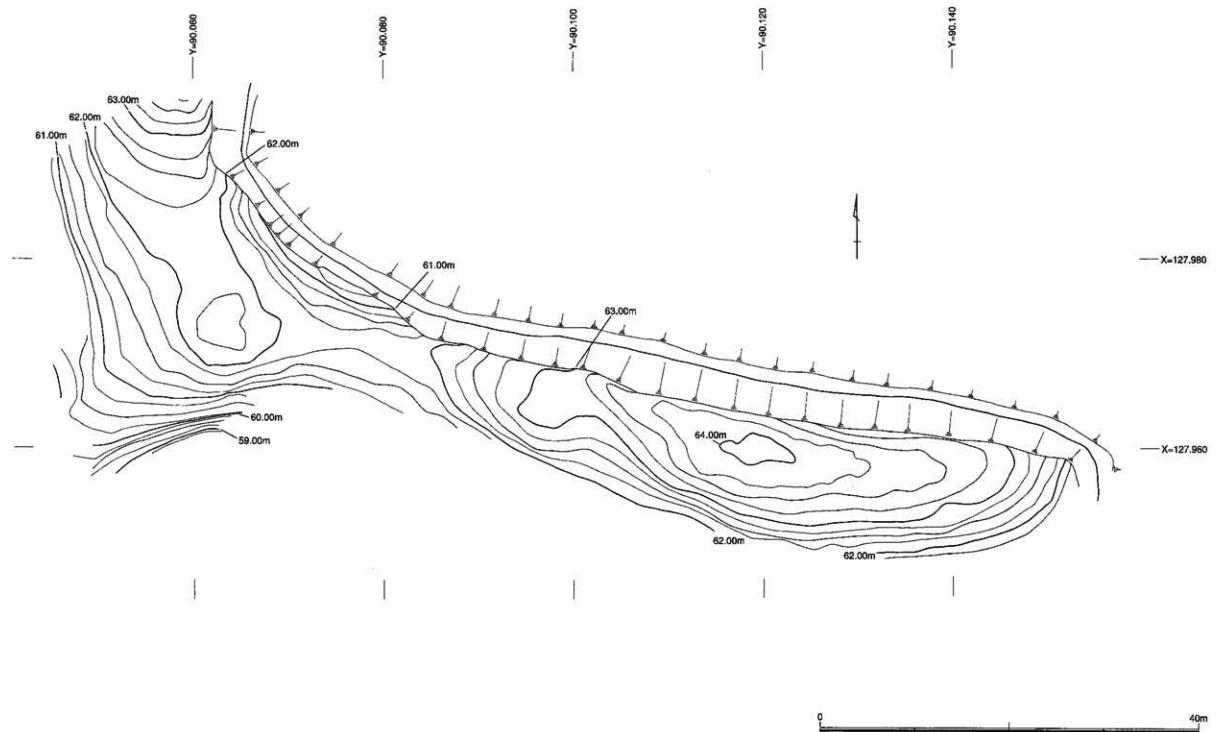
#### トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査に際し、現況の地形測量および地下レーダー探査を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、地下レーダー探査の成果もふまえて試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘の結果、横穴式石室を1基確認したため、225m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。

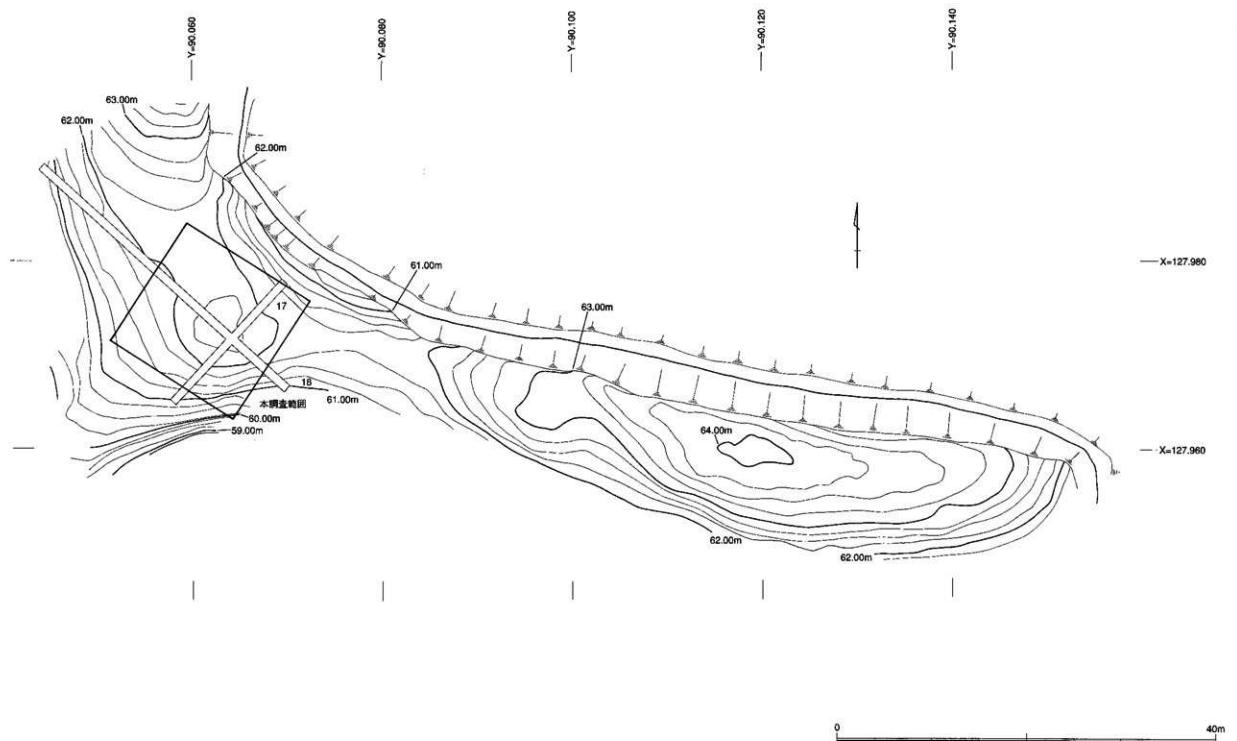
土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1. …黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土、腐植土。）
2. …にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質土（やや砂性強い。しまり弱い。）
3. …明黄褐色 10YR6/6 砂質土（しまり弱い。）
4. …にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土（やや粘性強い。ややしまり強い。）
5. …明黄褐色 10YR5/6 砂質土（ややしまり強い。古墳盛土の可能性あり。）
6. …明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、 $\phi = 3 \sim 5$  cm程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/3 粘土が混じる。）

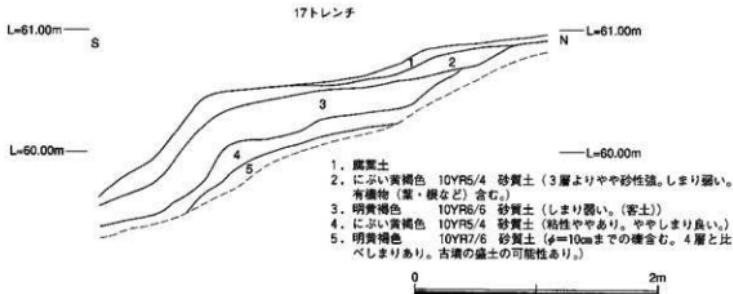




第2図 地形平面図



第3図 トレーンチ配置図・本調査範囲



第4図 トレンチ土層断面図

### (3) 遺構と遺物

#### 出土遺構（第5図）

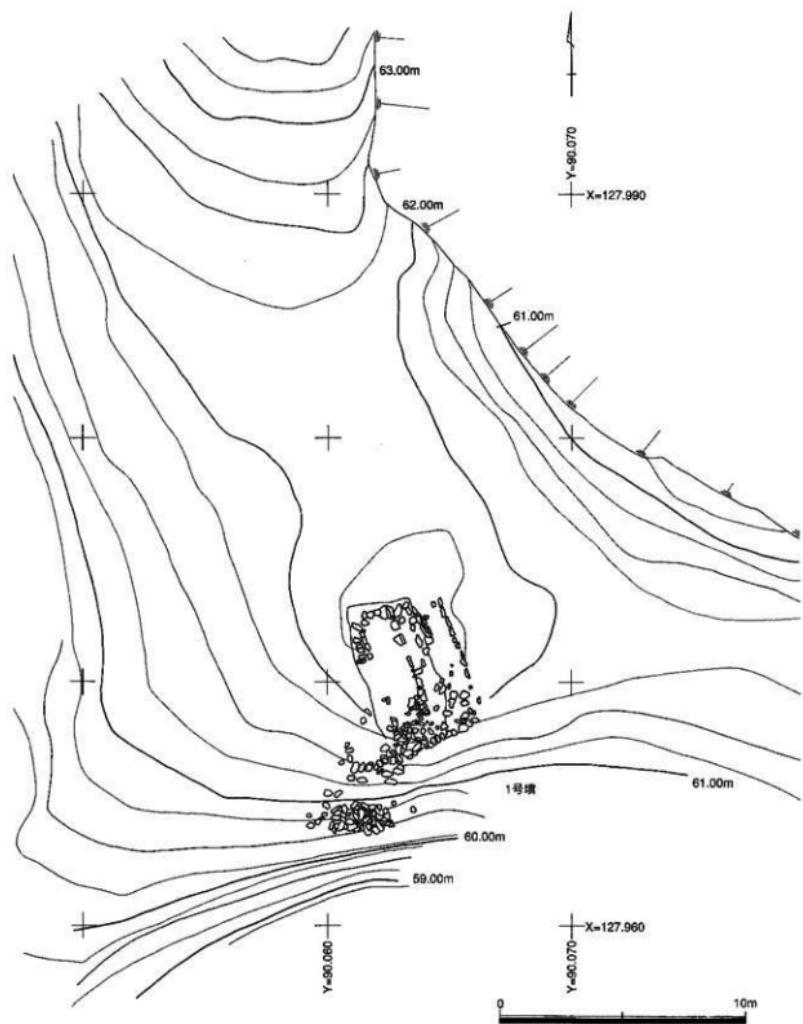
表土直下に横穴式石室を主体部とする古墳を1基確認した。地形測量時において径8m、高さ50cm程度の古墳状隆起が北西地点で確認され、地下レーダー探査では微弱な反射像がみられた地点である。

#### SM1001（1号墳）（第6・7・8図）

横穴式石室を主体部とする。砂岩を用いた横穴式石室の基底部一段が検出され、主軸方向はN-18°-Eで南に開口する。玄室部は床面まで攪乱が及んでおり、西側壁の遺存状況は悪いが、両袖式で羨道部が「ハ」字形に開く。石室は余長5.6mで、玄室長3.6m、幅1.2mである。玄門部は幅0.8m、開口部幅1.8mで右袖石は立石状に据えられていた。羨道部には敷石をとどめ、玄室奥壁はわずかに隅丸を呈している。墳丘は削平されて残存していないが、東西6m、南北5mに外護列石の1ないし2段の基底が遺存しており、北および西側の2辺は不明であるが、一辺6mの方墳であったと考えられる。南辺は羨道の端部から左右に延びた外護列石を形成しており、斜面に沿って貼石状に構築する。羨道端部は列石により閉塞しており、垂直に積み上げている。さらに南辺では外方に4個の砂岩の角砾を、階段状に積み上げた列石が残っており、2段の外護列石が形成されていたことが確認される。

#### 出土遺物（第9図）

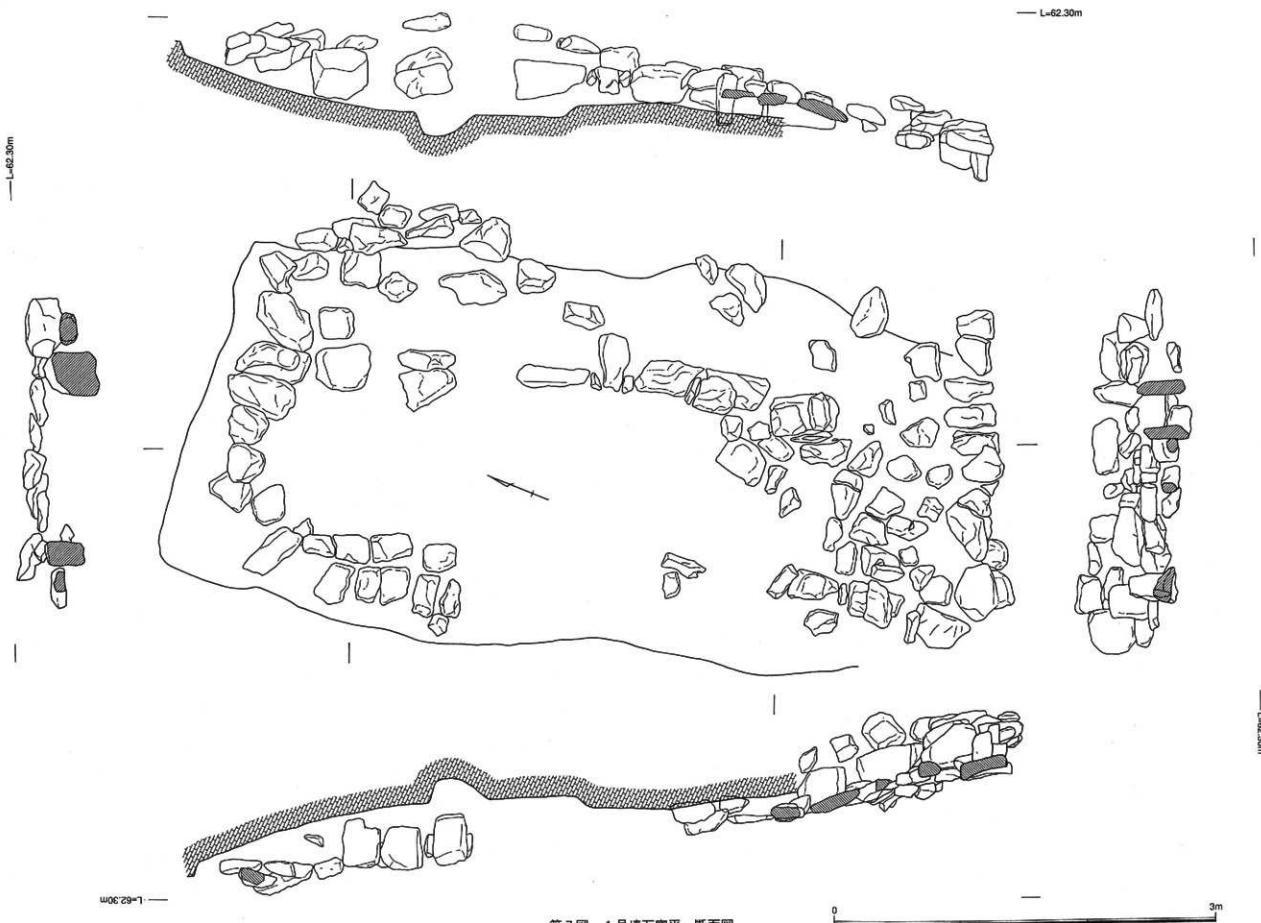
平成9年度の試掘調査において須恵器の小片が僅かに出土しているが、本掘では遺物の出土は皆無である。1は杯蓋、2・3は壺の一部と思われるが、詳細な形状・時期の決定は困難である。



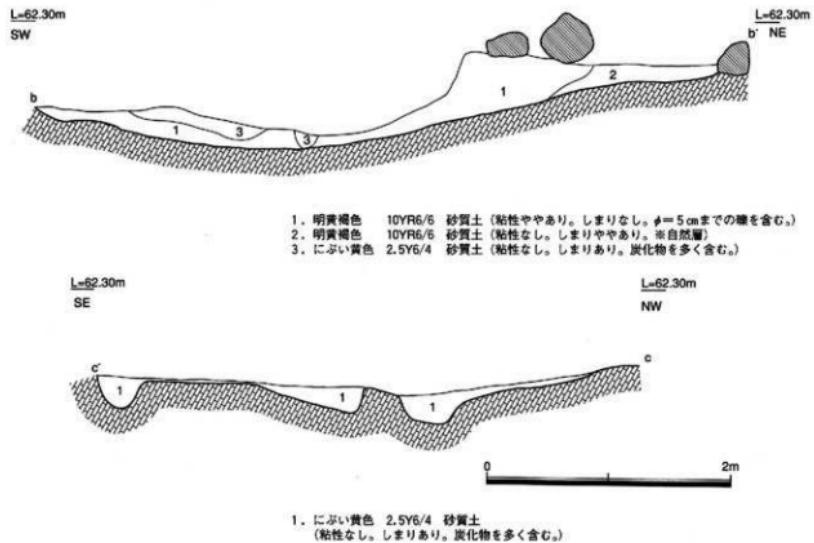
第5図 遺構配置図



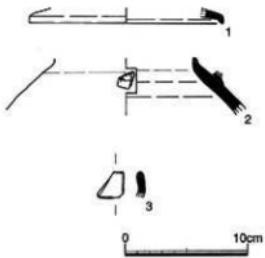
第6図 1号墳主体部平・断面図



第7図 1号填石室平・断面図



第8図 1号墳主体部土層断面図



第9図 包含層出土遺物

#### (4)まとめ

詳細な時期決定のできる出土遺物はないが、主体部の構築・形態などから、本遺跡の築造年代は7世紀前半と考えられる。

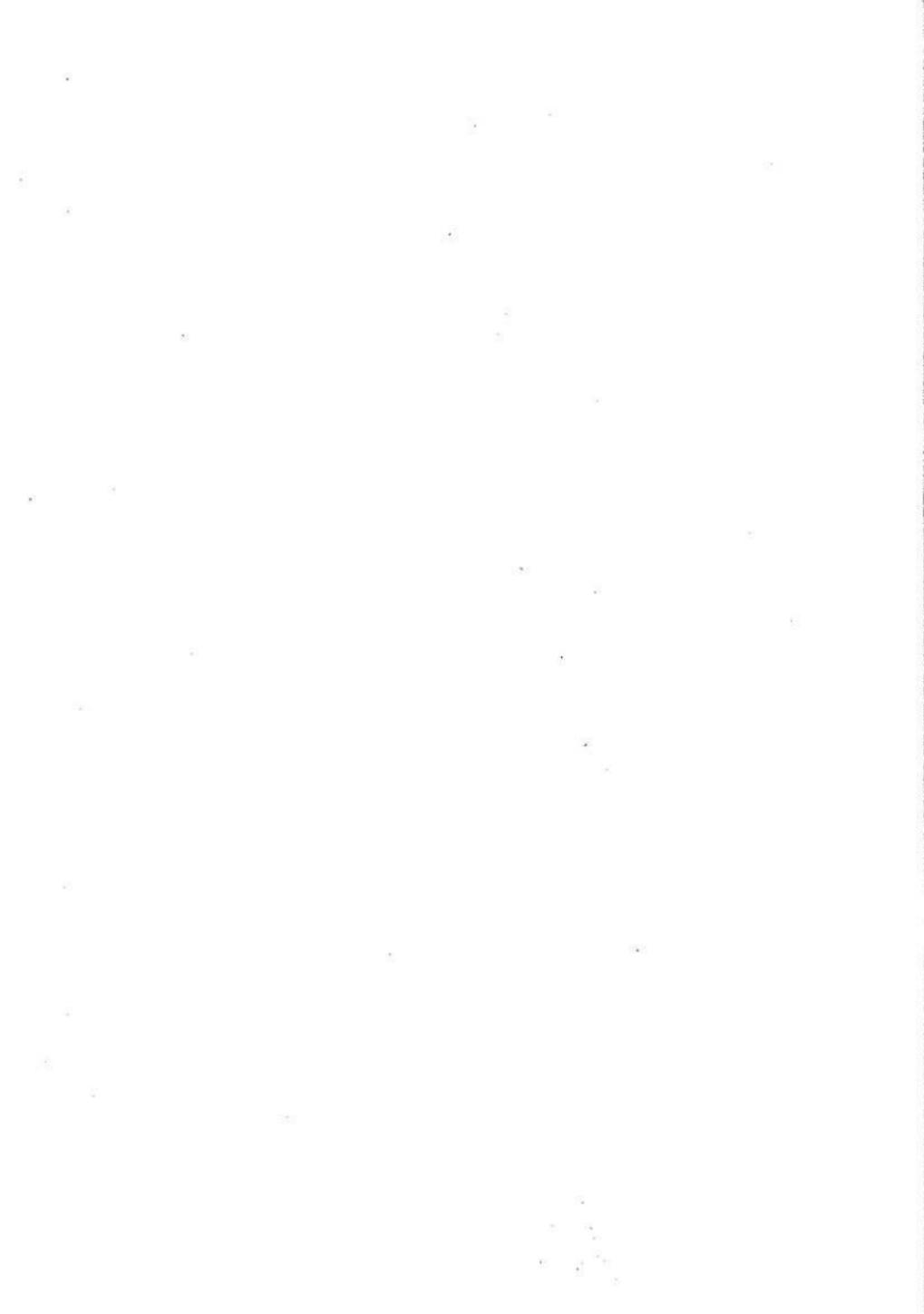
中谷山古墳群（I）  
第1表 出土遺構一覧表  
SM

遺構名	グリッド	墳丘形別	埋立地名	東西南北 方位	遺構剖面 形態	南北長軸 (m)	東西長軸 (m)	東西幅員 (m)	東西深さ (m)	東西幅員 (m)	東西深さ (m)	石室深度 (m)	石室幅員 (m)	石室長 (m)	石室高 (m)	石室底面 (m)	上部方角 (m)	備考
SM1001	A-1-2	方墳	一辺6m 板塁x	長方形	D字状 (或いは 複合)	6.0	3.0	0.6	5.6	1.2	0.4	3.6	2.0	2.0	2.0	6.8 前部の 1.8	N 18° E	石室の外側に長輪6m、楕円5mの洋式石室。 楕円式石室。

第2表 出土遺物観察表  
包含層（土器）

発見 場所	種類	出土先	層位	基層	表面	寸法 (cm)	幅 (cm)	高 (cm)	取扱 (調査 用)	層名	その他の 記述	形状	断面	調査	参考 資料	色 調	備考
1	丸錐形器	2号 (高麗土古窯)	保留器 蓋	U底板 1/16	15.5	16.0			1.3	U形板	扁平な筒形で、口周溝 21㌢より22㌢に20.6㌢。	外面：ナゲ。 内面：ナゲ。	右高・左 低	外唇：灰 内唇：灰	焼成直後。		
2	南折沿 具石列罐	高麗土下 20cm	保留器 蓋	U底板 1/10				11.7	4.7	直形	外周開槽跡5付け。	外壁：ナゲ。 内壁：ナゲ。	右高	外唇：灰白 内唇：灰	焼成直後。	外唇：灰白 内唇：灰	焼成直後。
3	北帶新規	2号	楕円器 蓋	瓦片						RQ-1 厚2.05 厚0.5	口縁器			外壁：ナゲ。 内壁：ナゲ。	右高	外唇：灰 内唇：灰	焼成直後。

## V 川端奥郷遺跡



## 例　　言

- 1 本章は四国横断自動車道建設に伴う川端奥郷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 所在地　板野郡板野町川端字馬越38-1他  
　　調査対象面積　　21,850m<sup>2</sup>  
　　試掘面積　　　　1,455m<sup>2</sup>  
　　本調査面積　　　400m<sup>2</sup>
- 3 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。  
　　発掘調査期間　　平成11年1月1日～平成11年3月31日（試掘）  
　　　　　　　　　平成11年5月1日～平成11年6月30日（本掘）  
　　報告書作成期間　平成14年4月1日～平成15年3月31日
- 4 遺構番号、挿図番号、図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。
- 5 本遺跡の地理的・歴史的環境については、「II　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

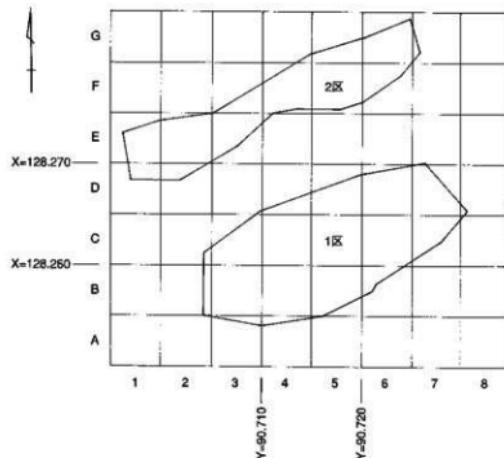
# 1 調査の経過

## (1) 調査の経過

川端奥郷遺跡は阿讃山脈南麓に三方を尾根に囲まれた平野部（谷）の板野郡板野町川端地区に位置する。調査地点周辺は、谷口山古墳や阿王塚古墳等の古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲内の21,850m<sup>2</sup>を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年度および平成11年度にかけて試掘の承諾可能な地区より順次、重機および人力掘削によるトレンチ調査を計1,455m<sup>2</sup>実施した。試掘の結果、調査対象地東端の尾根裾部において須恵器片や土師器片などを集中的に含む層が確認されたため、遺物包含の分布状況の把握も含め、400m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成11年6月30日に終了した。

## (2) 発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならない、第IV系国土地標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南北隔を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定することとした。



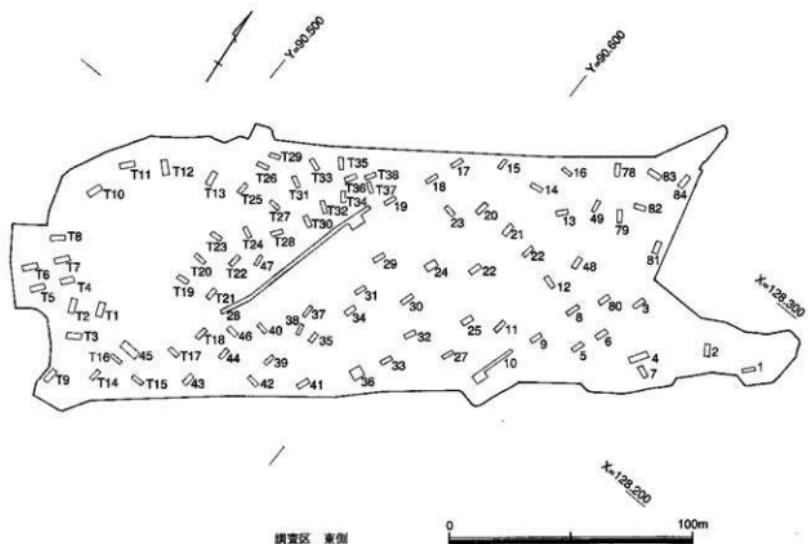
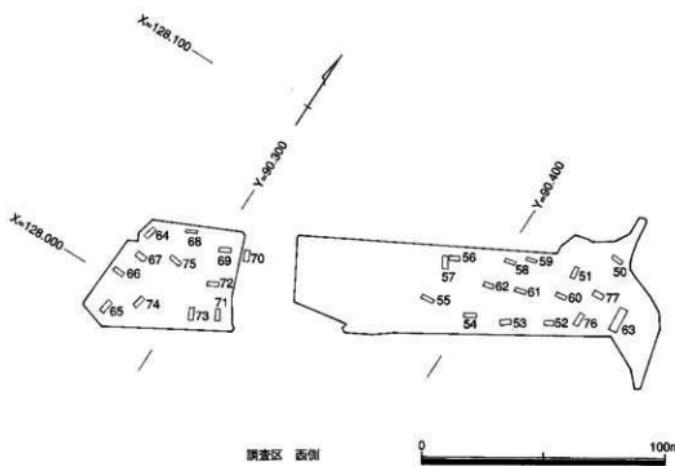
第1図 グリッド配置図

### (3) 調査日誌抄

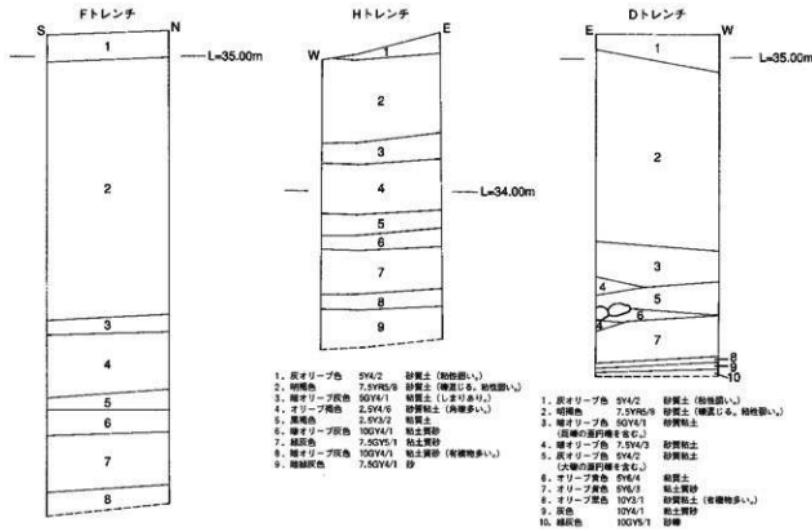
1999年

- 5月6日 調査準備。
- 5月7日 機械掘削開始。表土除去。
- 5月12日 試掘トレンチ配置図作成。
- 5月26日 機械埋め戻し完了。作業終了。
- 6月1日 調査準備。
- 6月2日 グリッド設定。尾根部地形測量。
- 6月8日 表土除去。
- 6月16日 トレンチ掘削。土層断面図作成。
- 6月21日 現場埋め戻し。物品運搬。現場撤収。

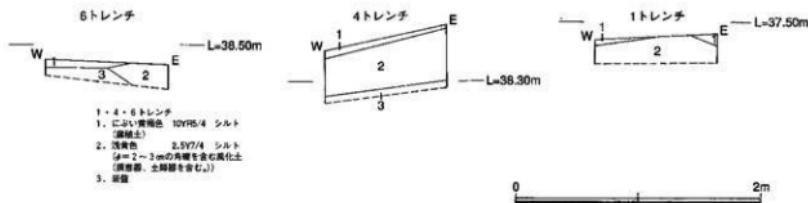




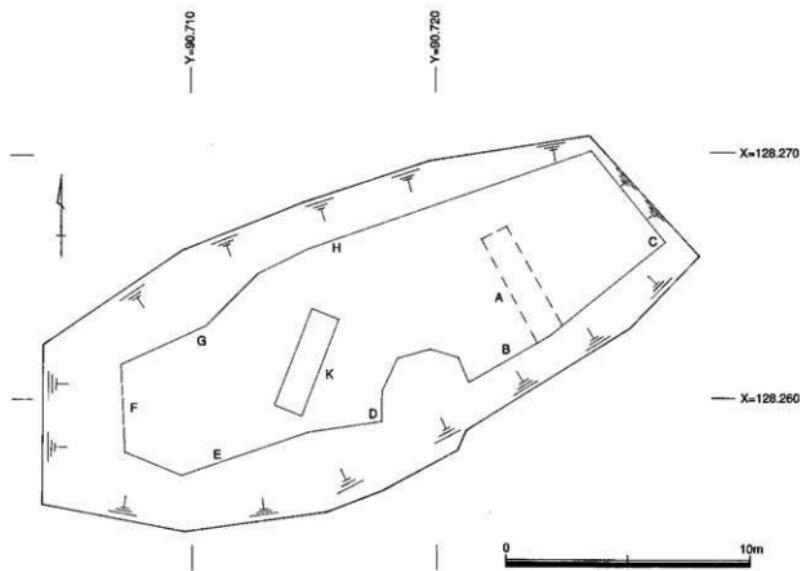
第2図 調査区トレント配置図



1. 黄オリーブ色 SY4/2 砂質土 (粘性高い。)
2. 明褐色 7.5YR5/8 砂質土 (粘性じゅう。粘性低い。)
3. 雜オリーブ灰色 50Y4/1 砂質土 (しまりあり。)
- (表面の薄い層を含む。しまりあり。)
4. オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土 (粘性多い。)
5. 明褐色 7.5YR5/8 砂質土 (2cmの角礫を含む。)
6. 褐色 7.5GY4/1 砂質土
7. 雜褐色 10GY4/1 砂土質砂 (有機物多い。)
8. 雜褐色 10GY4/1 砂土質砂 (有機物多い。)



第3図 模式柱状土層図



第4図 1区トレンチ配置図

## 2 調査成果

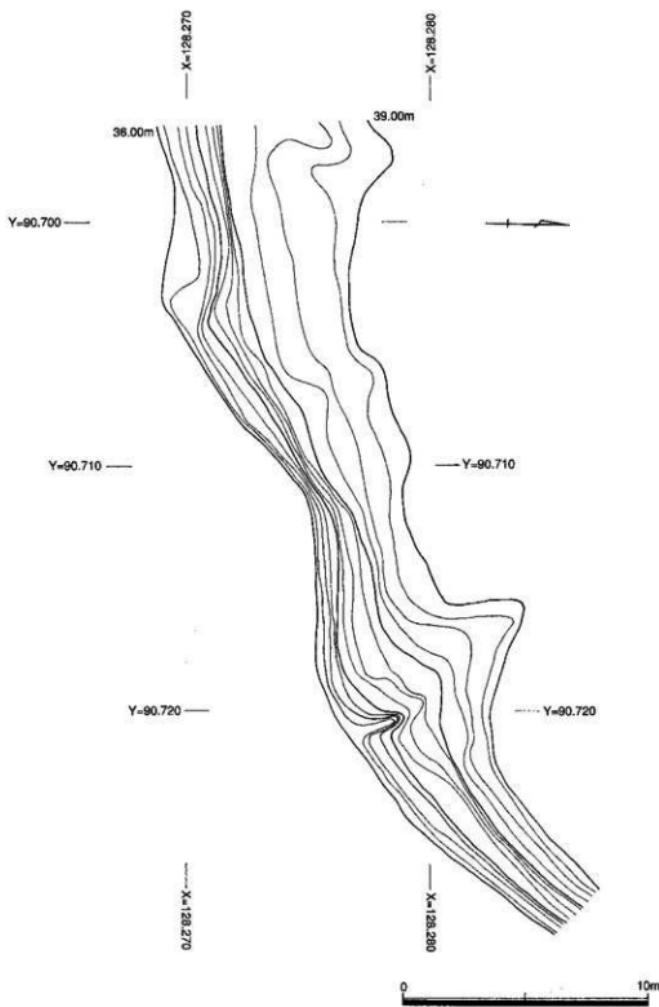
### (1) 基本層序

#### トレンチ配置状況と土層堆積状況（第2～4・6・7図）

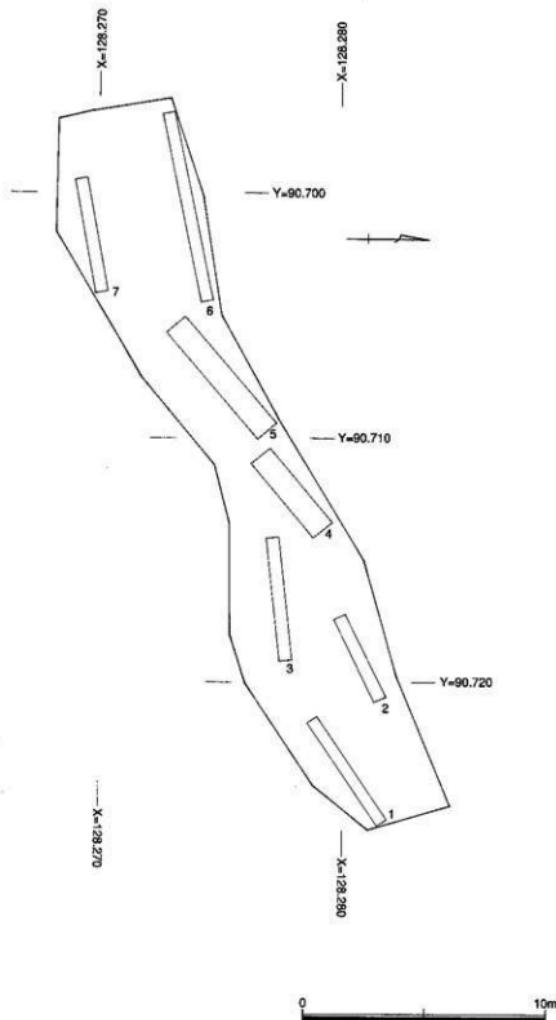
試掘トレンチは横断道の路線に沿って、扇状地上を東西に横断するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の5%を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの厚さの確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20%を上限とした。

試掘の結果、調査対象地東端の尾根部において須恵器片や土師器片などを集中的に含む層が確認されたため、遺物包含の分布状況の把握も含め、400m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。また調査区東端の調査に際し、現況の地形測量を実施した。

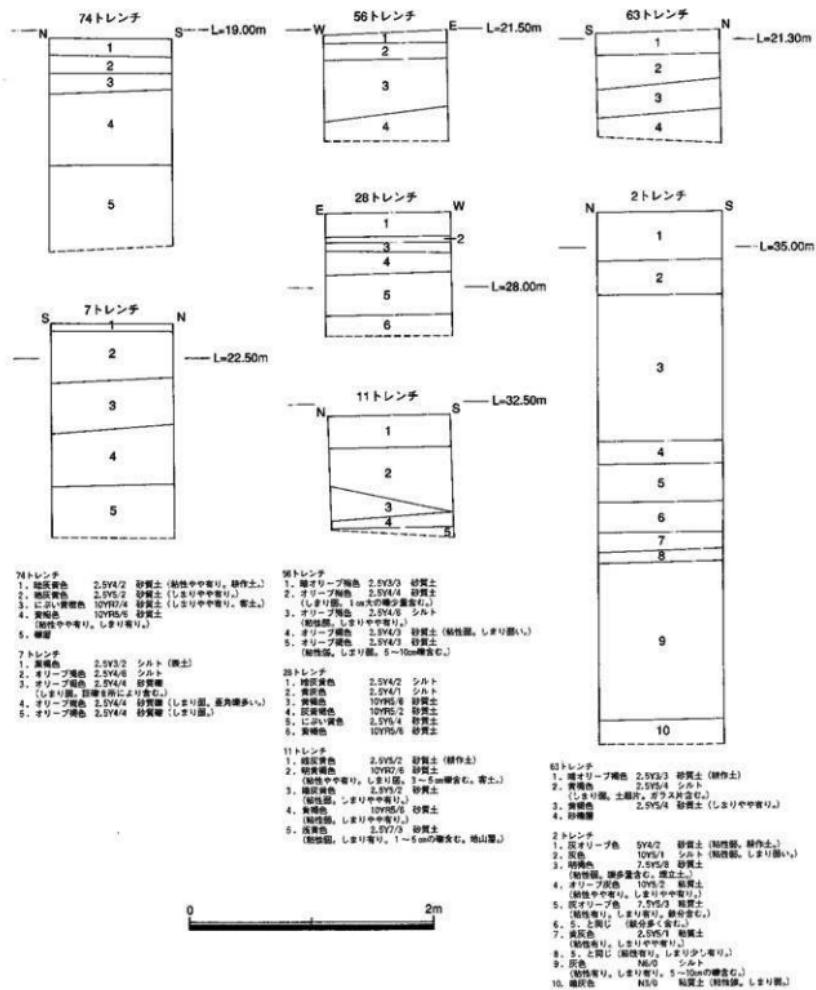
土層堆積状況は各トレンチにより若干の差異はあるものの、調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の変更が著しい。表土以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂礫層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。



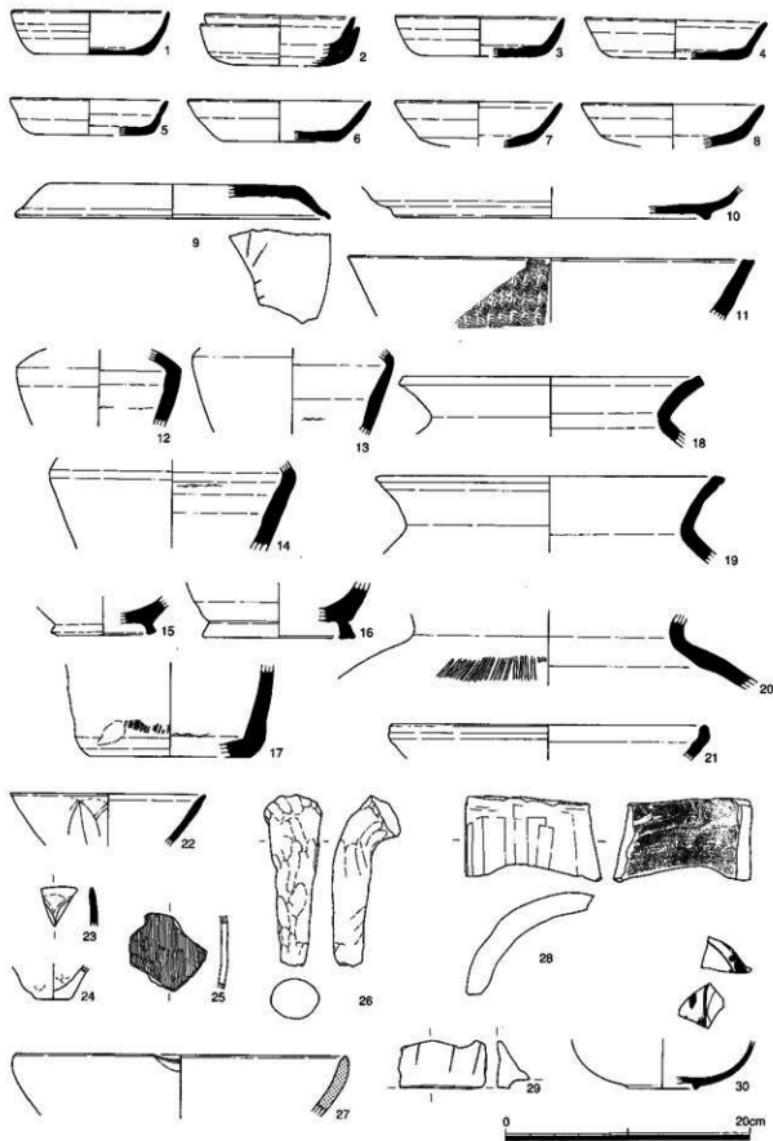
第5図 2区地形平面図



第6図 2区トレーン配置図



第7図 1・2区模式柱状土層図



第8図 出土遺物 1

## (2) 遺構と遺物

遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・3・12図)

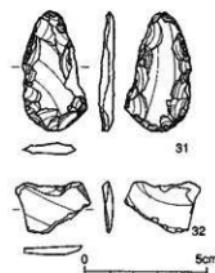
調査対象地は阿讃山脈南麓の低位段丘面の北端から尾根の最下部にかけての標高35~38mの地点に位置する。

### 出土遺構

遺物の出土はみられたが、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

### 出土遺物 (第8・9図)

出土遺物は時期的に古墳時代後期から近世のものが出土しており、詳細な所属時期の決定は困難である。出土遺物の大半は7~9世紀頃と思われる須恵器がほとんどである。その中に融着したもの、あるいは使用痕のまったく見られないものが含まれることから、付近に焼成窯が存在した可能性がある。



第9図 出土遺物2

## (3)まとめ

遺物包含層と見られた地層は植物片など有機物に富むビート層（粘質土層）であることから、遺物は周辺の遺跡から、池などの湿地あるいは流路に流れ込み堆積したものと考えられる。遺構面の特定はできず、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。

## 川端奥郷遺跡

第1表 出土遺物観察表  
包含層（土器）

品目番 号	層 構	所 在地	形 状	基 本 性 質	残存率	口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	厚 さ (cm)	断面 形状	その他の 性質	組 合	形 状	含 有 物	色 調	備 考
1	No.1 トレンチ	9号	偏心 盤	全 体 1/4	12.6	13.0	9.0		3.5	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	長石	外観：青灰 内面：青灰	地成良好。	
2		C-7	偏心 盤	全 体 1/6	12.0	12.7		7.4	4.1 3.3	口縁 直壁	上部が膨張して腹部側に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められ、底部 に4.0、1~1.5cm程度の 凹部が最も多く見られる。	外観：リタリナヂ。 内面：直面。 内面：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	長石 長 石	外観：灰白 内面：灰白 内面：灰白	地成良好。 内面に自然 風化が認められ る。底面に 凹部があること から、底面 が、伏せて 傾かれていた ことを想われ る。	
3		C-5	偏心 盤	全 体 1/2	13.9		9.3		3.3	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：リタリナヂ。	長石	外観：灰灰 内面：灰青 内面：灰白	地成良好。	
4	P5より 東6m	オリーブ 褐色帶下	偏心盤 形	全 体 1/5	14.8	15.0	10.2		3.1	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められ、底部 を丸く認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。 内面：直面。	白色輝石	外観：灰白 内面：灰白	地成良好。 内面に自然 風化が認められ る。底面に 凹部があること から、底面 が、伏せて 傾かれたと 想われる。	
5		罐	偏心盤 形	全 体 1/6	12.6		9.9		2.9	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	長石 白 色輝石	外観：灰白 内面：灰白 内面：灰白	地成良好。 内面に自然 風化が認められ る。底面に 凹部がある。	
6	P5より 東6m	オリーブ 褐色帶下	偏心盤 形	全 体 1/6	11.8		9.0		3.5	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	長石	外観：灰白 内面：灰白	地成良好。	
7		C-4	偏心盤 形 (外底)	2 体 1/6	13.5				3.6	口縁 直壁	体部外上方へ直線的に 立ち上がり、口縁を内側に 寄りかねて認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	長石 白 色輝石	外観：暗青 内面：青白 内面：青白	地成良好。	
8	P5より 東6m	オリーブ 褐色帶下	偏心盤 形	全 体 1/4	14.8				3.6	口縁 直壁	体部外上方へ立ち上がり、 口縁を内側に認められる。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。 内面：直面。	長石	外観：灰 内面：灰 内面：灰白	地成良好。 内面に物残 しやと思わ れる内心内 の凹み等が 認められる。	
9		5号	偏心盤 形	全 体 1/15	25.7	26.0			2.7	天井部 直壁	若干等厚で、天井部 は薄い。底面や 天井部は、口縁 より少し高く、 天井部に凹り、 底面に凸り認め られる。	外観：リタリナヂ。 内面：リタリナヂ。 内面：直面。	長石 黄 色 輝 石	外観：灰 内面：灰 内面：灰白	地成良好。	
10		C-6	偏心盤 直壁	直壁 1/10			25.2	2.6	高台高 6.5	直壁	全体が薄い。 天井部は、口縁 より少し高く、 天井部に凹り、 底面に凸り認め られる。	外観：ナヂ。 内面：ナヂ。	長石 黄 色 輝 石	外観：灰 内面：灰 内面：灰白	地成良好。 内面に凹 溝が認められ た。底面に 凹部がある。	
11		C-5	偏心盤 直壁	直壁 1/2	33.2				4.9	口縁部	全体外上方に直線的に 立ち上がり口縁を内側に 寄りかねて認められる。直 壁部は、口縁より 少し高く認められる。	外観：ロクロナヂ。口 縁部：リタリナヂ。 内面：ロクロナヂ。直 壁部：ロクロナヂ。自 然風化。	白色輝石 高台高 6.5	外観：オリ ーブ 内面：白色 内面：直面	地成良好。 内面に凹 溝が認められ た。	
12		C-5	偏心盤 直壁	直壁 1/5	13.4			6.2		直壁	直壁強く内方に傾斜す る。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	长石 黄 色 辉 石	外観：青灰 内面：白色 内面：直面	地成良好。	
13		C-6	偏心盤 直壁	直壁 1/3		16.4			7.1	直壁	直壁強く内方に傾斜す る。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。 内面：直面。	长石 黄 色 辉 石	外観：暗青 内面：明青 内面：直面	地成良好。	
14		C-5	偏心盤 直壁	直壁 1/6		20.2			7.3	直壁	直壁で内方に傾斜す る。	外観：リタリナヂ。口 縁部：ロクロナヂ。	长石 黄 色 辉 石	外観：オリ ーブ 内面：白色 内面：直面	地成良好。 内面に凹 溝が認められ た。	
15		C-4	偏心盤 直壁	直壁 1/5			8.4	2.0	高台高 6.5	直壁	体部若干不規則な外 方に立ち上がる。底 付近は天井部や内壁に 凹凸があり、直壁部も 凹凸がある。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	白色輝石	外観：灰 内面：灰 内面：灰白	地成良好。 内面に凹 溝が認められ た。	
16		C-D-6	偏心盤 直壁	直壁 1/3			12.5	4.6	高台高 6.5	直壁	直壁で内方に傾斜す る。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	长石	外観：灰 内面：灰	地成良好。	
17		C-3	偏心盤 直壁	直壁 1/5			13.2	7.6		直壁	直壁で内方に傾斜す る。底付近は天井部や 内壁に凹凸があり、直 壁部にも凹凸がある。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	长石 黄 色 辉 石	外観：青灰 内面：白色 内面：直面	地成良好。	
18		C-4	偏心盤 直壁	直壁 1/9	24.0				19.5	5.0	口縁 直壁	直壁で内方に傾斜す る。底付近は天井部や 内壁に凹凸があり、直 壁部にも凹凸がある。	外観：ロクロナヂ。 内面：ロクロナヂ。	白色輝石 高台高 6.5	外観：灰 内面：灰 内面：灰白	地成良好。

集計番号	基 標	出土点	層 位	材 質	埋 墓	口 径 (cm)	深 度 (cm)	底 直 (cm)	底 高 (cm)	その他の記述	部 位	形 異	質 様	含む有	色 調	備考
19	P5より 東6m	オリーブ 色地磨上	腰帯骨 突	口縁へ 腰帯骨 突	27.0			22.4	7.2	口縁へ 腰帯骨 突	骨頭の上方へ内側に かぶさる上がり。口縁 部で腰帯骨に外反し、腰 帯骨が方角部に内反し、底 面に甲板に付せり。	外因: ナデ。 内因: ナデ。	右肩・縫 縫片付	内因: 淡白 外因: 淡白 底: 白	褐色不良。 均白に赤斑 者有り。	
20	P5より 東6m	オリーブ 色地磨上	腰帯骨 突	腰帯骨 突	1/6			22.2	6.1	腰帯骨	骨頭内部に小さな立ち 上がり。丁寧細かに作成 する。	外因: ナデ。 内因: ナデ/ ナカ。	腰帯片付	内因: 淡白 外因: 淡白 底: 白	褐色不良。	
21	T-29	3層	腰帯骨 突	口縁骨 1/16	26.3	26.2			2.6	口縁骨	骨頭外部内側部骨頭に 立ち上がり。口縁骨頭 を尖り尖削に收める。	外因: ロクロナダ。 内因: ロクロナダ。	右肩・黄 石	内因: 淡口 石	褐色良好。	
22	Ka26 トレンチ	第1	青銅 鏡	口縁骨 1/6	36.0				4.2	口縁	骨頭外上方へ内側に 立ち上がり。口縁骨頭 を尖り尖削に收める。	外因: ロクロナダのち 後退。 腰帯骨尖り切削。 内因: ロクロナダのち 後退。	腰帯	輪: ブレイ ムのオシリ ス 刀: 黄白	経度良系。 褐色良好。 茎持14枚。	
23	Ka26 トレンチ	鉢上	青銅 鏡	鏡介				33.3 33.0 厚0.5	口縫			外因: ロクロナダのち 後退。 腰帯骨尖り切削。 内因: ロクロナダのち 後退。	輪: ブレイ ムのオシリ ス 刀: 黄白	経度良系。 褐色良好。		
24	D-6		土器骨 体	口縫 1/1			32.8	2.6		底部外上方に近づく。	外因: ロクロナダのち 後退。 腰帯骨尖り切削。 内因: ロクロナダのち 後退。	右肩・黄 石	内因: 淡口 石	褐色不良。 底: 淡白。		
25		下位腰帶	土器骨 體	鏡介				6.3	不明	-	骨頭: 二重骨頭 腰帯骨: 二重腰帯 内因: ニミタニエ。	外因: ナデ/ ナカ。	右肩・黄 石	外因: 淡口 石 内因: 淡口 石	褐色やや不 良。前段に 暗色付帯。	
26	Ka26 トレンチ	3層	土器骨 體	腰帯 2/3				45.0 11.9 厚0.3	腰帯			外因: ナゼリのロビ ナダ。	右肩・黄 石	内因: 淡口 石 底: 黄白 い底端	褐色不良。	
27	C-4		玉環 法印	口縫一 腰帯 1/16	27.2	27.6		5.0	口縫一 腰帯	口縫骨頭に内側骨頭に 立ち上がり。口縫骨頭 をくぼむ。法印内 に骨頭がある。	外因: ナデ。 内因: ナデ。	右肩	内因: 淡口 石	褐色良好。		
28	C-4		玉環 法印	不明				4.3	腰帯 厚2.0	不明		外因: ナゼリのロビ ナダ。 3重の腰帯。	右肩・黄 石	外因: 淡口 石 内因: 淡口 石	褐色やや不 良。前段に 暗色付帯。	
29	C-7		玉環 法印	不明				39.0 厚2.1 厚2.5	腰帯 厚2.5	不明		外因: ナゼリのロビ ナダ。 3重の腰帯。	右肩・黄 石 内因: ナミエ。	内因: 淡口 石 外因: 淡白	褐色良好。 輪裏の瓦の一 個。	
30	Ka26 トレンチ	石塚	青銅 鏡	腰帯 1/6				3.6	4.0	腰帯 厚2.3	腰帯	骨頭外上方へゆるやか に立ち上がる。底は口 縫骨頭に内側骨頭に 立ち上がり。腰帯を底内側に 収める。腰帯の底端。	骨頭(底端)。 外因: ロクロナダのち 後退。 内因: ロクロナダのち 後退。	腰帯片付 右肩・淡口 石	腰帯片付 右肩: 淡口 石	褐色系。 褐色良好。

川端奥窓遺跡 石器・石製品觀察表  
包含層

石器名 品番	產 地	出土施設	層 位	石 材	器 形	底 直 (cm)	高 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	その他の記述 (cm)	高存率	基 本	質 様
31	Ya26 トレンチ	3層	サヌカイト	打削石器	4.0	2.6	0.6	7.2			1/1		右腰半周品。
32	Ya26 トレンチ	右腰半 周	サヌカイト	研磨	2.1	3.1	0.4	2.5					全欠。



## VI 川端馬越古墳群



## 例　　言

- 1 本章は四国横断自動車道建設に伴う川端馬越古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 所在地 板野郡板野町川端字岸土谷3-28他  
調査対象面積 4,400m<sup>2</sup>  
試掘面積 220m<sup>2</sup>  
本調査面積 200m<sup>2</sup>
- 3 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。  
発掘調査期間 平成10年2月1日～平成10年3月31日（試掘）  
平成10年4月1日～平成10年5月31日（本掘）  
報告書作成期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日
- 4 造構番号、挿図番号、図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。
- 5 本遺跡の地理的・歴史的環境については、「II 調査地点の立地と環境」を参照されたい。

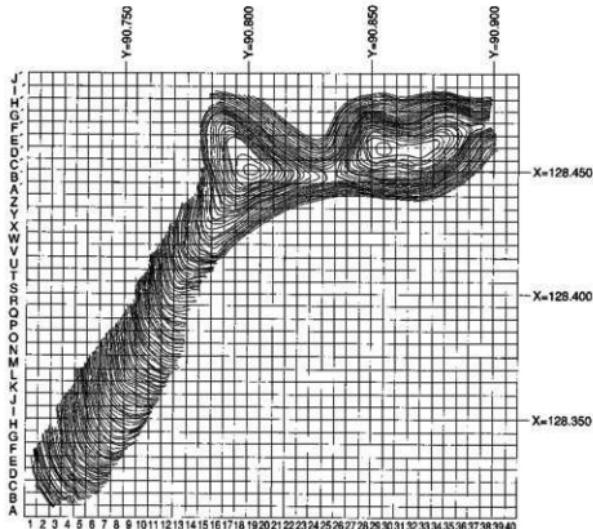
# 1 調査の経過

## (1) 調査の経過 (I-第1図およびII-第1・3・12図)

調査対象地は阿讃山脈南麓の標高57~87mの北東から南西方向へ緩やかに傾斜する尾根上に位置する。調査地点周辺は、谷口山古墳や阿王塚古墳等の古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲内、4,400m<sup>2</sup>を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年度に試掘の承諾可能な地区より順次、人力掘削によるトレンチ調査を計220m<sup>2</sup>実施した。試掘の結果、調査対象地西側尾根裾部において古墳の石室と思われる石列や須恵器片などを検出したため、平成11年度に200m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成11年5月31日に終了した。

## (2) 発掘調査の方法 (第1図)

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第1図 グリッド配置図

### (3) 調査日誌抄

1999年（試掘）

- 2月1日 調査準備。
- 2月5日 機材運搬。
- 2月9日 調査地現況地形測量。
- 2月16日 試掘トレンチ設定。掘削開始。
- 3月22日 図面整理。
- 3月26日 図面整理。



1999年（本掘）

- 4月1日 調査準備。
- 4月7日 調査区人力掘削開始。遺構検出作業。
- 4月9日 遺構掘削開始。
- 4月15日 図面作成開始。
- 5月24日 埋め戻し作業。現場撤収。

## 2 調査成果

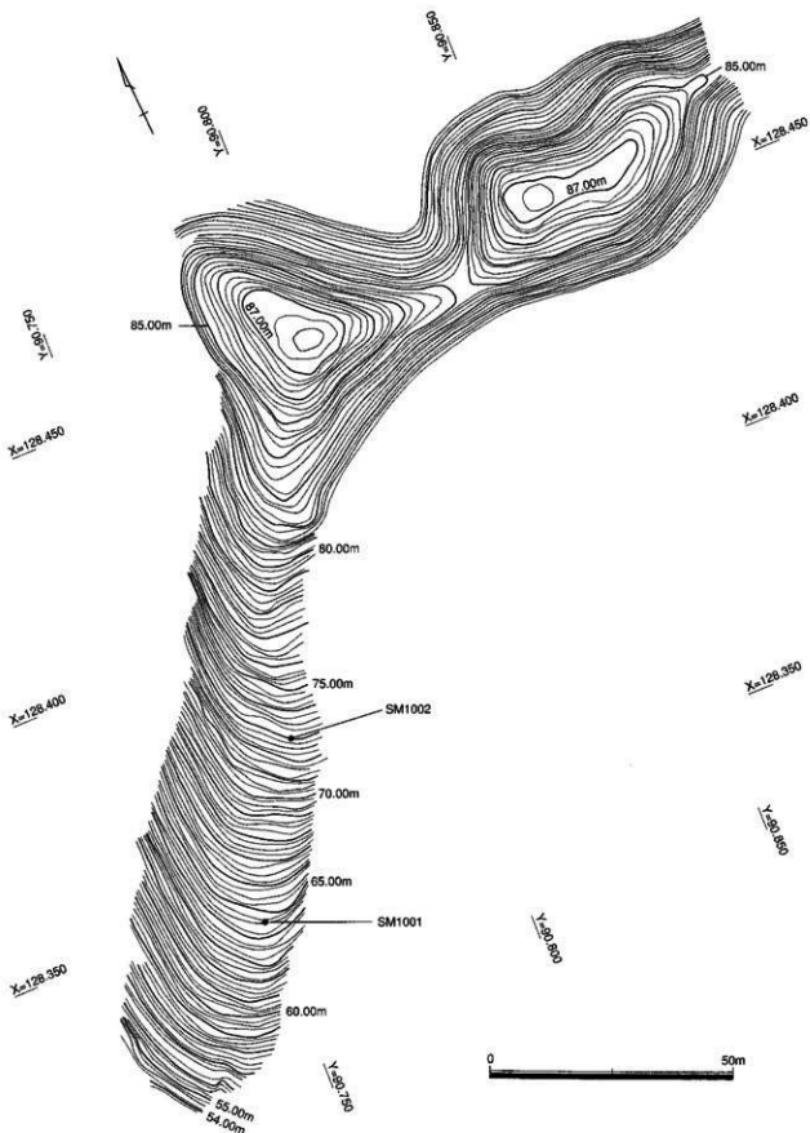
### (1) 基本層序

トレンチ配置状況と土層堆積状況（第2・3・4図）

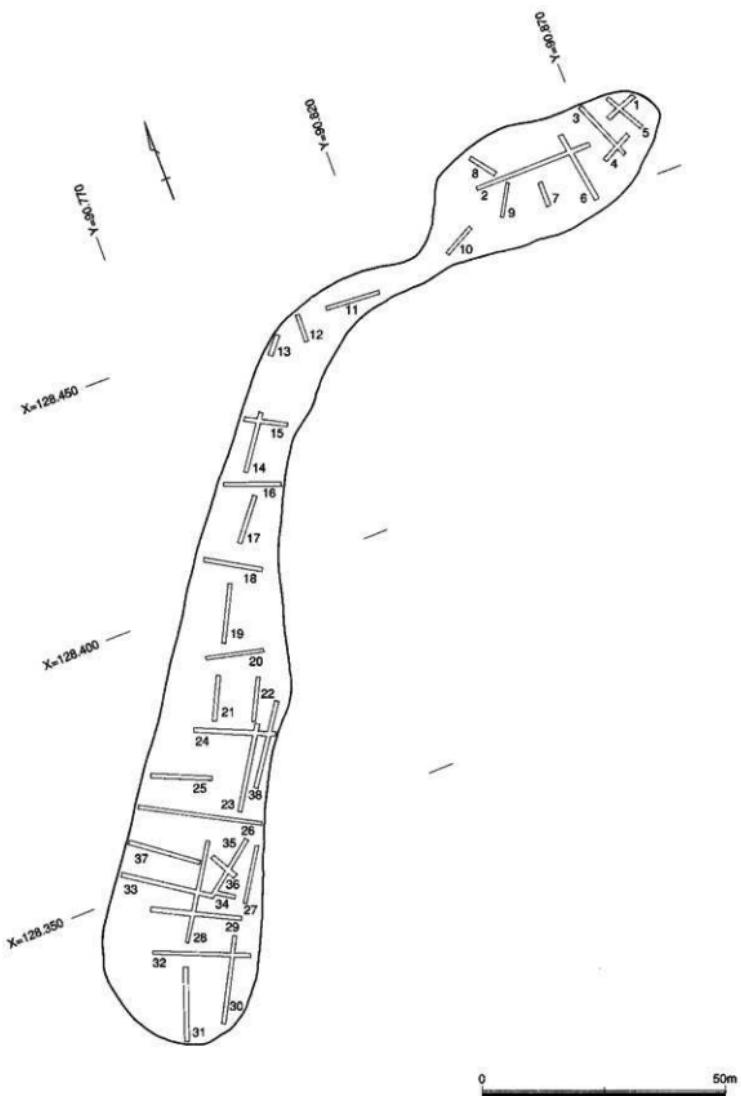
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘は土層堆積状況、遺構・遺物の出土層位および遺跡の範囲の把握に努めた。試掘の結果、調査区西側尾根部において石室と思われる石列を検出したため、200m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査へ移行した。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

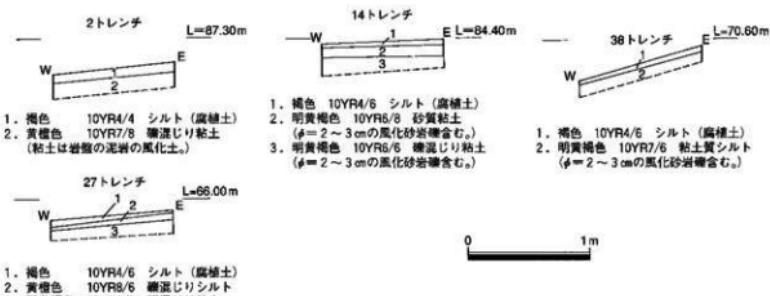
1. …黒褐色 7.5YR2/2 砂質土（表土、腐植土。）
2. …明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、 $\phi = 3 \sim 5$  cm程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/3 粘土が混じる。）
3. …黄橙色 10YR7/8 砂質土（岩盤。地山。砂岩・泥岩疊層。）



第2図 地形平面・遺構配置図



第3図 トレンチ配置図



第4図 模式柱状土層図

## (2) 遺構と遺物

### 出土遺構（第5・9図）

尾根筋より南東方向寄りの地点で、2基の横穴式石室が検出された。共に削平を受け、残存状況は良くないが、副葬品の一部と思われる若干の鉄器類等の遺物も検出された。遺物包含層からも須恵器片が若干出土した。

### SM1001（1号墳）（第5～7図）

石室礫床の一部が検出されたのみで、整体および上部構造はほとんど失われていた。礫床の残存部は、長軸1.50m、短軸0.9mを測る。主軸方向は、N-15°-Wで、南に開口する横穴式石室とみられる。

### 出土遺物（第8図）

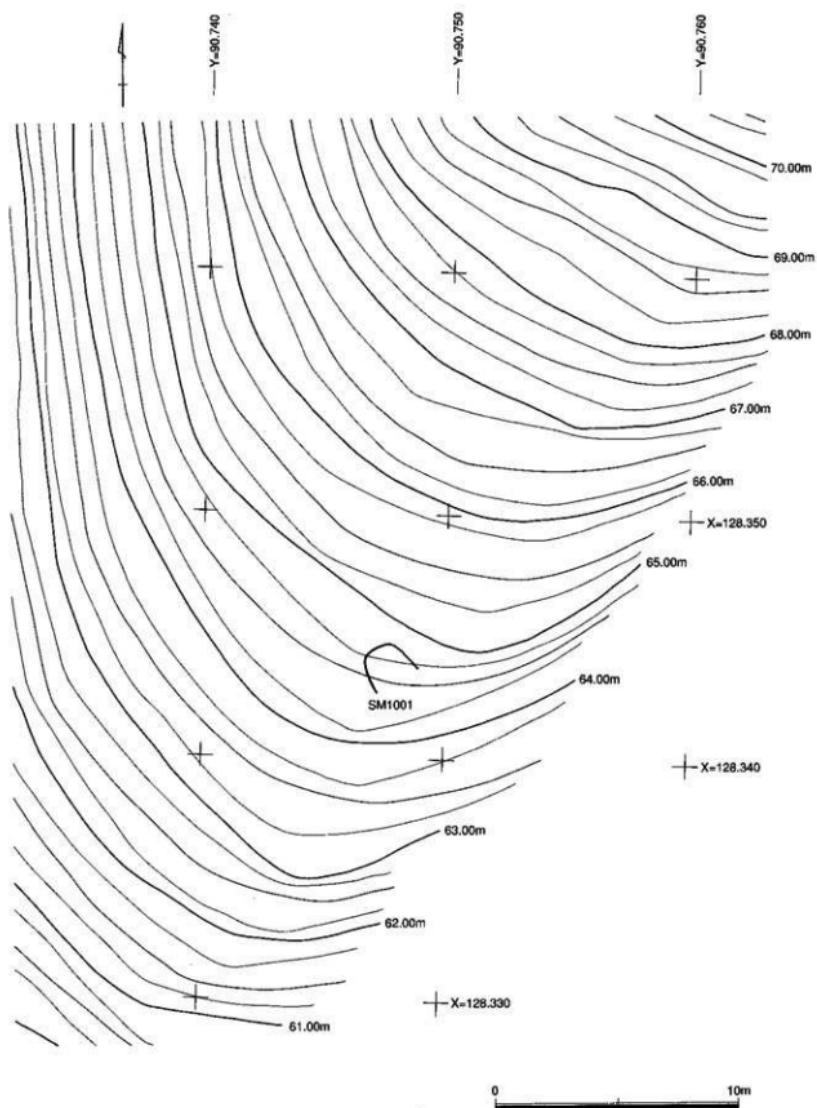
鉄器類が22点出土した。鉄鎌の茎部の他、棺を留めていたと思われる鉄釘も見られる。

### SM1002（2号墳）（第9～13図）

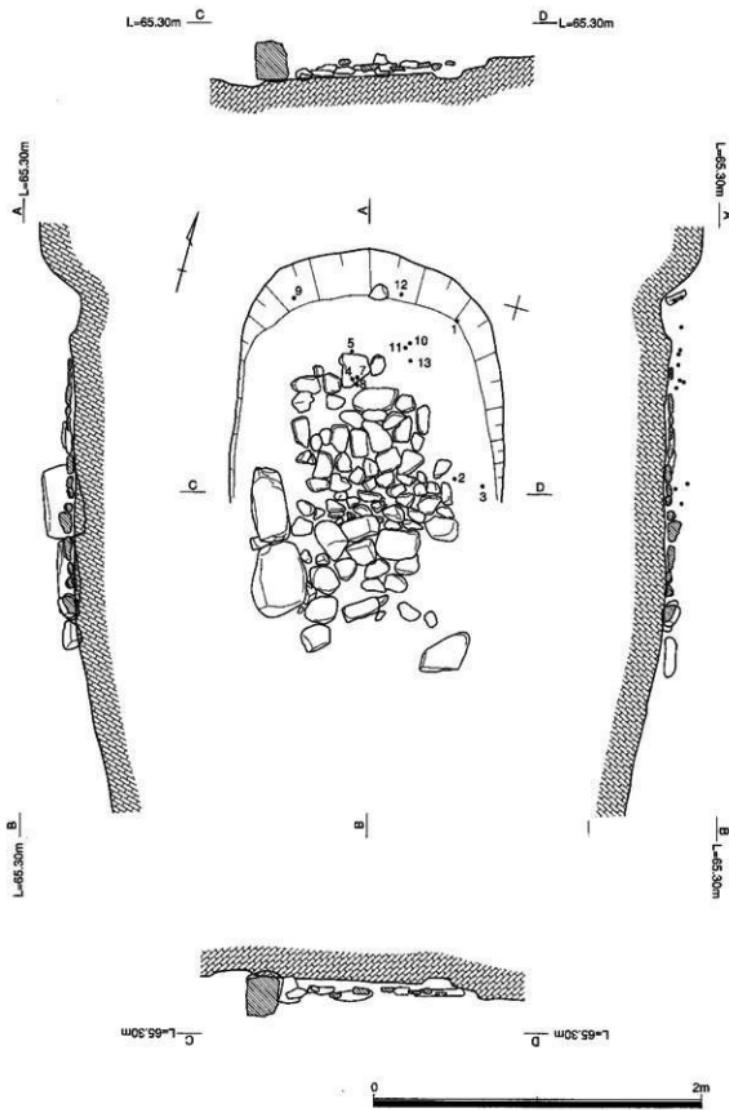
玄室部と羨道部の一部が残存する横穴式石室である。玄室部は、長軸2.50m、短軸0.9mを測る。主軸方向は、N-18°-Wで南に開口する。礫床は2次床面を形成していた形跡がある。側壁部は基底部一段目がほぼ残っており、左片袖式の平面形を示す。羨道部は右側側壁部の一段目が約1.0m残存する。

### 出土遺物（第14図）

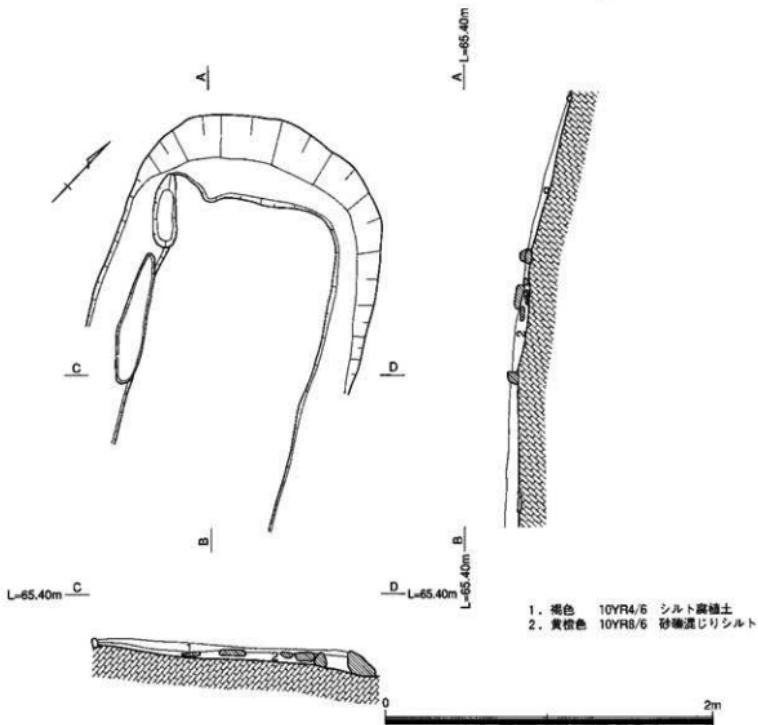
須恵器小片の他、鉄器類が25点出土した。鉄鎌の茎部をはじめ、鎌等の工具と思われる鉄器片、棺を留めていたと思われる鎌・鉄釘が出土しているが、全体が判明するものは少ない。



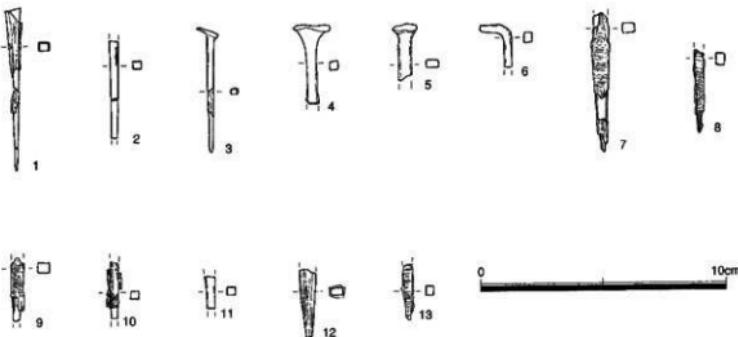
第5図 SM1001周辺地形平面図



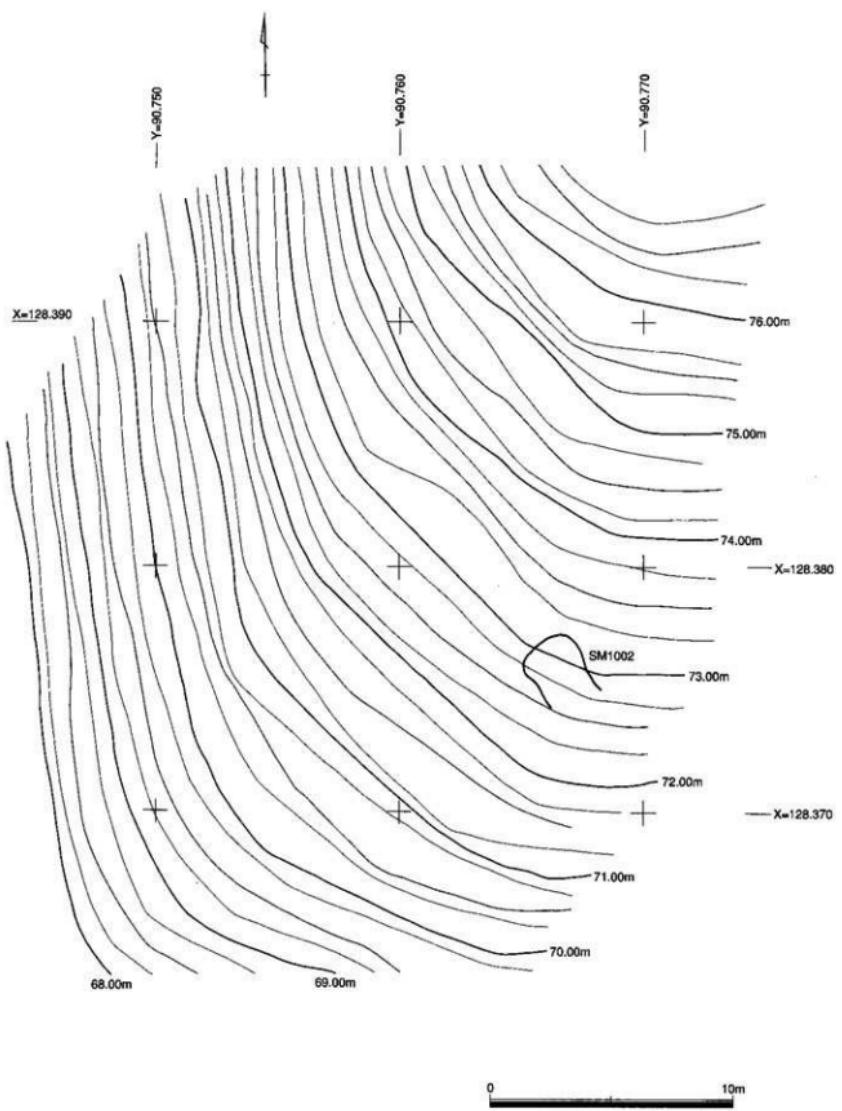
第6図 SM1001石室平・断面および遺物出土分布状況ドット図



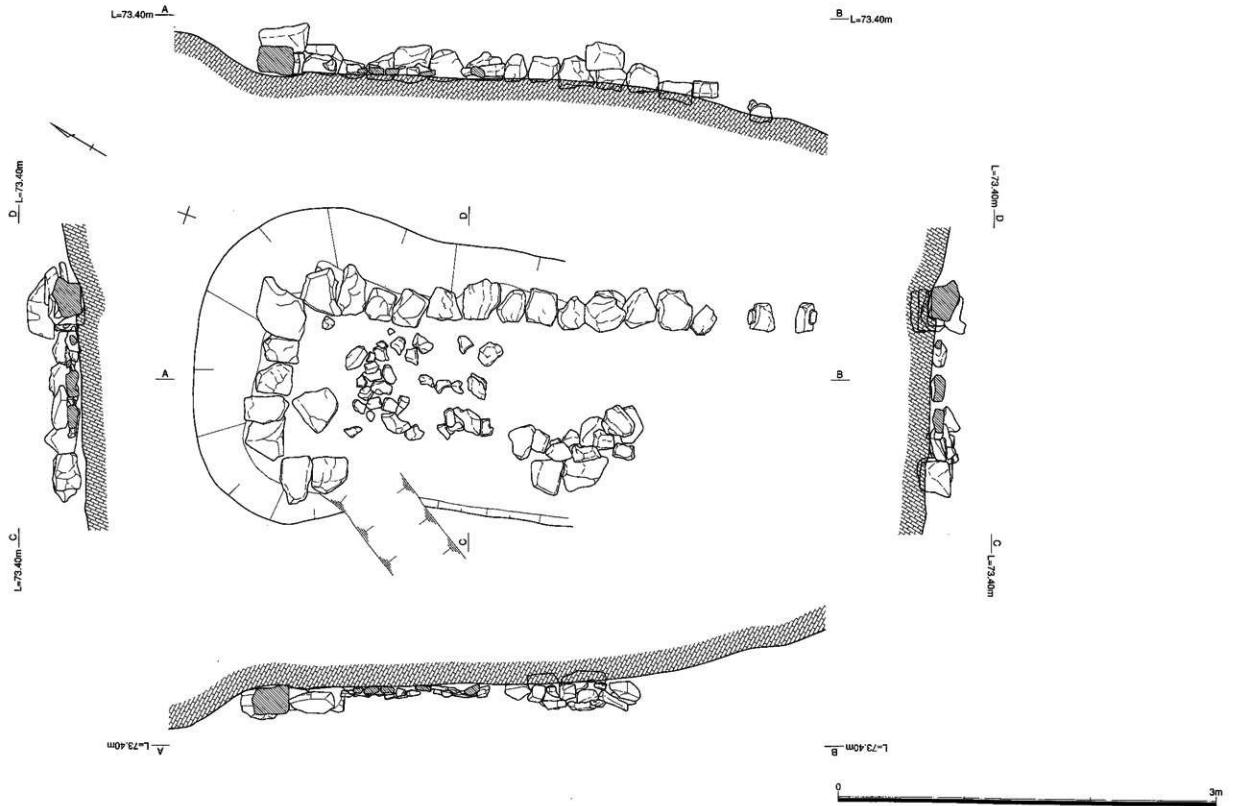
第7図 SM1001石室土層断面図



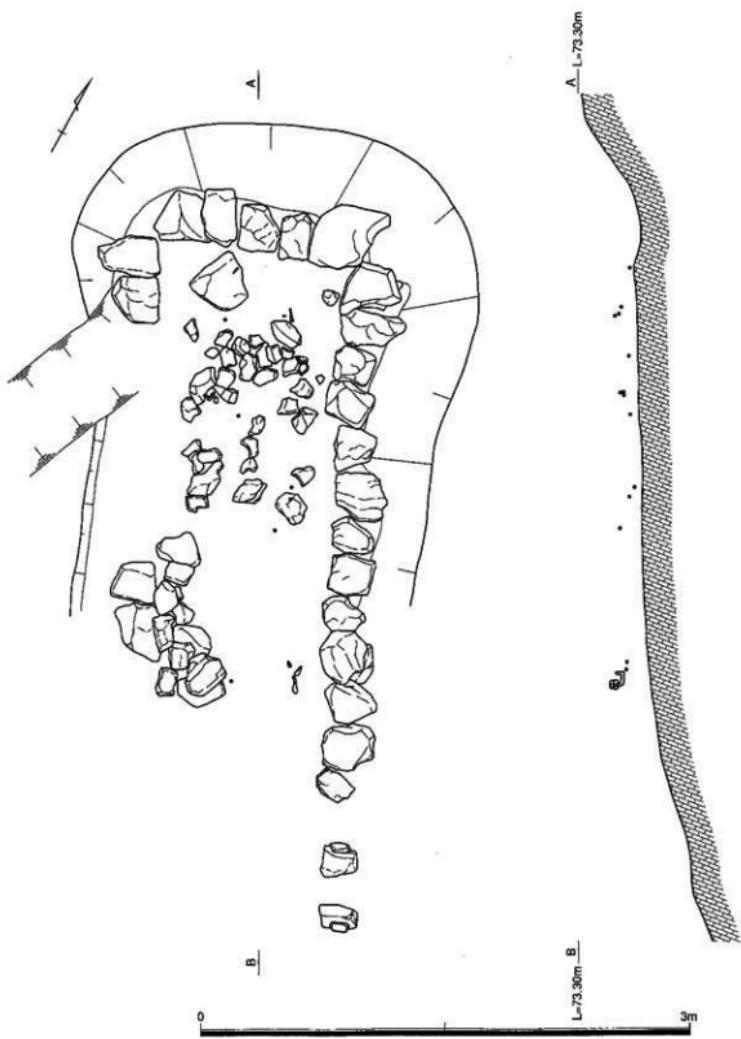
第8図 SM1001出土遺物



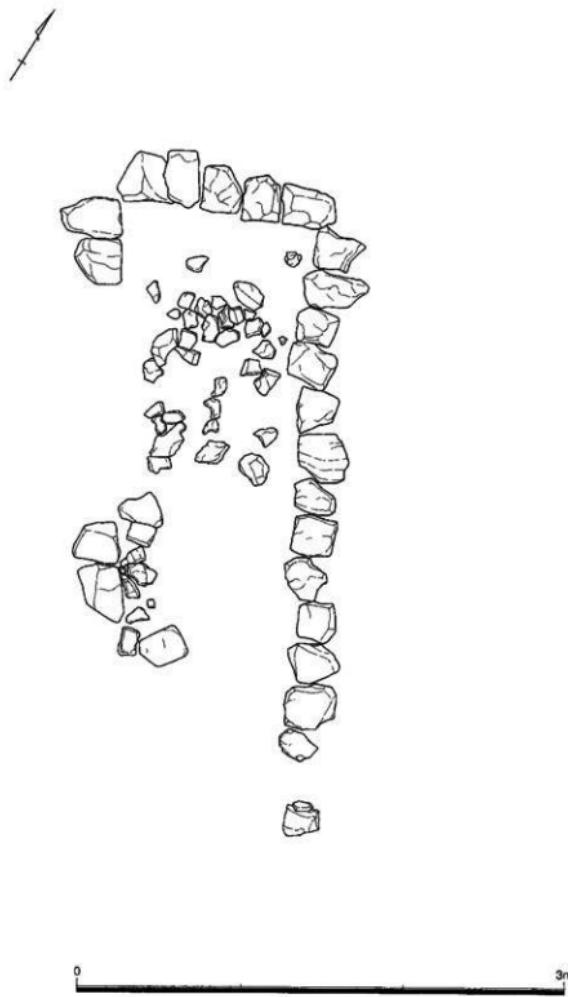
第9図 SM1002周辺地形平面図



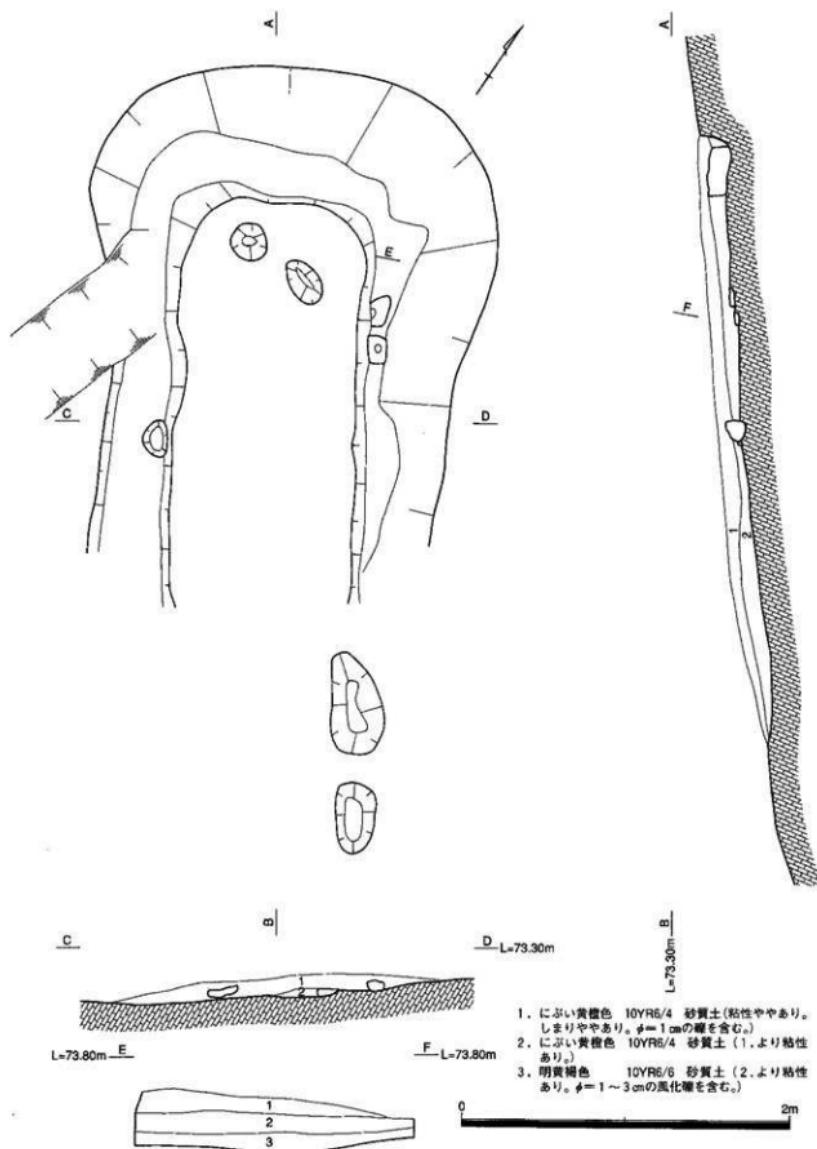
第10図 SM1002石室平・断面図



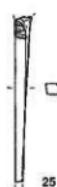
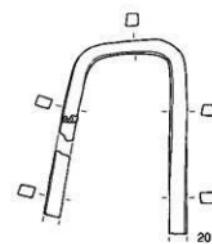
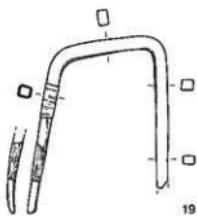
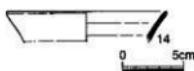
第11図 SM1002遺物出土分布状況ドット図



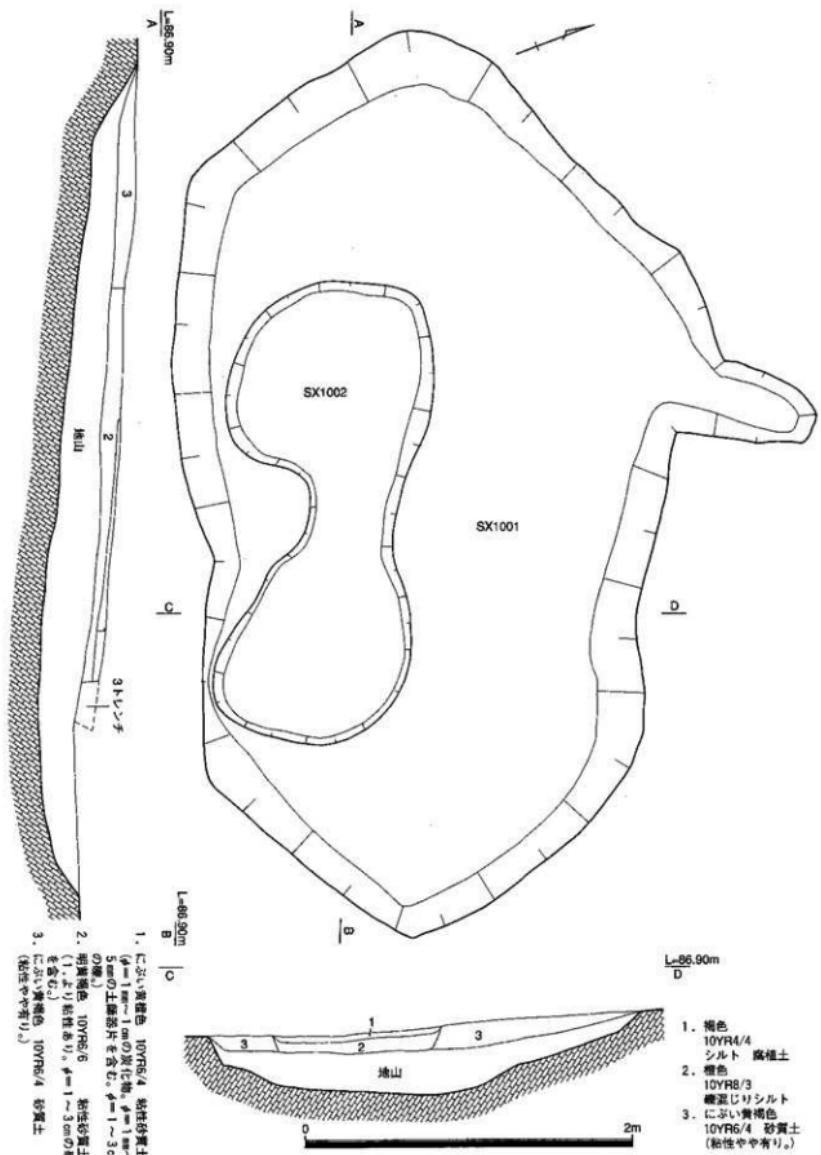
第12図 SM1002石室基底部平面図



第13図 SM1002石組除去後平・土層断面図



第14図 SM1002出土遺物



第15図 SX1001・1002平・断面図

#### SX1001 (第15図)

浅い窪地状の造構である。平面形はややいびつな橢円形状を呈する。浅い窪地状の自然地形に周辺の土砂が堆積したものと見られ、人為的な造構の可能性は低い。

#### 出土遺物

若干の須恵器小片が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

#### SX1002 (第15図)

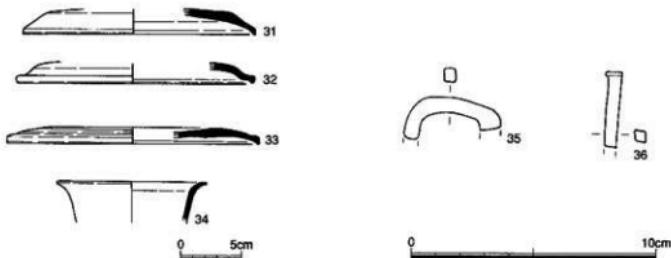
SX1001と切り合う造構である。SX1001同様、浅い窪地状を呈し、いびつな橢円形状を呈する。

#### 出土遺物

若干の須恵器小片が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

#### 包含層出土遺物 (第16図)

須恵器の蓋等が出土している。いずれも小片のため、全容は不明であるが、7世紀後半以降、8・9世紀頃のものと考えられる。



第16図 包含層出土遺物

#### (3)まとめ

検出された2基の古墳は共に削平が著しいが、基底部の一部が遺存していた。詳細な時期決定は困難であるが、2基とも主体部に横穴式石室をもつ古墳であったと思われ、築造年代は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

2号墳石室床面上から若干の須恵器片が出土している。出土遺物から2基の石室は、6世紀末に築かれたものと考えられる。

川端馬越古墳群  
第1表 出土遺構一覧表

SM

遺構名	グリッド	墓壁平面 形態	墓壁側面 形態	墓壁長軸 (m)	墓壁高純 (m)	墓壁深度 (m)	石室長軸 (内法.m)	石室横軸 (内法.m)	石室深度 (内法.m)	主軸方向	備考
SM1001	G-8	馬頭長方形 D字状(浅 いV字形状)		2.5	1.6	0.25	1.5	0.9	15	N-15° W	横穴式石室墓。 玄通部が石築壁部一段目約1mが残存。
SM1002	N-12	馬頭長方形 D字状(浅 いV字形状)		4.6	2.1	0.25	2.5	0.9	20	N-35° W	横穴式石室墓。 玄通部が石築壁部一段目約1mが残存。

第2表 出土遺物觀察表  
SM1001 (鉄器・鉄製品)

遺物番 号	遺構	出土地點	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の法量 (cm)	残存率	部位	備考
1	SM1001		表土下	鉄鍔 (柄)	5.8	0.4	0.4	3.8		1/2	玄部	木質付茎。 木目横方向。
2	SM1001		表土下	鉄鍔 (柄)	4.0	0.4	0.4	2.0				木質付茎。 木目横方向。
3	SM1001		表土下	釘	3.1	0.3	0.2	3.0		1/1		木質付茎。 木目横方向。
4	SM1001		2層	釘	3.3	0.5	0.4	2.5		1/2	表部	
5	SM1001		2層	釘	2.3	1.0	0.5	3.1		1/3	鏡部	
6	SM1001		2層	釘	1.7	0.4	0.4	2.0		1/3	鏡部	
7	SM1001		基盤部 列石底下	釘	5.5	0.7	0.5	5.0		2/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。
8	SM1001		2層	釘	3.3	0.5	0.5	1.5		1/2	先端部	木質付茎。 木目横方向。
9	SM1001		2層	釘	2.6	0.5	0.5	2.6				木質付茎。 木目横方向。
10	SM1001		基盤部 列石底下	釘	2.4	0.6	0.4	1.2				木質付茎。 木目横方向。
11	SM1001		2層	釘	1.3	0.4	0.4	0.4				
12	SM1001		1層	釘	2.9	0.6	0.3	1.9		1/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。
13	SM1001		2層	釘	2.2	0.6	0.4	0.9		1/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。

SM1002 (鉄器・鉄製品)

遺物番 号	遺構	出土地點	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の法量 (cm)	残存率	部位	備考
15	SM1002		埋土	鉄錐	4.6	0.6	0.6	3.2		1/3		木質付茎。
16	SM1002		埋土	鉄錐	3.1	0.6	0.3	1.7		1/3	茎部	木質付茎。 木目横方向。
17	SM1002		埋土	錐	9.1	0.5	0.3	20.5				木質付茎。 木目横方向。
18	SM1002		埋土	錐	2.8	0.6	0.4	3.3				木質付茎。 木目横方向。
19	SM1002		表土下	錐	7.2	0.6	0.7	29.3		9/10		木質付茎。
20	SM1002		埋土	錐	13.0	0.7	0.5	41.5		4/5	茎	木質付茎。
21	SM1002		埋土	錐	3.9	0.2	0.8	4.2		1/3	鏡部	木質付茎。
22	SM1002		埋土	釘	2.4	0.5	0.3	1.6		1/2	表部	
23	SM1002		埋土	釘	2.3	0.4	0.4	3.7		1/3	鏡部	
24	SM1002		埋土	小錐	1.9	1.1	0.4	2.4				
25	SM1002		埋土	釘	6.7	0.6	0.5	8.4				木質付茎。 木目横方向。
26	SM1002		埋土	釘	3.0	0.4	0.3	1.8		1/2	先端部	
27	SM1002		埋土	釘	2.9	0.7	0.4	1.7				木質付茎。 木目横方向。
28	SM1002		埋土	釘	3.3	0.8	0.6	3.4		1/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。
29	SM1002		埋土	釘	2.8	0.7	0.6	1.8		1/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。
30	SM1002		埋土	釘	2.9	0.8	0.5	1.7		1/3	先端部	木質付茎。 木目横方向。

### 包含層（鉄器・鉄製品）

割合番 別名番号	深 度	出土地点	層 位	基 構	从 S (cm)	幅 (cm)	厚 S (cm)	重 量 (g)	その他の状 況 (cm)	残 留 率	基 位	備 考
25		T-3・4	包含層	縦	4.0	1.7	0.6	7.9		1/3	身	
26		T-3・5	包含層	横	3.1	0.4	0.5	5.1		1/2	腰部	

### SM (土器)

定 し も 名 呼	深 度	出土地点	層 位	基 構	底 幅	底 高	口 径	各 他 大 小 (cm)	底 (cm)	腹 (cm)	底心 - 最高点 (cm)	その他の 状況 (cm)	削除	形 素	肩 型	内省 特徴	色 質	備 考
14	NMDWU	N-12	出土	隔壁 基	L168 1/6	13.0		10.0		2.4		山腹状	包含層上に付接時に 立ち上がり、口縁部を 内側に折出し、腹部を 丸く收める。		外西：ナチュラル。 内西：ナチュラル。 右肩：灰 左肩：灰 内面：灰	細威良好。		

### 包含層（土器）

名 き も 内省特徴	深 度	出土地点	層 位	基 構	底 幅	底 高	口 径	各 他 大 小 (cm)	底 (cm)	腹 (cm)	底心 - 最高点 (cm)	その他の 状況 (cm)	削除	形 素	肩 型	内省 特徴	色 質	備 考
31	86.9 トレンチ		2層	隔壁 基	口縁部 1/16	19.0				2.0		口縫部	直筒な形状で、底やか なリニアードで口縁に至 り、口縫部を丸く收め る。		外西：ナチュラル。 内西：ナチュラル。	右肩	外西：灰 内西：灰青 細威良好。	
32	86.8 トレンチ		2層	隔壁 基	口縁部 1/30	18.0		19.4		1.7		口縫部	直筒な形状で、底やか なリニアードで口縁に至 り、口縫部を丸く收 める。		外西：ロクロナデ。 内西：ロクロナデ。	右肩	外西：灰 内西：灰 細威良好。	
33	86.5 トレンチ		2層 盛埴土塗下 表土下	隔壁 基	全体 1/6	33.4	20.7			1.3		天井部 ～ 山腹	直筒な形状で、底やか なリニアードで口縁に至 り、口縫部を丸く收 める。		外西：ロクロナデ。 内西：ロクロナデ。 右肩：灰 内西：灰白	右肩 内西：灰 細威良好。		
34	86.3 トレンチ		2層	隔壁 基	口縁部 1/16	12.0				3.3		口縫部	口縫部外上方に立ち上 がり、口縫部を丸く收 め、丸く折める。		外西：ロクロナデ。 内西：ロクロナデ。	右肩	外西：暗青 内西：灰白 細威良好。	

## VII 桧はちまき山遺跡



## 例　　言

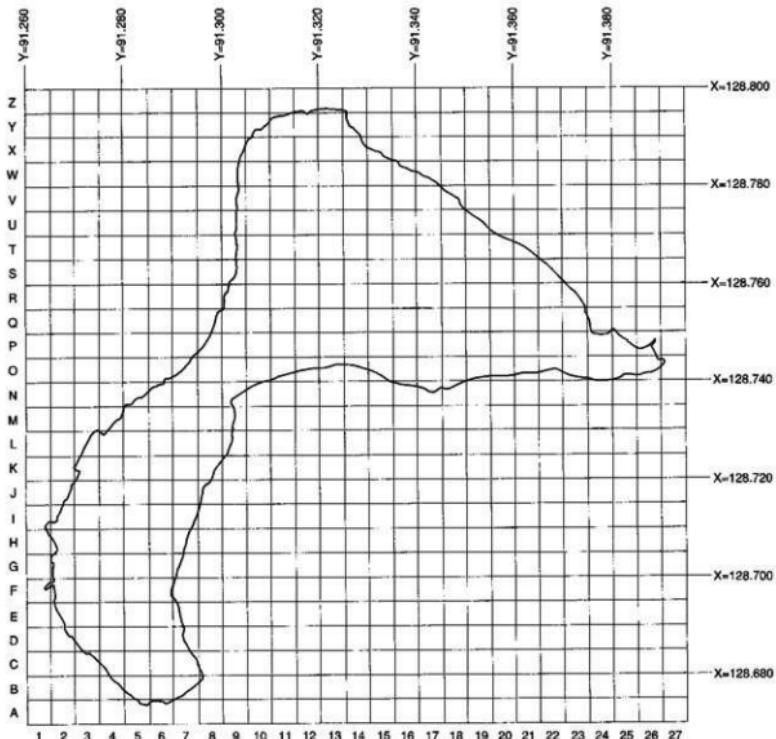
- 1 本章は四国横断自動車道建設に伴う桧はしまき山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 所在地 鳴門市大麻町桧字西谷山17-1他
- 3 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間	平成11年9月1日～平成11年11月30日
	平成12年4月1日～平成12年12月31日
報告書作成期間	平成14年4月1日～平成16年3月31日
- 4 調査対象面積 平成11年度 調査対象面積2,760m<sup>2</sup> 試掘面積 400m<sup>2</sup>  
平成12年度 本調査5,200m<sup>2</sup>
- 5 遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

# 1 調査の経過

## (1) 調査の経過 (I-第1図およびII-第1・4・13図)

桧はしまき山遺跡は阿讃山脈南麓、鳴門市大麻町桧字西谷山17-1他の標高56~86mの二股に分かれた尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳(前方後円墳)の所在する徳島市国府町の氣延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されている地域である。平成3年度に、調査地点の南に隣接する民間住宅地開発事業に伴い、鳴門市教委が発掘調査を実施し、弥生時代中期の集落を確認している。事前の分布調査において同時期の遺構の存在する可能性が考えられた。平成11年度に四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲内の2,760m<sup>2</sup>を調査対象面積として試掘調査を実施した。調査に際し、現況の地形測量を実施した。試掘トレチの設定に際しては、尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレ



第1図 グリッド配置図

チを設定した。また遺構・遺物の出土状況に応じ部分的にトレンチを拡張して遺構の広がりの把握に努めた。試掘調査は平成11年9月1日～11月30日にかけて人力掘削によるトレンチを400m<sup>2</sup>実施した。その結果、ほぼ調査区全域にわたり弥生時代中期の土器・石器の出土がみられ、弥生時代の高地性集落であることが確認され、当初予定の調査対象面積より東側の斜面部にも遺構が広がることが明らかになった。試掘調査の結果を受けて、協議を行い、平成12年度に5,200m<sup>2</sup>の範囲を対象に本調査を実施した。本調査は平成12年4月1日～12年12月31日の期間実施された。

## (2) 発掘調査の方法 (第1図)

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

## (3) 調査日誌抄

1999年

9月1日 事務所引越し。  
9月2日 事前準備。  
9月3日 図面作成。  
9月8日 トレンチ掘削開始。図面作成。  
図面整理。  
11月26日 トレンチ掘削終了。埋め戻し。  
後片付け。  
11月30日 図面整理。引越し。

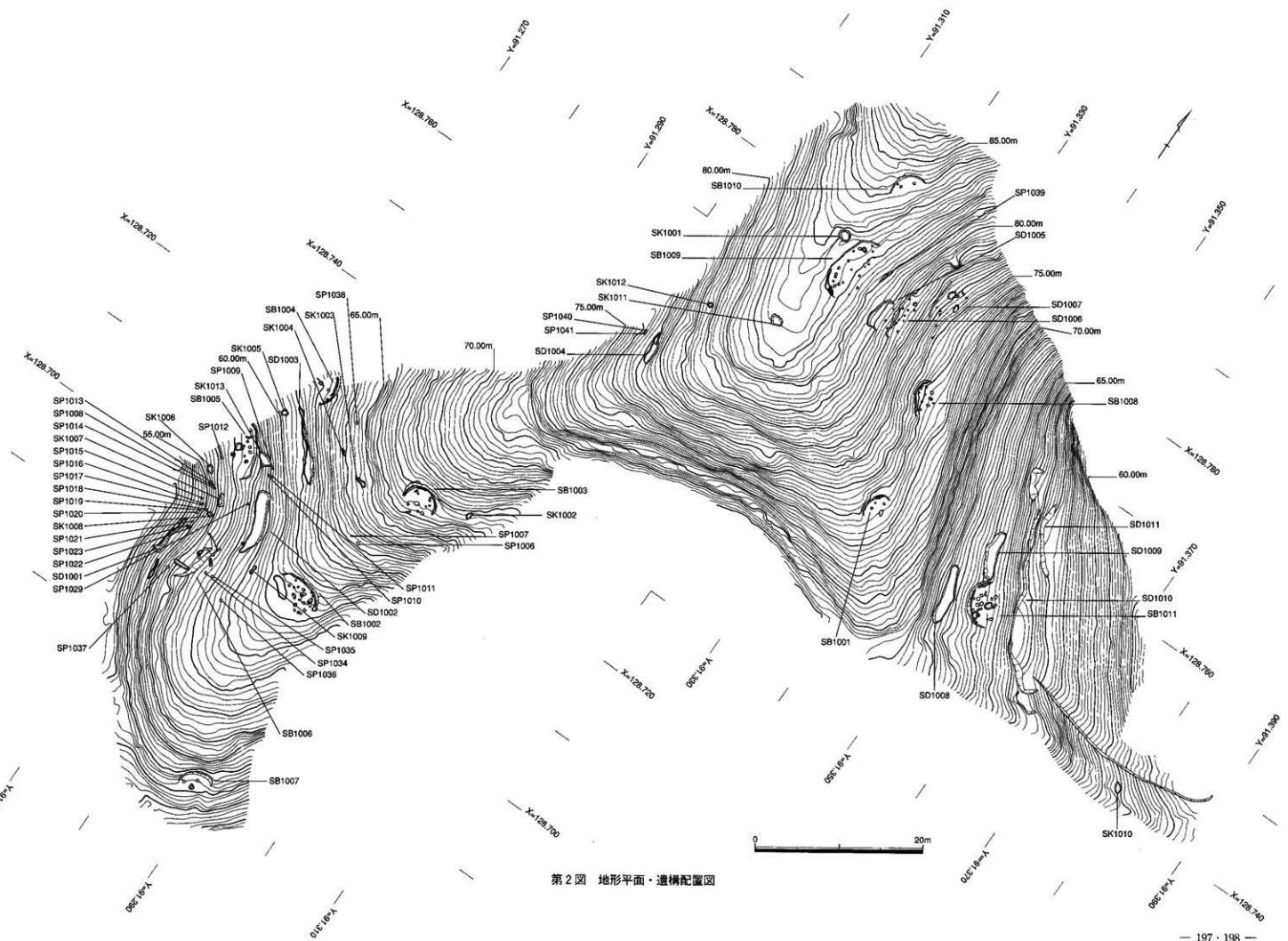
根)。

7月17日 遺構検出状況写真撮影 (西側尾根)。  
重機掘削 (東側尾根)。  
7月18日 遺構配置図作成 (西側尾根)。段状遺構検出 (北側尾根)。  
7月19日 遺構掘削 (西側尾根)。遺構面精査。  
豊穴住居跡検出 (北側尾根)。  
8月23日 包含層掘削 (東側尾根)。  
8月30日 遺構検出状況写真撮影 (北側尾根)。  
8月31日 遺構配置図作成 (北側尾根)。  
9月8日 豊穴住居跡検出 (東側尾根)。  
9月26日 遺構面精査、段状遺構検出 (東側尾根)。  
9月27日 遺構検出状況写真撮影 (東側尾根)。  
9月28日 遺構掘削 (北側尾根)。遺構配置図作成 (東側尾根)。  
10月24日 豊穴住居跡等遺構掘削 (東側尾根)。  
11月11日 航空写真撮影事前準備。航空写真撮影。遺構完掘状況写真撮影。  
12月31日 調査現場作業終了。現場撤収。

2000年

4月1日 伐採終了。調査前写真撮影。地形平板測量開始。  
5月16日 重機搬入。  
5月17日 重機掘削開始。  
5月30日 包含層掘削開始。  
6月1日 包含層掘削 (西側尾根)。  
7月4日 重機掘削 (北側尾根)。  
7月7日 遺構面精査、豊穴住居跡・段状遺構検出 (西側尾根)。包含層掘削 (北側尾



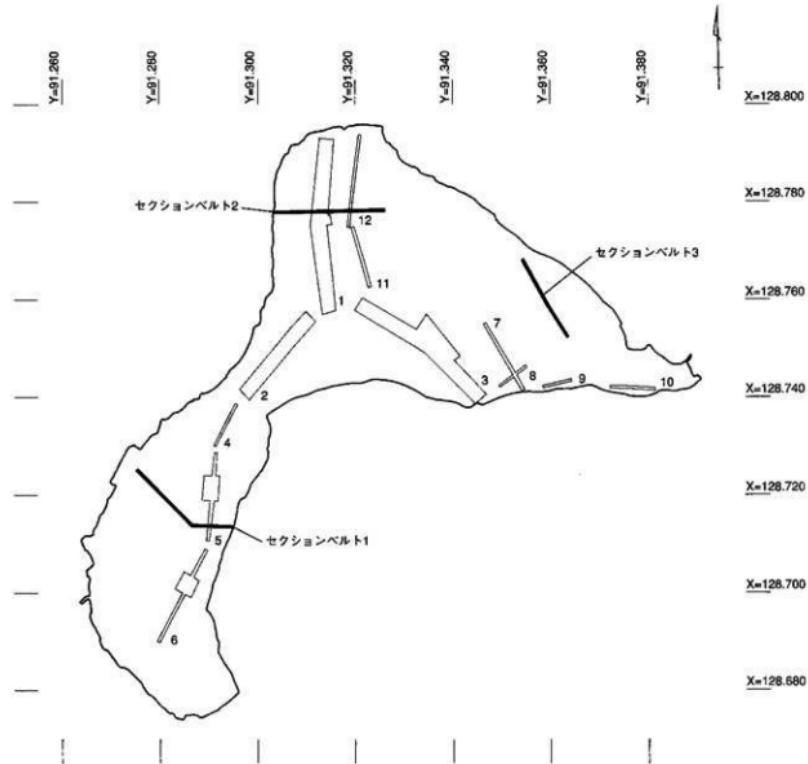


第2図 地形平面・遺構配置図

## 2 調査成果

### (1) 遺跡の概要（第2図）

桧はしまき山遺跡は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査により存在が確認された。桧はしまき山遺跡は、鳴門市大麻町桧宇西谷山の阿讚山脈南麓、標高56~86mの尾根上に位置し、北から南への傾斜面と西から東への傾斜面に大きく分かれる。麓（平地部）からの比高差は約36~56mを測る。調査区からは堅穴住居跡11軒の他、段状造構11基が出土した。出土遺物から弥生時代中期末~後期初頭頃の高地性集落であることが確認された。また調査区南側の平野部では平成3年度に鳴門市によって発掘調査が実施され、弥生時代中期以降の堅穴住居群が確認されている。



第3図 トレンチ配置図

## (2) 基本層序 (第3・4図)

土層堆積状況はトレンチによって微差はあるが、基本的に1. 腐植土 2. 風化砂礫土 3. 風化砂礫土(包含層・遺構面) 4. 地山(岩盤)である。斜面部分は急峻な地形のため非常に早い速度で風化砂礫土が堆積していた。基本層序は以下の通り調査区全域ではほぼ対応する。

1. …黒褐色 7.5Y2/2 砂質土(表土・腐植土。)
2. …黄褐色 10YR5/6 砂質土。
3. …明黄褐色 10YR6/6 砂質土(岩盤・和泉層群の砂質泥岩風化層を含む。遺物包含層。)
4. …にぶい黄褐色 2.5Y6/4 砂質土(岩盤・和泉層群の砂質泥岩風化層。)

## (3) 遺構と遺物

阿瀬山脈南麓の標高56~86mの尾根上に位置し、北から南への傾斜面と西から東への傾斜面に大きく分かれる。麓(平地部)からの比高差は約36~56mを測る。調査の結果、弥生時代中期末~後期初頭の高地性集落であることが確認された。主な遺構としては、北から南へ傾斜する西側尾根上からは6軒の竪穴住居跡、段状遺構4基が、西から東へ傾斜する東側の斜面部からは竪穴住居跡5軒、段状遺構7基が検出された。その他の遺構としては、性格不明遺構、土坑13基、柱穴36基が出土した。

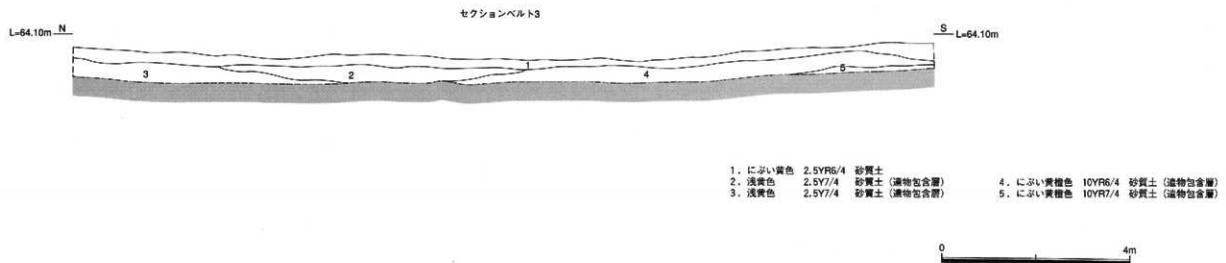
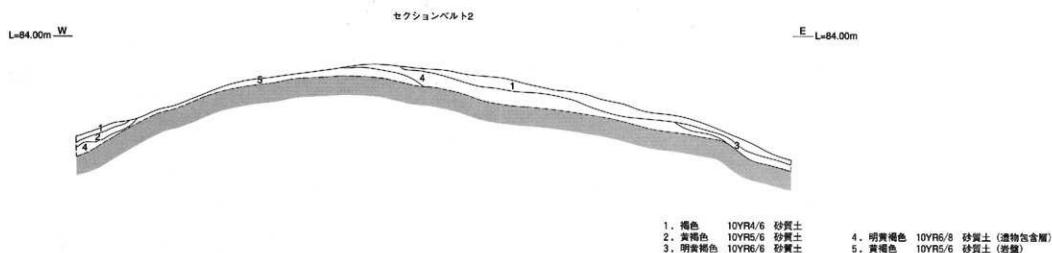
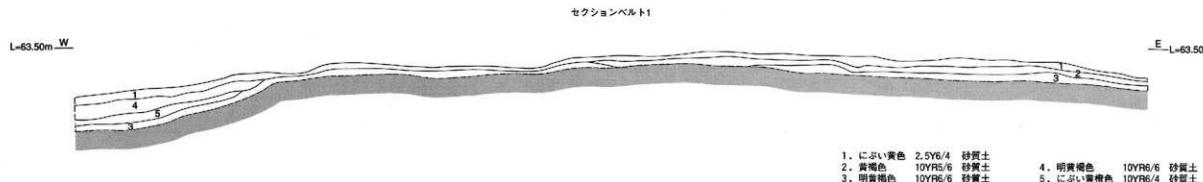
遺物点数は、9,300点、28ℓコンテナで55箱の出土量であった。本遺跡における出土遺物の大半は包含層および段状遺構から出土したものが大半を占める。急峻な傾斜地のためか、出土土器は、小片で摩滅が激しく、調整の判別するものは少ないゆえ、器種等の認定に誤りがあった場合は御容赦されたい。最終的に報告書に掲載したのは、土器94点・石器250点であった。

## 弥生時代

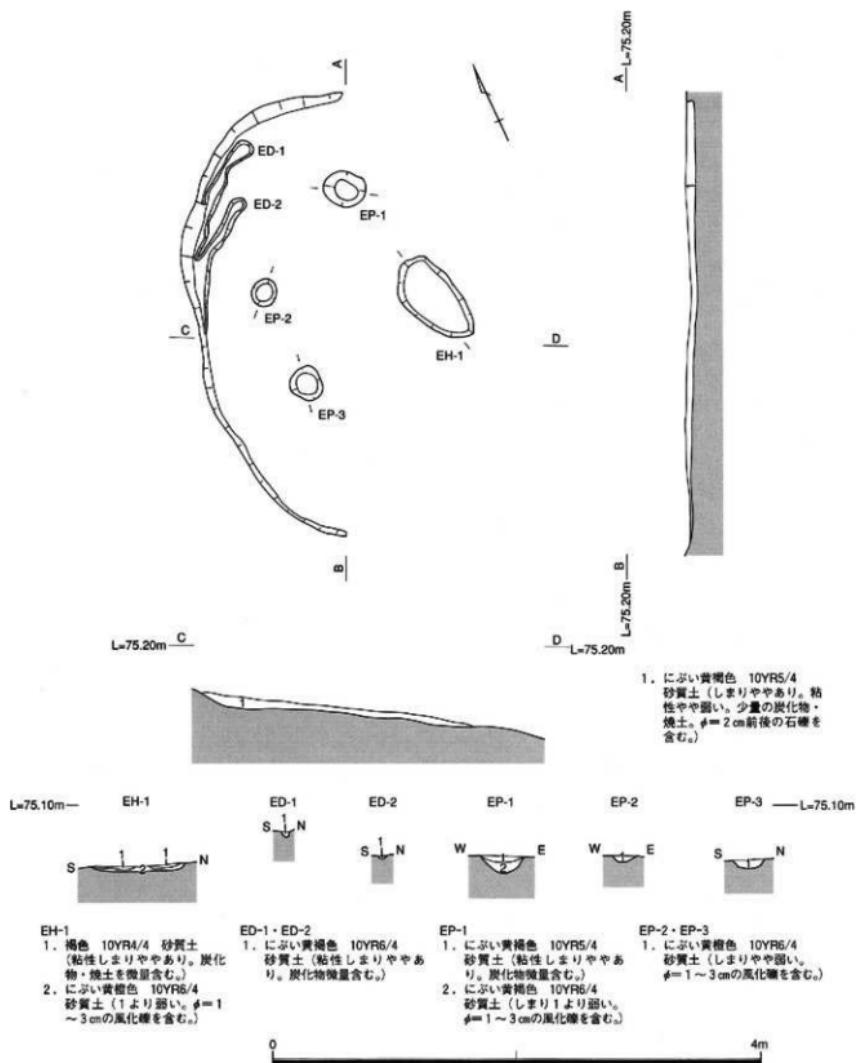
### 竪穴住居跡(SB) (第2図)

本遺跡で出土した竪穴住居跡は、計11軒である。尾根頂部あるいは斜面地形コンターラインに沿うように構築されている。主柱は6本が主体となるが、全容が分かるものは少ない。山頂部の平坦面には確認されていない。住居内の遺物の出土量が少なく、各住居とも單一時期であることから、集落の存続期間が短期であったことが確認される。当初、竪穴住居跡としたものは13軒であったが、その後の検討で、竪穴住居跡とした中には平面プランが曖昧なものもあり、必ずしも竪穴住居跡と断定し難いものがあったのも否めない事実である。最終的に住居施設として評価し得るものは11軒であると結論付けた。時期的には出土遺物等から弥生時代中期末~後期初頭と考えられる。

調査区の制限のため確認することはできなかったが、遺跡の位置する尾根の北側の東・西斜面上に竪穴住居群が展開している可能性がある。



第4図 トレンチ土層断面図



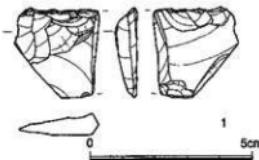
第5図 SB1001平・断面図

#### SB1001（1号竪穴住居跡）（第5図）

調査区北部、Q-16グリッド、標高75.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。南側部分は一部消失しており、断面形はL字状を呈する。平面プランは隅丸長方形状を呈する。残存状態は比較的良好である。規模は現存長で長軸3.72m、短軸2.22m、最大深度は9cmを測る。主柱穴は6本と思われ、中央部には炉跡も確認された。周壁溝も部分的に検出されている。

#### 出土遺物（第6図）

出土遺物は少ない。弥生土器片もわずかに出土したが、いずれも細片のため実測可能なものはなかった。1はサヌカイトの楔形石器である。炉跡より出土しているが、被熱はしていない。



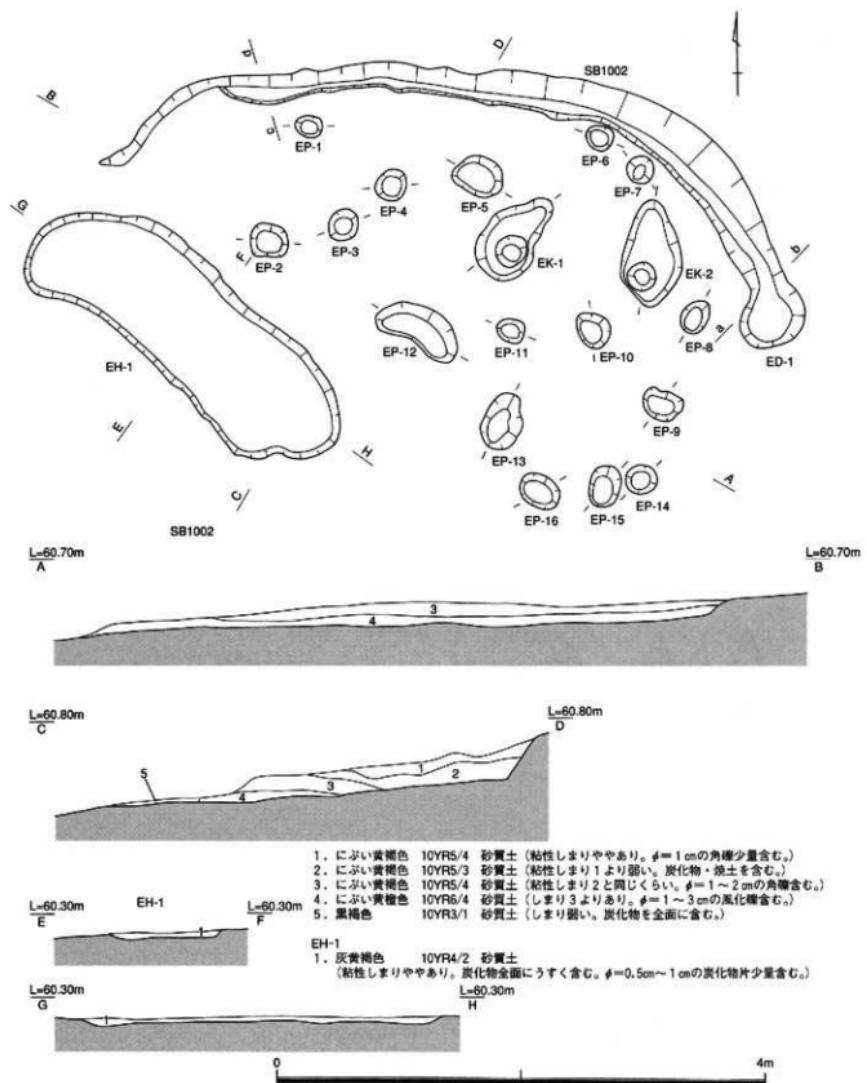
第6図 SB1001出土遺物

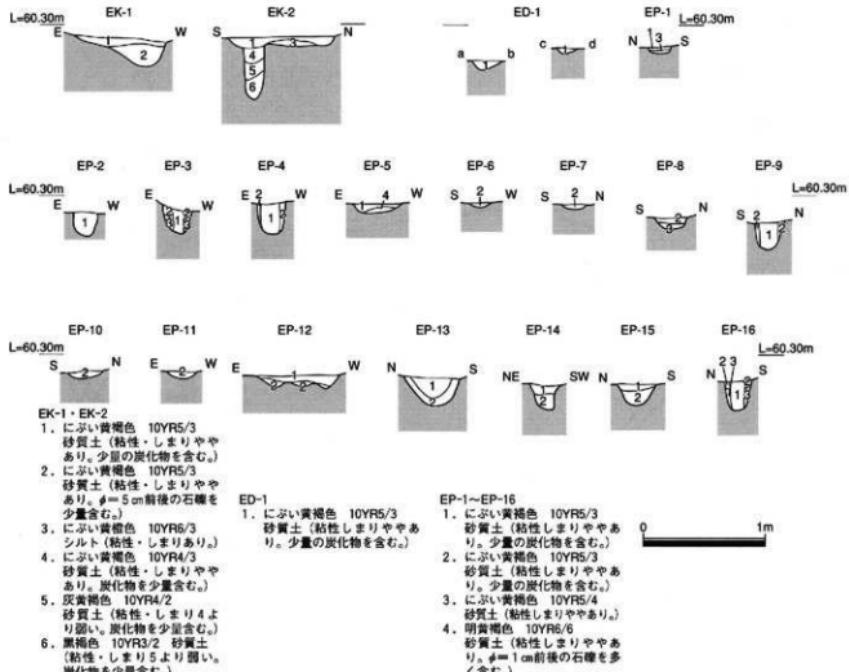
#### SB1002（2号竪穴住居跡）（第7・8図）

調査区中央部、G・H-5・6グリッド、標高61.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。直径5.0m前後の円形であったと思われるが、西側部分は一部消失しており、半円形の平面プランをとどめる。規模は現存長で長軸5.32m、短軸3.46m、最大深度は28cmを測り、断面形はL字状を呈する。主柱穴は6本と思われる。周壁溝は南側で不明瞭になっている。不明瞭ではあるが、西側で炉跡と思われる炭化物の拡がりが確認された。

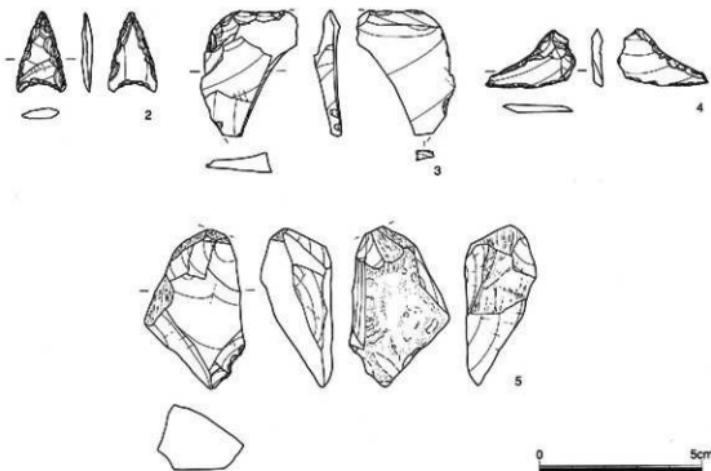
#### 出土遺物（第9図）

弥生土器片もわずかに出土したが、いずれも細片のため実測可能なものはない。2は床面直上より出土したサヌカイトの石錐である。3は石核、4は使用痕のある剥片、5は剥片である。石材はいずれもサヌカイトである。

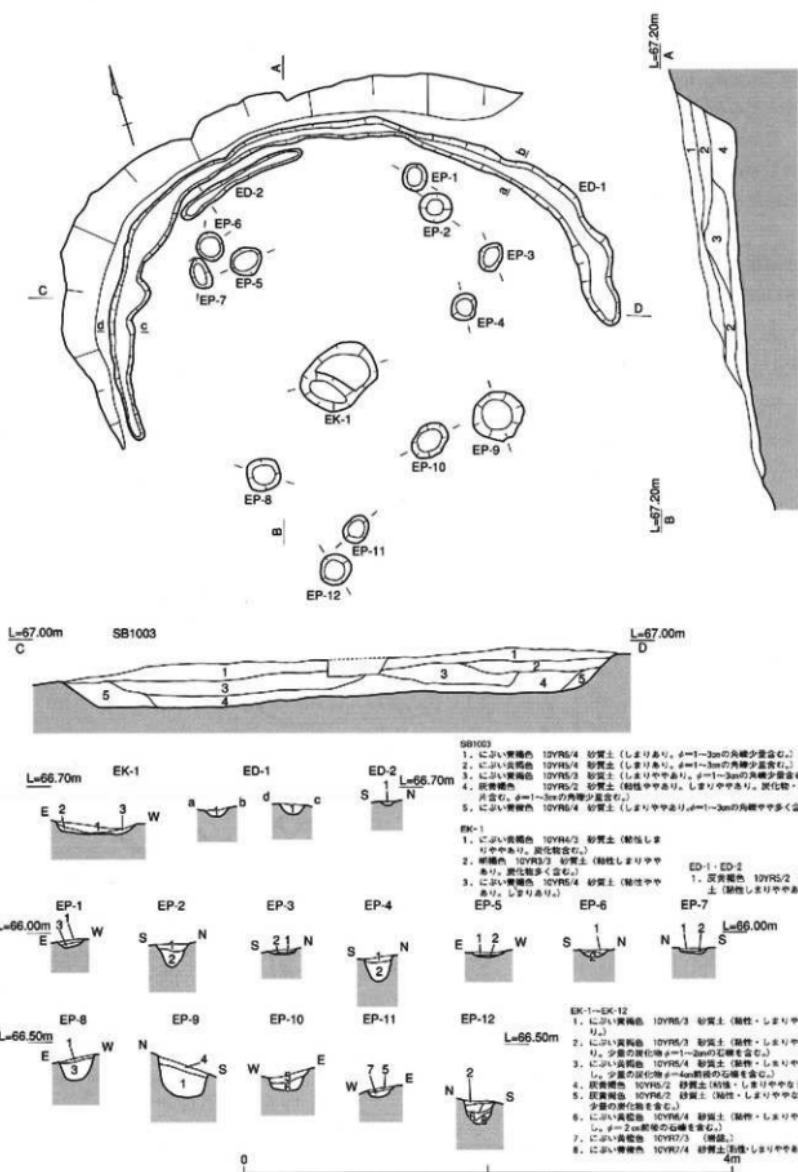




第8図 SB1002-EK・ED・EP断面図



第9図 SB1002出土遺物



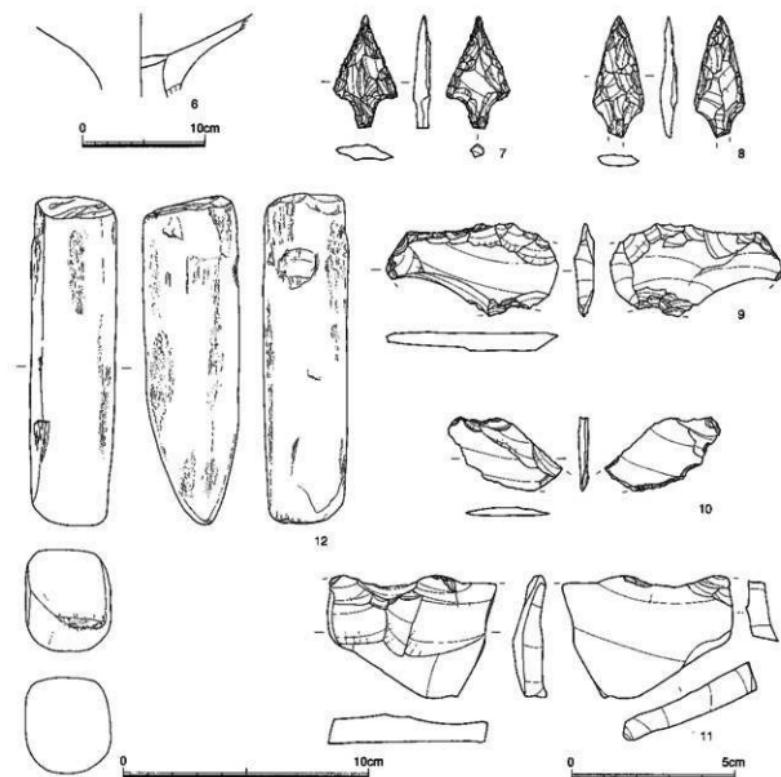
第10図 SB1003平・断面図

SB1003（3号竪穴住居跡）（第10図）

調査区北部、K-6・7グリッド、標高67.00m前後の南東向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5.0mの円形であったと思われるが、南側約2/3が消失しており、全体は不明である。周壁溝は検出されている。規模は現存長で直径4.55m、短軸3.52m、最大深度は42cmを測る。断面形はL字状を呈する。床面検出の柱穴は不安定であるが、主柱穴は8本になると思われる。明瞭な炉跡は確認されていない。

出土遺物（第11図）

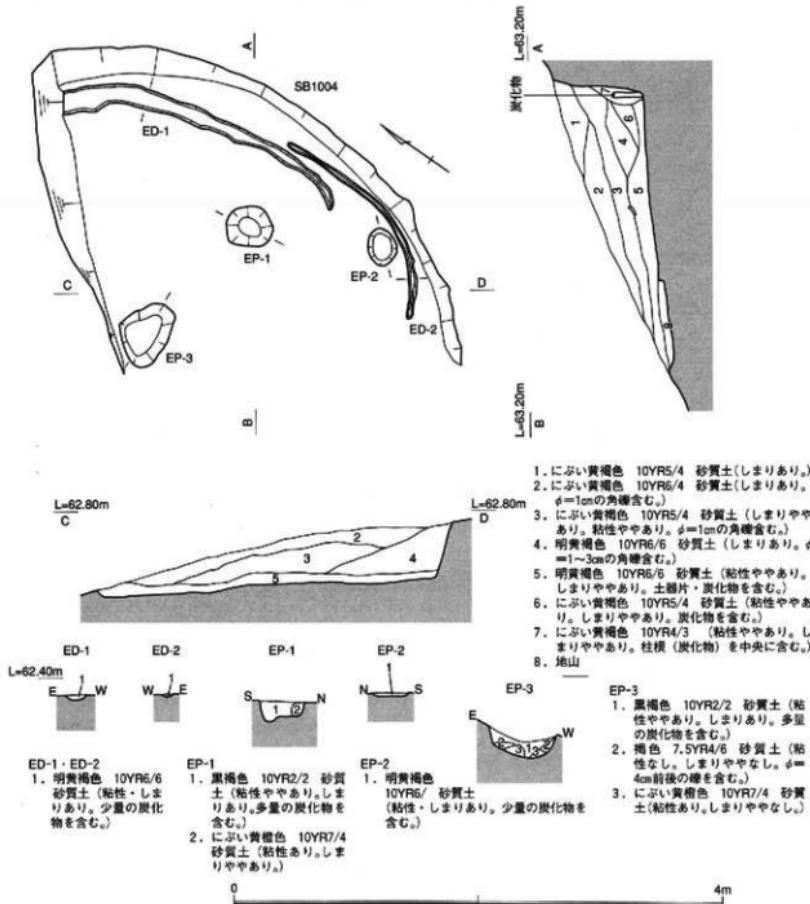
6は周壁溝より出土した高杯の杯部である。7・8は石鏃である。9は楔形石器、10・11は剥片である。7～11はサヌカイトを石材とする。12は柱状片刃石斧で石材は片岩を用いる。



第11図 SB1003出土遺物

SB1004 (4号竪穴住居跡) (第12図)

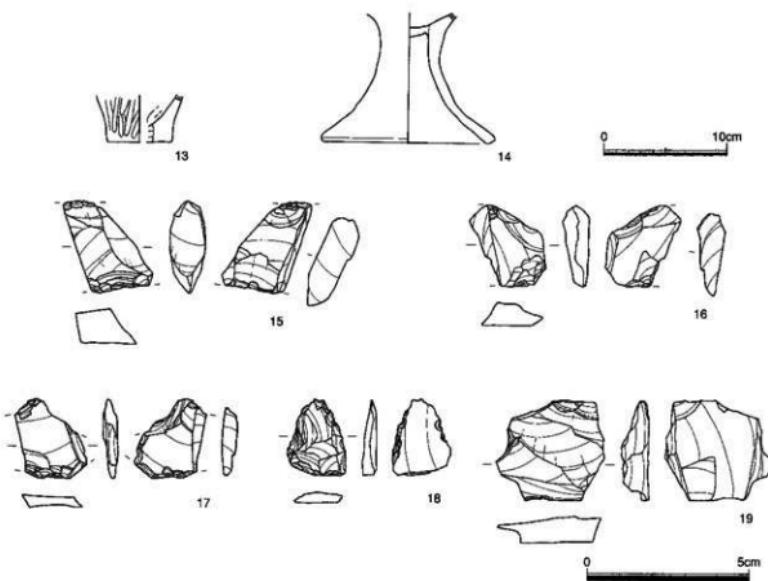
調査区北部、L-3・4グリッド、標高63.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5.0mの円形であったと思われるが、南側約2/3が消失しており、全体は不明である。周壁溝は検出されている。規模は現存長で直径2.77m、短軸2.62m、最大深度は69cmを測る。断面形はL字状を呈する。床面検出の柱穴は明瞭でなく、主柱穴は不明である。炉跡は不明である。



第12図 SB1004平・断面図

出土遺物（第13図）

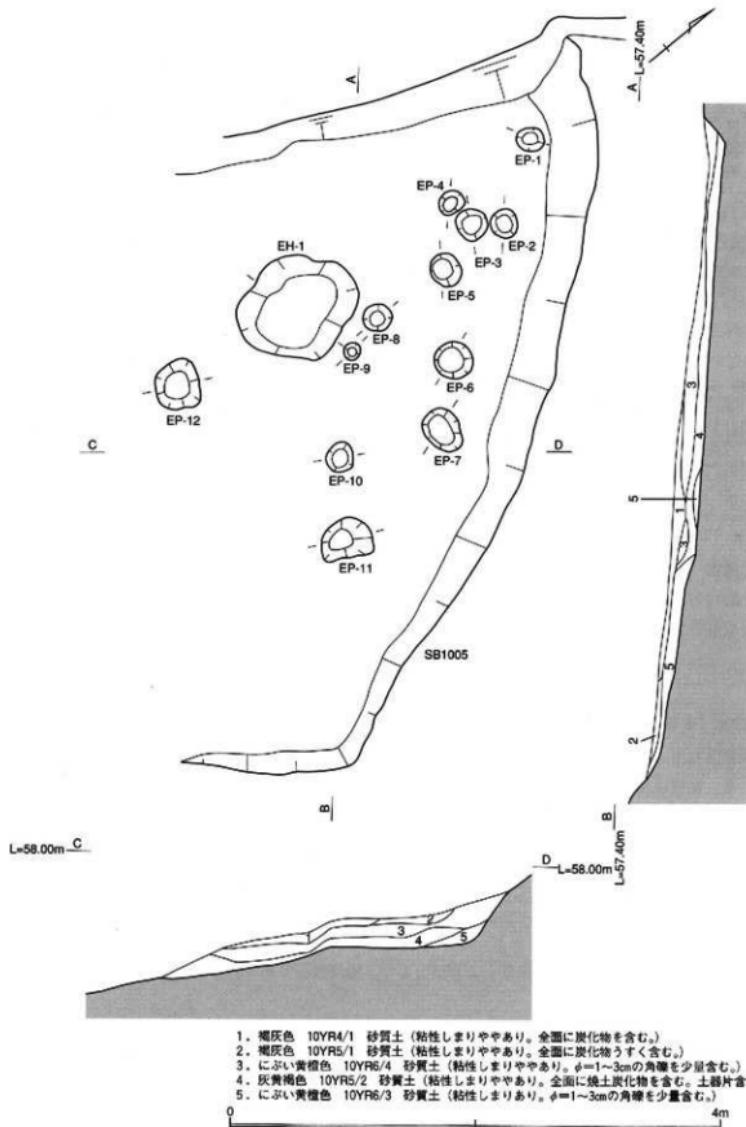
13は甕底部と思われる。14は高杯脚部である。摩滅が著しく調整は不明である。15～17・19は楔形石器、18は石錐である。いずれもサスカイトを用いる。



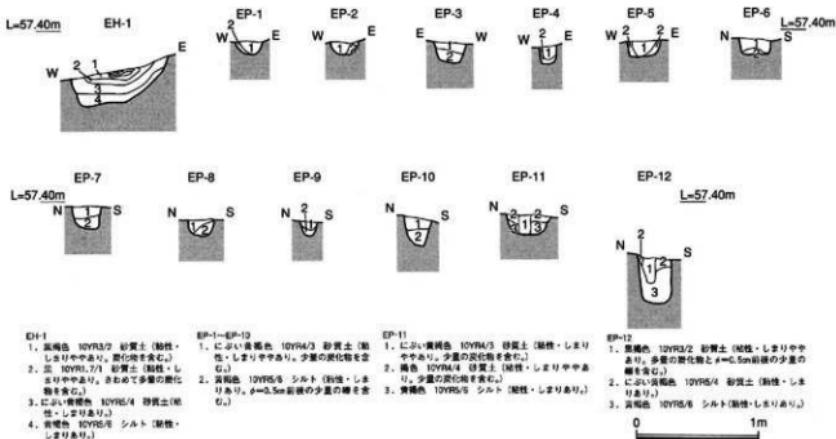
第13図 SB1004出土遺物

SB1005（5号竪穴住居跡）（第14・15図）

調査区北部、I・J-2・3グリッド、標高58.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、長軸5.62m、短軸3.31mの隅丸長方形の平面プランを呈する。西側が一部分消失しているが、比較的残存状態は良好である。最大深度は27cmを測る。床面検出の柱穴は5本確認されており、主柱穴は6本であると思われる。炉跡は確認されたが、周壁溝は検出されていない。



第14図 SB1005平・断面図



第15図 SB1005-EH・EP 断面図

#### 出土遺物（第16図）

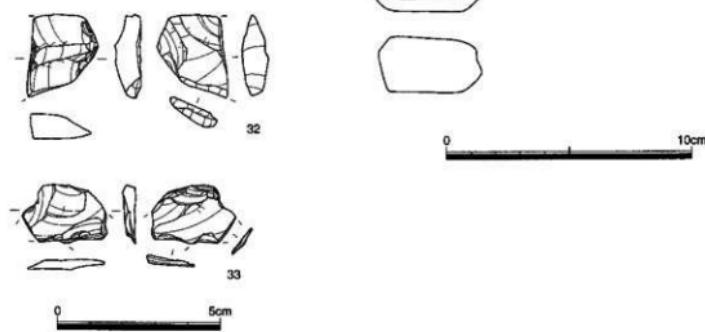
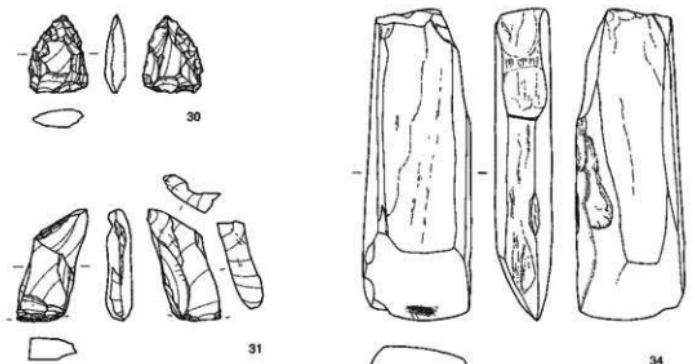
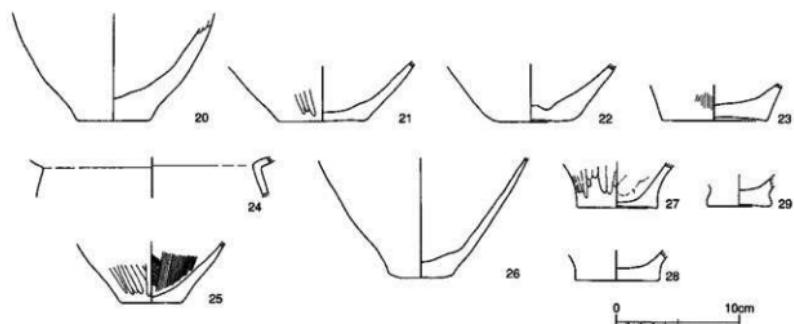
20～23は壺と思われる。いずれも底部であり、器形の全容は不明である。24～29は壺で24は口縁部、25～29は底部である。いずれも小片のため詳細は不明である。30は石鏃、31・32は楔形石器、33は剥片である。いずれもサスカイトを石材とする。34は扁平片刃石斧である。石材は片岩を用いる。

#### SB1006（6号竪穴住居跡）（第17・18図）

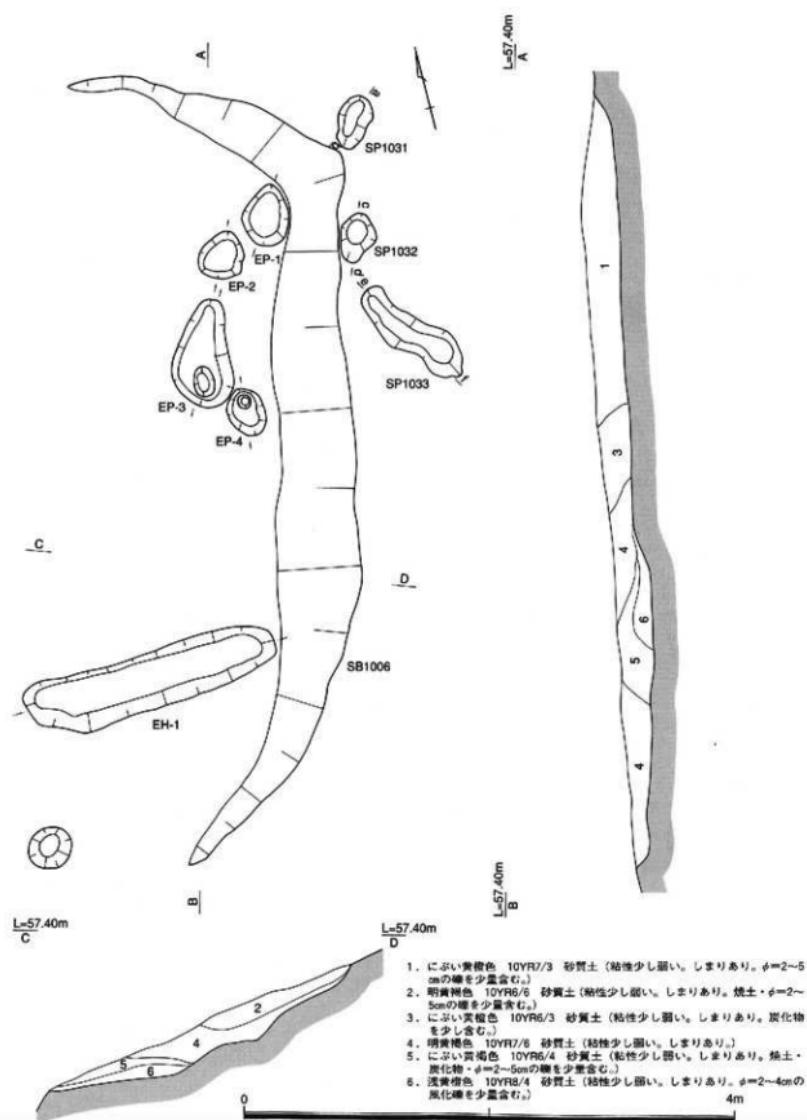
調査区北部、F～H-3グリッド、標高57.00m前後の南北向きの斜面上に位置し、南側約1/2が消失している。規模は現存長で長軸6.46m、短軸2.56mの隅丸長方形の平面プランを呈する。最大深度は22cmで、直径5.0m前後の円形を呈していたものと思われる。床面検出の柱穴は4本確認されている。柱穴間の判明するものはないが、竪穴住居跡の規模から類推すると主柱穴は6本であると思われる。炉跡と思われる炭化物・焼土の括がりを確認した。周壁溝は検出されていない。

#### 出土遺物（第19図）

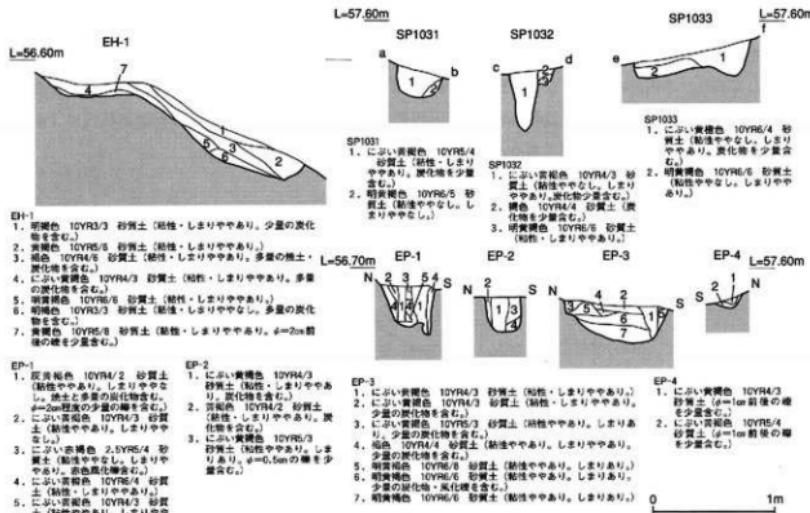
35は壺の底部と思われる。床面直上より出土した。36は台石である。砂岩の亜角礫を用いる。



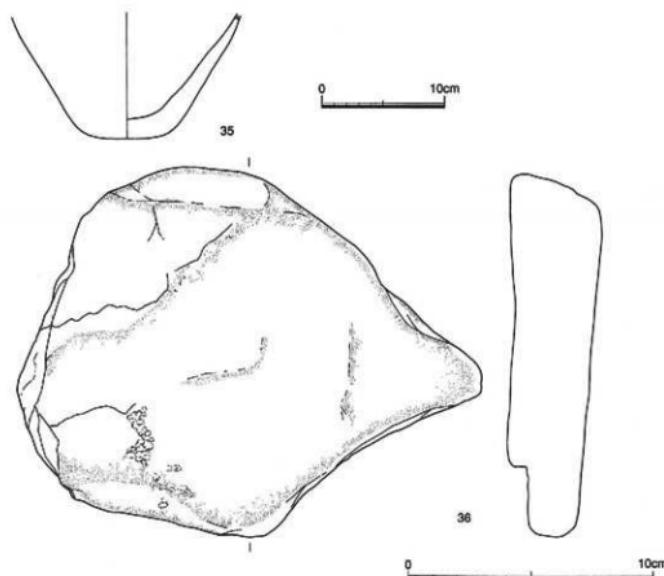
第16図 SB1005出土遺物



第17図 SB1006平・断面図およびSP1031～1033平面図



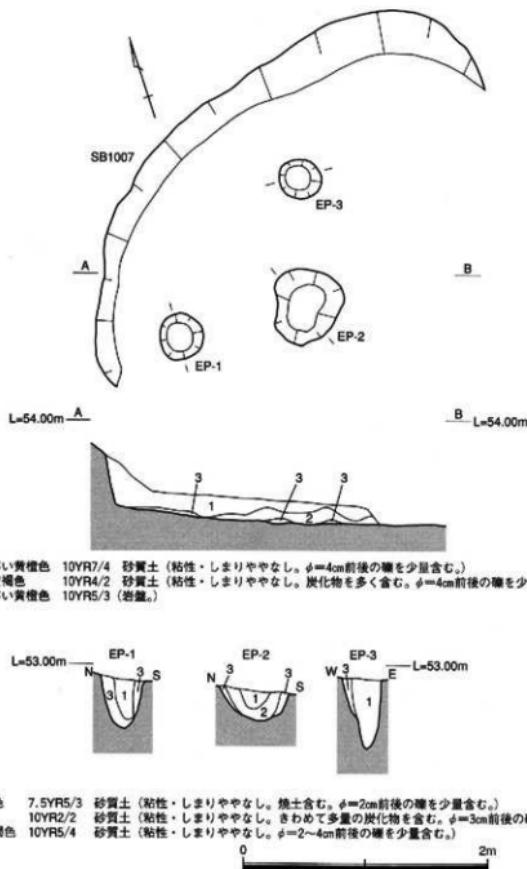
第18図 SB1006-EH・EP および SP1031～1033断面図



第19図 SB1006出土遺物

SB1007 (7号竪穴住居跡) (第20図)

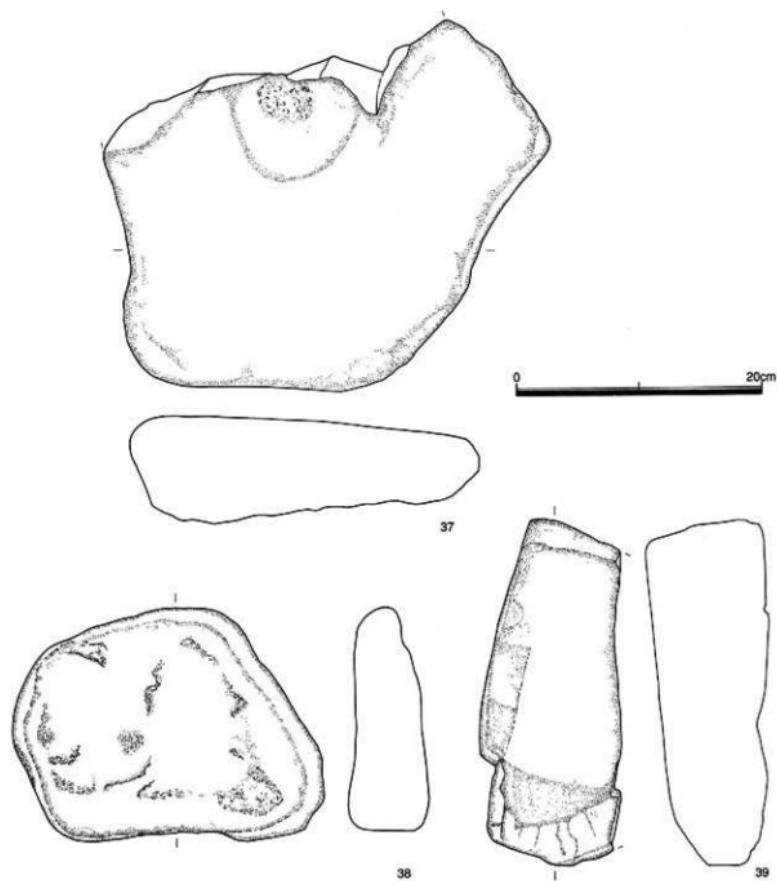
調査区北部、B・C-6・7グリッド、標高54.00m 前後の南西向きの斜面上に位置する。南側約1/2が消失しており、半円形の平面プランを呈し、断面形はL字状である。規模は現存長で長軸3.88m、短軸2.75m、最大深度は42cmで、直径4.0m 前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は3本確認されているが、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。



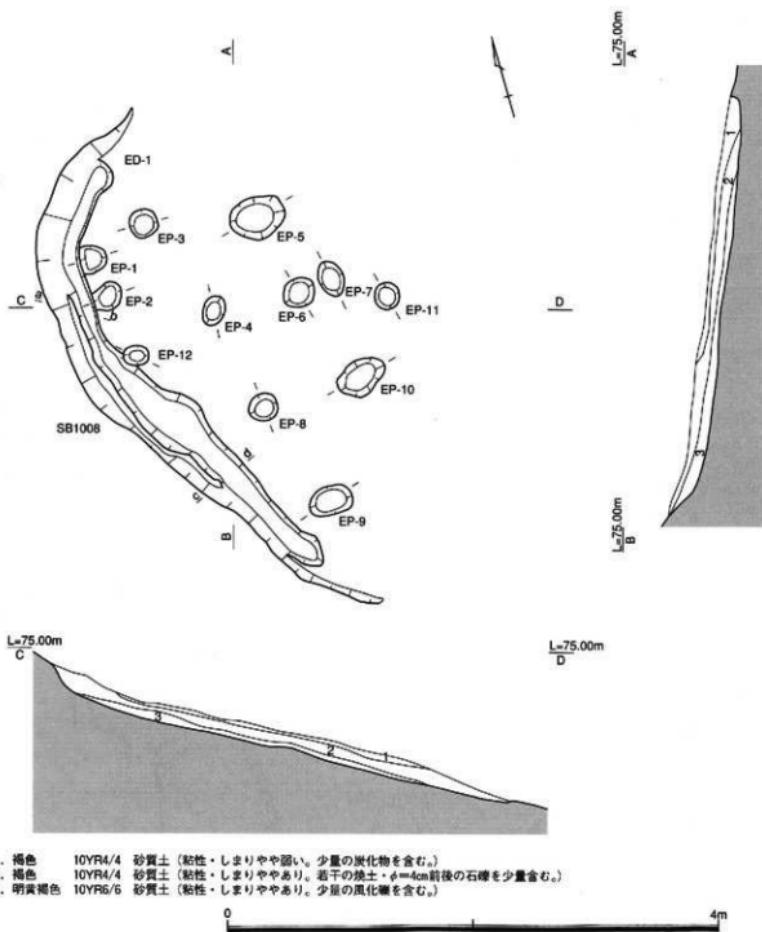
第20図 SB1007平・断面図

出土遺物（第21図）

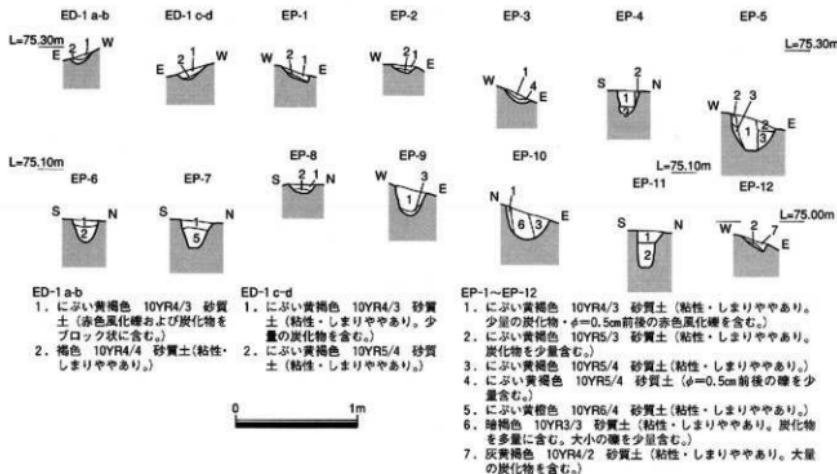
砥石と台石が出土している。37・38は台石、39は砥石である。石材は砂岩を用いる。



第21図 SB1007出土遺物



第22図 SB1008平・断面図



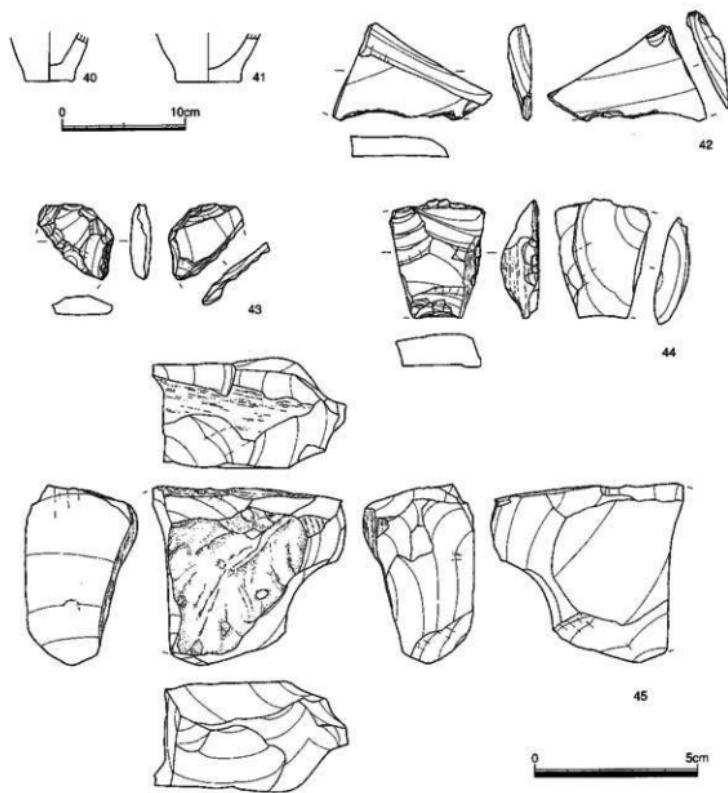
第23図 SB1008-ED・EP断面図

#### SB1008 (8号竪穴住居跡) (第22・23図)

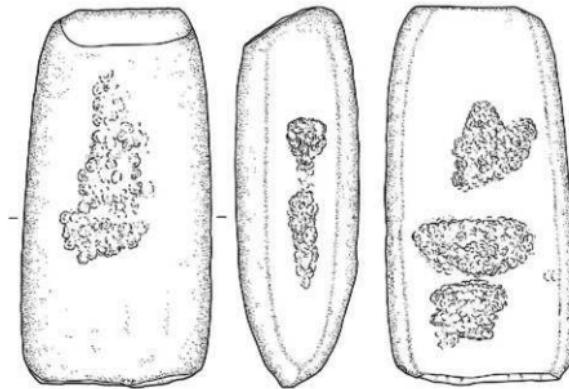
調査区中央部、S・T-15・16グリッド、標高75.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。コンタラインに沿うように検出され、段状を呈する。西側の大部分が消失しているものと思われ、全体は不明であるが、4.0m前後の円形を呈していたものと思われる。規模は現存長で長軸4.06m、短軸3.58m、最大深度は18cmで、隅丸長方形を呈する。平面的には複数の造構が切り合っているように見えるが、切り合いで確認することはできなかった。床面にはピットが数基出土しているが、不整列であり、主柱穴は不明である。炉跡は確認されていない。周壁溝は検出された。

#### 出土遺物 (第24・25図)

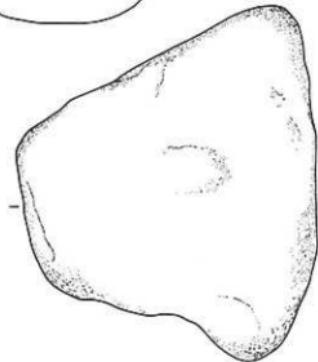
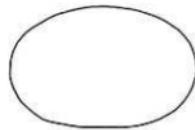
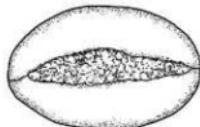
40は壺、41は甕である。いずれも小片であり、詳細は不明である。42は削器、43・44は楔形石器、45は石核で打面を転移しながら剥片を剥離している。46は太形蛤刃石斧で刃部の使用痕が顕著である。47は敲石で表裏面に敲打痕が見られる。石材は42～45はサスカイト、46は玄武岩、47は砂岩を使用している。



第24図 SB1008出土遺物 1



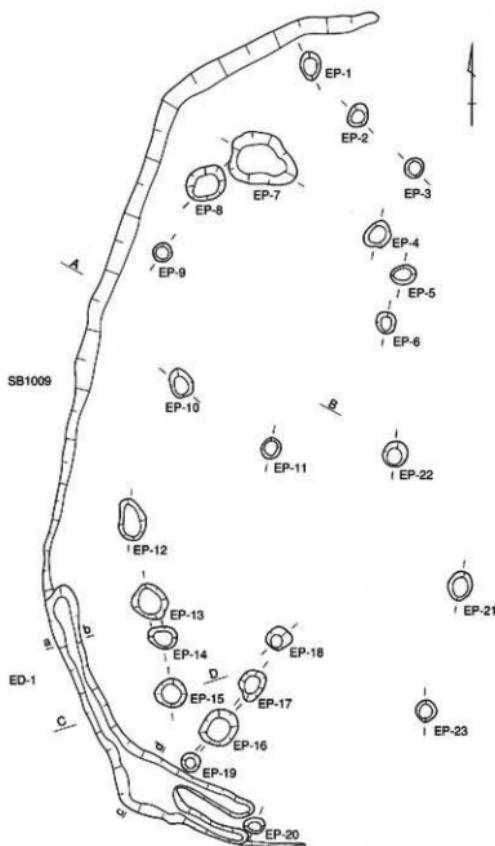
46



47



第25図 SB1008出土遺物 2



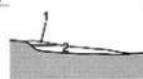
L=82.70m A



B

C

D L=82.70m

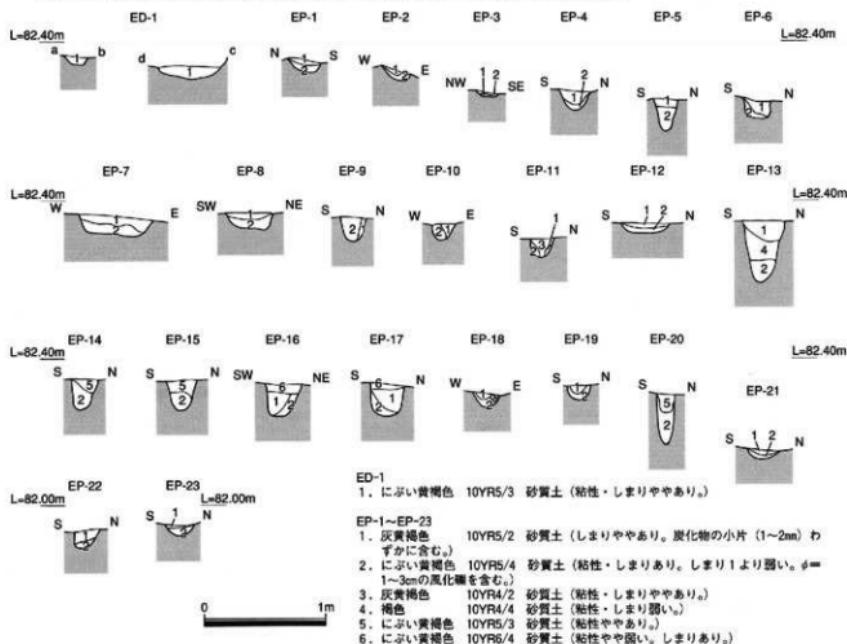


1. 灰青褐色 10YRS/2 砂質土 (粘性ややあり。しまりややあり。)
2. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (粘性。しまりよりあり。)
3. にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土 ( $\phi=3\text{--}10\text{cm}$ の風化塊を含む。)
4. 明黄褐色 10YR5/6 砂質土 ( $\phi=5\text{cm}$ ほどの風化塊を含む。)

第26図 SB1009平・断面図

### SB1009 (9号竪穴住居跡) (第26・27図)

調査区北部、U・V-12グリッド、標高82.00m 前後の南東向きの斜面上に位置する。西側部分は一部消失しており、隅丸の「コ」の字形の平面プランを呈する。残存状態は比較的良好である。規模は現存長で長軸6.77m、短軸1.86m、最大深度は27cmを測る。柱穴と思われるビットは3基検出され、主柱穴は6本と思われる。炉跡は検出されなかった。周壁溝は部分的に検出された。



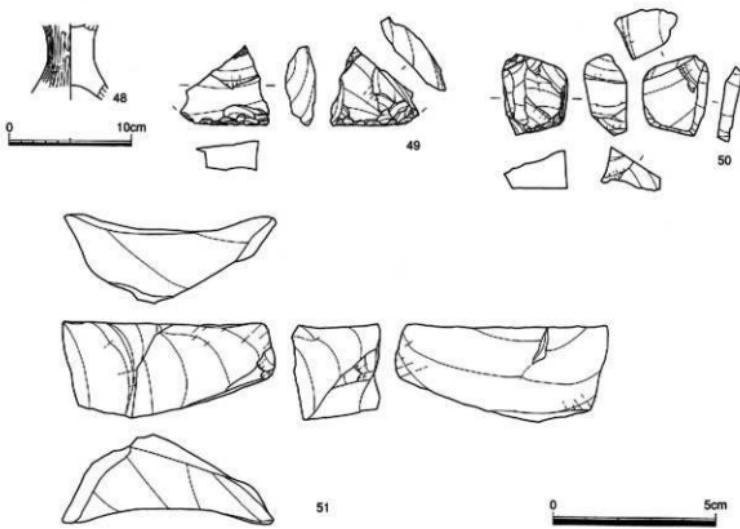
第27図 SB1009-ED・EP断面図

### 出土遺物 (第28図)

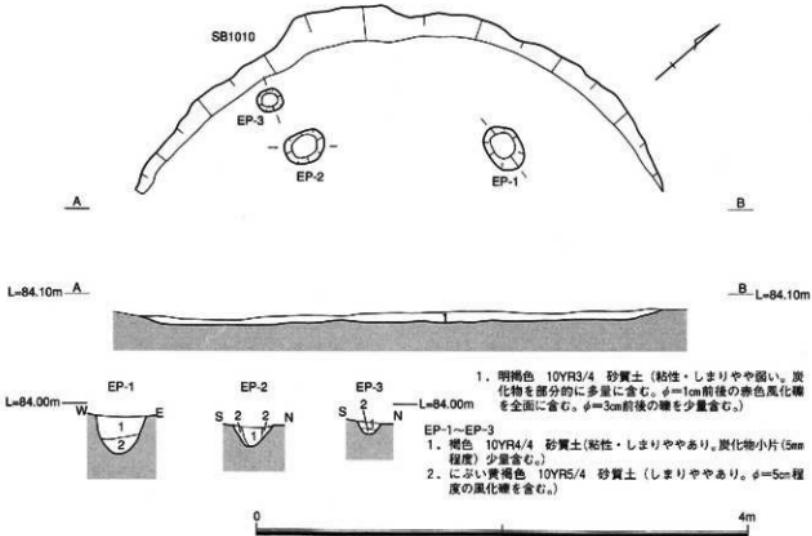
弥生土器片・石器が出土した。48は高杯脚部である。小片であり、全体は不明である。49・50は楔形石器、51は剥片で打面を転移しながら剥離されている。石核とも考えられる。石材は49~51はサヌカイトを使用している。

### SB1010 (10号竪穴住居跡) (第29図)

調査区南部、X-12グリッド、標高84.00m 前後の南向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランを呈する。南側約1/2が消失している。規模は現存長で長軸4.33m、短軸1.52m、最大深度は8 cmで、直径4.0 m 前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は2本確認されている。炉跡および周壁溝は検出されていない。



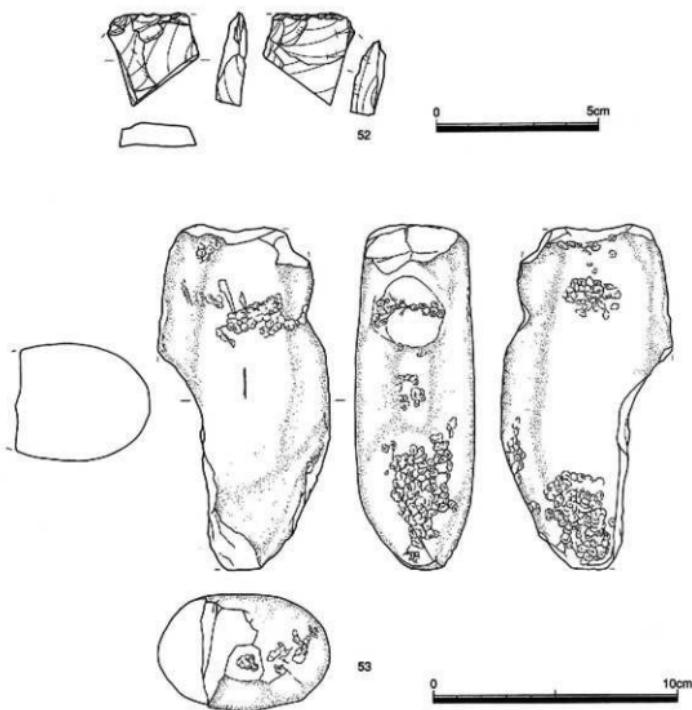
第28図 SB1009出土遺物



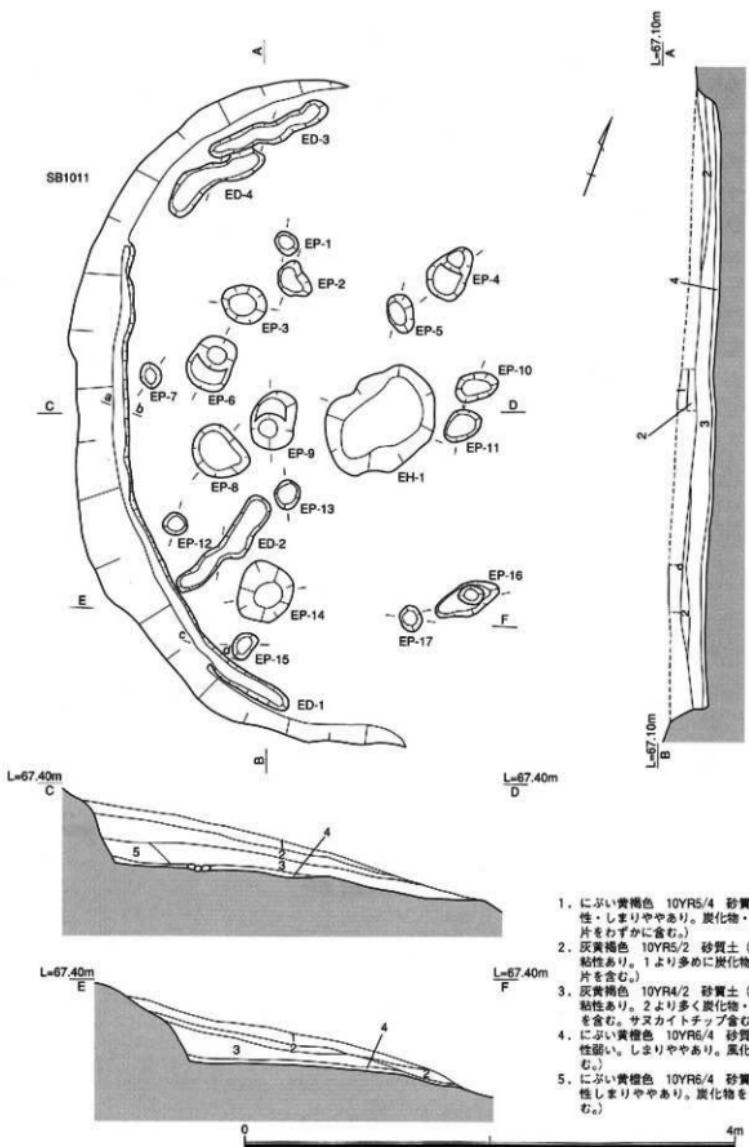
第29図 SB1010平・断面図

出土遺物（第30図）

52は楔形石器で石材はサスカイトである。53は太形蛤刃石斧で石材に玄武岩を使用している。弥生土器細片なども出土したが、実測可能な遺物はなかった。



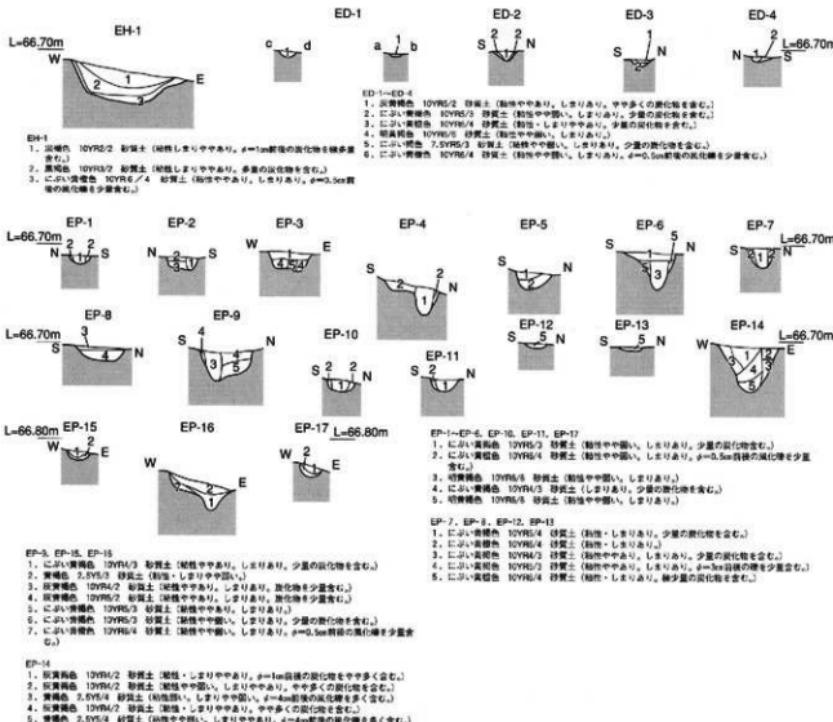
第30図 SB1010出土遺物



第31図 SB1011平・断面図

### SB1011 (11号竪穴住居跡) (第31・32図)

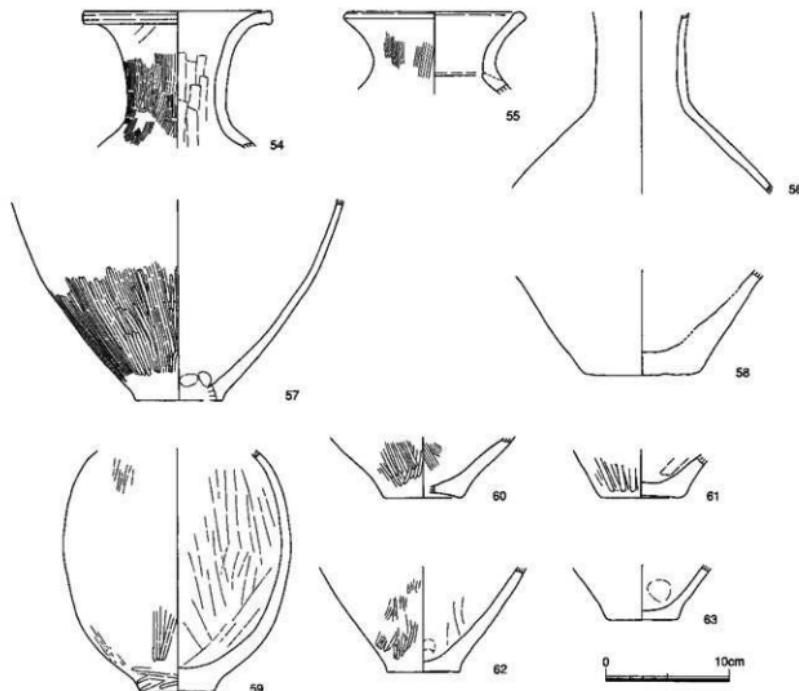
調査区南部、P・Q-19・20グリッド、遺構内埋土および床面からはサスカイトの剥片・碎片が多量に検出され、また石器などの製品をはじめ、敲石・石台など、石器製作に関係する一連の遺物が出土していることから、住居というよりも石器製作工房的な施設であったと考えられる遺構である。標高67.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。西側約1/2が消失しており、半円形の平面プランを呈する。規模は現存長で長軸5.46m、短軸3.54m、最大深度は46cmで、直径5.0mの円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は4本確認されているが、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝も検出されている。



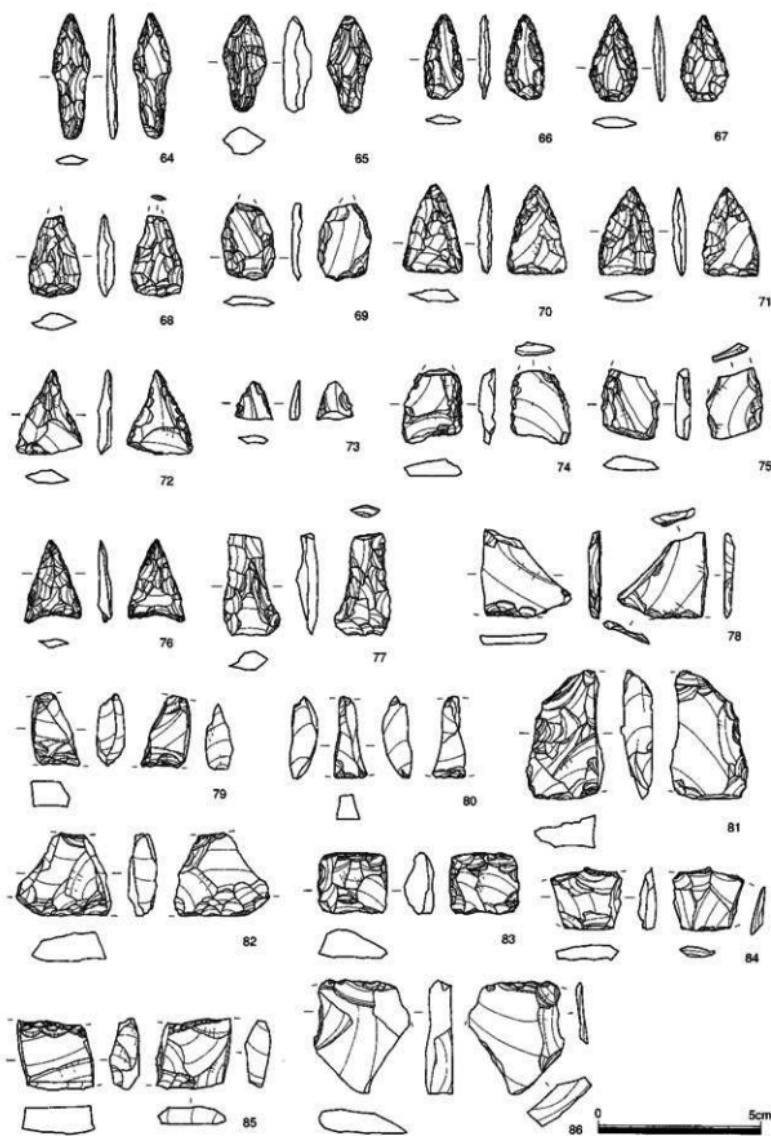
第32図 SB1011-EH・ED・EP 断面図

出土遺物（第33～37図）

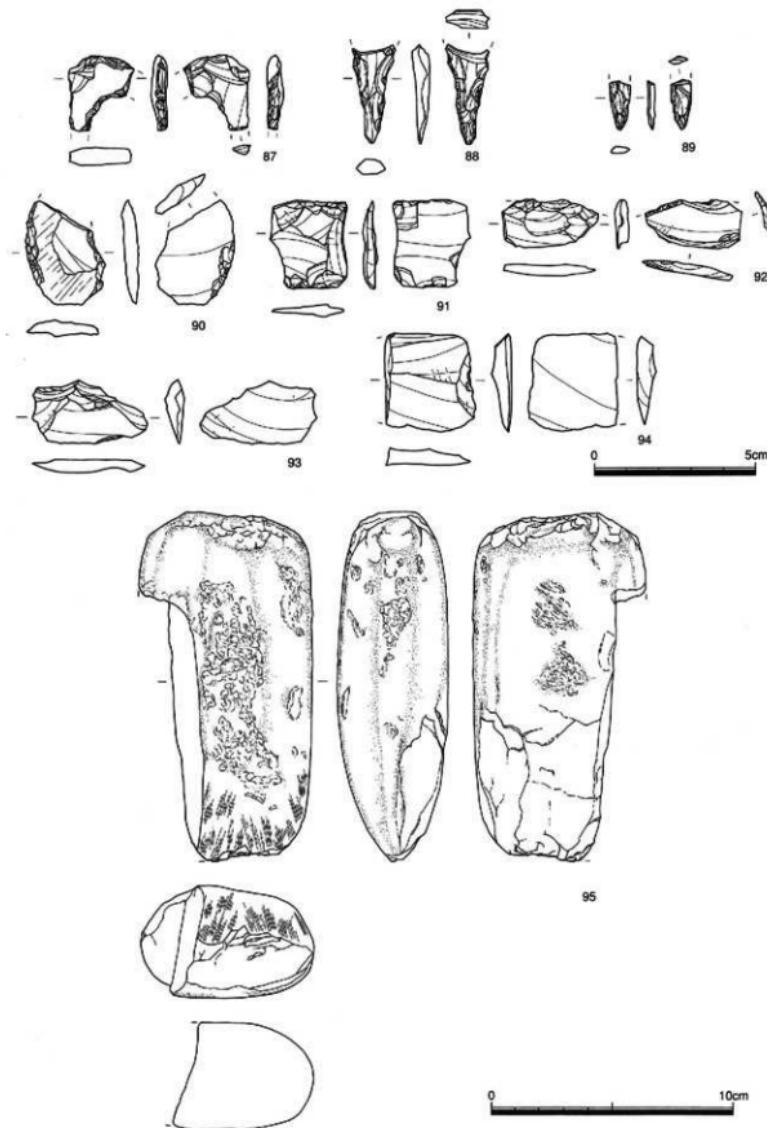
54～61は壺、62・63は甕と思われる。いずれも底部など小片が多いため、全体の判明するものは少ない。石器類は他の遺構に比べ、多く出土している。その多くはチップなどの碎片であるため、実測可能なものは36点である。量的に多いのは石鏃、楔形石器である。64～77は石鏃、78は削器、79～86は楔形石器、87～89は石錐、90は使用痕のある剥片、91～94は剥片である。石材はいずれもサヌカイトを用いている。95は太形蛤刃石斧で石材に玄武岩を使用している。96は扁平片刃石斧である。石材は片岩である。97は敲石、98は台石、99は砥石で共に砂岩を用いる。



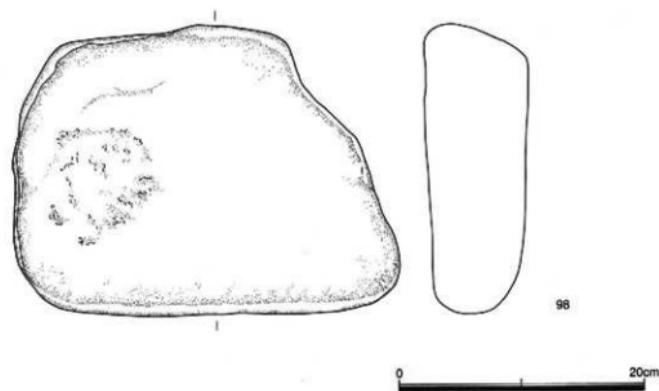
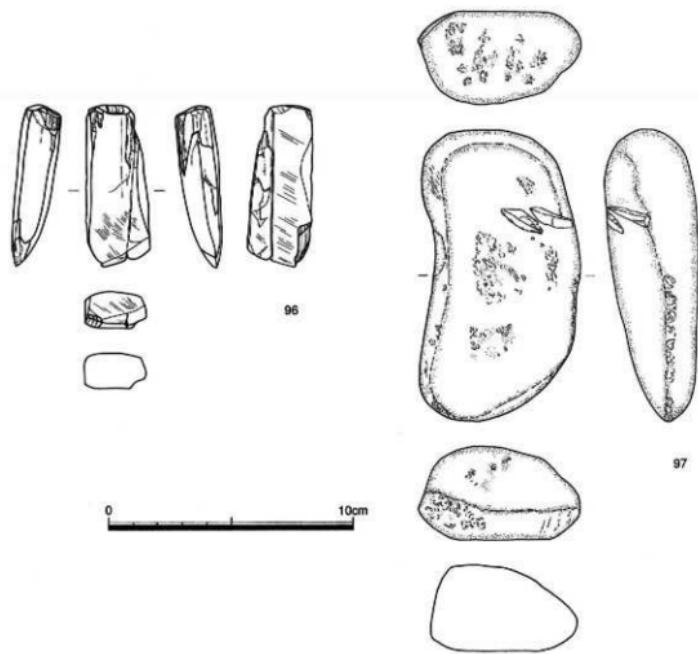
第33図 SB1011出土遺物 1



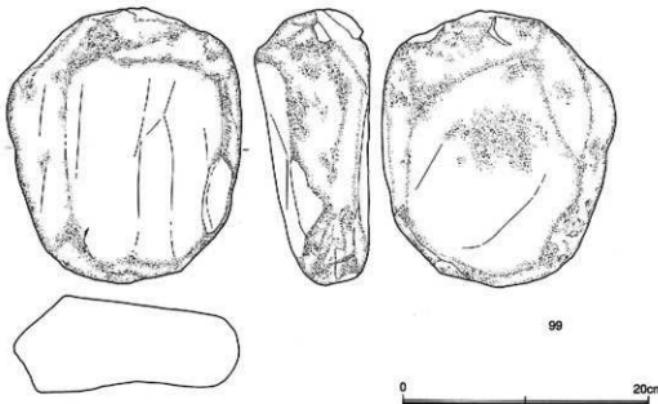
第34図 SB1011出土遺物 2



第35図 SB1011出土遺物 3



第36図 SB1011出土遺物 4



第37図 SB1011出土遺物 5

#### 段状遺構 (SD) (第2図)

本遺跡から出土した段状遺構 (SD) は東および西斜面上に形成されている。段状遺構は地形コンターラインに沿って、斜面を大規模に「L」字状にカットすることで平坦面を造りだすものである。段状遺構という呼称は、遺構の造成過程において与えられた名称であり、形態的な呼称である。ゆえに機能的部分について表現したものではない。

弥生時代の高地性集落で出土する段状遺構は、その形状や規模、および付帯施設等について多くのバリエーションを持っており、段状遺構という一遺構の中でも様々な機能的差異を持つと考えられる。近年においても様々な検討が成されているが、未だ機能的側面について不明な点が多いため、本遺跡についても機能的な部分について極力言及していない。

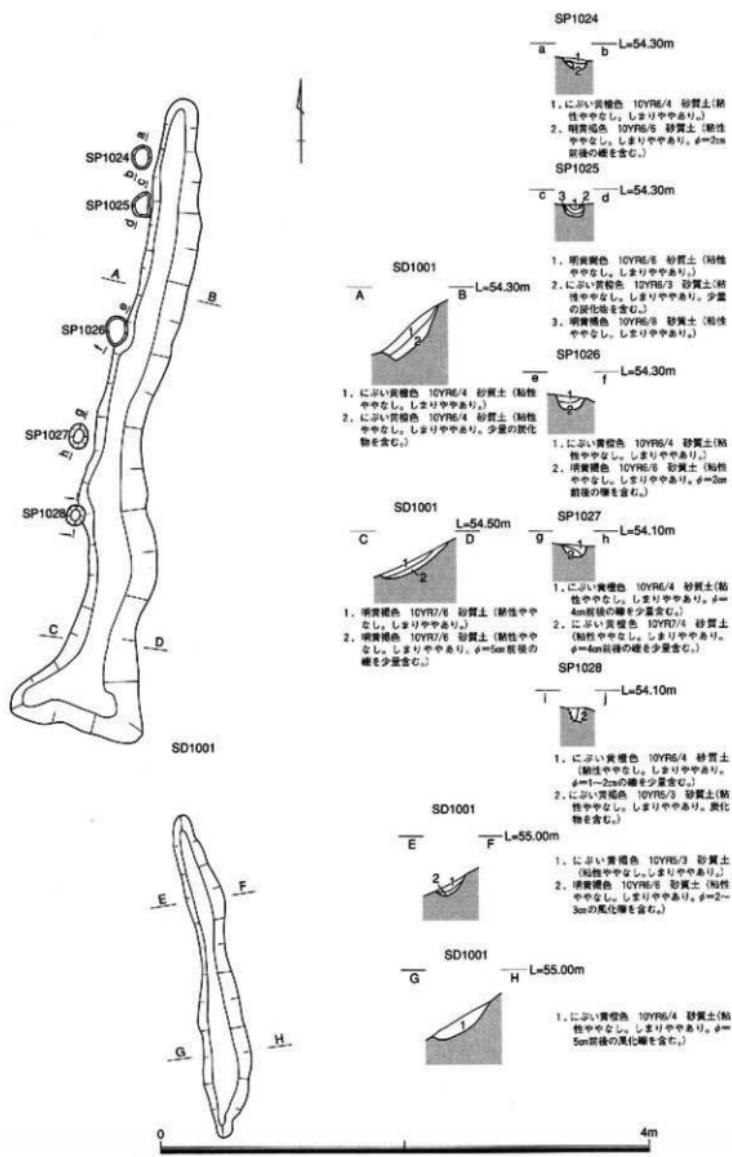
本遺跡では計11基の段状遺構が確認された。段状遺構内堆積土は地山上に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。平面の形態的には、全長5.0m前後の細長い不定形な形状をしたものが多く、また柱穴・周壁溝などを伴うものは少ない。段状遺構としたものの中で、柱穴を伴うものは、竪穴住居跡になる可能性も残す。

#### SD1001 (段状遺構 1) (第38図)

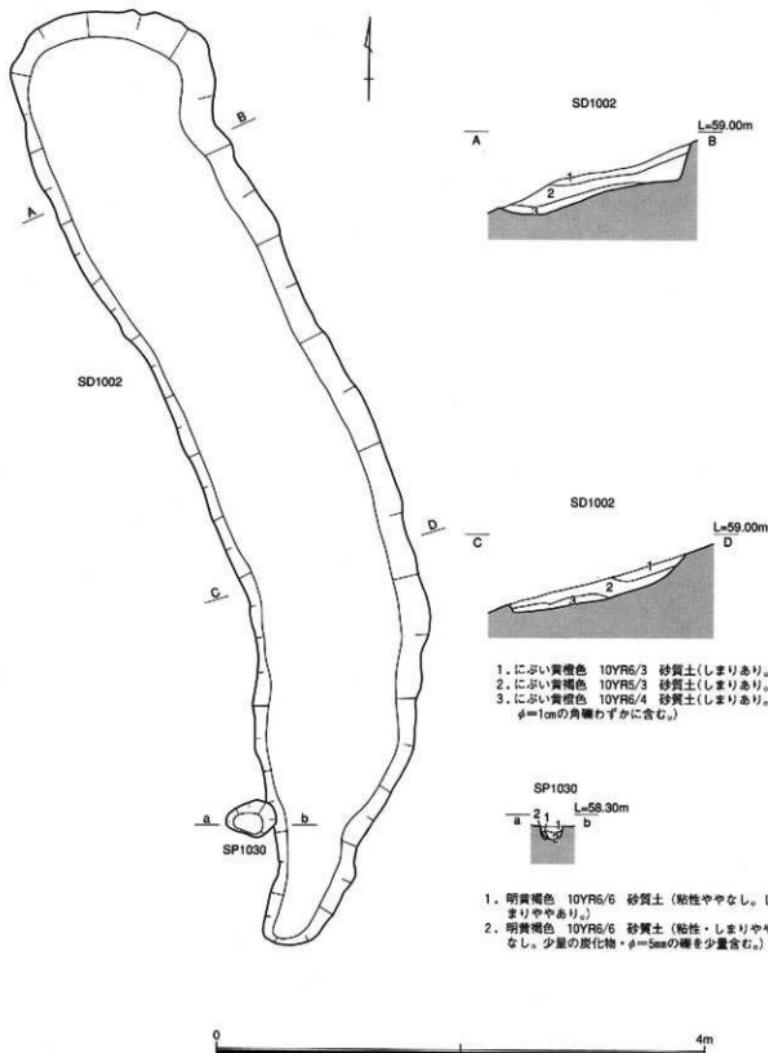
調査区南西部、G-2・3グリッド、標高54m前後の斜面上の地形コンターラインに沿って構築される。斜面を「L」字状にカットし、立ち上がりは確認できない。平面形状は細長い楕円形状(溝状)を呈する。また同一地形コンターラインに沿って、段状遺構に付帯すると思われる数基の柱穴が確認されている。段状遺構内堆積土は地山上に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

#### 出土遺物

弥生土器細片などが出土したが、実測可能な遺物はなかった。



第38図 SD1001およびSP1024~1028平・断面図



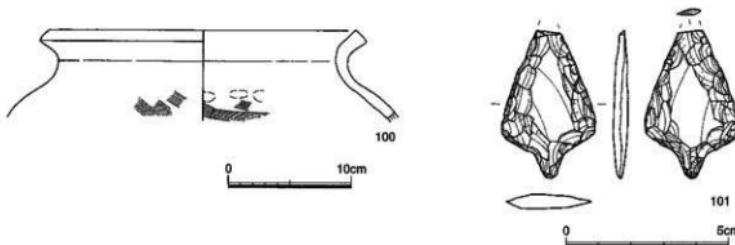
第39図 SD1002・SP1030平・断面図

#### SD1002（段状遺構2）（第39図）

H・I-4グリッド、調査区南西部、標高59.00m前後の斜面上に構築され、SB1006の上を地形コンターラインに沿って延びる。平面形状は細長い楕円形状を呈する。斜面を「L」字状にカットし、平坦面を造りだす。柱穴・周壁溝等の付帯施設は伴わない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

#### 出土遺物（第40・41図）

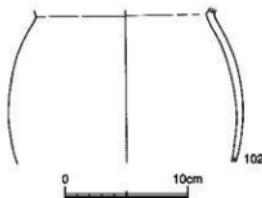
弥生土器小片、サヌカイトチップなどが出土したが、実測可能な遺物は2点のみであった。100は壺口縁部である。101はサヌカイトの石鎚で器長5cm程度の大形のものである。102はSD1002に付随すると思われる柱穴出土土器で壺体部である。



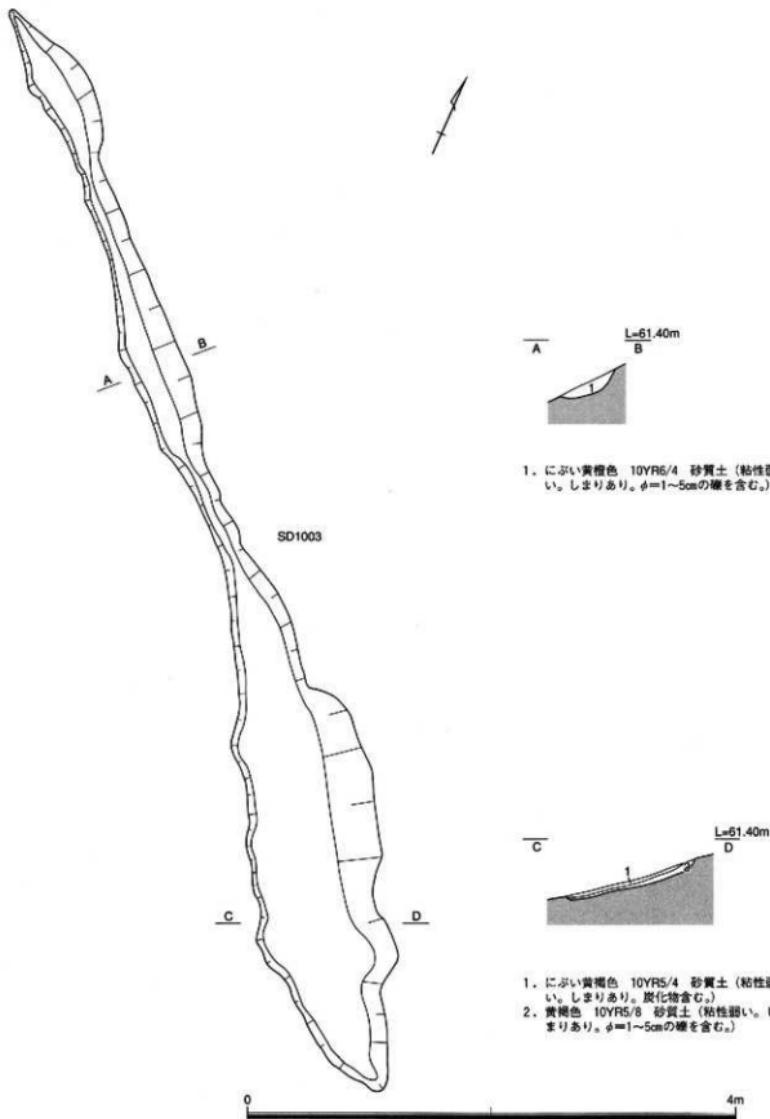
第40図 SD1002出土遺物

#### SD1003（段状遺構3）（第42図）

J・K-3・4グリッド、調査区南西部、SB1004の下を地形コンターラインに沿って延びる。標高61.00m前後の地点の斜面を「L」字状にカットして造りだし、平面形状は細長い不整形な楕円形状を呈する。柱穴・周壁溝等の付帯施設は伴わない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



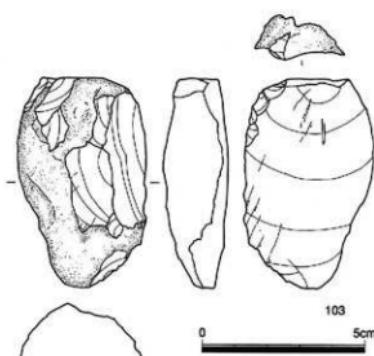
第42図 SD1003出土遺物



第42図 SD1003平・断面図

### 出土遺物（第43図）

弥生土器片などが出土したが、いずれも細片のため実測可能なものは少ない。103はサスカイト剥片で自然面を残す。



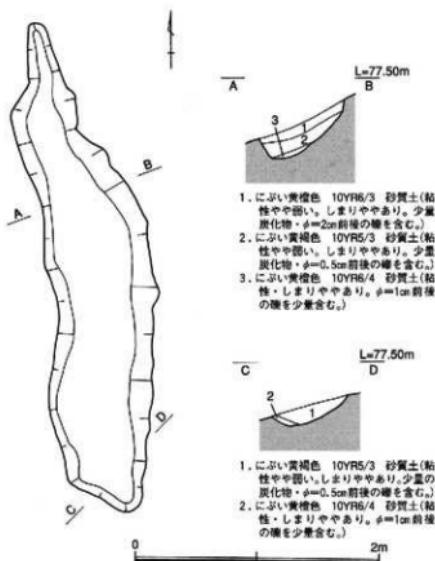
第43図 SD1003出土遺物

### SD1004（段状造構4）（第44図）

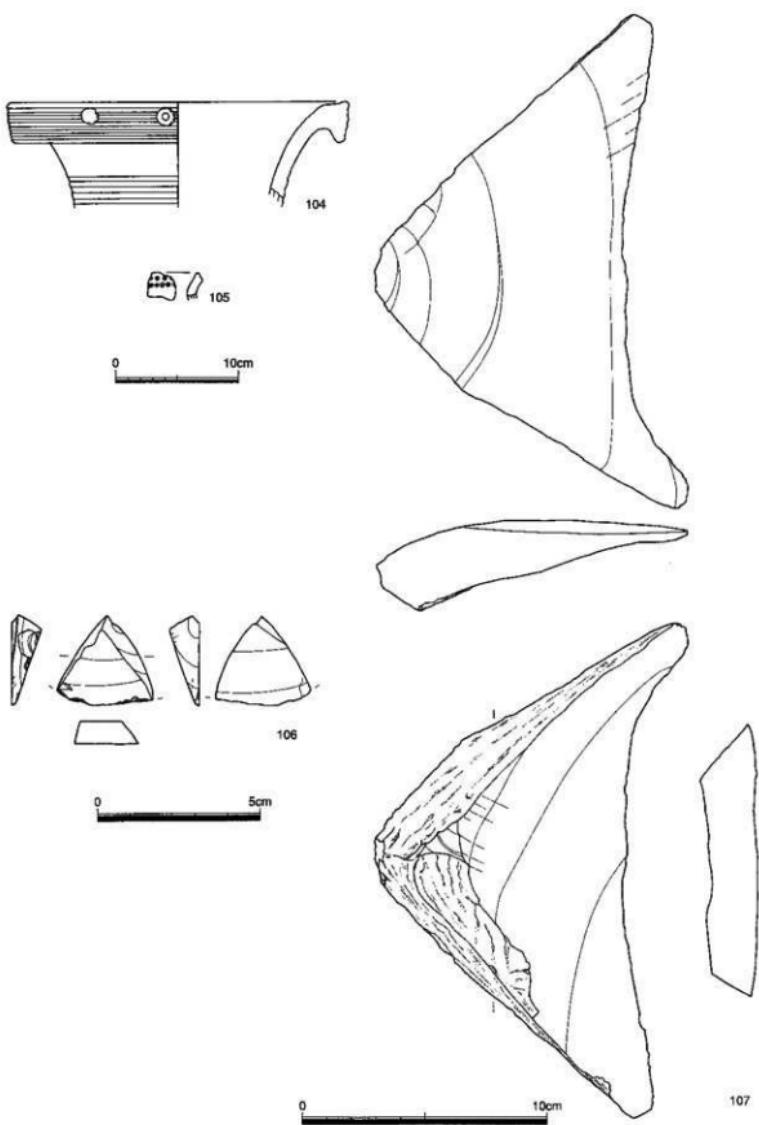
Q・R-9グリッド、調査区南西部、標高78.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い梢円形状を呈する。段状造構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

### 出土遺物（第45図）

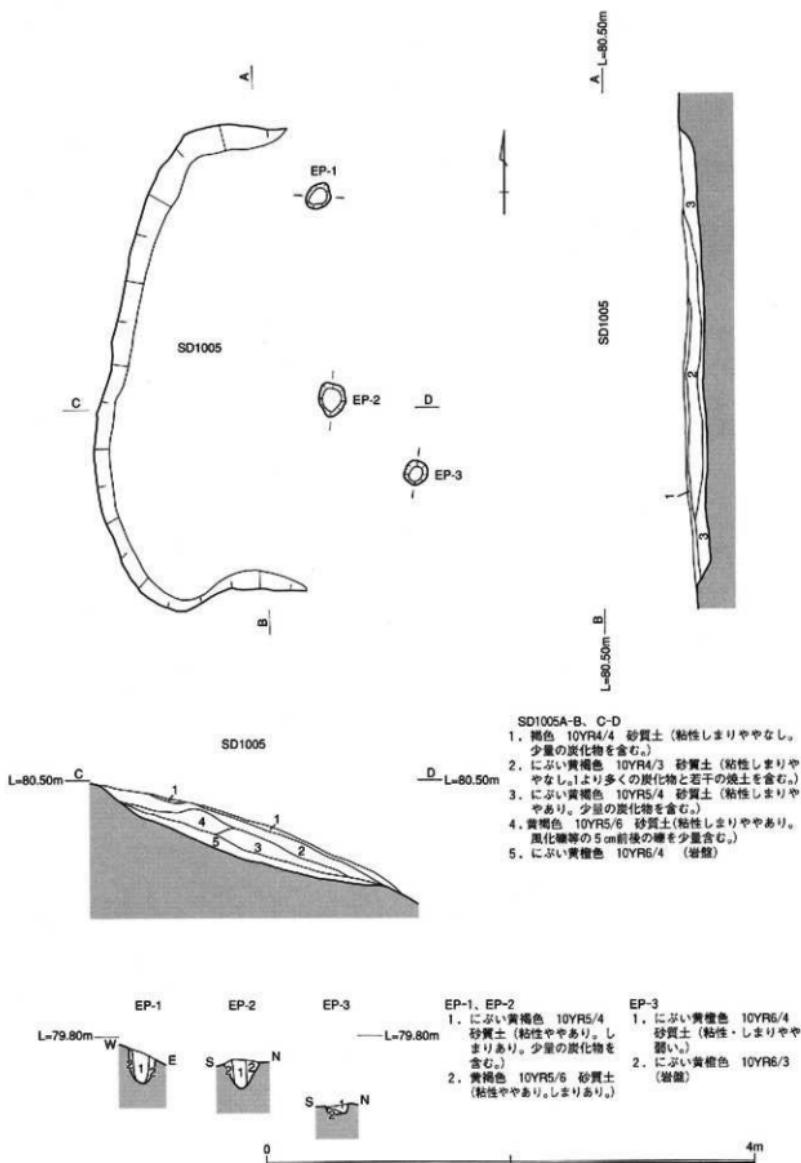
104・105は壺である。104は口縁端部外面に円形浮文、105は口縁端部内面に竹管文が装飾される。106は楔形石器、107は大形の剥片で自然面が残存する。石材はいずれもサスカイトである。



第44図 SD1004平・断面図



第45図 SD1004出土遺物



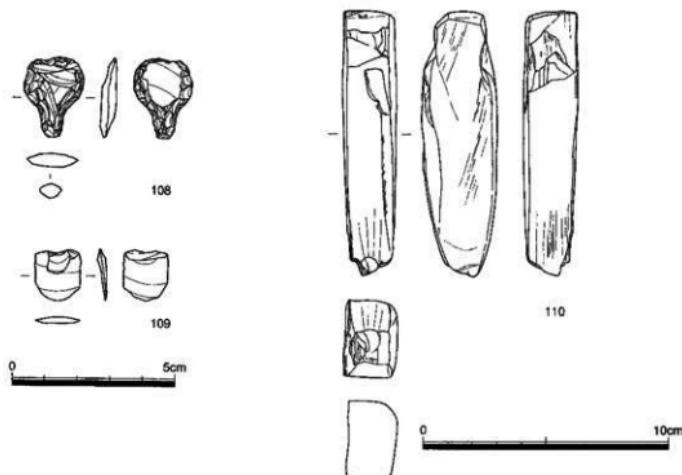
第46図 SD1005平・断面図

### SD1005（段状遺構5）（第46図）

U-13グリッド、調査区中央部、標高80.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだしている。平面形は隅丸長方形形状を呈する。残存状態は良くないが、柱穴が2基確認されており、堅穴住居跡の可能性を残す。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

### 出土遺物（第47図）

108は石錐、109は剥片である。石材はサスカイトである。110は片岩の柱状片刃石斧である。基部に弱い抉りがある。また刃部は使用によると思われる刃潰れがみられる。



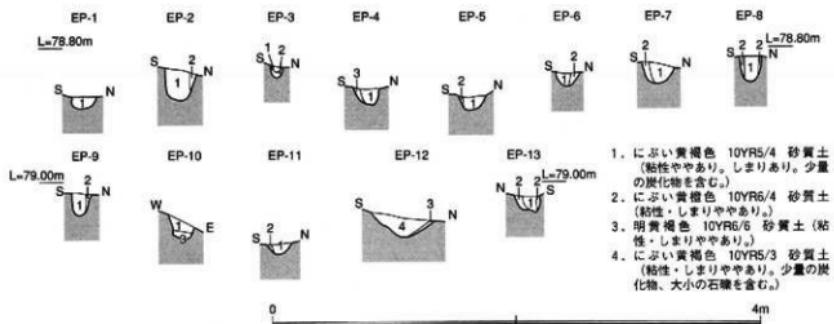
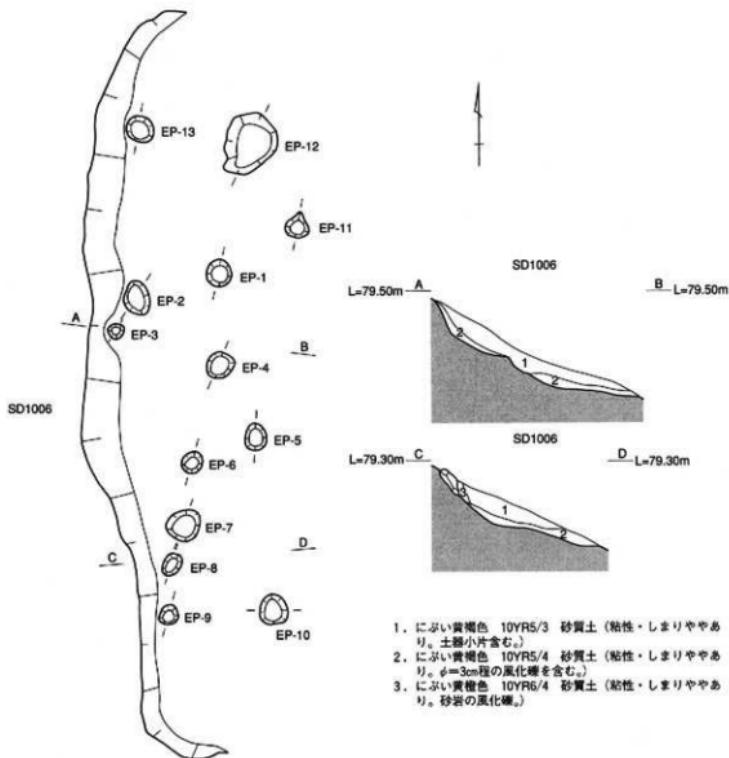
第47図 SD1005出土遺物

### SD1006（段状遺構6）（第48図）

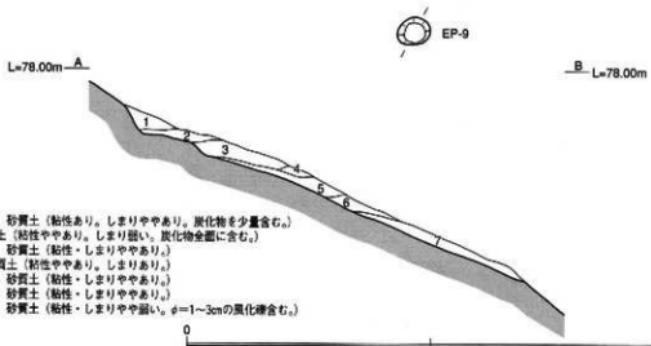
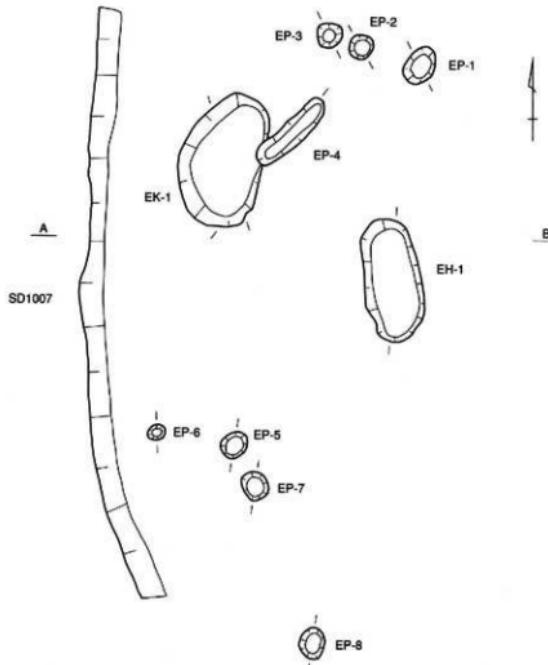
U・V-14グリッド、調査区中央部、標高79.00m前後の地点の東側斜面を地形コンターラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形はやや細長い隅丸長方形形状を呈する。13基の柱穴が出土しており、堅穴住居跡の可能性もある。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

### 出土遺物

実測可能な遺物は出土していない。



第48図 SD1006平・断面図

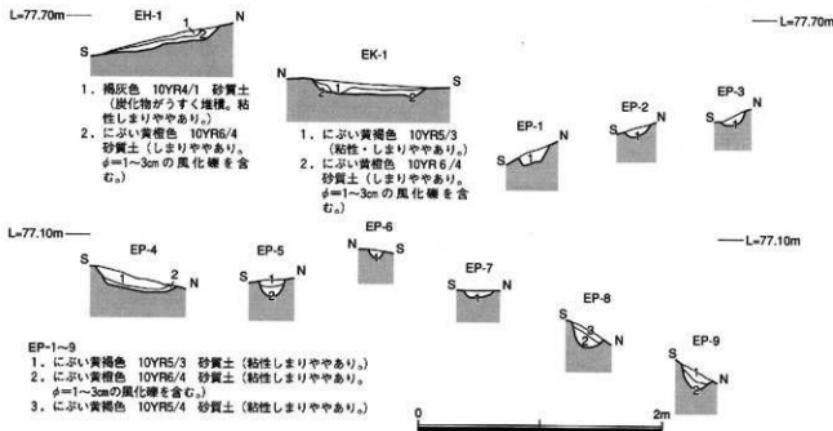


第49図 SD1007平・断面図

1. にがい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (粘性あり。しまりややあり。炭化物を少量含む。)
2. 黒褐色 10YR3/1 砂質土 (粘性ややあり。しまり弱い。炭化物全面に含む。)
3. にがい黄褐色 10YR5/4 砂質土 (粘性ややあり。しまりややあり。)
4. 明黄褐色 10YR6/6 砂質土 (粘性ややあり。しまりややあり。)
5. にがい黄褐色 10YR6/4 砂質土 (粘性ややあり。しまりややあり。)
6. にがい黄褐色 10YR6/3 砂質土 (粘性。しまりややあり。)
7. にがい黄褐色 10YR6/3 砂質土 (粘性。しまりややや強い。φ=1~3cmの炭化物含む。)

### SD1007（段状造構7）（第49・50図）

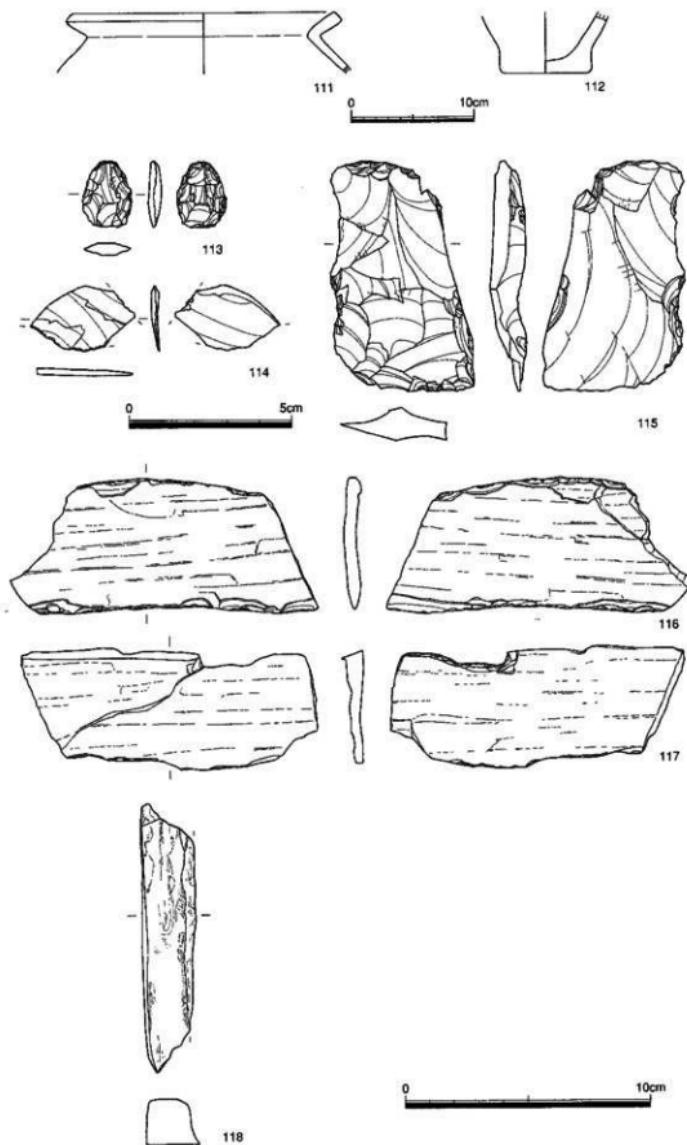
V-14・15グリッド、調査区中央部、標高77.00m前後の地点の東側斜面を地形コンタインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形は長方形形状を呈し、平坦面上には複数の土坑・柱穴が出土したが、切り合ひ関係は不明瞭である。豊穴住居跡の可能性を残す。段状造構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



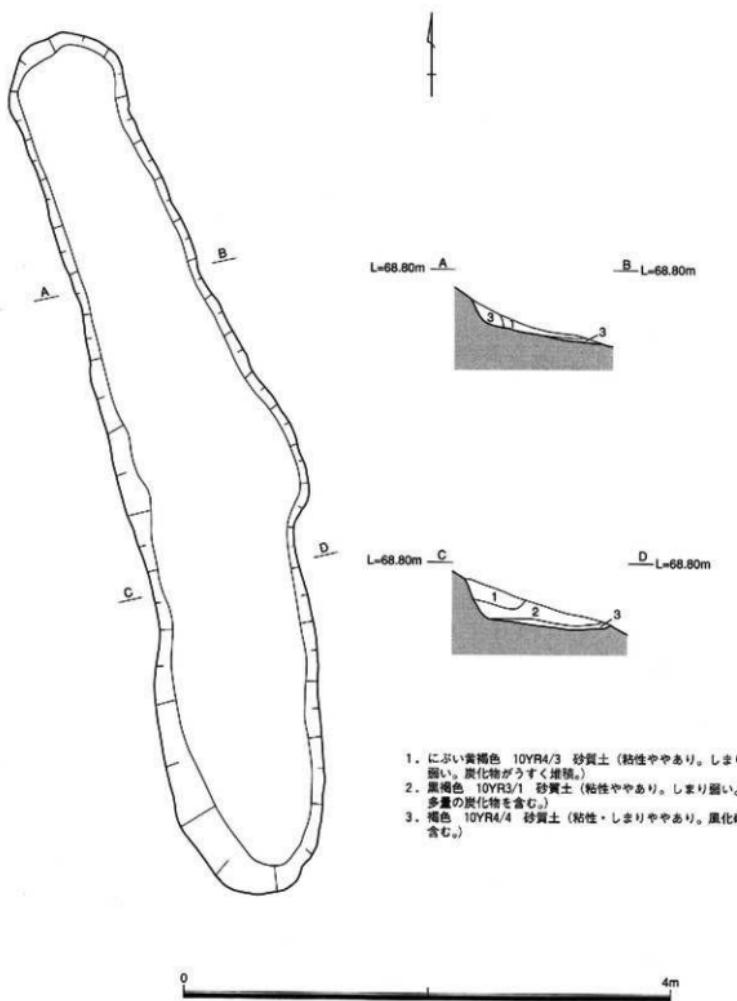
第50図 SD1007-EH・EK・EP 平・断面図

### 出土遺物（第51図）

111は壺口縁部である。112は壺底部と思われる。113は石錐、114は剥片である。115は楔形石器である。いずれも石材はサスカイトを用いる。116・117は石庖丁で、結晶片岩の剥片を素材としている。118は柱状片岩斧で石材は片岩を用いる。



第51図 SD1007出土遺物



第52図 SD1008平・断面図

SD1008（段状遺構 8）（第52図）

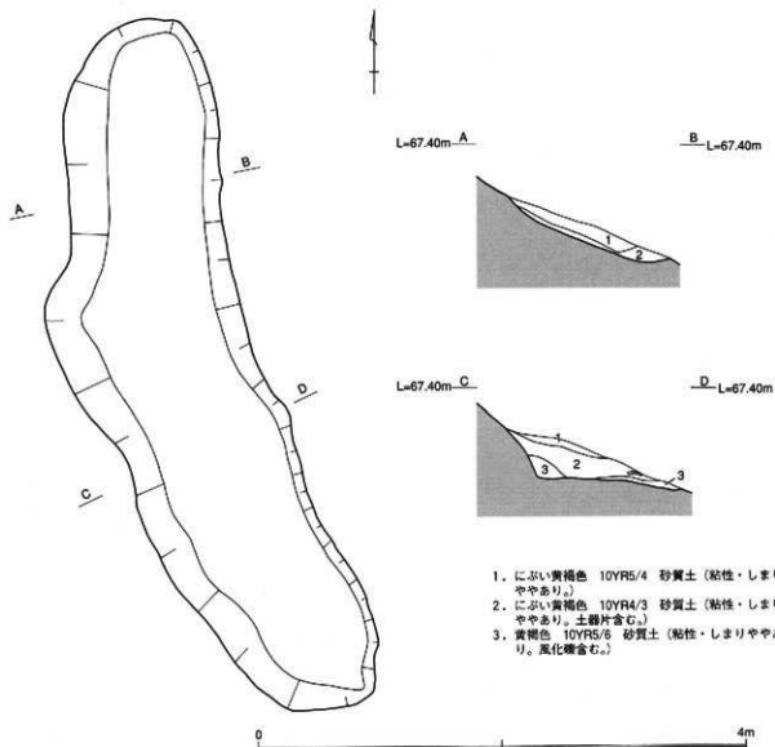
P・Q-18グリッド、調査区南東部、標高69.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物

実測可能な遺物は出土していない。

SD1009（段状遺構 9）（第53図）

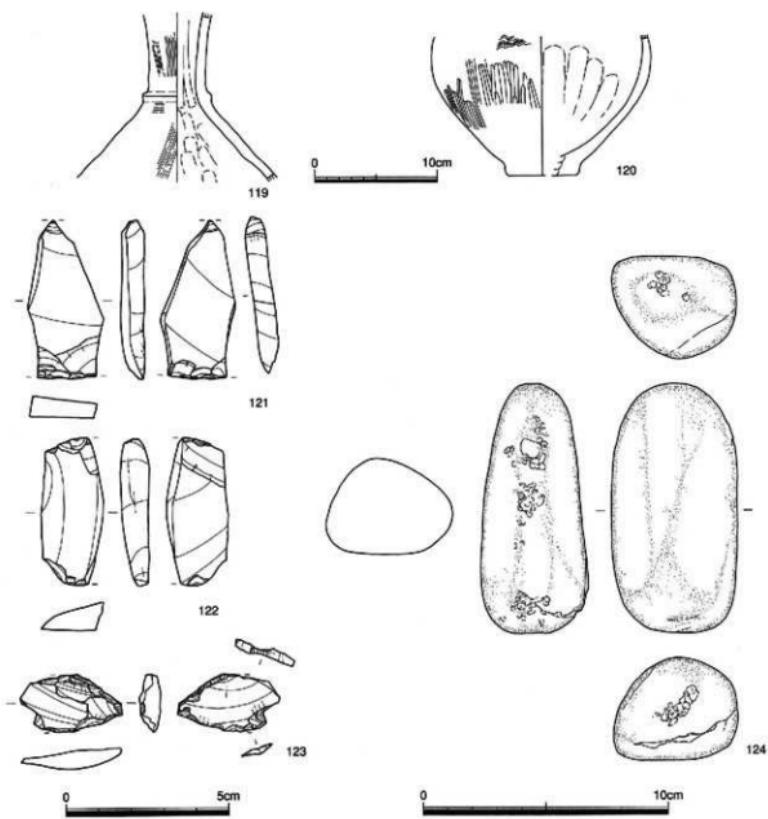
Q・R-18・19グリッド、調査区南東部、標高67.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



第53図 SD1009平・断面図

出土遺物（第54図）

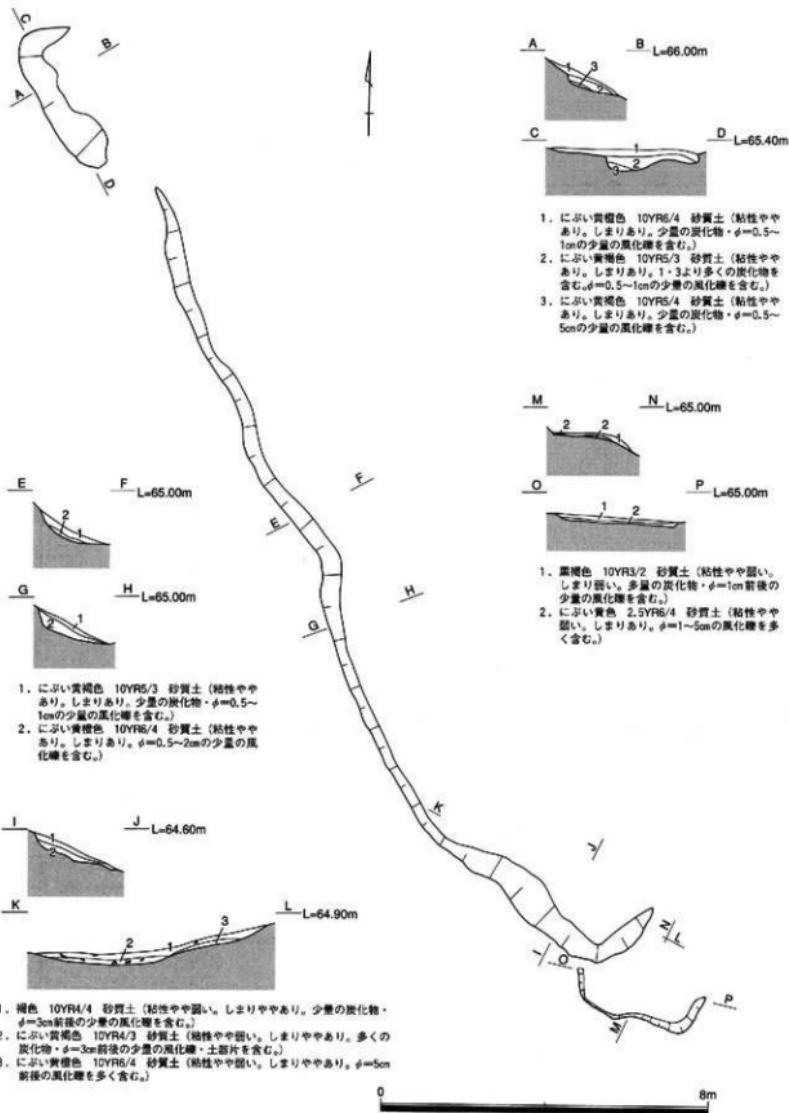
壺形土器と思われる土器片が出土している。119は壺頸部、120は底部である。121～124は石器である。121・122は楔形石器、123は二次加工痕のある剥片である。石材はサヌカイトを用いる。124は砂岩の円礫を使用した敲石である。



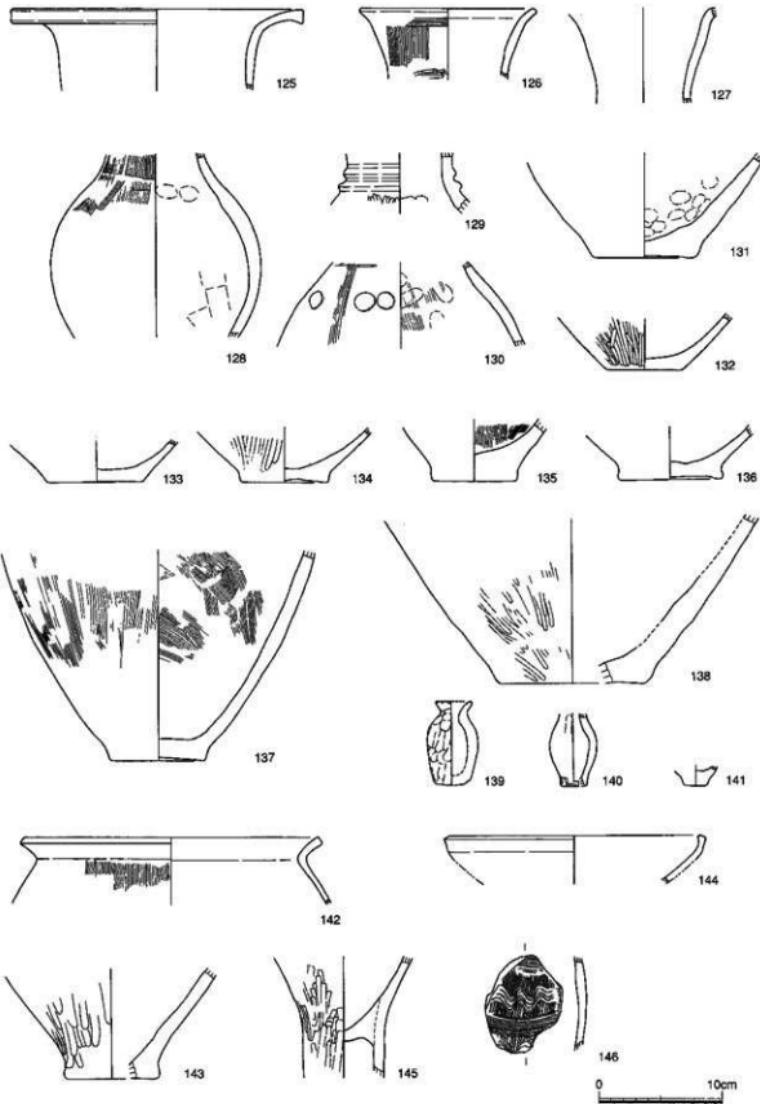
第54図 SD1009出土遺物

SD1010（段状遺構10）（第55図）

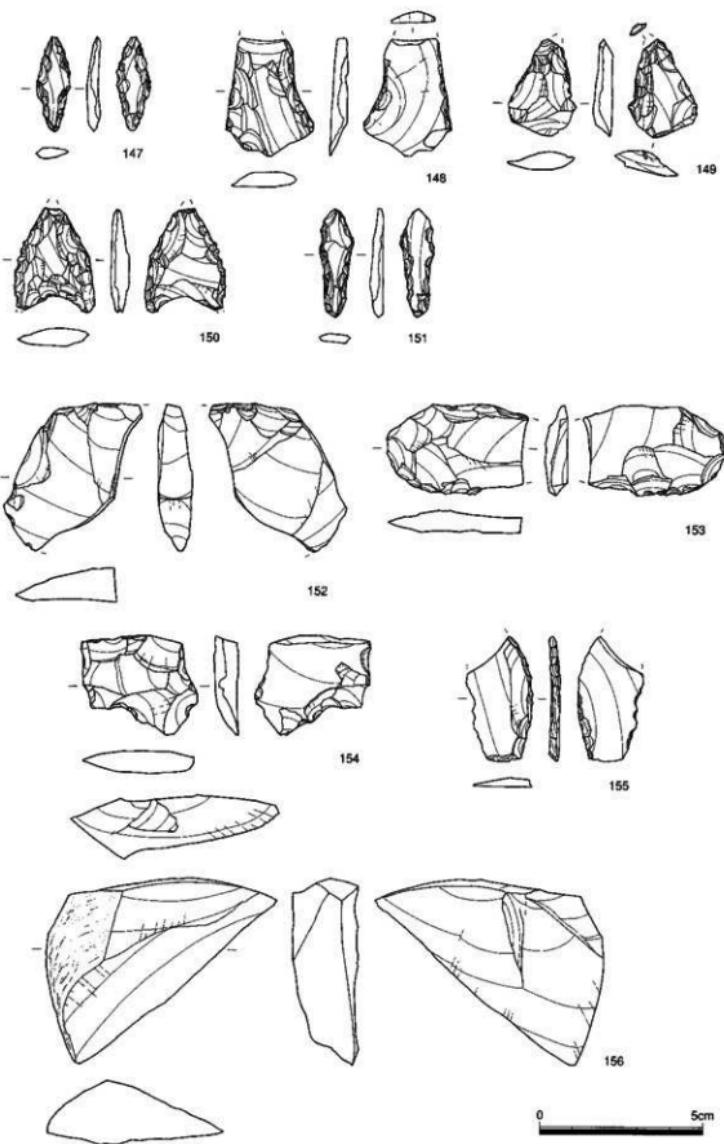
P～S-20・21グリッド、調査区南東部に位置する本遺跡で最長の段状遺構である。標高63.00m前後の地点の東側斜面を、地形コンターラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだす。立ち上がりは確認できない。平面形は不整形な細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。



第55図 SD1010平・断面図



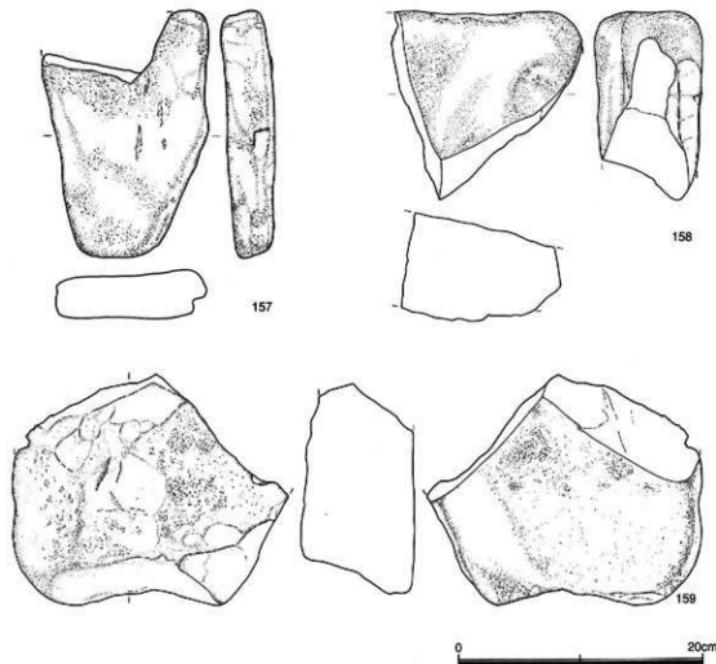
第56図 SD1010出土遺物 1



第57図 SD1010出土遺物 2

出土遺物（第56～58図）

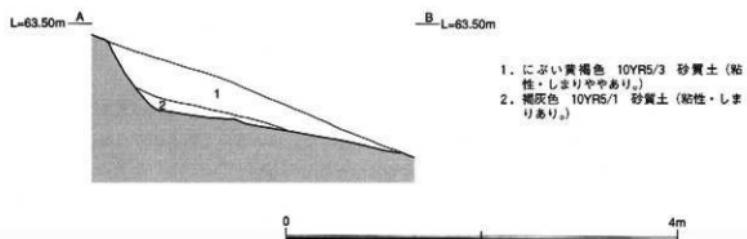
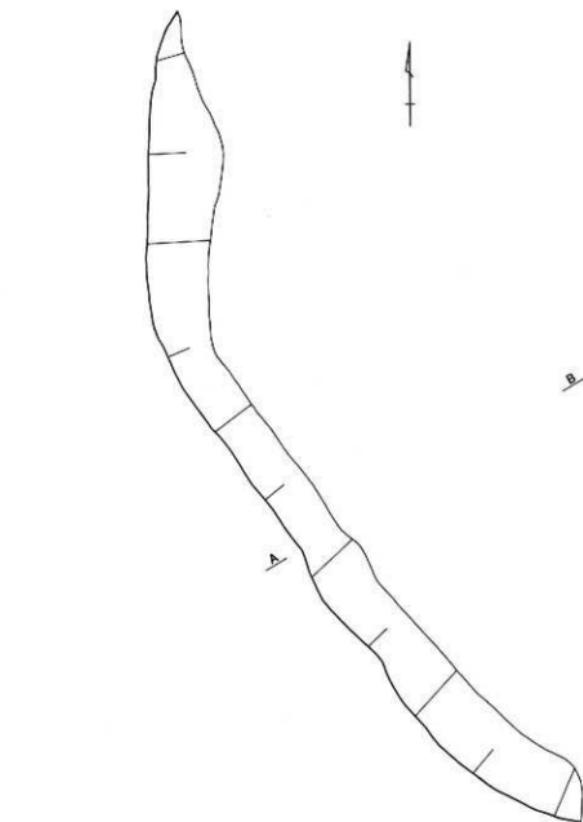
他の遺構に比べ、遺物の出土量が多い。125～146は弥生土器、147～159は石器である。125～141は壺である。142・143は壺、144・145は高杯である。146は壺と思われる。147～150は石鎌、151は石錐である。152・153は楔形石器、154・155は使用痕のある剥片、156は剥片である。石器石材はいずれもサヌカイトである。157～159は砂岩の台石である。



第58図 SD1010出土遺物 3

SD1011（段状遺構11）（第59図）

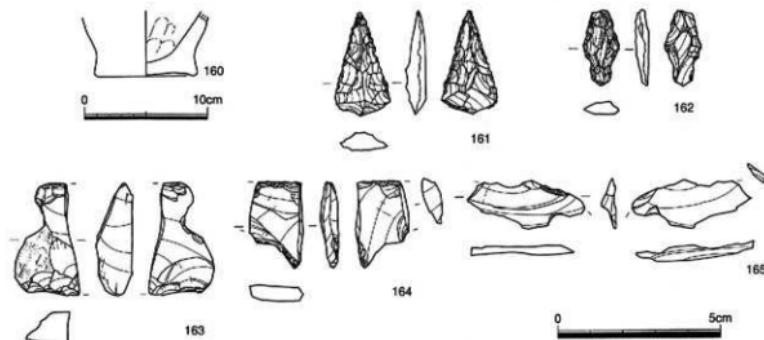
R～T-19・20グリッド、調査区南東部に位置する。標高63.00m 前後の地点の東側斜面を、地形コンターラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形は不整形な細長い梢円形状を呈する。柱穴等は出土していない。



第59図 SD1011平・断面図

### 出土遺物（第60図）

160は壺の底部と思われる。161・162は石鏃、163は楔形石器、164は石錐、165は剥片である。石材はサヌカイトを用いる。



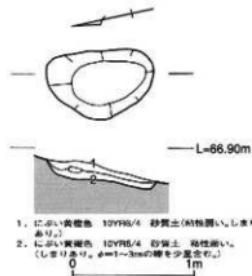
第60図 SD1011出土遺物

### SK1002（土坑2）（第61図）

調査区南西部、K・L-8グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第61図 SK1002平・断面図

### SK1003（土坑3）（第62図）

調査区南西部、K-5グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第62図 SK1003平・断面図

### SK1004（土坑4）（第63図）

調査区南西部、K・L-6グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



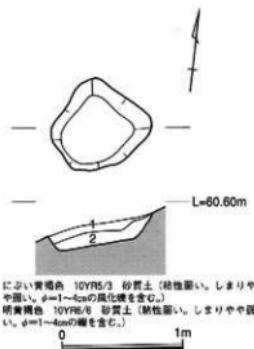
第63図 SK1004平・断面図

### SK1005（土坑5）（第64図）

調査区南西部、K-3グリッドに位置するいびつな円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



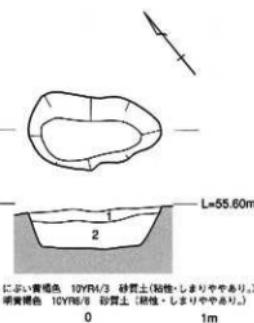
第64図 SK1005平・断面図

### SK1006（土坑6）（第65図）

調査区南西部、I-2グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



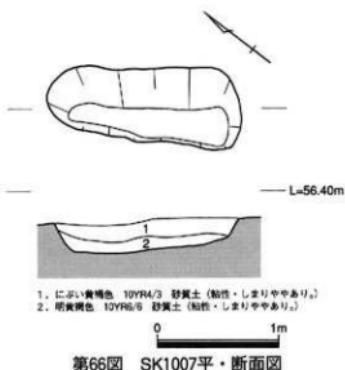
第65図 SK1006平・断面図

### SK1007（土坑7）（第66図）

調査区南西部、H・I-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

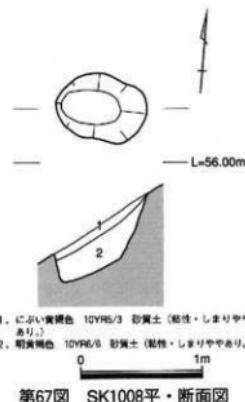


### SK1008（土坑8）（第67図）

調査区南西部、H-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

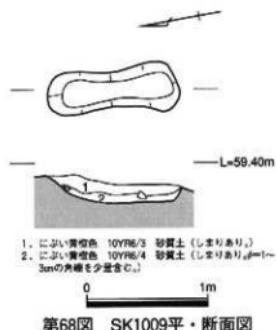


### SK1009（土坑9）（第68図）

調査区南西部、G・H-4グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

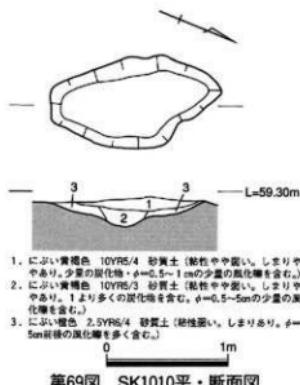


### SK1010（土坑10）（第69図）

調査区南東部、O-24グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第69図 SK1010平・断面図

### SK1011（土坑11）（第70図）

調査区中央部、S・T-11グリッドに位置する楕円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



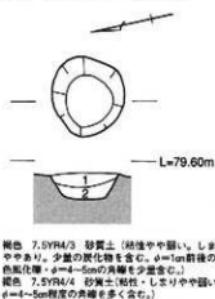
第70図 SK1011平・断面図

### SK1012（土坑12）（第71図）

調査区中央部、S-10グリッドに位置する円形の土坑である。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第71図 SK1012平・断面図

SK1013 (土坑13) (第72図)

調査区南西部、J-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

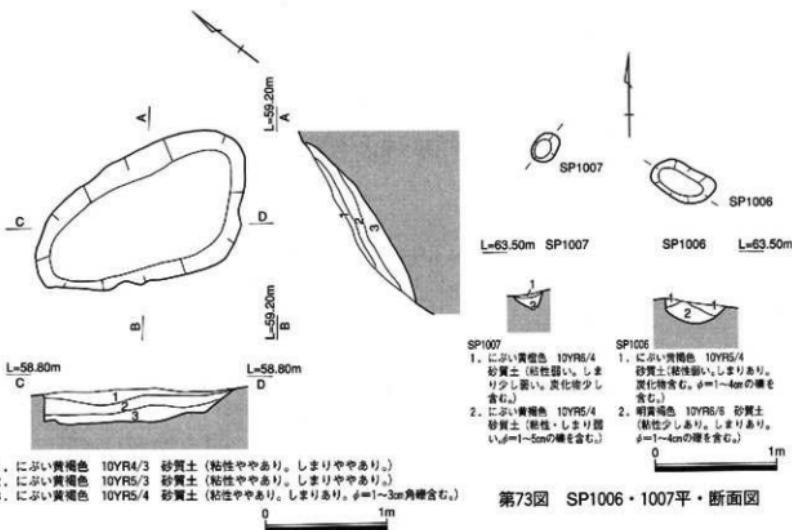
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1006・1007 (柱穴 6・7) (第73図)

I・J-6グリッド、調査区西部に位置する円形のビットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

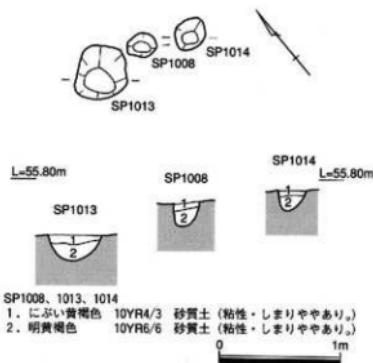


第73図 SP1006・1007平・断面図

第72図 SK1013平・断面図

SP1008・1013・1014（柱穴8・13・14）（第74図）

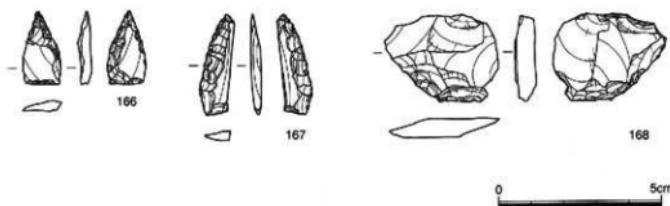
I-2・3グリッド、調査区西部に位置する。SD1001の北側に位置する円形のピットである。SP1008からは石器が出土した。



第74図 SP1008・1013・1014平・断面図

SP1008出土遺物（第75図）

166・167は石鏸、168は楔形石器である。石材はサヌカイトである。



第75図 SP1008出土遺物

SP1009～1011（柱穴9～11）（第76図）

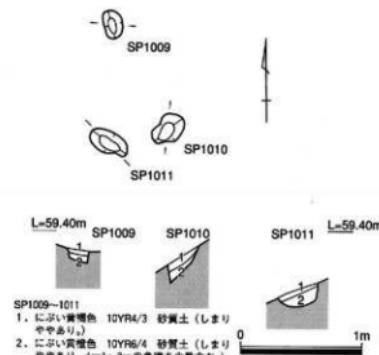
I・J-3・4グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1012（柱穴12）（第77図）

I-2グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。



第76図 SP1009～1011平・断面図

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1015～1020（柱穴15～20）（第78図）

H・I-2・3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

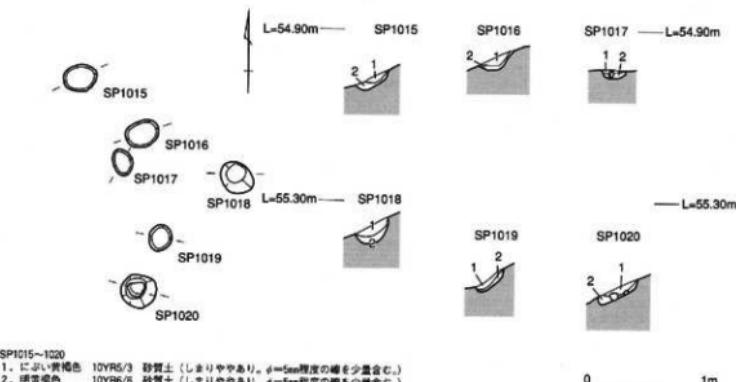
出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

1. にせい黄褐色 (10YR6/4) 砂質土 (粘性やなし。しまりややあり。φ=0.5cm程度の縦を少量含む。)
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 (粘性やなし。しまりややあり。φ=0.5~4cmの縦を少量含む。)

0 1m

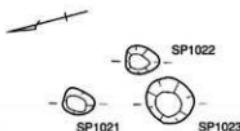
第77図 SP1012平・断面図



第78図 SP1015～1020平・断面図

SP1021～1023（柱穴21～23）（第79図）

G・H-2・3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。



#### 出土遺物

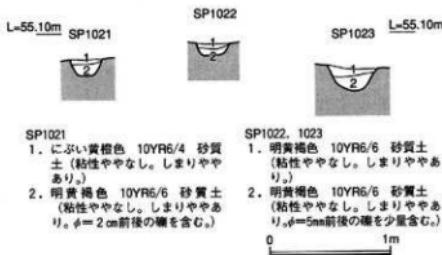
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1029（柱穴29）（第80図）

I-3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第79図 SP1021～1023平・断面図

SP1034・1035（柱穴34・35）（第81図）

G-4グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第80図 SP1029平・断面図

第81図 SP1034・1035平・断面図

SP1036（柱穴36）（第82図）

F・G-4グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



- SP1036  
1. にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質土  
(粘性やなし。しまりややあり。  
炭化物を含む。)  
2. 明黄褐色 10YR6/6 砂質土 (粘  
性・しまりややあり。)

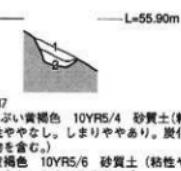
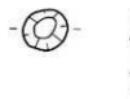
第82図 SP1036平・断面図

SP1037（柱穴37）（第83図）

F-3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



- SP1037  
1. にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土 (粘  
性やなし。しまりややあり。炭化  
物を含む。)  
2. 黄褐色 10YR5/6 砂質土 (粘性や  
なし。しまりややあり。)

第83図 SP1037平・断面図

SP1038（柱穴38）（第84図）

L-4・5グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



- SP1038  
1. にぶい黄褐色 10YR7/4 砂質土 (粘  
性・しまりややなし。)  
2. にぶい黄褐色 10YR6/4 (若量。)

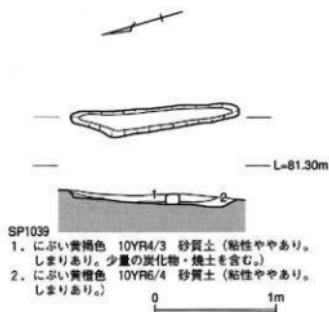
第84図 SP1038平・断面図

### SP1039（柱穴39）（第85図）

V-13グリッド、調査区中央部に位置する長楕円形の浅いピットである。

#### 出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第85図 SP1039平・断面図

### SP1040・1041（柱穴40・41）（第86図）

Q・R-9グリッド、調査区中央部に位置する円形のピットである。

#### 出土遺物

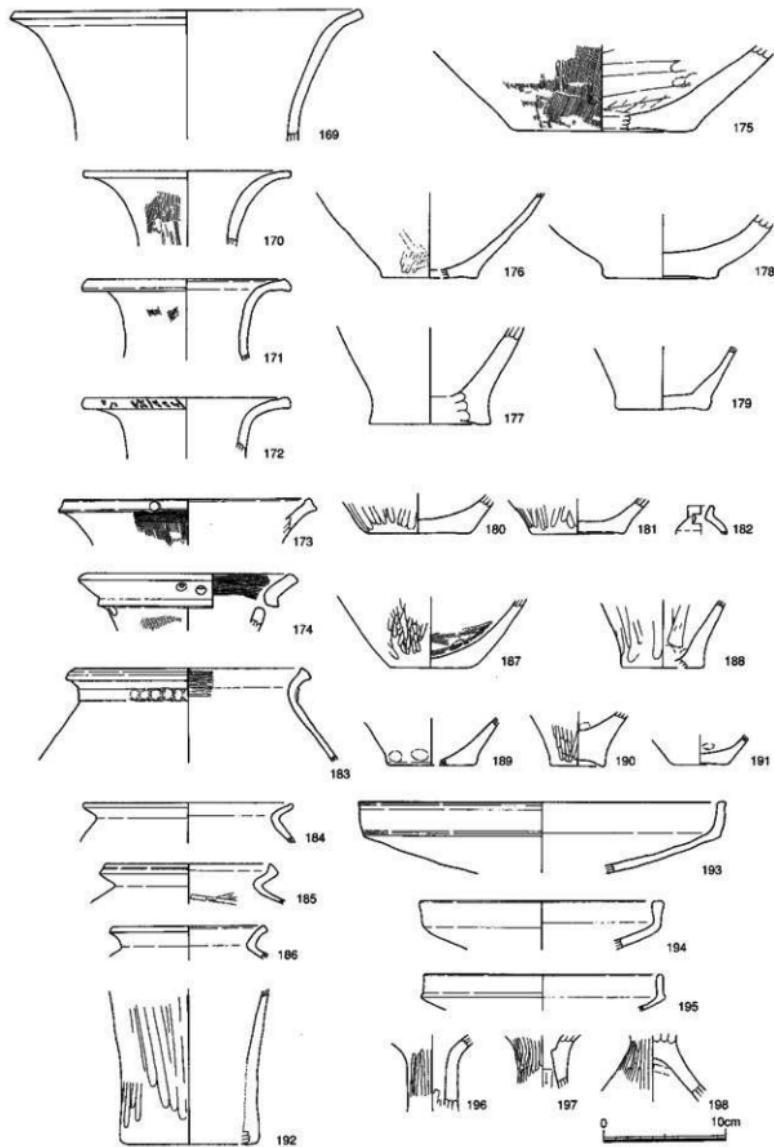
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第86図 SP1040・1041平・断面図

#### 包含層出土遺物

遺構以外からも多く多くの弥生土器・石器が出土している。遺構内出土遺物と同様、土器類は小片あるいは摩滅の著しいものがほとんどであり、全容の判明するものは少ない。遺構外で出土した遺物のうち、実測可能なものについて包含層出土遺物としてここに掲載する。



第87図 包含層出土遺物 1

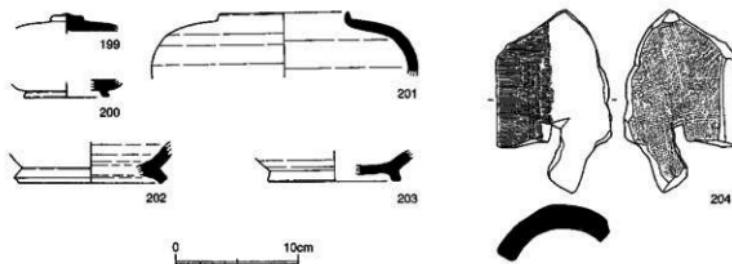
## 出土土器

### 弥生土器（第87図）

169～182は壺、183～191は甕、192はバケツ形土器、193～198は高杯土器である。

### その他の土器（第88図）

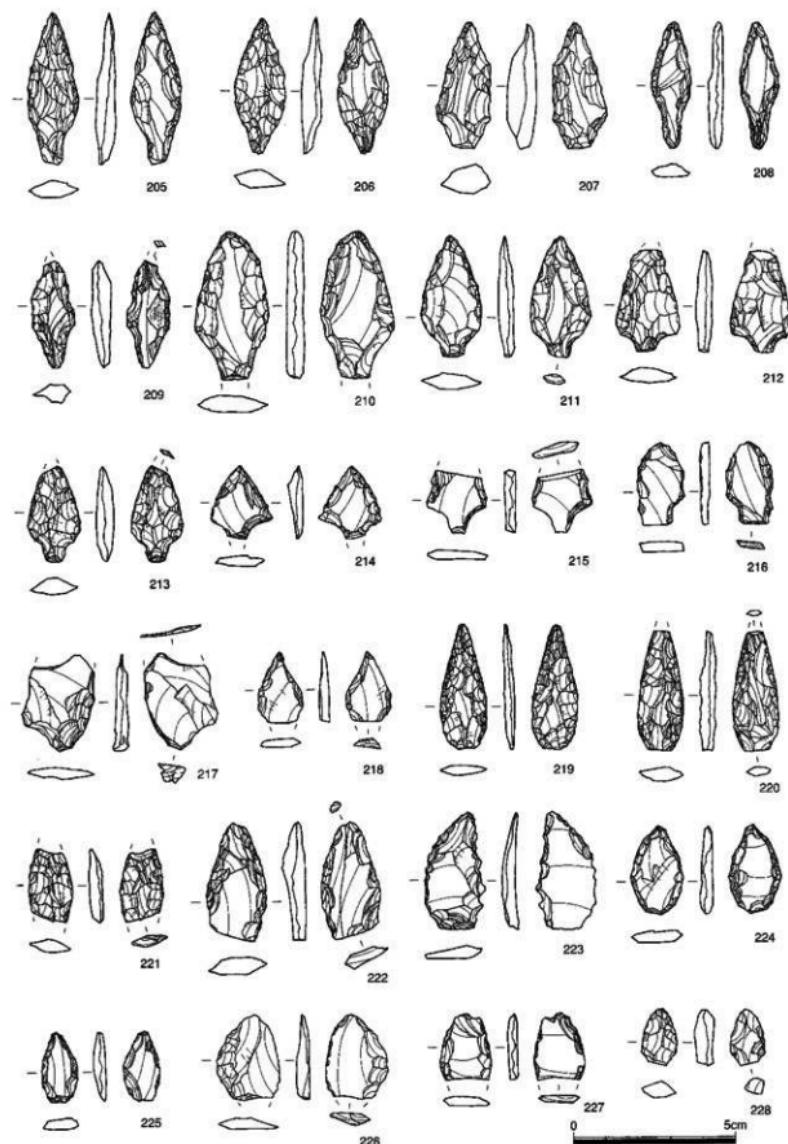
199は須恵器蓋である。200は須恵器壺の底部と思われる。201は須恵器短頸壺、202・203は須恵器甕の底部と思われる。199～203はいずれも小片のため、詳細な時期決定は困難であるが、概ね10世紀末頃と思われる。204は丸瓦で時期は不明である。



第88図 包含層出土遺物 2

## 出土石器（第89～105図）

剥片石器のほとんどがサヌカイトを石材とする。205～247は石鎚、248は石剣、249・250は石庖丁である。249はサヌカイト、250は結晶片岩の剥片を素材とする。251～256は削器、257～297は楔形石器、298～325は剥片である。剥片の中には微細な剥離がみられるもの、自然面の残存するものがある。326・327は太形鉈刀石斧である。玄武岩を石材に用いる。328は柱状片刃石斧、329は扁平片刃石斧である。石材は結晶片岩である。330は円柱状の泥岩礫の端部に刃部を作出した鑿状の磨製石斧である。331～339は敲石である。335は莢レイ岩、336は片岩を用いる。他は砂岩の円礫を使用している。340～344は台石である。いずれも砂岩の亜角礫を用いる。



第89図 包含層出土遺物 3